岩 波 文 庫

33-311-1

碧巖錄

岩 波 書 店

凡例

一、本書の底本には、元の大徳四年（一三〇〇）に張煒（字は明遠）が刊行した、いわゆる張本を祖本とする通行本で最も普及したとされる瑞龍寺版（宮内庁書陵部蔵）を用いた。

一、底本は本則および頌の部分を一格下げ、著語をやや小字にするのみで一巻一〇則を連続させているが、読みやすくするために一則ごとに改頁とし、【本則】【頌】〔評唱〕を明示し、著語は〔　〕で囲んだ。各則の標題は大智実統『碧巌録種電鈔』（一七三九刊）によった。

一、垂示・本則・頌の部分はそれぞれ一つの段落とし、評唱は適当な段落に分けた。

一、上段に新字体による原文（ただし必要に応じて旧字体も使う）を、下段に現代仮名づかいによる訓読文を配し、原文には句読点および中黒点を施し、訓読文においては引用文は「　」で括り、簡単な説明や補足は（　）で補うなどして見やすくした。また、底本で二行割注の箇所は〈　〉で括った。

一、原文の脇には校異の所在を示す＊と注番号を、訓読文の難解な漢字や旧来の読みくせには振りがなを付けた。校異および注は段落ごとにまとめた。

一、校異については岐陽方秀『不二鈔』（一六五〇刊）により参考程度にとどめ、諸本との異同は

特に必要な場合に限って注の中で言及することとした。

一、注はこれまで誤読されてきた俗語・口語の語義や語法についての説明を詳しくし、固有名詞(人名・地名)や仏教語などの説明は簡略にした。

一、訓読文はそれを読むだけで意味が取れるように工夫を加え、特に口語の語彙には原語に即して思いきった訓みをつけた。そもそも文語の漢文の読解のために編み出された訓読法には限界があり、特に本書のように口語を多用する文を訓み下すには無理がある。そこで、可能な限りの調和を図り、訓読しただけでは理解しにくいところは注で補うようにした。なお、本書で示した訓みは私どもの解釈による試案であり、それぞれの文脈を勘案して定めた。

目次

巻第九

巻第十

仏果圜悟禅師碧巌録

（下）

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第八

第七一則　百丈併却咽喉

【本則】挙。百丈[一]復問五峰[二]、併却咽喉唇吻、作麼生道。〔阿呵呵[三]。箭過[四]新羅国。〕峰云、和尚也須併却。〔攙旗奪鼓。一句截流[五]、万機寝削。〕丈云、無人処[六]斫額望汝。〔土曠人稀、相逢者少。〕〈此一則、与七巻末公案同看。〉

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第八

第七一則　百丈、咽喉を併却ぐ

【本則】挙す。百丈復た五峰に問う、「咽喉と唇吻とを併却いで、作麼生か道う」。〔阿呵呵。箭、新羅国に過ぐ。〕峰云く、「和尚も也た須らく併却ぐべし」。〔旗を攙り鼓を奪う。一句流れを截ちて、万機寝削す。〕丈云く、「人無き処に斫額して汝を望まん」。〔土曠く人稀にして、相逢う者少なし。〕〈此の一則は七巻の末の公案と同に看よ。〉

一 百丈懐海(七四九―八一四)。 二 百丈の法嗣、五峰常観。 三 笑い声。 四 とりつきようもないところへ飛んで行ってしまった。 五 一句が流れを断ち切り、あらゆる作用が消えた。 六 人のいないところで、額に手をかざして君を望み見よう。

【評唱】潙山[一]把定封疆、五峰截断衆流。這些子[二]、要是箇漢、当面提掇。

【評唱】潙山は封疆を把定し、五峰は衆流を截断す。這の些子、要ず是れ箇の漢にしてこそ、当面に提掇せ

如馬前相撲、不容擬議。直下便用、緊迅危峭。不似潙山盤礴滔滔地。如今禅和子、只向架下行、不能出他一頭地。所以道、欲得親切、莫将問来問。五峰答処、当頭坐断、不妨快俊。百丈云、無人処斫額望汝。且道、是肯他、是不肯他、是殺、是活。見他阿轆轆地、只与他一点、雪竇頌云、

ん。馬前の相撲の如く、擬議を容れず。直下に便ち用いて、緊迅危峭なり。潙山の盤礴滔滔地なるに似ず。如今の禅和子、只だ架下を行くのみにして、他を出づること一頭地なる能わず。所以に道う、「親切ならんと欲得せば、問を将ち来たりて問うこと莫れ」と。五峰の答処、当頭に坐断して、不妨に快俊なり。百丈云く、「人無き処に斫額して汝を望まん」と。且道、是れ他を肯うか、是れ他を肯わざるか、是れ殺か、是れ活か。他の阿轆轆地なるを見て、只だ他に一点して、雪竇頌して云く、

＊危峭　福本は「孤危」。

一 潙山霊祐(七七一―八五三)。第七〇則を参照。二 この微妙な勘どころは、ひとかどの人物であってこそ、ありありと提示できる。三 早く決着すべきことの喩え。四 機峰の鋭いこと。五 重厚で荘重な在りよう。六 弁舌が尽きないさま。七 棚の下。既有の枠組の中。八 頭一つぬきんでる。九 ピタリと核心をつく。一〇 円転自在に対応して行くさま。一一 (頌で)ぽんと一突きしてやって。

【頌】和尚也併却、〔已在言前了。截断衆流。〕龍蛇陣上看謀略。〔須是

【頌】和尚も也た併却ぐべし、〔已に言前に在り了れり。衆流を截断す。〕龍蛇陣上に謀略を看る。〔須是ら

*金牙始解。七事随身。慣戦作家。〕令人長憶李将軍、〔妙手無多子。疋馬単鎗、千里万里、千人万人。〕万里天辺飛一鶚。〔大衆見麼。且道、落在什麼処。**中也。打云、飛過去也。〕

く金牙にして始めて解す。七事身に随う。戦に慣れたる作家。〕人をして長く李将軍を憶わしむ、〔妙手多子無し。疋馬単鎗、千里万里、千人万人。〕万里の天辺に一の鶚飛ぶ。〔大衆見るや。且道、什麼処にか落在す。中れり。打って云く、飛び過ぎ去れり。〕

＊金牙始解　福本は「金毛獅子始得」。＊＊中也　福本に無し。

一「龍蛇陣」は兵法の陣立ての一つ。ここは、百丈の発問をいう。「謀略」は百丈の手の内。二 弓矢など七種の武器を装備する。三 漢の名将で弓の名手だった李広(?―前一一九)。四 妙手は手が込んだものではない。五 一騎で千里万里を行き、千人万人と戦う。六「万里天辺」は「無人処」のイメージ。「一鶚」は百丈が手をかざして遥かに望見しているもの。「鶚」はワシ・タカの類。「鵰(雕)」と同じ。

〔評唱〕和尚也併却、雪竇於一句中、拶一拶云、龍蛇陣上看謀略。如排両陣、突出突入、七縦八横、有闘将底手脚、有大謀略底人、疋馬単鎗、向龍蛇陣上、出没自在。你作麼生囲繞

〔評唱〕「和尚も也た併却ぐべし」と、雪竇一句の中に拶一拶して云く、「龍蛇陣上に謀略を看る」と。両陣を排き、突出突入、七縦八横なるに、闘将底の手脚有り、大謀略有る底の人の、疋馬単鎗にして、龍蛇陣上に出没自在なるが如し。你作麼生か他を囲繞み得ん。

得他。若不是這箇人、争知有如此謀略。雪竇此三頌、皆就裏頭状出底語如此、大似李広神箭。万里天辺飛一鶚、一箭落一鵰定也。*更不放過。雪竇頌、百丈問処如一鶚、五峰答処如一箭相似。山僧只管讃歎五峰、不覚渾身入泥水了也。

若し是れ這箇の人にあらずんば、争か此の如き謀略有るを知らん。雪竇の此の三頌、皆な裏頭に就いて状き出だす底の語此の如くして、大いに李広の神箭に似たり。「万里の天辺に一の鶚飛ぶ」も、一箭もて一鵰を落とすこと定まれり。更て放過さず。雪竇は頌す、百丈の問処は一鶚の如く、五峰の答処は一箭の如くに相似たりと。山僧は只管に五峰を讃歎して、覚えず渾身泥水に入り了れり。

＊定　福本は「他」。

一　内実に即して述べたことば。二　全身を泥にまみれさせる。人の為にと、言わずもがなのことまで言う喩え。

第七二則　百丈問雲巌

【本則】挙。百丈又問雲巌、併却咽喉唇吻、作麼生道。〔蝦蟆窟裏出来。道什麼。〕巌云、和尚有也未。〔粘皮著骨。拖泥帯水。前不搆村、後不迭店。〕丈云、喪我児孫。〔灼然有此。答得半前落後。〕

＊蝦蟆　蜀本は「啞莫」、福本は「啞草」。

一 雲巌曇晟(七八二―八四一)。一説に八二九年に示寂。 二 蛙のねぐらからお出でなすった。しきりにわめき立てている。 三「のどと唇とをふさいだ上で、なお一言有りや」の意。『伝灯録』六・百丈章を参照。 四 もたもたとこね廻し続ける。 五 べとべとの泥まみれ。 六 進退きわまって立ち往生。 七 どっちつかず。

【評唱】　雲巌在百丈、二十年作侍者、後同道吾至薬山。山問云、子在百丈会下、為箇什麼事。巌云、透脱生死。

第七二則　百丈、雲巌に問う

【本則】　挙す。百丈又た雲巌に問う、「咽喉と唇吻とを併却いで、作麼生か道う」。〔蝦蟆の窟裏より出で来たる。什麼をか道う。〕巌云く、「和尚有り也未」。〔皮に粘き骨に著く。拖泥帯水。前むも村に搆らず、後るも店に迭ばず。〕丈云く、「我が児孫を喪えり」。〔灼然として此れ有り。答え得て半前落後。〕

【評唱】　雲巌、百丈に在って、二十年侍者と作り、後に道吾と同に薬山に至る。山、問うて云く、「子 百丈の会下に在って、箇の什麼なる事をか為す」。巌云く、

山云、還透脱也未。巌云、渠無生死。山云、二十年在百丈、習気也未除。巌辞去、見南泉、後復帰薬山、方契悟。看他古人、二十年参究、猶自半青半黄、粘皮著骨、不能穎脱。是則也是、只是前不搆村、後不迭店。不見道、語不離窠臼、焉能出蓋纏。白雲横谷口、迷却幾人源。洞下謂之触破。故云、躍開仙仗鳳凰楼、時人嫌触当今号。所以道、荊棘林須是透過始得。若不透過、終始渉廉纖、斬不断。適来道、前不搆村、後不迭店。雲巌只管去点検他人底。百丈見他如此、一時把来、打殺了也。雪竇頌云、

「生死を透脱す」。山云く、「還た透脱する也未」。巌云く、「渠に生死無し」。山云く、「二十年百丈に在って、習気も也た未だ除かず」と。巌、辞し去って南泉に見え、後に復た薬山に帰って、方めて契悟す。看よ他の古人、二十年参究するも、猶自半青半黄、皮に粘き骨に著いて、穎脱する能わず。是は則ち也た是なるも、只だ是れ前むも村に搆らず後るも店に迭ばず。見道ずや、「語窠臼を離れずんば、焉んぞ能く蓋纏を出でん。白雲、谷口に横たわり、幾人の源をか迷却す」と。洞下に之を触破と謂う。故に云く、「仙仗の鳳凰楼を躍開す、時人当今の号に触るることを嫌う」と。所以に道う、「荊棘の林須是らく透過して始めて得し。若し透過せずんば、終始廉纖に渉って斬不断らん」。適来に道う、「前むも村に搆らず後るも店に迭ばず」と。雲巌只管に去きて他人底を点検す。百丈他の此の如くなるを見て、一時に把え来たりて、打殺し了れり。雪竇の頌に云く、

一 道吾円智(えんち)(七六九―八三五)。二 薬山惟儼(いげん)(七五一?―八三四?)。三「渠」は三人称代名詞、かれ。「主人公」を指す。四 思いこみの残滓。五 南泉普願(ふがん)(七四八―八三四)。六 穀物が成熟していない状態。未熟なこと。七 雲峰文悦(うんぽうぶんえつ)(九九八―一〇六二)の語。言葉が型にはまり込んでしまったら、どうして煩悩から抜け出せよう。八 心源、本性。九 洞山門下。一〇 臨済の法嗣、克符(こくふ)(紙衣(しえ)道者、紙衣和尚とも)の兼中到の頌による。「仙仗」は天子の儀仗、「鳳凰楼」は禁中。ここは悟りの境界を指す。「当今」は時の皇帝。一一 瑣末の微細なところ。一二 百丈の境地をチェックしようとした。

【頌】和尚有也未、〔公案現成。随[一]波逐浪、和泥合水。〕金毛[二]獅子不踞地。〔灼然。有什麼用処。可惜許。〕両両[三]三三旧路行、〔併却咽喉唇吻、作麼生道。転[四]身吐気、脚跟下蹉過了也。〕大雄[五]山下空[六]弾指。〔一死更不再活。可悲可痛。蒼天中更添怨苦。〕

【頌】和尚有り也未(や)、〔公案現成す。波に随い浪を逐い、泥に和し水に合す。〕金毛の獅子踞地(こじ)せず。〔灼然たり。什麼(なん)の用処(はたらき)か有らん。可惜許(おしむべし)。〕両両三三旧路を行く、〔咽喉と唇吻(くち)とを併却(ふさ)いで作麼生(いか)にか道(い)わん。身を転じ気を吐くも、脚跟下に蹉過(すれちが)い了れり。〕大雄(だいゆう)山下(さんか)空しく弾指す。〔一たび死すれば更に再びは活きず。悲しむべし痛むべし。蒼天の中(うち)に更に怨苦を添う。〕

一 相手次第に対応し、泥まみれになっている。二 金毛の獅子でありながら、身構えもしない。三 潙山、五峰、雲巌と連れだって古い道を行く。四 立場を逆転して獅子となって気炎を上げてはみたが。五「山下」は宋本『雪竇頌古』のように「山上」とするのがよい。大雄山(百丈山)では百丈は空しく

指をはじいて歎息しただけだ。六 がっくり来ているところに怨めしさが加わった。

〔評唱〕和尚有也未。雪竇拠款結案、是則是、只是金毛獅子、争奈不踞地。獅子捉物、蔵牙伏爪、踞地返擲。物無大小、皆以全威、要全其功。雲巌云、和尚有也未、只是向旧路上行。所以雪竇云、百丈向大雄山下空弾指。

〔評唱〕「和尚有り也未」と。雪竇款に拠って案を結すらく、是は則ち是なるも、只だ是れ金毛の獅子、争奈せん踞地せざるを、と。獅子は物を捉うるに、牙を蔵し爪を伏せ、踞地して返擲す。物の大小と無く、皆な全威を以てし、其の功を全うせんと要す。雲巌云く、「和尚有り也未」とは、只だ是れ旧路上を行くのみ。所以に雪竇云く、「百丈、大雄山下に空しく弾指す」と。

一 ただ、しかし。二 ひたすら〜するだけ。「旧路」とは百丈が開拓する以前の古道。

第七三則　馬大師四句百非

垂示云、夫説法者、無説無示。其聴法者、無聞無得。説既無説無示、争如不説。聴既無聞無得、争如不聴。而無説又無聴、却較些子。只如今諸人聴山僧在這裏説、作麼生免得此過。具透関眼者、試挙看。

一『維摩経』弟子品の句。

【本則】挙。僧問馬大師、離四句、絶百非、請師直指某甲西来意。〔什麼処得這話頭来。那裏得這消息。〕

第七三則　馬大師の四句百非

垂示に云く、「夫れ法を説くとは、説くこと無く示すこと無し。其れ法を聴くとは、聞くこと無く得ること無し」と。説くも既に説くこと無く示すこと無くんば、争か説かざるに如かん。聴くも既に聞くこと無く得ること無くんば、争か聴かざるに如かん。而るに説くこと無く又た聴くこと無きも、却って些子く較えり。只だ如今諸人、山僧が這裏に在いて説くを聴くに、作麼生か此の過を免れ得ん。透関の眼を具する者、試みに挙し看よ。

【本則】挙す。僧、馬大師に問う、「四句を離れ百非を絶して、請う師、某甲に西来意を直指せよ」。〔什麼処よりか這の話頭を得来たる。那裏よりか這の消息を

馬師云、我今日[四]労倦、不能為汝説。問取[五]智蔵去。〔退身三歩。蹉過也不知。[六]蔵身露影。不妨是這老漢、推過与別人。〕僧問智蔵。〔也須与他一拶。蹉過也不知。〕蔵云、何不問和尚。〔草裏[七]焦尾大虫出来。也道什麼。直得[八]草縄自縛、去死十分。〕僧云、和尚教来問。〔受人処分。前箭猶軽後箭深。〕蔵云、我今日頭痛、不能為汝説。問取[九]海兄去。〔不妨是[一〇]八十四員善知識、一様患這般病痛。〕僧問海兄。〔転与別人。[一一]抱贓叫屈。〕海云、我到這裏、却不会。〔不用[一二]忉忉。従教千古万古黒漫漫。〕僧挙似馬大師。〔這僧却有些子眼睛。〕馬師云、[一三]蔵頭白、海頭黒。〔[一四]寰中天子勅、塞外将軍令。〕

得たる。〕馬師云く、「我今日、労倦たり。汝が為に説くこと能わず。智蔵に問取いに去け」。〔退身三歩。蹉過うも也た知かず。身を蔵して影を露す。不妨に是れ這の老漢、別人に推過与けたり。〕僧、智蔵に問う。〔也た須らく他に一拶を与わすべし。蹉過うも也た知かず。〕蔵云く、「何ぞ和尚に問わざる」。〔草裏より焦尾の大虫出で来たる。也た什麼を道うぞ。直得に草縄もて自ら縛り、死を去ること十分。〕僧云く、「和尚、来たり問わしむ」。〔人の処分を受く。前箭は猶お軽きも後箭は深し。〕蔵云く、「我今日、頭痛す。汝が為に説くこと能わず。海兄に問取いに去け」。〔不妨も是れ八十四員の善知識、一様に這般る病痛を患う。〕僧、海兄に問う。〔別人に転与す。贓を抱えて屈と叫ぶ。〕海云く、「我這裏に到って却って会せず」。〔忉忉たるを用いず。従教い千古万古なるも黒漫漫。〕僧、馬大師に挙似す。〔這の僧却って些子の眼睛有り。〕馬師云く、「蔵頭は白く、海頭は黒し」。〔寰中にては天子の

勅、塞外にては将軍の令。」

一 馬祖道一(七〇九—七八八)。二「四句」はあらゆる立言が収まる四つの基本的な表現形式、「百非」は有る限りの否定形式。一切の概念や論理を超えたところ。三 達磨が西からやって来た意味。仏法の根本義。四『祖堂集』一四、『伝灯録』七・智蔵章では「無心情(気が乗らぬ)」。五 西堂智蔵(七三八—八一七)。六 言いたいことを全部言ってしまわないでちらちらとほのめかす。七「焦尾」は焼尾で、尾を焼いて人に化した虎。八 自分で自分を縛り上げてしまって、命が危ない。九 百丈懐海(七四九—八一四)。一〇 馬祖下の善知識は八十余人と称された。一一「贓」は不正な手段で手に入れた品物。「屈」はぬれぎぬを着せられること。贓物をかかえて無実だと叫ぶ。一二 弁舌を弄する。「叨叨」に同じ。一三 智蔵の頭は白く、懐海の頭は黒い。二人の求道のスタイルの違いを対照的に示したもの。一四 国内では天子の勅命、辺境では将軍の命令。鶴の一声。確固不動の断案。

【評唱】 這箇公案、山僧旧日在成都参真覚、覚云、只消看馬祖第一句、自然一時理会得。且道、這僧是会来問、不会来問。此問不妨深遠。離四句者、有・無・非有非無・非非有非非無、離此四句、絶其百非。只管作道理、不識話頭、討頭脳不見。若是山僧、待馬祖道了、也便与展坐具礼

【評唱】 這箇の公案、山僧、旧日、成都に在って真覚に参ずるに、覚云く、「只だ馬祖の第一句を看るを消うれば、自然に一時に理会し得ん」と。且道、這の僧是れ会して来たり問うか、会せずして来たり問うか。此の問、不妨に深遠なり。「四句を離る」とは、有と、無と、非有非無と、非非有非非無と、此の四句を離れ、其の百非を絶す。只管道理を作さば、話頭を識らず、頭脳を討むるも見えじ。若是山僧ならば、馬祖の道い

三拝、看他作麼生道。当時馬祖、若見這僧来、問離四句、絶百非、請師直指某甲西来意、以拄杖劈脊便棒趕出、看他省不省。馬大師、只管与他打葛藤、以至這漢当面蹉過、更令去問智蔵。殊不知、[二]馬大師来風深辨、這僧懞懂走去問智蔵。蔵云、何不問和尚。僧云、和尚教来問。看他這些子、拶著便転、更無閑暇処。智蔵云、我今日頭痛、不能為汝説得。問取海兄去。這僧又去問海兄。海兄云、我到這裏、却不会。且道、為什麼一人道頭痛、一人云不会。畢竟作麼生。

了るを待って、也た便ち与に坐具を展べて礼三拝して、他の作麼生に道うかを看ん。当時馬祖、若し這の僧の来たり、「四句を離れ、百非を絶して、請う師、某甲に西来意を直指せよ」と問うを見れば、拄杖を以て劈脊に便ち棒して趕い出だして、他の省くか省かざるかを看ん。馬大師、只管他の与に葛藤を打し、以て這の漢の当面に蹉過いて、更に去きて智蔵に問わしむるに至る。殊に知らず、馬大師は来風深く辨ずるに、這の僧は懞懂として走去きて智蔵に問う。蔵云く、「何ぞ和尚に問わざる」。僧云く、「和尚、来たり問わしむ」と。看よ他の這の些子、拶著らば便ち転じ、更に閑暇処の無きことを。智蔵云く、「我今日、頭痛す。汝が為に説得すること能わず。海兄に問取いに去け」と。這の僧又た去きて海兄に問う。海兄云く、「我這裏に到って却って会せず」と。且道、為什麼にか一人は頭痛と道い、一人は会せずと云う。畢竟作麼生。

一 黄檗惟勝か。　二 相手の出かたを見きわめる。

這僧却回来、挙似馬大師。師云、蔵頭白、海頭黒。若以解路卜度、却謂之相瞞。有者道、只是相推過。有者道、三箇総識他問頭、所以不答。総是拍盲地、一時将古人醍醐上味、著毒薬在裏許。所以馬祖道、待汝一口吸尽西江水、即向汝道。与此公案一般。若会得蔵頭白、海頭黒、便会西江水話。這僧将一担懞懂、換得箇不安楽、更労他三人尊宿、入泥入水。畢竟這僧不瞥地。雖然一恁麼、這三箇宗師、却被箇担板漢勘破。如今人、只管去語言上作活計云、白是明頭合、黒是暗頭合。只管鑽研計較。殊不知、古人一句截断意根。須是向正脈裏自看、始得穏当。所以道、末後一句、始到牢関。把断要津、不通凡聖。若

這の僧却回り来たりて、馬大師に挙似す。師云く、「蔵頭は白く、海頭は黒し」と。若し解路を以て卜度らば、却って之を相瞞すと謂わん。有る者は道う、「只だ是れ相推過く」と。有る者は道う、「三箇総て他の問頭を識るが所以に答えず」と。総て是れ拍盲地に一時に古人の醍醐上味を将て毒薬を著けて裏許に在く。所以に馬祖道く、「汝が一口に西江の水を吸い尽くすを待って、即ち汝に道わん」と。此の公案と一般なり。若し「蔵頭は白く、海頭は黒し」を会得せば、便ち西江の水の話を会せん。這の僧一担の懞懂を箇の不安楽に換え得て、更に他の三人の尊宿を労して、泥に入り水に入らしむ。畢竟這の僧瞥地ならず。一に恁麼なりと雖然も、這の三箇の宗師、却って箇の担板漢に勘破せらる。如今の人、只管に語言の上に去いて活計を作し、「白は是れ明頭合、黒は是れ暗頭合」と云いて、只管に鑽研計較す。殊に知らず、古人一句に意根を截断することを。須是らく正脈裏に向いて自ら

論此事、如当門按一口剣相似、擬議則喪身失命。又道、[四]譬如擲剣揮空。莫論及之不及。但向[五]八面玲瓏処会取。不見古人道、這漆桶。或云、野狐精。或云、瞎漢。且道、与一棒一喝、是同是別。若知千差万別、只是一般、自然[六]八面受敵。要会蔵頭白、海頭黒麼。五祖先師道、[七]封后先生。雪竇頌云、

看て始めて穏当なるを得ん。所以に道う、「末後の一句、始めて牢関に到る。要津を把断して、凡も聖も通さず」と。若し此の事を論ぜば、当門にて一口の剣を按うるが如くに相似て、擬議わば則ち喪身失命せん。又た道く、「譬えば剣を擲って空に揮うが如し。及と不及とを論ずること莫れ」と。但だ八面玲瓏の処に向いて会取せよ。見ずや古人道く、「這の漆桶」。或は云く、「野狐精」。或は云く、「瞎漢」と。且道、一棒一喝と是れ同じか是れ別か。若し千差万別なるも、只だ是れ一般なりと知らば、自然に八面に敵を受けん。「蔵頭は白く、海頭は黒し」を会せんと要すや。五祖先師道く、「封后先生」と。雪竇の頌に云く、

一 分別による判断。二 本当のところをはぐらかした。三 押しつけあう。四 極上の美味の中に毒薬を仕込む。五 第四二則・本則の評唱に既出。六 方便を弄すること。七 ちらりと見て悟るほど霊利でない。八 ワンパターンで融通のきかない輩。九 明白な提示がぴたり。一〇 ことばを超えた提示がぴたり。一一 詮索して、あれこれひねくりまわす。一二 洛浦(楽普)元安(八三四—八九八)の語。『伝灯録』一六に見える。一三 ポイントを抑えて、凡夫も聖人も一切通さない。一四 盤山宝積の語。『会元』三に見える。一五 一切がありのままに徹見された世界。一六 大力量があること。一七 不詳。黄帝

の三公の風后を指すか。

【頌】　蔵頭白、海頭黒、〔半合半開。一手擡、一手搦。金声玉振。〕明眼衲僧会不得。〔更行脚三十年。終是被人穿却你鼻孔。山僧故是口似匾担。〕馬駒踏殺天下人、〔叢林中、也須是這老漢始得。放出這老漢。〕臨済未是白拈賊。〔癩児牽伴。直饒好手、也被人捉了也。〕離四句、絶百非、〔道什麼。也須是自点検看。阿爺似阿爹。〕天上人間唯我知。〔用我作什麼。奪却拄杖子。或若無人無我、無得無失、将什麼知。〕

＊金声玉振　福本は「金箱玉印」。

【頌】　蔵頭は白く、海頭は黒し、〔半合半開。一手には擡げ一手には搦う。金声して玉振す。〕明眼の衲僧も会すること得ず。〔更に行脚すること三十年せよ。終是に人に你の鼻孔を穿却たる。山僧故是口匾担の似し。〕馬駒踏殺す天下の人、〔叢林中也た須是らく這の老漢にして始めて得し。這の老漢を放出せよ。〕臨済未だ是れ白拈賊にあらず。〔癩児伴を牽く。直饒好手なるも也た人に捉われ了る。〕四句を離れ百非を絶す、〔什麼を道うぞ。也た須是らく自ら点検し看るべし。阿爺は阿爹に似たり。〕天上人間唯だ我のみぞ知る。〔我を用て什麼か作ん。拄杖子を奪却らん。或若人無く我無く、得無く失無くんば、什麼を将てか知らん。〕

一 半分閉じて半分開く。思わせぶりな示し方。二 金(鐘)の音に始まり、玉(磬)を打って終わる。終始一貫みごとに備わること。『孟子』万章下による。三 口をへの字に結んで黙りこむ。「匾担」は天

秤棒。四 一頭の馬（馬祖）が天下の人を蹴ちらす。五 臨済などまだ「ひったくり」でもない。臨済は、馬祖の四世の法孫でその機鋒の鋭さから「白拈賊」と評された。六「おやじ」も「とっつぁん」も似たようなもの。何をそんなにこだわるのか。

［評唱］　蔵頭白、海頭黒、且道、意作麼生。這些子[一]、天下衲僧跳不出。看他雪竇後面合殺得好。道、直饒是明眼衲僧、也会不得。這箇些子消息、謂之神仙秘訣、父子不伝。釈迦老子説一代時教、末後[二]単伝心印。喚作金[三]剛王宝剣、喚作正位。恁麼葛藤、早是事不獲已。古人略露[四]些子鋒鋩。若是透得底人、便乃七穿八穴、得大自在。若透不得、従前無悟入処、転説転遠也。

馬駒踏殺天下人、西天般若[五]多羅、讖達磨云、[六]震旦雖闊無別路、要仮児孫脚下行。[七]金雞解銜一粒粟、供養十

［評唱］「蔵頭は白く、海頭は黒し」と、且道、意作麼生。這の些子、天下の衲僧跳け出せず。看よ他の雪竇後面に合殺り得て好きことを。道く、「直饒是れ明眼の衲僧も也た会すること得ず」と。這箇些子の消息、之を神仙の秘訣と謂い、父子も伝えず。釈迦老子、一代時教を説き、末後に心印を単伝す。喚んで金剛王宝剣と作し、喚んで正位と作す。恁麼の葛藤、早是に事已むことを獲ず。古人略些子の鋒鋩を露すなり。若是透得底人ならば、便乃ち七穿八穴して、大自在を得ん。若し透不得して、従前として悟入の処無くんば、転た説くほどに転た遠からん。

「馬駒踏殺す天下の人」とは、西天の般若多羅、達磨に讖して云く、「震旦闊しと雖も別路無し、児孫の脚下を仮りて行かんことを要す。金雞解く一粒の粟を

方羅漢僧。又六祖[八]謂譲[九]和尚曰、向後仏法、[一〇]従汝辺去。已後出一馬駒、踏殺天下人。厥後江西法嗣、布於天下、時号馬祖焉。[一一]達磨六祖、皆先讖馬祖。看他作略果然別。只道、蔵頭白、海頭黒、便見踏殺天下人処。只這一句黒白語、千人万人咬不破。

一 うまく結着をつけた。 二 一切のものを自在に断ち切る宝剣。 三 絶対的に正しい立場。 四 七通八達。縦横無尽に突き通し突き抜ける。 五 第二七祖。達磨の師とされる。 六 中国のこと。 七 にわとりの美称。南嶽(金州の人とされる)を暗示する。 八 慧能(六三八―七一三)。 九 南嶽懐譲(六七七―七四四)。 一〇 お前さんの方へ行くだろう。 一一 「達磨」は「般若多羅」の誤り。

臨済未是白拈賊、[一]臨済一日示衆云、赤肉団上有一無位真人、常向汝等諸人面門出入、未証拠者看看。時有僧出問、如何是無位真人。臨済下禅牀、[二]搊住云、道道。僧無語。済托開云、

銜え、十方の羅漢僧に供養せん」と。又た六祖、譲和尚に謂って曰く、「向後仏法、汝が辺より去かん。已後一馬駒を出だして、天下の人を踏殺さん」と。厥の後江西の法嗣、天下に布く、時に馬祖と号す。達磨六祖、皆な先に馬祖を讖す。看よ他の作略、果然して別なることを。只だ「蔵頭は白く、海頭は黒し」と道いて、便ち天下の人を踏殺す処を見る。只だ這の一句「黒白」の語、千人万人咬み破けず。

「臨済未だ是れ白拈賊にあらず」とは、臨済、一日、衆に示して云く、「赤肉団上に一無位の真人有って、常に汝等諸人の面門より出入す、未だ証拠せざる者は看よ看よ」。時に僧有り、出でて問う、「如何なるか是れ無位の真人」。臨済、禅牀を下り、搊住んで云く、

無位真人是什麼乾屎橛。[三]雪峰後聞云、臨済大似白拈賊。雪竇要与他臨済相見、観馬祖機鋒、尤過於臨済。此正是白拈賊、臨済未是白拈賊也。雪竇一時穿却了也、却頌這僧道、離四句、絶百非、*天上人間唯我知。且莫向鬼窟裏作活計。[四]古人云、問在答処、答在問処。早是奇特。你作麼生離得四句、絶得百非。雪竇道、此事唯我能知。直饒三世諸仏、也覰不見。既是**独自箇知、諸人更上来、求箇什麼。[五]大潙真如拈云、這僧恁麼問、馬祖恁麼答。離四句、絶百非、智蔵・海兄都不知。要会麼。不見道、馬駒踏殺天下人。

「道え道え」。僧、語無し。済托開して云く、「無位の真人、是れ什麼たる乾屎橛ぞ」と。雪峰、後に聞いて云く、「臨済大いに白拈賊に似たり」と。雪竇他の臨済と相見せんと要し、馬祖の機鋒を観るに、尤も臨済に過れり。此れ正に是れ白拈賊、臨済は未だ是れ白拈賊にあらざるなり。雪竇一時に穿却ち了れり。却に這の僧を頌して道く、「四句を離れ百非を絶す、天上人間唯だ我のみぞ知る」と。且も鬼窟裏に向いて活計を作すこと莫れ。古人云く、「問は答処に在り、答は問処に在り」と。早是に奇特なり。你、作麼生か四句を離れ得、百非を絶し得ん。雪竇道く、「此の事は唯だ我のみぞ能く知る」と。直饒三世の諸仏も、也た覰い見ず。既是に独自箇のみぞ知る、諸人更に上来たりて、箇の什麼をか求めん。大潙真如拈げて云く、「這の僧恁麼に問い、馬祖恁麼に答う。四句を離れ百非を絶して、智蔵・海兄都て知らず。会せんと要すや。見道ずや、『馬駒踏殺す天下の人』」と。

＊天上人間唯我知且　福本は「切」。＊＊自箇　福本は「自各」。

一『臨済録』上堂（岩波文庫二〇頁）を参照。**二** ぐっと胸ぐらをつかむ。**三** 雪峰義存（八二二―九〇八）。**四** 首山省念（九二六―九九三）。**五** 大潙慕喆（？―一〇九五）。真如禅師と称された。

第七四則　金牛和尚呵呵笑

垂示云、鏌鎁横按、鋒前翦断葛藤窠。明鏡高懸、句中引出毘盧印。田地穏密処、著衣喫飯。神通遊戯処、如何湊泊。還委悉麼。看取下文。

第七四則　金牛和尚、呵呵と笑う

垂示に云く、鏌鎁横に按えて、鋒前もて葛藤窠を翦断る。明鏡高く懸けて、句中に毘盧印を引き出す。田地穏密の処、著衣喫飯す。神通遊戯の処、如何か湊泊せん。還た委悉すや。下文を看取よ。

一 名剣の名。二 言句のしがらみ。三 毘盧遮那仏の法界定印。真理の証。四 堅実で、しかもその痕跡すらとどめない境地。五 着物を着たり飯を食ったり。平常のままであること。六 無礙自在の境地。七 勘どころをつかむ。八 知る。明らめる。委知。

【本則】挙。金牛和尚毎至斎時、自将飯桶於僧堂前作舞、呵呵大笑云、菩薩子喫飯来。〔竿頭糸線従君弄、*不犯清波意自殊。醍醐毒薬一時行。是則是七珍八宝一時羅列、争奈相逢者少。〕雪竇云、雖然如此、金牛不是好心。〔是賊識賊、是精識精。来

【本則】挙す。金牛和尚、斎時に至る毎に、自ら飯桶を将て僧堂の前に舞を作し、呵呵大笑して云く、「菩薩子、飯を喫し来たれ」と。〔竿頭の糸線は君の弄るに従すも、清波を犯さざるは意自ずから殊なる。醍醐と毒薬と一時に行る。七珍八宝一時に羅列すと是則是も、争奈せん相逢う者少なることを。〕雪竇云く、「此の如くなりと雖然も、金牛は是れ好心ならず」。〔是れ

説是非者、便是是非人。〕僧問長慶[九]、古人道、菩薩子喫飯来、意旨如何。〔不妨疑著、元来[一〇]不知落処。長慶道什麽。〕慶云、大似因斎慶讃[一一]。〔相席打令。拠款結案。〕

賊にして賊を識り、是れ精にして精を識る。来たりて是非を説う者は、便ち是れ是非の人なり。〕僧、長慶に問う、「古人道く、『菩薩子、飯を喫し来たれ』とは、意旨如何」。〔不妨に疑著うも、元来、落処を知らず。長慶什麽と道うや。〕慶云く、「斎に因って慶讃するに大いに似たり」。〔席を相て令を打す。款に拠って案を結す。〕

＊不犯清波意自殊　福本は「不把輪勾付与君」。

一 馬祖の法嗣。二 中食。昼食。三 竿の先の釣糸はどうあやつってもらってもよいが、澄んだ波をかき乱さない私の釣り方は、またそれなりの心構えがあってのことだ。船子徳誠の語（『祖堂集』五・華亭章）。四 受け取り手次第で甘露味にも毒薬にもなるような振舞。五 山海の珍味をことごとく具えたご馳走。六 善意、好意。七 蛇の道はへび。「精」は物の怪。八 あれこれ文句をつける当人こそが、いわくのある人間だ。九 長慶慧稜（八五四—九三二）。一〇 食事の時に便乗して「ありがたや」と唱える。第九三則・本則にも。一一 宴席の雰囲気を見て、ふさわしい酒令（酒席での遊戯）を行う。

【評唱】金牛乃馬祖下尊宿。毎至斎時、自将飯桶於僧堂前作舞、呵呵大笑云、菩薩子喫飯来。如此者二十年。

【評唱】金牛は乃ち馬祖下の尊宿なり。斎時に至る毎に、自ら飯桶を将て僧堂の前に舞を作し、呵呵大笑して云く、「菩薩子、飯を喫し来たれ」と。此の如くす

且道、他意在什麼処。若只喚作喫飯、尋常[一]敲魚撃鼓、亦自告報矣。又何須更自将飯桶来[二]、作許多伎倆。莫是他顚麼。莫是提唱建立麼。若是提唱此[三]事、何不去宝華王座[四]上、敲床竪払。須要如此、作什麼。今人殊不知、古人意在言外。何不且看祖師当時初来底題目道什麼。分明説道、教外別伝、単伝心印。古人方便、也只教你直截承当去。後来人妄自卜度、便道、那裏有許多事。寒則向火、熱則乗涼、飢則喫飯、困則打眠。若恁麼以常情[五]義解詮註、達磨一宗掃土而尽。不知古人向二六[六]時中、念念不捨、要明此事。

る者二十年。且道、他の意は什麼処にか在る。若し只だ喚んで「飯を喫す」と作さば、尋常魚を敲き鼓を撃って、亦た自ら告報せん。又た何ぞ須いん、更に自ら飯桶を将ち来たりて許多な伎倆を作すことを。是れ他は顚えるに莫ずや。是れ提唱建立するに莫ずや。若し是此の事を提唱せんとせば、何ぞ宝華王座上に去いて、床を敲き払を竪てざる。此の如きことを須要いて什麼か作ん。今の人は殊に知らず、古人の意は言外に在ることを。何ぞ且ず祖師当時初来底の題目什麼と道いしかを看ざる。分明と説道う、「教外別伝、単伝心印」と。古人の方便、也た只だ你をして直截に承当い去らしむ。後来の人妄に自ら卜度りて、便ち道う、「那裏にか許多の事有らん。寒ければ則ち火に向かい、熱ければ則ち涼に乗じ、飢うれば則ち飯を喫し、困れば則ち打眠る」と。若し恁麼に常情を以て義解詮註せば、達磨の一宗、土を掃って尽きん。知らず古人は二六時中に向いて念念捨てず、此の事を明らめんと要するこ

とを。

一 食事の時を知らせる。 二 一つの命題として提起する。 三 禅の極則。 四 説法の高座。須弥座。 五 意義を詮索する。 六 一日中。

雪竇云、雖然如此、金牛不是好心。只這一句、多少人錯会。所謂醍醐上味、為世所珍、遇斯等人、翻成毒薬。金牛既是落草為人、雪竇為什麼道、不是好心。因什麼、却恁麼道。衲僧家須是有生機始得。今人不到古人田地、只管道、見什麼心、有什麼仏。若作這見解、壊却金牛老作家了也。須是子細看始得。若只今日明日、口快些子、無有了期。

雪竇云く、「此の如くなりと雖然も、金牛は是れ好心ならず」と。只だ這の一句、多少の人錯り会す。所謂醍醐の上味は世の珍とする所と為るも、斯等の人に遇わば、翻って毒薬と成る。金牛既是に落草して人の為にするに、雪竇は為什麼にか道う、「是れ好心ならず」と。什麼に因ってか却って恁麼に道う。衲僧家須是らく生機有って始めて得し。今の人は古人の田地に到らずして、只管に道う、「什麼の心をか見、什麼の仏か有らん」と。若し這の見解を作さば、金牛なる老作家を壊却い了らん。須是らく子細に看て始めて得し。若し只だ今日明日、口快些子ならば、了期有ること無し。

一 生き生きしたはたらき、生命力。

後来長慶上堂。僧問、古人道、菩薩子喫飯来、意旨如何。慶云、大似因斎慶讃。尊宿家忒煞慈悲、漏逗不少。是則是因斎慶讃、你且道、慶讃箇什麽。看他雪竇頌云、

【頌】白雲影裏笑呵呵、〔笑中有刀。熱発作什麽。天下衲僧、不知落処。〕両手持来付与他。〔豈有恁麽事。莫謗金牛好。喚作飯桶得麽。若是本分衲僧、不喫這般茶飯。〕若是金毛獅子子、〔須是他格外、始得許他具眼、只恐眼不正。〕三千里外見誵訛。〔不直半文銭。一場漏逗。誵訛在什麽処。瞎漢。〕

一「家」は人に関する語に付く接尾語。

後来に長慶上堂す。僧問う、「古人道く、『菩薩子、飯を喫し来たれ』とは、意旨如何」。慶云く、「斎に因って慶讃するに大いに似たり」と。尊宿家は忒煞だ慈悲にして、漏逗少なからず。「斎に因って慶讃す」とは是則是の、你は且道、箇の什麽をか慶讃す。看よ他の雪竇の頌に云く、

【頌】白雲の影裏に笑うこと呵呵、〔笑中に刀有り。熱発して什麽か作ん。天下の衲僧、落処を知らず。〕両手に持ち来たりて他に付与す。〔豈に恁麽の事有らんや。金牛を謗ること莫くんば好し。喚んで飯桶と作して得しきや。若是本分の衲僧ならば這般る茶飯を喫せず。〕若是金毛の獅子子ならば、〔須是らく他、格外なるべくして始めて他の具眼なるを許むるを得るも、只だ恐らくは眼正しからざらん。〕三千里外に誵訛を見ん。〔半文銭にも直いせず。一場の漏逗。誵訛什麽

処(こ)にか在る。瞎漢(かっかん)。」

一 白雲輝く下でカラカラと大笑い。寒山のイメージ。二 熱病をおこす。カッカする。三 金牛和尚の飯を受けるに足る達道者。四「他」は衍字か。五 ひとくせあるところ。問題の所在。

〔評唱〕白雲影裏笑呵呵。長慶道、因斎慶讃。雪竇道、両手持来付与他。且道、只是与他喫飯、為当別有奇特。若向箇裏知得端的、便是箇金毛獅子子。若是金毛獅子子、更不必金牛将飯桶来、作舞大笑。直向三千里外、便知他敗欠処。古人道[一]、鑑在機先[二]、不消一捏。所以衲僧家、尋常須是向格外用、始得称本分宗師。若只拠語言、未免漏逗。

〔評唱〕「白雲の影裏に笑うこと呵呵」と。長慶道(いわ)く、「斎に因って慶讃す」と。雪竇道く、「両手に持ち来たりて他に付与す」と。且道(さて)、只だ是れ他(かれ)に与(あた)えて飯を喫せしむるか、為当(はた)別に奇特有るか。若し箇裏(ここ)に向(お)いて端的を知得せば、便ち是れ箇(こ)の金毛の獅子子ならん。若是(もし)金毛の獅子子ならば、更に金牛の飯桶を将(も)ち来たり、舞を作(な)して大笑するを必とせじ。直(じき)に三千里外に向(お)いて、便ち他(かれ)の敗欠(しくじり)の処を知らん。古人道く、「鑑(かがみ)は機先に在り、一捏(ひとひねり)すら消(もち)いず」と。所以(ゆえ)に衲僧家、尋常須是(すべか)らく格外に向(お)いて用(はたら)いて、始めて本分の宗師と称するを得ん。若し只だ語言に拠(よ)らば、未だ漏逗を免れず。

一 未詳。二 兆す以前に正体を見て取る。

第七五則　烏臼問法道

垂示云、霊鋒宝剣、常露現前。亦能殺人、亦能活人。在彼在此、同得同失。若要提持、一任提持。若要平展、一任平展。且道、不落賓主、不拘回互時如何。試挙看。

第七五則　烏臼、法道を問う

垂示に云く、霊鋒の宝剣、常に現前に露る。亦た能く人を殺し、亦た能く人を活かす。彼に在り此に在り、同に得同に失う。若し提持せんと要せば、一に提持するに任す。若し平展せんと要せば、一に平展するに任す。且道、賓主に落ちず、回互に拘らざる時は如何。試みに挙し看ん。

一「霊鋒〜活人」は大慧の『正法眼蔵』上に見える羅山道閑の語。二 問題として突きつける。三 平常のままに提示する。四 主客の範疇に嵌まらず、相対の関係にとらわれない。

【本則】挙。僧従定州和尚会裏来到*烏臼。烏臼問、定州法道何似這裏。〔言中有響。要辨浅深。探竿影草。太煞瞞人。〕僧云、不別。〔死漢中有活底。一箇半箇。鉄橛子一般。踏著

【本則】挙す。僧、定州和尚の会裏より来たりて烏臼に到る。烏臼問う、「定州の法道、這裏と何似」。〔言中に響有り。浅深を辨ずるを要す。探竿影草。太だ人を瞞す。〕僧云く、「別ならず」。〔死漢の中に活底有り。一箇半箇。鉄橛子と一般。実地を踏著す。〕

実地。〕臼云、若不別、更転彼中去。便打。〔灼然、[八]正令当行。〕僧云、棒頭有眼、不得[九]草草打人。〔也是這作家始得。却是獅子児。〕臼云、今日[一〇]打著一箇也。又打三下。〔説什麼一箇、千箇万箇。〕僧便出去。〔元来是屋裏人、只得受[一一]屈。只是見機而作。〕臼云、[一二]屈棒元来有人喫在。〔[一三]唖子喫苦瓜。[一四]放去又収来。[一五]点得回来、堪作何用。〕僧転身云、[一六]争奈杓柄在和尚手裏。〔[一七]依前三百六十日、却是箇伶俐衲僧。〕臼云、汝若要、山僧回与汝。〔知他阿誰是君、阿誰是臣。敢向虎口横身。忒煞[一八]不識好悪。〕僧近前、奪臼手中棒、打臼三下。〔也是一箇作家禅客始得。賓主互換、縦奪臨時。〕臼云、屈棒屈棒。〔[一九]点。這老

臼云く、「若し別ならずんば、更に彼中に転じ去れ」。便ち打つ。〔灼然なり、正令当に行わる。〕僧云く、「棒頭に眼有り、草草に人を打つこと不得れ」。〔也た是れ這の作家にして始めて得し。却って是れ獅子児なり。〕臼云く、「今日、一箇を打著せり」。又た打つこと三下す。〔什麼の一箇とか説わん、千箇万箇。〕僧便ち出で去る。〔元来是れ屋裏の人、只だ屈を受くることを得たり。只だ是れ機を見て作す。〕臼云く、「屈棒を元来人の喫すること有る在」。〔唖子、苦瓜を喫す。放去し又た収来す。点得せられて回り来たるとも、何の用を作すにか堪えん。〕僧、身を転じて云く、「争奈せん杓柄は和尚の手の裏に在り」。〔依前として三百六十日なるも、却って是れ箇の伶俐き衲僧。〕臼云く、「汝若し要せば、山僧は汝に回与さん」。〔知他、阿誰か是れ君、阿誰か是れ臣なる。敢て虎口に身を横たう。忒煞だ好悪を識らず。〕僧近前って臼の手中の棒を奪い、臼を打つこと三下す。〔也た是れ一箇の作家の禅

漢、著[二〇]什麼死急。〕僧云、有人喫在。〔[二一]呵呵。是幾箇杓柄、却在這僧手裏。〕曰云、草草打著箇漢。〔[二二]不落両辺。知他是阿誰。〕僧便礼拝。〔臨危不変、方是丈夫児。〕曰云、和尚***却[二三]恁麼去也。〔点。〕僧大笑而出。〔作家禅客、天然[二四]有在。猛虎須得清風随、方知尽[二五]始尽終。天下人****摸索不著。〕曰云、[二六]消得恁麼、消得恁麼。〔可惜放過。何不劈脊便棒。将謂走到什麼処去。〕

客にして始めて得し。賓主互換、縦奪時に臨む。〕曰云く、「屈棒、屈棒」。〔点。這の老漢什麼の死急をか著く。〕僧云く、「人の喫すること有る在」。〔呵呵。是れ幾箇の杓柄か却って這の僧の手の裏に在る。〕曰云く、「草草に箇の漢を打著す」。〔両辺に落ちざるは、知他是れ阿誰なるぞ。〕僧、便ち礼拝す。〔危うきに臨んで変ぜずして、方めて是れ丈夫児。〕曰云く、「却って恁麼にし去れり」。〔点。〕僧大笑して出づ。〔作家の禅客、天然の在る有り。猛虎は清風の随うを須得ちて方めて始を尽し終を尽すを知る。天下の人摸索不著。〕曰云く、「恁麼を消得す、恁麼を消得す」。〔惜しむべし放過することを。何ぞ劈脊に便ち棒せざる。走げて什麼処にか到り去れりと将謂いしに。〕

＊到烏曰　福本ではこの下に「何必」という著語が有る。　＊＊灼然　福本は「灼然打著」。　＊＊＊和尚　宋本『頌古』『五灯会元』には無い。あとの評唱での引用にも無い。衍字と認めて読まない。これを定州和尚に当てるのは誤り。　＊＊＊＊天下人　福本に無し。

一 定州大像山定真院の石蔵（七一八―八〇〇）。二 馬祖の法嗣。三 仏法。また仏法にかかわる発言

や指導の仕方。四「何如」に同じ。〜にくらべてどうだ。五 魚を獲るしかけ。問いかけて相手に探りを入れる喩え。六 得難い人物をいう。七 足が地についている。八 天子が定めた法令が目の当たりに実施された。九 そそくさ、いい加減に。一〇 打ち甲斐のある男を打てたわい。一一 身に覚えのない目に遇う。一二 おまえにとっては打たれる理由もない棒を、よくもまあ喰らったものだ。「屈棒」は無実の罪で打たれる罰棒。一三 口には言えない苦しみ。一四 ゆるめたり、ひきしめたり。一五 烏臼に一発やられてもどってきても物の役にも立たぬ。一六 おまえのは棒ではなくてひしゃくじゃないか。「杓」は臼で搗いた穀物を掬いとるためのもの。烏臼の「臼」にかこつけた逆襲。一七 変わりばえのしないやり口だが。一八 ものの道理がわからない、まともな常識がない。一九 そこだ！ 二〇 なにをそうムキになっているのか。二一 笑い声。二二 正反・順逆の枠に拘われていない。二三 なんと、そういうやりくちなんだな。二四 天性自然の風格がある。二五 始めあり終りあるきちんとしたけじめのつけ方。二六 (いかにもおまえは)それだけのことはある。「消得」は、その資格がある、それに価する。

【評唱】　僧従定州和尚会裏来到烏臼。臼亦是作家。諸人若向這裏識得此二人一出一入、千箇万箇、只是一箇。作主也恁麼、作賓也恁麼。二人畢竟合成一家。一期勘辨、賓主問答、始終作家。看烏臼問這僧云、定州法道

【評唱】　僧、定州和尚の会裏より来たりて烏臼に到る。臼も亦た是れ作家なり。諸人若し這裏に向いて、此の二人の一出一入を識得せば、千箇万箇も只だ是れ一箇。主と作ることも也た恁麼、賓と作ることも也た恁麼なり。二人畢竟合して一家と成る。一期の勘辨、賓主問答するに、始終作家なり。看よ烏臼這の僧に問うて云

何似這裏。僧便云、不別。当時若不是烏臼、難奈這僧何。臼云、若不別、更転彼中去。便打。争奈這僧是作家漢、便云、棒頭有眼、不得草草打人。臼一向行令云、今日打著一箇也。又打三下。其僧便出去。看他両箇転轆轆地、倶是作家了這一事。須要分緇素、別休咎。這僧雖出去、這公案却未了在。烏臼始終要験他実処、看他如何。這僧却似撐門拄戸、所以未見得他。烏臼却云、屈棒元来有人喫在。這僧要転身吐気、却不与他争、軽軽転云、争奈杓柄在和尚手裏。烏臼是頂門具眼底宗師、敢向猛虎口裏横身云、汝若要、山僧回与汝。這漢是箇肘下有符底漢、所謂見義不為無勇也。更不擬議、近前奪烏臼手中棒、打臼

く、「定州の法道、這裏と何似」。僧便ち云く、「別ならず」と。当時若し是れ烏臼にあらずんば、這の僧を奈何ともし難からん。臼云く、「若し別ならずんば、更に彼中に転じ去れ」と。便ち打つ。争奈せん這の僧は是れ作家の漢なれば、便ち云く、「棒頭に眼有り、草草に人を打つこと不得れ」と。臼一向に令を行じて云く、「今日、一箇を打著せり」。又た打つこと三下す。其の僧便ち出で去る。看よ他の両箇転轆轆地、倶に是れ作家にして這の一事を了ずることを。須らく緇素を分ち休咎を別つ要し。這の僧出で去ると雖も、這の公案却って未だ了らざる在。烏臼は始終他の実処を験し、他は如何かを看んと要す。這の僧却って門を撐え戸を拄うるに似て、所以に未だ他を見得れず。烏臼却って云く、「屈棒を元来人の喫すること有る在」。這の僧、身を転じ気を吐かんと要して、却って他と争わず、軽軽と転じて云く、「争奈せん、杓柄は和尚の手の裏に在り」と。烏臼は是れ頂門に眼を具する底の宗師な

三下。臼云、屈棒屈棒。你且道、意作麼生。頭上道、屈棒元来有人喫在。及乎到這僧打他、却道、屈棒屈棒。僧云、有人喫在。臼云、草草打著箇漢。頭上道、草草打著一箇也。到末後自喫棒、為什麼亦道、草草打著箇漢。当時若不是這僧卓[*九]朔地、也不奈他何。這僧便礼拝。這箇礼拝、最毒也、不是好心。若不是烏臼、也識他不破。烏臼云、却恁麼去也。其僧大笑而出。烏臼云、消得恁麼、消得恁麼。看他作家相見、始終賓主分明、断而能続。其実也只是互換之機。他到這裏、亦不道有箇互換処。自是他古人絶情塵意想。彼此作家、亦不道有得有失。雖是一期間語言、両箇活鱍鱍地、都有血脈針線。若能於此見

れば、敢て猛虎の口の裏に身を横たえて云く、「汝若し要せば、山僧は汝に回与さん」と。這の漢は是れ箇の肘の下に符有る底の漢、所謂義を見て為ざるは勇無きなり。更に擬議わず、近前って烏臼の手中の棒を奪い、臼を打つこと三下す。臼云く、「屈棒、屈棒」と。你且道、意作麼生。頭上に道う、「屈棒を元来人の喫すること有る在」。這の僧、他を打つに到るに及んで、却って道う、「屈棒、屈棒」と。僧云く、「人の喫すること有る在」。臼云く、「草草に箇の漢を打著す」。頭上に道う、「草草に一箇を打著せり」と。末後に自ら棒を喫するに到って、為什麼にか亦た道う、「草草に箇の漢を打著す」と。当時若し是れ這の僧卓朔地なるにあらずんば、也た他を奈何ともせじ。這の僧便ち礼拝す。這箇の礼拝、最も毒なり、是れ好心ならず。若し是れ烏臼にあらずんば、也た他を識破れざらん。烏臼云く、「却って恁麼にし去れり」と。其の僧大笑して出づ。烏臼云く、「恁麼を消得す、恁麼を消得

得、亦乃向十二時中歴歴分明。其僧便出、是双放、已下是双収、謂之互換也。雪竇正恁麼地頌出。

す」と。看よ他の作家の相見、始終賓主分明にして、断えて而も能く続くことを。其の実は也た只だ是れ互換の機なり。他這裏に到って、亦た箇の互換の処有りと道わず。自是より他の古人は情塵意想を絶す。彼此の作家も亦た得有り失有りと道わず。是れ一期の間の語言なりと雖も、両箇活鱍鱍地にして、都に血脈針線有り。若し能く此に於て見得らば、亦乃ち十二時中に歴歴分明ならん。其の僧便ち出づるは、是れ双放、已下は是れ双収、之を互換と謂うなり。雪竇正に恁麼地に頌出す。

＊卓朔　福本は「眼貶貶」。

一 相手の在りようを検証すること。二 その場の決着をつける。三 磨をごろごろ挽く音。あらゆるものを自在に転化するさま。四 悟りの機微をつかんだ。五 著実・真実のところ。六 門戸に突っかい棒をする。自分の立場を守るのに精一杯。七 魔よけの護符を脇の下につけた、特殊な力量を持った者。八『論語』為政の句。九 突っ張ったさま。目をギラリと見開いたり、耳をピンと立てたり。一〇 並の思弁の働き。一一 問題の在りかに脈々と通じる筋みち。

【頌】 呼即易、〔天下人総疑著。臭

【頌】 呼ぶは即ち易く、〔天下の人総て疑著わん。臭

肉引来蝿。天下衲僧、総不知落処。〕遣即難。〔不妨[一]勦絶海上明公秀。〕互換機鋒子細看。〔一出一入、二倶作家。〕[二]一条拄杖両人扶。且道、在阿誰辺。〕[三]劫石固来猶可壊、〔[四]袖裏金鎚、如何辨取。千聖不伝。〕滄溟深処立須乾。〔向什麼処安排。〕棒頭有眼。独許他親得。〕烏臼老、[五]烏臼老、〔可惜許。[六]這老漢不識好悪。〕幾何般。〔也是箇無端漢。[七]百千万重*。〕与他杓柄太無端。〔已在言前。[八]泊合打破蔡州。好与三十棒。且道、過在什麼処。〕

肉は蝿を引き来たす。天下の衲僧は、総て落処を知らず。〕遣るは即ち難し。〔不妨も海上の明公秀を勦絶す。〕互換の機鋒子細に看よ。〔一出一入、二倶に作家。〕一条の拄杖を両人扶く。且道、阿誰の辺にか在る。〕劫石は固くし来たるも猶お壊すべし、〔袖の裏の金鎚、如何か辨取けん。千聖すら伝えず。〕滄溟深き処も立ちどころに須らく乾くべし。〔什麼処にか安排けん。〕棒頭に眼有り。独り許む他親しく得たることを。〕烏臼老、烏臼老、〔可惜許。這の老漢、好悪を識らず。〕幾何般ぞ。〔也た是れ箇の無端の漢。百千万重。〕他に杓柄を与うること太だ無端なり。〔已に言前に在り。泊合ど蔡州を打破せられんとす。好し三十棒を与うるに。且道、過は什麼処にか在る。〕

＊重　福本は「里」。

一 捉えようの無いところを一掃して問題点を顕わにした。「明公秀」は、蜃気楼のこと。まぼろし、実体なきものの喩え。二 二人が互角に渡りあいながら、帰する所は一つ。三 劫石は堅固な物だが、それでも叩き壊すことができる。劫石は、経典に説かれる大磐石で、ここは石蔵を暗喩。四（その劫

石を叩き割る）袖に隠し持つ鉄製ハンマー。五 機用の変転ぶりは幾通りなのか。六 突拍子もない。七 端倪すべからざる機用の深さ。八 唐の元和九年（八一四）、呉元済は叛乱を起して蔡州城に立て籠ったが、十二年（八一七）に攻め落とされた。「打破蔡州」は相手の依って立つ足場を粉砕すること。ここでは、烏臼は危うくそういう目に遭うところだったという意。ちなみに、「人境両倶奪」の境地について、臨済が「并汾絶信、独処一方」と答えた（『臨済録』示衆、岩波文庫三一頁）ことを踏まえて、大慧は「打破蔡州城、殺却呉元済」と言っている。

〔評唱〕　呼即易、遣即難、一等是落草。雪竇忒煞慈悲。尋常道、呼蛇易、遣蛇難。如今将箇瓢子吹来、喚蛇即易、要遣時即難。一似将棒与他却易、復奪他棒遣去却難。須是有本分手脚、方能遣得他去。烏臼是作家、有呼蛇底手脚、亦有遣蛇底手段。這僧也不是瞌睡底。烏臼問、定州法道何似這裏、便是呼他。烏臼便打、是遣他。僧云、棒頭有眼、不得草草打人、却転在這僧処、便是呼来。烏臼云、汝

〔評唱〕「呼ぶは即ち易く、遣るは即ち難し」とは、一等く是れ落草。雪竇忒だ慈悲なり。尋常に道う、「蛇を呼ぶは易く、蛇を遣るは難し」と。如今箇の瓢子を吹き来たりて、蛇を喚ぶは即ち易く、遣らんと要する時は即ち難し。一に棒を他に与うるは却って易く、復た他の棒を奪って遣り去るは却って難きに似たり。須是らく本分の手脚有って、方めて能く他を遣り得去るべし。烏臼は是れ作家にして、蛇を呼ぶ底の手脚有り、亦た蛇を遣る底の手段有り。這の僧も也た是れ瞌睡底にあらず。烏臼問う、「定州の法道、這裏と何似」とは、便ち是れ他を呼ぶなり。烏臼便ち打つは、是れ

若要、山僧回与汝。僧便近前奪棒、也打三下、却是這僧遣去。乃至這僧大笑而出、烏臼云、消得恁麼、消得恁麼、此分明是遣得他恰好。看他両箇、機鋒互換、糸来線去、打成一片、始終賓主分明。有時主却作賓、有時賓却作主。雪竇也讃歎不及。所以道、互換之機、教人且子細看。劫石固来猶可壊。謂此劫石、長四十里、*広八万四千由旬、厚八万四千由旬。凡五百年、乃有天人下来、以六銖衣袖払一下、又去至五百年、又来如此払、払尽此石、乃為一劫。謂之軽衣払石劫。雪竇道、劫石固来猶可壊。石雖堅固、尚爾可消磨尽。此二人機鋒、千古万古、更無有窮尽。滄溟深処立須乾。任是滄溟、洪波浩渺、白浪滔

他(かれ)を遣るなり。僧云く、「棒頭に眼有り、草草に人を打つこと不得(なか)れ」とは、却って這(こ)の僧の処に転在して、便ち是れ呼び来たるなり。烏臼云く、「汝若し要(ほっ)せば、山僧(それがし)は汝に回与(かえ)さん」。僧便ち近前(すす)みて棒を奪い也(ま)た打つこと三下(みたび)するは、却って是れ這の僧遣り去るなり。乃至(ないし)、這(こ)の僧大笑して出で、烏臼云く、「恁麼を消得す、恁麼を消得す」とは、此れ分明(あきらか)に是れ他(かれ)を遣り得て恰好(みごと)なり。看よ他(か)の両箇(ふたり)、機鋒互換、糸来線去(しらいせんこ)、打(だ)成一片(じょういっぺん)、始終賓主分明なることを。有る時は主却って賓と作(な)り、有る時は賓却って主と作(な)る。雪竇也た讃歎し及(き)れず。所以(ゆえ)に道(い)う、「互換の機、人をして且(まず)は子細に看しむ」と。「劫石は固くし来たるも猶お壊すべし」。此の「劫石」と謂(い)うは、長さ四十里、広さ八万四千由旬(ゆじゅん)、厚さ八万四千由旬。凡そ五百年にして乃ち天人の下り来たる有りて、六銖の衣袖を以て払うこと一下(ひとたび)、又た去りて五百年に至り、又た来たりて此の如く払い、此の石を払い尽すを乃ち一劫と為す。之を軽(けい)

天、若教此二人向内立地[四]、此滄溟也須乾竭。雪竇到此、一時頌了、末後更道、鳥臼老、鳥臼老、幾何般。或擒或縦、或殺或活、畢竟是幾何般。与他杓柄太無端。這箇拄杖子、三世諸仏也用、歴代祖師也用、宗師家也用、与人抽釘抜楔、解粘去縛。争得軽易分付与人。雪竇意、要独用。頼値這僧、当時只与他平[五]展。忽若旱地起雷、看他如何当抵。鳥臼過杓柄与人去、豈不是太無端。

衣払石劫と謂う。雪竇道く、「劫石は固くし来たるも猶お壊すべし」。石は堅固なりと雖も、尚爾消磨し尽すべし。此の二人の機鋒は、千古万古、更に窮尽くる有ること無し。「滄溟深き処も立ちどころに須らく乾くべし」。任是滄溟の洪波浩渺、白浪滔天なるも、若教此の二人、内に立地たば、此の滄溟も也た須らく乾き竭すべし。雪竇此に到るや、一時に頌し了って、末後に更に道う、「鳥臼老、鳥臼老、幾何般ぞ」と。或は擒或は縦、或は殺或は活、畢竟是れ幾何般かある。「他に杓柄を与うること太だ無端なり」。這箇の拄杖子、三世の諸仏も也た用い、歴代の祖師も也た用い、宗師家も也た用いて、人の与に釘を抽き楔を抜き、粘を解き縛を去る。争か軽易しく人に分付与すことを得ん。雪竇の意に、独り用いんことを要す。頼に這の僧の当時只だ他の与に平展するに値う。忽若旱地に雷を起こさば、看よ他如何か当抵わん。鳥臼の杓柄を人に過し与え去るは、豈に是れ太だ無端なるにあらずや。

＊広八〜由句〔一四字〕　蜀本に無し。

一 問題がくるりと一転して。 二 相手の出方に自在に対応する。 三 きわめて軽い衣。 四「地」は意味の無い語助。 五 尋常に立ち向かう。

第七六則　丹霞問甚処来

垂示云、細如米末、冷似氷霜。逼塞乾坤、離明絶暗。[一]低低処観之有餘、高高処平之不足。[二]把住放行、総在這裏許。還有[三]出身処也無。試挙看。

第七六則　丹霞、甚処よりか来たると問う

垂示に云く、細かきことは米末の如く、冷たきことは氷霜に似たり。乾坤に逼塞して、明を離れ暗を絶す。低低の処も之を観れば餘り有り、高高の処も之を平ぐれば足らず。把住と放行と、総て這の裏許に在り。還た出身の処有り也無。試みに挙し看ん。

一 低いところにも余りが有り、高いところにも足らないものが有る。凡庸な目では見て取れぬ玄妙な消息。第六九則・頌の著語には「低低処平之有餘、高高処観之不足」と。二 修行者を練磨する手段。押さえ込むことと相手にまかせてやらせておくこと。三 超出、解脱の境地。

【本則】　挙。[一]丹霞問僧、甚処来。〔正是不可総没来処也。要知来処、也不難。〕僧云、山下来。〔著草鞋、入你肚裏過也、[*]只是不会。言中有響[**][二]諳含来。[三]知他是黄是緑。〕霞云、喫飯了也未。〔[四]第一杓悪水澆。[五]何必定

【本則】　挙す。丹霞、僧に問う、「甚処よりか来たる」。〔正に是れ総て来処没かるべからず。来処を知らんと要するも也た難からず。〕僧云く、「山の下より来たる」。〔草鞋を著けて你の肚の裏に入りて過るに、只だ是れ会せず。言中に響有り、諳含し来たる。知他是れ黄なるか是れ緑なるか。〕霞云く、「飯を喫し了る

盤星、要知端的。〕僧云、喫飯了。〔果然撞著箇露柱。却被旁人穿却鼻孔。元来是箇無孔鉄鎚。〕霞云、将飯来与汝喫底人、還具眼麼。〔雖然是倚勢欺人、也是抝款結案。当時好掀倒禅床。無端作什麼。〕僧無語。〔果然走不得。這僧若是作家、向他道、与和尚眼一般。〕

長慶問保福、将飯与人喫、報恩有分。為什麼不具眼。〔也只道得一半。通身是、遍身是。一刀両段。一手擡、一手搦。〕福云、施者受者、二俱瞎漢。〔抝令而行、一句道尽。罕遇其人。〕長慶云、尽其機来、還成瞎否。〔識甚好悪。猶自未肯。討什麼碗。〕

也末」。〔第一杓の悪水澆ぐ。何ぞ必ずしも定盤星ならん、端的を知るを要す。〕僧云く、「飯を喫し了れり」。〔果然して箇の露柱に撞著る。却って旁人に鼻孔を穿却たる。元来是れ箇の無孔の鉄鎚。〕霞云く、「飯を将ち来たりて汝に喫せしめし底の人、還た眼を具せしや」。〔是れ勢に倚って人を欺ると雖然も、也た是れ款に抝って案を結す。当時、好し禅床を掀倒すに。無端に什麼か作ん。〕僧、語無し。〔果然して走げ得ず。這の僧若是作家ならば他に道わん、「和尚の眼と一般なり」と。〕

長慶、保福に問う、「飯を人に喫せしむるは、恩に報ゆるに分有り。為什麼にか眼を具せざる」。〔也た只だ一半を道い得たるのみ。通身是、遍身是。一刀両段。一手には擡げ一手には搦う。〕福云く、「施す者と受くる者と、二り倶に瞎漢なり」。〔令に抝って行い、一句に道い尽す。其の人に遇うこと罕なり。〕長慶云く、「其の機を尽し来たるに、還た瞎と成る否」。〔甚の好

福云、道我瞎、得麼。〔両箇倶是草裏漢。龍頭蛇尾。当時待他道、尽其機来、還成瞎否、只向他道瞎。也只道得一半。一等是作家、為什麼前不搆村、後不迭店。〕

悪をか識らん。猶自未だ肯わず。什麼なる碗を討むるや。〕福云く、「我は瞎す、と道いて得しきや」。〔両箇倶に是れ草裏の漢。龍頭蛇尾。当時他の「其の機を尽し来たるに、還た瞎と成る否」と道うを待って、只だ他に「瞎」と道わん。也た只だ一半を道い得たるのみ。一等く是れ作家なるに、為什麼に前むも村に搆らず、後るも店に迭ばざる。〕

＊只是不会　福本は「只不知」。＊＊諳含来　福本は「諳諳含含」。＊＊＊両箇倶是草裏漢　福本では「二倶瞎漢」の下に在る。

一 丹霞天然(七三八―八二四)。二 言外に寓意を響かせている。三 黄(熟している)か、緑(未熟)か。四『種電鈔』は、「第二杓」とする。五 なにも規準にとらわれることはあるまい、そのものずばりが肝心だ。六 突拍子もなく何をしようというのだ。七 長慶慧稜(八五四―九三二)。八 保福従展(?―九二八)。九 全身が眼そのもの。一〇 分限を発揮し尽す。一一 (満腹のはずなのに)どんな食事にありつこうというのか。

【評唱】鄧州丹霞天然禅師、不知何許人。初習儒学、将入長安応挙、方宿於逆旅、忽夢白光満室。占者曰、

【評唱】鄧州丹霞の天然禅師は、何許の人なるかを知らず。初め儒学を習い、将に長安に入りて挙に応ぜんとし、逆旅に宿すに方りて、忽ち白き光の室に満つる

解空之祥。偶一禅客問曰、仁者何往。曰、選官去。禅客曰、選官何如選仏。霞云、選仏当往何所。禅客曰、今江西馬大師出世、是選仏之場。仁者可往。遂直造江西。才見馬大師、以両手托幞頭脚〈一作額〉。馬師顧視云、吾非汝師、南嶽石頭処去。遽抵南嶽、還似前意投之。石頭云、著槽廠去。師礼謝、入行者堂。随衆作務凡三年。石頭一日告衆云、来日剗仏殿前草。至来日、大衆各備鍬钁剗草。丹霞独以盆盛水、浄頭於師前跪膝。石頭見而笑之、便与剃髪、又為説戒。丹霞掩耳而出、便往江西、再謁馬祖。未参礼、便去僧堂内、騎聖僧頸而坐。時大衆驚愕、急報馬祖。祖躬入堂視之曰、我子天然。霞便下礼拝曰、謝

を夢みたり。占者の曰く、「空を解るの祥なり」と。偶ま一禅客あり、問うて曰く、「仁者は何に往くや」。曰く、「選官に去く」。禅客曰く、「選官は何ぞ選仏に如かん」。霞云く、「選仏には当に何所にか往くべき」。禅客曰く、「今江西に馬大師出世す、是れ選仏の場なり。仁者往くべし」と。遂に直ちに江西に造る。馬大師を見るや才や、両手を以て幞頭脚〈一に「額」に作る〉を托ぐ。馬師顧視て云く、「吾は汝の師に非ず、南嶽の石頭の処に去け」と。遽ぎ南嶽に抵り、還た前意を以て之に投ず。石頭云く、「槽廠に去け」と。師礼謝して、行者堂に入る。衆に随って作務すること凡そ三年。石頭、一日、衆に告げて云く、「来日、仏殿の前の草を剗らん」と。来日に至り、大衆各鍬钁を備えて草を剗る。丹霞独り盆を以て水を盛り、師の前に於て頭を浄め跪膝く。石頭見て之を笑い、便ち与に剃髪し、又た為に説戒す。丹霞、耳を掩って出で、便ち江西に往き、再び馬祖に謁ゆ。未だ参礼せざるに、便

師賜法号。因名天然。他古人天然、如此穎脱。所謂選官不如選仏也。伝灯録中、載其語句。

ち僧堂の内に去きて、聖僧の頸に騎って坐す。時に大衆驚愕し、急ぎ馬祖に報ず。祖、躬ら堂に入り之を視て曰く、「我が子は天然なり」と。霞、便ち下りて礼拝して曰く、「師の法号を賜えるを謝す」と。因って天然と名のる。他の古人天然、此の如く穎脱なり。所謂「選官は選仏に如かず」なり。『伝灯録』の中に其の語句を載す。

*似　福本は「以」。これに従う。

一 官吏に選ばれに行く。二 馬祖道一（七〇九―七八八）。三 頭巾についている二本の垂れ。四 石頭希遷（七〇〇―七九〇）。五 馬小屋当番になりなさい。六 雑役をする未得度の行者の住む寮。七 僧堂の中央に安置する仏像。八 錐の先端が袋から突き出るように、一発で突き抜ける。

直是壁立千仞、句句有与人抽釘抜楔底手脚。*似問這僧道、什麼処来。僧云、山下来。這僧却不通来処、一如具眼倒去勘主家相似。当時若不是丹霞、也**難為収拾。丹霞却云、喫飯了也未。頭辺総未見得。此是第二回

直是に壁立千仞、句句人の与に釘を抽き楔を抜く底の手脚有り。這の僧に問うて道く、「什麼処よりか来たる」。僧云く、「山の下より来たる」と。這の僧却って来処を通さずして、一に具眼のもの倒に去きて主家を勘すが如くに相似たり。当時若し是れ丹霞にあらずんば、也た収拾を為し難からん。丹霞却って云く、

勘他。僧云、喫飯了也。懵懂漢、元来不会。霞云、将飯与汝喫底人、還具眼麼。僧無語。丹霞意道、与你這般漢飯喫、堪作什麼。這僧若是箇漢、試与他一劄、看他如何。雖然如是、丹霞也未放你在。這僧便眼眨眨地無語。

保福・長慶、同在雪峰会下、常挙古人公案商量。長慶問保福、将飯与人喫、報恩有分。為什麼不具眼。不必尽問公案中事、大綱借此語作話頭、要験他諦当処。保福云、施者受者、二俱瞎漢。快哉。到這裏、只論当機事、家裏有出身之路。長慶云、尽其機来、還成瞎否。保福云、道我瞎得

「飯を喫し了れる也末」と。頭辺は総て未だ見得れず。此れは是れ第二回他を勘す。僧云く、「飯を喫し了れり」と。懵懂の漢、元来会せず。霞云く、「飯を汝に喫せしめし底の人、還た眼を具せしや」と。僧、語無し。丹霞の意に道う、「你這般漢に飯を喫せしむとも、什麼をか作すに堪えん」と。這の僧若是箇の漢ならば、試みに他に一劄を与えて、他は如何と看ん。是の如しと雖然も、丹霞も也た未だ你を放さざる在。這の僧便ち眼眨眨地にして語無し。

保福・長慶、同じく雪峰の会下に在り、常に古人の公案を挙げて商量す。長慶、保福に問う、「飯を人に喫せしむるは、恩に報ゆるに分有り。為什麼にか眼を具せざる」と。必ずしも尽くは公案中の事を問わず、大綱此の語を借りて話頭と作して、他の諦当の処を験せんと要す。保福云く、「施す者と受くる者と、二り倶に瞎漢なり」と。快なる哉。這裏に到って、只だ当機の事を論ずるのみ、家裏に出身の路有り。長慶云く、

麼。保福意謂、我恁麼具眼、与你道了也。還道我瞎得麼。雖然如是、半合半開。当時若是山僧、等他道尽其機来、還成瞎否、只向他道瞎。可惜許。保福当時若下得這箇瞎字、免得雪竇許多葛藤。雪竇亦只用此意頌。

「其の機を尽し来たるに、還た瞎と成る否や」。保福云く、「我は瞎す、と道いて得しきや」と。保福の意に謂う、「我恁麼に眼を具して、你の与に道い了れり。還た我は瞎す、と道いて得しきや」と。是の如くなりと雖然も、半合半開なり。当時若是山僧ならば、他の「其の機を尽し来たるに、還た瞎と成る否」と道うを等って、只だ他に「瞎なり」と道わん。可惜許。保福、当時若し這箇の「瞎」の字を下し得ば、雪竇の許多しき葛藤を免れ得んに。雪竇も亦た只だ此の意を用て頌す。

＊似問　福本は「似佗問」。「似佗」は衍字。　＊＊也難為収拾　福本は「也収他不得」。　＊＊＊眨地　蜀本は「瞎」。　＊＊＊＊家裏　蜀本は「句中」、その方がよい。

一 主人である相手の力量を検証する。　二 愚鈍な、ぼんやりした。　三 眼をぱちくりさせて。　四 ぴたりあたった勘どころ。　五 いま直面している問題。

【頌】尽機不成瞎、〔只道得一半。也要験＊他過。言猶在耳。〕按牛頭喫草。〔失銭遭罪。半河南、半河北。

【頌】機を尽さば瞎と成らずと、〔只だ一半を道い得たるのみ。也た他を験し過るを要す。言猶お耳に在り。〕牛の頭を按えて草を喫せしむ。〔銭を失い罪に遭

殊不知、傷鋒犯手。〕四七二三[二]諸祖師、〔有条攀条。帯累先聖。不唯只帯累一人。〕宝器[三]持来成過咎。〔尽大地人、換[四]手搥胸。還我拄杖来。帯累山僧、也出頭不得。〕過咎深、〔可煞深。天下衲僧跳不出。且道、深多少。〕無処尋。〔在你脚跟下、摸索不著。〕天[五]上人間同陸沈。〔天下衲僧、一坑埋却。還有活底人麼。放過一著[＊＊]。蒼天蒼天。〕

う。半(なかば)は河南、半(なかば)は河北。殊に知らず、鋒に傷つき手を犯すことを。〕四七二三の諸祖師、〔条有れば条に攀(よ)る。先聖(せんしょう)を帯累(まきぞえに)す。唯只(ただ)一人を帯累せしのみにあらず。〕宝器を持ち来たりて過咎(とが)を成す。〔尽大地の人、手を換(か)えて胸を搥(う)つ。我に拄杖を還し来たれ。山僧(それがし)を帯累(まきぞえに)して也た出頭し得ざらしむ。〕過咎深く、〔可煞(はなは)だ深し。天下の衲僧跳(ぬ)け出せず。且道(さて)、深きこと多少(いくばく)ぞ。〕尋ぬるに処無し。〔你の脚跟下に在るに、摸索不(さぐりあて)著(られず)。〕天上人間(じんかん)同じく陸沈す。〔天下の衲僧、一坑に埋(うめ)却(こ)まる。還(は)た活底人(いきたるひと)有りや。一著を放過す。蒼天(ああ)、蒼天(ああ)。〕

＊他　福本に無し。　＊＊放過一著　福本では「摸索不著」の次に在り。

一 余計なことをする。機を忘じ切っている保福を無理やり瞎漢にしようとした。 二 西天の二十八祖と唐土の六祖。 三 仏法を伝えるなどという余計なことをしてくれた。 四 悲歎に暮れる仕草。 五 生きとし生けるものが、あたら地上で深く沈められている。「陸沈」は『荘子』則陽に見える。

〔評唱〕尽機不成瞎。長慶云、尽其機来、還成瞎否。保福云、道我瞎得

〔評唱〕「機を尽さば瞎と成らず」。長慶云く、「其の機を尽し来たるに、還(は)た瞎と成らん否(や)」。保福云く、

麼。一似按牛頭喫草。須是等他自喫始得。那裏按他頭教喫。雪竇恁麼頌、自然見得丹霞意。四七二三諸祖師、宝器持来成過咎、不唯只帯累長慶、乃至西天二十八祖、此土六祖、一時埋没。釈迦老子、四十九年、説一大蔵教、末後唯伝這箇宝器。永嘉道、不是標形虚事褫、如来宝杖親蹤跡。若作保福見解、宝器持来、都成過咎。過咎深、無処尋、這箇与你説不得。但去静坐、向他句中点検看。既是過咎深、因什麼却無処尋。此非小過也。将祖師大事、一斉於陸地上平沈却。所以雪竇道、天上人間同陸沈。

「我は瞎す、と道いて得しきや」と。一に牛の頭を按えて草を喫せしむるに似たり。須是らく他自ら喫せんとするを等って始めて得し。那裏にか他の頭を按えて喫せしめん。雪竇恁麼に頌し自然に丹霞の意を見得す。「四七二三の諸祖師、宝器を持ち来たりて過咎を成す」とは、唯只長慶を帯累するのみにあらず、西天の二十八祖と此土の六祖と乃至も一時に埋没す。釈迦老子は四十九年、一大蔵教を説いて、末後に唯だ這箇の宝器を伝う。永嘉道く、「是れ形を標して虚しく事褫するにあらず、如来の宝杖親しく跡を蹤む」と。若し保福の見解を作さば、宝器を持ち来たるは、都て過咎を成すなり。「過咎深く、尋ぬるに処無し」とは、這箇は你に説き得ず。但だ去きて静坐し、他の句中に向いて点検し看よ。既是に過咎深し、什麼に因ってか却って尋ぬるに処無き。此れ小過に非ざるなり。祖師の大事を一斉に陸地上に平沈し却る。所以に雪竇道く、「天上人間同じく陸沈す」と。

一　永嘉玄覚(げんかく)(六七五―七一三)。以下は、その作とされる『証道歌』の句。「杖は修行者が形を飾って無意味に大事がっているのではない、世尊の御杖(おつえ)として、その足跡をお慕いするのだ」。第三一則・頌の評唱に既出。

第七七則　雲門答餬餅

垂示云、向上転去、可以穿天下人鼻孔。似鶻捉鳩。向下転去、自己鼻孔在別人手裏。如亀蔵殻。箇中忽有箇出来道、本来無向上向下、用転作什麼、只向伊道、我也知、你向鬼窟裏作活計。且道、作麼生辨箇緇素。良久云、有条攀条、無条攀例。試挙看。

＊向鬼窟裏作活計　蜀本は「親」。

一「条」は法律の条文、「例」は判例。

【本則】挙。僧問雲門、如何是超仏越祖之談。〔開。旱地忽雷。拶。〕門

第七七則　雲門、餬餅と答う

垂示に云く、向上に転じ去かば、以て天下の人の鼻孔を穿つべし。鶻の鳩を捉うるが似し。向下に転じ去かば、自己の鼻孔は別人の手の裏に在り。亀の殻に蔵るるが如し。箇中に忽し箇の出で来たりて、「本来向上も向下も無し、転ずるを用て什麼か作ん」と道うもの有らば、只だ伊に道わん、「我も也た知る、你が鬼窟裏に活計を作せるを」と。且道、作麼生か箇の緇素を辨ぜん。良久して云く、「条有れば条に攀り、条無ければ例に攀る」と。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。僧、雲門に問う、「如何なるか是れ超仏越祖の談」。〔開けり。旱地の忽雷。拶。〕門云く、

云、餬餅。[五]〔舌拄上齶。[六]過也。[七]〕

「餬餅」。〔舌を上齶に拄く。過ぎされり。〕

一 雲門文偃(八六四―九四九)。二 仏祖よりも今一つ上の次元の消息。「仏向上事」についての談義。三 青天の霹靂。第七五則・頌の評唱に「旱地起雷」と。四 グサリ(と切り込んだ)。五 小麦粉を練って発酵させ、胡麻をまぶして焼き上げた食品。胡餅。六 ものが言えない。ことばに詰まる。七 (その餅は喉を)通り抜けたぞ。

【評唱】　這僧問雲門、如何是超仏越祖之談。門云、餬餅。還覚寒毛卓竪麼。衲僧家問仏問祖、問禅問道、問向上向下了、更＊無可得問、却致箇問端、問超仏越祖之談。雲門是作家、便水長船高、[一]泥多仏大、便答道、餬餅。可謂道不虚行、[二]功不浪施。雲門復示衆云、你勿可作了、[三]見人道著祖師意、便問超仏越祖之談道理。你且喚什麼作仏、喚什麼作祖、即説超仏越祖之談、便問箇出三界。[四]你把三界来看。有什麼見聞覚知、隔碍著你。

【評唱】　這の僧、雲門に問う、「如何なるか是れ超仏越祖の談」。門云く、「餬餅」と。還た寒毛の卓竪つことを覚ゆるや。衲僧家、仏を問い祖を問い、禅を問い道を問い、向上も向下も問い了り、更に得て問うべきこと無くして、却って箇の問端を致し、超仏越祖の談を問う。雲門は是れ作家なれば、便ち水長せば船高く、泥多ければ仏大なるがごとく、便ち答えて道う、「餬餅」と。道は虚しくは行われず、功は浪りには施さずと謂うべし。雲門復た衆に示して云く、「你作すべきこと勿くし了り、人の祖師意を道著つるを見て、便ち超仏越祖の談の道理を問う。你且て什麼を喚んで仏と作し、什麼を喚んで祖と作して、即ち超仏越祖の談と

有什麼[五]声色仏法、与汝可了。[六]了箇什麼碗。以那箇為[七]差殊之見。他古聖勿奈你何、横身為物、道箇[八]挙体全真、物物覿体、不可得。我向汝道、直下有什麼事、早是[九]埋没了也。会得此語、便識得餬餅。

説い、便ち箇の三界を出づることを問うや。你、三界を把り来たり看よ。什麼の見聞覚知の、你を隔碍著ること有らん。什麼の声色仏法の、汝の与に了ずべきこと有らん。箇の什麼なる碗をか了ぜん。那箇を以てか差殊の見と為さん。他の古聖は你を奈何ともすること勿くして、身を横たえて物の為にし、箇の挙体全真、物物覿体と道うも、得べからず。我、汝に『直下に什麼の事か有る』と道うすら、早是に(汝を)埋没し了れり」と。此の語を会得せば、便ち「餬餅」を識得せん。

＊無可得問　福本は「無所可問」、蜀本は「無可所問」。

一 水かさが増せば船は高く浮き、使う泥が多ければ大きな仏像ができる。二 しかるべき相手があってこそ道は発現し、本領が発揮される。三 全くものの役にも立たぬ。以下、『雲門広録』上に見える。四 欲界・色界・無色界。衆生が輪廻する三種の世界。五 感覚的に捉えられる仏法。六 どんな碗飯(おまんま)をモノにするというのか。七 格別すぐれた見地。八 全身まるごと真実。あらゆる物がそのまま真実。九 手も足も出せないようにしてしまった。

五祖云、驢屎比麝香〈一作馬糞〉。所謂直截根源仏所印、摘葉尋枝我不能。到這裏、欲得親切、莫将問来問。看這僧問、如何是超仏越祖之談。門云、餬餅。還識羞慚麼、還覚漏逗麼。有一般人杜撰道、雲門見兎放鷹、便道、餬餅。若恁麼将餬餅、便是超仏越祖之談見去、豈有活路。莫作餬餅会、又不作超仏越祖会。便是活路也。与麻三斤、解打鼓一般。雖然只道餬餅、其実難見。後人多作道理云、麤言及細語、皆帰第一義。若恁麼会、且去作座主。一生贏得多知多解。如今禅和子道、超仏越祖之時、諸仏也踏在脚跟下、祖師也踏在脚跟下。所以雲門、只向他道餬餅。既是餬餅、豈解超仏越祖。試去参詳看。諸方頌

五祖云く、「驢屎を麝香〈一に「馬糞」と作す〉に比す」と。所謂「直に根源を截つは仏の印する所、葉を摘み枝を尋ぬるは我能せず」と。這裏に到っては、「親切ならんと欲得せば、問を将ち来たって問うこと莫れ」。看よ這の僧問う、「如何なるか是れ超仏越祖の談」。門云く、「餬餅」と。還た羞慚を識るや、還た漏逗せるに覚くや。有一般人、杜撰に道う、「雲門は兎を見て鷹を放ち、便ち『餬餅』と道う」と。若し恁麼に「餬餅」を便ち是れ「超仏越祖の談」なりと見去らば、豈に活路有らんや。「餬餅」の会を作すこと莫れ、又た「超仏越祖」の会を作さざれ。便ち是れ活路なり。「麻三斤」、「解打鼓」と一般なり。只だ『餬餅』と道うと雖然も、其れ実に見難し。後人多く道理を作して云く、「麤言及び細語、皆な第一義に帰す」と。若し恁麼に会せば、且く去きて座主と作れ。一生多知多解なるのみに贏得らん。如今の禅和子道う、「超仏越祖の時、諸仏も也た脚跟下に踏在け、祖師も也た脚跟下

極多、尽向問頭辺作言語。唯雪竇頌得最好。試挙看。頌云、

に踏在けり。所以に雲門は只だ他に『餬餅』と道えるなり」と。既に是れ餬餅、豈に解く超仏越祖せんや。試みに去きて参詳し看よ。諸方の頌極めて多きも、尽く問頭の辺に向いて言語を作す。唯だ雪竇のみ頌し得て最も好し。試みに挙し看ん。頌に云く、

一 五祖法演(?—一一〇四)。 二 ロバの糞を麝香になぞらえる。味噌も糞も一緒。寒山の詩に見える。 三 ずばりと根こそぎ断ち切ることは仏の印可を得ている、枝葉末節の詮索はする気になれぬ。『証道歌』の句。 四 第一二則を参照。 五 第四四則を参照。 六 肌理のあらい言葉と肌理こまやかな言葉。『涅槃経』梵行品の偈。 七 座主(経典の講釈をする僧)となって、お談義で暮らすがよかろう。 八 せいぜい〜に終る。〜となるのが落ちだ。

【頌】[一]超談禅客問偏多、〔箇箇出来、便作這般見解。如麻似粟。〕[二]縫罅[三]披離見也麼。〔已在言前。開也。自屎不覚臭。〕餬餅趕来猶不住、〔[四]将木槵子、換却你眼睛了也。〕至今天下有[五]譊訛。〔画箇円相云、莫是*恁麼会麼。咬人言語、有甚了期。大地茫茫愁殺

【頌】 超談の禅客問うこと偏に多し、〔箇箇出で来たりて、便ち這般る見解を作す。麻の如く粟の似し。〕縫罅披離たるを見るや。〔已に言前に在り。開けり。自屎は臭きを覚えず。〕餬餅趕来みて猶お住めず、〔木槵子を将て你の眼睛に換却え了れり。〕今に至るも天下に譊訛有り。〔箇の円相を画きて云く、「是れ恁麼に会すること莫きや」。人の言語を咬らば甚の了期か有

人。便打。」

らん。大地茫茫として人を愁殺す。便ち打つ。」

＊恁麼会　福本は「這箇」。

一 超仏越祖の談をする禅僧。「客」はその道のプロ(専門家)というニュアンス。二「縫罅」は、ひびわれ、破綻。「披離」は、ちりぢりばらばらのさま。禅客の超越談義は隙間だらけ。三 自分のボロは自分では気づかない。四 雲門の語(『雲門広録』中)。「木槵子」はムクロジ(無患子、木患子とも)。その果実は径約二センチメートルの球形で、堅く黒い種子を含む。五 (つめこんだ餬餅で)腹の調子がややこしい。

〔評唱〕　超談禅客問偏多、此語禅和家偏愛問。不見雲門道、你諸人、横担拄杖道、我参禅学道、便覓箇超仏越祖道理。我且問你、十二時中、行住坐臥、屙屎放尿、至於茅坑裏虫子、市肆買売羊肉案頭、還有超仏越祖底道理麼。道得底出来。若無、莫妨我東行西行。便下座。有者更不識好悪、作円相、土上加泥、添枷帯鎖。縫罅披離見也麼、他致問処、有大小大縫

〔評唱〕「超談の禅客問うこと偏に多し」と、此の語禅和家偏に問うことを愛む。見ずや雲門の、「你諸人、横に拄杖を担い、我参禅学道すと道いて、便ち箇の超仏越祖の道理を覓む。我且は你に問わん、十二時中、行住坐臥、屙屎放尿より、茅坑裏の虫子、市肆に羊肉を買売する案頭に至るまで、還た超仏越祖底の道理有りや。道い得る底は出で来たれ。若し無くんば我が東行西行するを妨ぐること莫れ」と道いて、便ち下座するを。有る者は更に好悪を識らず、円相を作して、土上に泥を加え、枷を添え鎖を帯ぶ。「縫罅披離たるを見

罅、雲門見他問処披離、所以将餬餅攔縫塞定。這僧猶自不肯住、却更問。是故雪竇道、餬餅埿来猶不住、至今天下有誵訛。如今禅和子、只管去餬餅上解会、不然、去超仏越祖処作道理。既不在這両頭、畢竟在什麼処。三十年後、[三]待山僧[四]換骨出来、却向你道。

るや」とは、他の問を致す処、大小大な縫罅有り、雲門他の問処の披離なるを見て、所以に餬餅を将て縫を攔けて塞定ぐ。這の僧、猶自住むを肯ぜず、却って更に問う。是の故に雪竇道く、「餬餅埿来みて猶お住めず、今に至るも天下に誵訛有り」と。如今の禅和子、只管に餬餅の上に去いて解会し、然らざれば超仏越祖の処に去いて道理を作す。既に這の両頭に在らず、畢竟什麼処にか在る。三十年後、山僧が骨を換えて出で来たるを待って、却に你に道わん。

一 雲門の上堂語。『雲門広録』上に見える。 二 市場の羊の肉を買売する台。 三 「待〜」は、〜となったら、その時になったら。 四 面目を一新する。

第七八則　十六開士入浴

【本則】挙。古有十六開士、〔成群作隊、有什麼用処。這一隊不喞嚠漢。〕於浴僧時、随例入浴、〔撞著露柱。漆桶作什麼。〕忽悟水因。〔悪水驀頭澆。〕諸禅徳、作麼生会他道、妙触宣明、〔*更不干別人事。作麼生会他。撲落非他物。〕成仏子住。〔天下衲僧、到這裏、摸索不著。両頭三面作什麼。〕也須七穿八穴始得。〔**一棒一条痕。莫辜負山僧好。撞著磕著。還曾見徳山・臨済麼。〕

＊更不〜他物〔一六字〕　福本では「也須七穿八穴始得」の上に在り、さらに「天下衲僧」の上に「諸仏祖師」が在る。　＊＊一棒〜磕著〔一五字〕　福本では「成仏子住」の下に在り、「妙触宣明」には著語が無い。

第七八則　十六開士の入浴

【本則】挙す。古え十六の開士有り、〔群を成し隊を作して什麼の用処にか有たん。這の一隊の不喞嚠漢。〕浴僧の時に、例に随って入浴するや、〔露柱に撞著る。漆桶、什麼をか作す。〕忽と水因を悟る。〔悪水驀頭に澆がる。〕諸禅徳、作麼生か他の「妙触宣明、〔更に別人の事に干らず。作麼生か他を会せん。撲落するは他物に非ず。〕成仏子住」と道えるを会する。〔天下の衲僧這裏に到って摸索不著。両頭三面して什麼か作せん。〕也た須らく七穿八穴して始めて得し。〔一棒一条痕。山僧に辜負くこと莫くんば好し。撞著磕著す。還た曾て徳山・臨済を見しや。〕

一 跋陀婆羅菩薩以下、十六人。「開士」は「菩薩」の訳語。 二 修行者への供養として入浴させてもらった時。 三 目の前のことが見てとれない。 四 水の本性。 五 ざんぶりとまっこうから汚水を浴びせられたぞ。 六 以下、雪竇の問題提起。 七 触覚の不思議さによって一心を明らかに悟った。『楞厳経』五の句。 八 払い落とされているものは、ほかならぬ自らのものだ。『天聖広灯録』二七・興教洪寿の章にも。 九 仏の子としての境地に落ち着いた。 一〇 本音を明かさぬ変幻ぶり。 一一 穴だらけになるまで徹底的に(彼らの仏子としての境地を)突き破る。 一二 一打ちごとに傷あとを残すように、徹底的に打ちすえる。 一三 (覚醒を促すため)撞いたり磕いたりする。

〔評唱〕 楞厳会上、跋陀婆羅菩薩、与十六開士、各修梵行、乃各説所証円通法門之因。此亦二十五円通之一数也。他因浴僧時、随例入浴、忽悟水因。云、既不洗塵、亦不洗体。且道、洗箇什麼。若会得去、中間安然、得無所有、千箇万箇、更近傍不得。所謂以無所得是真般若。若有所得、是相似般若。不見達磨謂二祖云、将心来、与汝安。二祖云、覓心了不可

〔評唱〕 楞厳会上に、跋陀婆羅菩薩、十六の開士と、各梵行を修め、乃ち各証る所の円通法門の因を説く。此れ亦た二十五円通の一数なり。他因に浴僧の時、例に随って入浴するや、忽と水因を悟る。云く、「既に塵を洗わず、亦た体をも洗わず」と。且道、箇の什麼をか洗う。若し会得し去らば、中間安然として無所有なるを得、千箇万箇なるも、更に近傍き得ず。所謂無所得是れ真の般若なるを以てなり。若し所得有らば、是れ相似般若なり。見ずや達磨、二祖に謂って云く、「心を将ち来たれ、汝の与に安んぜん」。二祖云

得。這裏些子、是衲僧性命根本、更総不消得如許多葛藤。只消道箇忽悟水因、自然了当。

一 僧の安居(修行)の無事円成を祈念する法会。二 清浄な修行。欲望を断ずる修行。三 融通無礙な教説。四 二十五種類の融通無礙の能力。『楞厳経』に説く。五 そこにそのままで大安楽。六 千人万人いても、ただの一人も近づけない。七 一切の執着・分別から自由であることが真の智慧である。八 二祖慧可(四八七－五九三)。九 決着がつく。

既不洗塵、亦不洗体、且道、悟箇什麼。到這般田地、一点也著不得。道箇仏字、也須諱却。他道、妙触宣明、成仏子住。宣則是顕也、妙触是明也。既悟妙触、成仏子住、即住仏地也。如今人亦入浴亦洗水、也恁麼触、因甚却不悟。皆被塵境惑障、粘皮著骨、所以不能便惺惺去。若向這裏、洗亦無所得、触亦無所得、水因

く、「心を覓むるに了に得べからず」と。這裏の些子こそ、是れ衲僧の性命の根本、更に総して如許多しき葛藤を消得さず。只だ箇の「忽と水因を悟る」と道うを消うるのみにて、自然に了当せん。

既に塵を洗わず、亦た体をも洗わず、且道、箇の什麼をか悟る。這般る田地に到っては、一点也著し得ず。箇の「仏」の字を道うも、也た須らく諱却むべし。他道う、「妙触宣明、成仏子住」と。「宣」は則ち是れ顕なり、「妙触」は是れ明なり。既に妙触を悟れば、仏子住を成じて、即ち仏地に住す。如今の人も亦た浴に入り亦た水に洗い、也た恁麼に触すも、甚に因ってか却って悟らざる。皆な塵境に惑障げられて、皮に粘き骨に著く、所以に便ち惺惺にし去ること能わず。若し

亦無所得、且道、是妙触宣明、不是妙触宣明。若向箇裏、直下見得、便是妙触宣明、成仏子住。如今人亦触、還見妙処麼。妙触非常触、与触者合則為触、離則非也。

這裏に向いて、洗うも亦た無所得、触すも亦た無所得、水因も亦た無所得なれば、且道、是れ妙触宣明か、是れ妙触宣明にあらざるか。若し箇裏に向いて直下に見得せば、便ち是れ「妙触宣明、成仏子住」なり。如今の人も亦た触し、還た妙処を見るや。妙触は常の触のごとく、触する者と合すれば則ち触と為り、離すれば則ち非なるものには非ず。

一　シミひとつも着けることができない。　二　第七二則・本則の著語に既出。　三　はっきりと悟る。

[一]玄沙過嶺、磕著脚指頭、以至徳山[二]棒、豈不是妙触。雖然恁麼、也須是七穿八穴始得。若只向身上摸索、有什麼交渉。你若七穿八穴去、何須入浴、便於一毫端上現[三]宝王刹、向微塵裏転大法輪。一処透得、千処万処一時透。莫只守一窠一窟、一切処都是観音入理之門。古人亦有[四]聞声悟道、

玄沙、嶺を過ぐるに、脚指頭を磕著くると、以至徳山の棒と、豈に是れ妙触にあらずや。恁麼なりと雖然も、也た須是らく七穿八穴して始めて得し。若し只だ身上に向いて摸索せば、什麼の交渉か有らん。你若し七穿八穴し去らば、何ぞ入浴することを須いん、便ち一毫の端上に宝王刹を現じ、微塵の裏に大法輪を転ぜん。一処透得すれば、千処万処一時に透る。只だ一窠一窟を守ること莫れ、一切処都て是れ観音入理の門な

[五]見色明心。若一人悟去則故是、因甚十六開士同時悟去。是故古人、同修同証、同悟同解。雪竇拈他教意、令人去妙触処会取。出他教眼頌、免得人去教網裏籠罩、半酔半醒、要令人直下灑灑落落。頌云、

り。古人も亦た声を聞いて道を悟り、色を見て心を明らむる有り。一人悟り去るが若きは則ち故是、甚に因ってか十六の開士、同時に悟り去る。是の故に古人、同修同証、同悟同解す。雪竇他の教意を拈りて、人をして妙触の処に去いて会取せしむ。他の教眼を出だして頌し、人の教網の裏に籠罩られて半酔半醒なることを免れ得しめ、人をして直下に灑灑落落ならしめんと要す。頌に云く、

一 玄沙師備(八三五－九〇八)は、嶺を越える坂道でつまずいて全身に痛みが走った途端にハタと思い当たったという。 二 徳山宣鑑(七八二－八六五)の棒で打たれた痛み。 三 荘厳された仏寺。 四 香厳智閑(?－八九八)は、小石が竹にぶつかる音を聞いて悟ったという。 五 霊雲志勤は、満開の桃の花を見て悟ったという。

【頌】 [一]了事衲僧消一箇、〔現有一箇。[二]朝打三千、暮打八百。跳出金剛圏[三]*、一箇也不消得。〕[四]長連床上展脚臥。〔果然是箇瞌睡漢。**[五]論劫不論禅。〕夢中曾説悟円通[六]、〔早是瞌睡更説夢、

【頌】 了事の衲僧一箇を消う、〔現に一箇有り。朝打三千、暮打八百。金剛圏を跳出さば、一箇すらも也た消得いず。〕長連床上に脚を展べて臥す。〔果然して是れ箇の瞌睡せる漢。論劫に禅を論ぜず。〕夢中に曾て説く円通を悟ると、〔早是に瞌睡して更に夢を説ける

却許你夢見。寐語作什麼。〕香水洗来驀面唾。〔咄。土上加泥又一重。莫来浄地上屙。〕

に、却って你に許む夢に見ることを。寐語いて什麼か作ん。〕香水もて洗い来たらば驀面に唾せん。〔咄。土上に泥を加うること又た一重。浄地上に来たりて屙する莫れ。〕

＊金剛圏　福本は「圏繢」。　＊＊論劫不論禅　福本では「香水洗来驀面唾」の下の「莫来浄地上屙」と入れ換わっている。

一 なすべきことをなしとげた坊主は一人でよい（十六人もの大勢はいらぬ）。二 朝に三千、暮に八百の罰棒を食らわす。三 一切の繫縛を脱して自由になった。四 僧堂内の起臥し坐禅する所。五 金輪際、禅をあげつらわない。「論劫」は副詞で、永久に。六 悟りの智慧があまねく行きわたっていること。『楞厳経』五に見える。七 芳香を加えた水で沐浴する（即ち、悟りくさをつける）なら。

〔評唱〕了事衲僧消一箇、且道、了得箇什麼事。作家禅客、聊聞挙著、剔起便行。似恁麼衲僧、只消得一箇。＊何用成群作隊。長連床上展脚臥、古人道、明明無悟法、悟了却迷人。長舒両脚睡、無偽亦無真。所以胸中無一事、飢来喫飯困来眠。雪竇意道、

〔評唱〕「了事の衲僧一箇を消う」と、且道、箇の什麼なる事をか了得す。作家の禅客は、聊か挙著するを聞くや、剔起して便ち行く。恁麼の似き衲僧、只だ一箇を消得む。何ぞ用いん群を成し隊を作すことを。「長連床上に脚を展べて臥す」とは、古人道く、「明明として悟法無し、悟了せば却って人を迷わす。長く両脚を舒べて睡れば、偽も無く亦た真も無し」と。所

你若説、入浴悟得妙触宣明、在這般無事衲僧分上、只似夢中説夢。所以道、夢中曾説悟円通、香水洗来驀面唾。似恁麼、只是悪水驀頭澆、更説箇什麼円通。雪竇道、似這般漢、正好驀頭驀面唾。山僧道、土上加泥又一重。

以に胸中に一事も無く、飢え来たらば飯を喫い、困れ来たらば眠る。雪竇の意に道く、「你若し『入浴して妙触宣明を悟得す』と説うも、這般る無事の衲僧の分上に在っては、只だ夢中に夢を説くに似たり」と。所以に道く、「夢中に曾て説く円通を悟ると、香水もて洗い来たらば驀面に唾せん」と。恁麼の似きは、只是悪水驀頭に澆がんのみ、更に箇の什麼の円通とか説わん。雪竇道く、「這般る漢の似きは、正に好し驀頭驀面に唾せん」と。山僧は道う、「土上に泥を加うること又た一重」と。

＊何用成群作隊　福本は「用十六箇作什麼」。

一 地を蹴ってさっと行く。 二 一人いれば十分だ。 三 夾山善会（八〇五－八八一）。以下、『伝灯録』一五に見える。

第七九則　投子一切声

垂示云、大用現前、不存軌則。活捉生擒、不労餘力。且道、是什麼人曾恁麼来。試挙看。

第七九則　投子の一切声

垂示に云く、大用現前して、軌則を存せず。活捉生擒して、餘力を労せず。且道、是れ什麼なる人か曾て恁麼にし来たる。試みに挙し看ん。

一（仏法の）大いなるはたらきの展開には、きまったパターンは無い。第三則の垂示に既出。　二 活機に応じてつかみとる。

【本則】挙。僧問投子、一切声是仏声、是否。〔也解捋虎鬚。青天轟霹靂。自屎不覚臭。〕投子云、是。〔賺殺一船人。売身与你了也。拈放一辺、是什麼心行。〕僧云、和尚莫屎沸碗鳴声。〔只見錐頭利、不見鑿頭方。道什麼。果然納敗欠。〕投子便打。〔著。好打。放過則不可。〕又問、麤

【本則】挙す。僧、投子に問う、「一切の声は是れ仏の声と、是なり否」。〔也た解く虎鬚を捋く。青天に霹靂を轟かす。自屎は臭きを覚えず。〕投子云く、「是なり」。〔一船の人を賺殺す。身を売りて你に与え了れり。一辺に拈放すとは、是れ什麼たる心行ぞ。〕僧云く、「和尚、屎沸碗鳴声すること莫れ」。〔只だ錐頭の利なるを見て、鑿頭の方なるを見ず。什麼と道うや。果然して敗欠に納る。〕投子、便ち打つ。〔著たれり。好

言及細語、皆帰第一義、是否。〔第二回捋虎鬚。[九]抱贓叫屈作什麼。東西南北、猶有影響在。〕投子云、是。〔又是売身与伱了也。[一〇]陥虎之機、也是什麼心行。〕僧云、喚和尚作一頭驢、得麼。〔只見錐頭利、不見鑿頭方。雖有逆水之波、只是頭上無角。[一二]含血噀人。〕投子便打。〔著。不可放過。好打。拄杖未到折、因什麼便休去。〕

く打て。放過さば則ち不可。〕又た問う、「麤言及び細語、皆な第一義に帰すと、是なり否」。〔第二回虎鬚を捋く。贓を抱きて屈なりと叫んで什麼か作ん。東西南北、猶お影響の在る有り。〕投子云く、「是なり」。〔又た是れ身を売りて伱に与え了れり。陥虎の機、也た是れ什麼たる心行ぞ。〕僧云く、「和尚を喚んで一頭の驢と作して得しきや」。〔只だ錐頭の利なるを見て、鑿頭の方なるを見ず。逆水の波有りと雖も、只だ是れ頭上に角無し。血を含んで人に噀く。〕投子、便ち打つ。〔著たれり。放過すべからず。好く打て。拄杖未だ折るるに到らざるに、什麼に因ってか便ち休め去る。〕

一 投子大同(八一九–九一四)。二『涅槃経』二〇・梵行品の偈の句。三 天下の人をコケにした。四 自分自身をお前に売り渡した。捨て身の方便をやってくれた。五(敢えて「是」という)一辺に片付けた。六 プップッと湯気をふき出す碗の音。無意味な発言の喩え。第二五則・頌の評唱の「熱碗鳴声」と同じ。七 錐の鋭利さは見えても、鑿の鋭利さが見えない。八『涅槃経』二〇・梵行品の偈の句。九 第七三則・本則の著語に既出。一〇 虎を陥れる機略。一一「捋虎鬚」どころの比ではない。一二 血を他人に吐きかける。他人を悪しざまに言う時は、自分の口がまず汚れる。唐代の格言。

〔評唱〕　投子朴実頭、得逸群之辯。凡有致問、開口便見胆、不費餘力、便坐断他舌頭。可謂運籌帷幄之中、決勝千里之外。這僧将声色仏法見解、貼在他額頭上、逢人便問。投子作家、来風深辨。這僧知投子実頭、合下做箇圏繢子、教投子入来。所以有後語。投子却使陥虎之機、釣他後語出来。這僧接他答処道、和尚莫冢沸碗鳴声。果然一釣便上。若是別人、則不奈這僧何。投子具眼、随後便打。咬豬狗底手脚、須還作家始得。左転也随他阿轆轆地、右転也随他阿轆轆地。這僧既是做箇圏繢子、要来捋虎鬚。殊不知、投子更在他圏繢頭上。投子便打。這僧可惜許、有頭無尾。当時等他拈棒、便与掀倒禅床、直饒投子全

〔評唱〕　投子は朴実頭にして、逸群の辯を得たり。凡そ問を致すもの有らば、口を開くや便ち胆を見ぬき、餘力を費さずして、便ち他の舌頭を坐断す。籌を帷幄の中に運らし、勝ちを千里の外に決すと謂うべし。這の僧は声色仏法の見解を他の額頭上に貼在けて、人に逢うや便ち問う。投子は作家なれば、来風深く辨ず。這の僧、投子の実頭なることを知り、合下に箇の圏繢子を做け、投子をして入り来たらしむ。所以に後語有り。投子は却って陥虎の機を使い、他の後語を釣り出だし来たる。這の僧、他の答処を接めて道う、「和尚、冢沸碗鳴声すること莫れ」と。果然して一釣に便ち上る。若是別人ならば、則ち這の僧を奈何ともせじ。投子は具眼なれば、随後に便ち打つ。豬や狗を咬む底の手脚は、須らく作家に還して始めて得し。左転するも也た他に随って阿轆轆地、右転するも也た他に随って阿轆轆地。這の僧既是に箇の圏繢子を做け、来たりて虎鬚を捋かんと要す。殊に知らず、投子は更に他の圏

機、也須倒退三千里。

續の頭上に在ることを。投子、便ち打つ。這の僧可惜許、頭有るも尾無し。当時、他の棒を拈るを等って、便ち与に禅床を掀倒さば、直饒投子全機もてするとも、也た須ずや倒退三千里せん。

一 漢の高祖が張良を評した語による。二 感覚的存在がそのまま仏法であるとする見地。三 相手の出かたを見て取る。四 下劣な相手をも真正面から導く手腕。五 左へかわしても右へかわしても自在に対応していく。

又問、麤言及細語、皆帰第一義、是否。投子亦云、是。一似前頭語、無異。僧云、喚和尚作一頭驢、得麼。投子又打。這僧雖然作窠窟、也不妨奇特。若是曲彔木床上老漢、頂門無眼、也難折挫他。投子有転身処。這僧既做箇道理、要攙他行市。到了依旧不奈投子老漢何。不見巌頭道、若論戦也、箇箇立在転処。投子放去太遅、収来太急。這僧当時若解転身吐

又た問う、「麤言及び細語、皆な第一義に帰すと、是なり否」。投子亦た云く、「是なり」。一に前頭の語に似て異なること無し。僧云く、「和尚を喚んで一頭の驢と作して得しきや」。投子又た打つ。這の僧は窠窟を作すと雖然も也た不妨に奇特なり。若是曲彔木床上の老漢も頂門に眼無ければ、也た他を折挫き難からん。投子は転身の処有り。這の僧既に箇の道理を做して、他の行市を攙らんと要す。到了、依旧として投子老漢を奈何ともせず。見ずや巌頭道く、「若し論戦せば、箇箇転処に立在たん」と。投子、放去は太だ

気、豈不作得箇口似血盆底漢。衲僧家一不做、二不休。這僧既不能返擲、却被投子穿了鼻孔。頌云、

遅く、収来は太だ急なり。這の僧、当時若し解く身を転じて気を吐かば、豈に箇の口血盆に似たる底の漢と作り得ざらんや。衲僧家は一に做さず二に休めず。這の僧、既に返擲すこと能わず、却って投子に鼻孔を穿ち了らる。頌に云く、

一 収まりかえった境地。二 説法の座に在る老和尚。三 自ら活路をきりひらいていくという境地。四 ほしいままに相場をあやつる。五 つまるところ、結局。「到底」と同義。六 巌頭全豁(八二八—八八七)。七「去」「来」は、動作の心理的方向を示す。八 もとは地獄の獄卒の形相。九 やらぬならそれまでのこと、いったん手をつけたら、とことんやる。毒を喰わば皿までも。

【頌】投子投子、〔灼然、天下無這実頭老漢。教壊人家男女。〕機輪無阻。〔有什麼奈何他処。也有此子。〕放一得二、〔換却你眼睛。什麼処見投子。〕同彼同此。〔恁麼来也喫棒、不恁麼来也喫棒。闍黎*替他。便打。〕可憐無限弄潮人、〔叢林中、放出一箇半箇。放出這両**箇漢。天下衲僧、

【頌】投子、投子、〔灼然たり、天下に這る実頭老漢無し。人家の男女を教え壊す。〕機輪阻むもの無し。〔什麼の他を奈何する処か有らん。也た此子有り。〕一を放って二を得たり、〔你の眼睛を換却う。什麼処にか投子を見ん。〕彼に同じく此に同じ。〔恁麼に来たるも也た棒を喫し、恁麼に来たらざるも也た棒を喫す。闍黎、他に替れ。便ち打つ。〕憐むべし限り無き潮を弄する人、〔叢林の中、一箇半箇を放出す。這の両箇

要恁麼去。〕畢竟還落潮中死。〔可惜許。争奈出這圏繢不得。愁人莫向愁人説。〕忽然活、〔禅床震動、驚殺山僧。也倒退三千里。〕百川倒流鬧𣿬𣿬。〔嶮。徒労佇思。山僧不敢開口。投子老漢、也須是拗折拄杖始得。〕

の漢を放出す。天下の衲僧恁麼に去くを要す。〕畢竟還た潮の中に落ちて死す。〔可惜許。争奈せん這の圏繢を出づること得ず。愁人は愁人に向って説うこと莫れ。〕忽然活せば、〔禅床震動し、山僧を驚殺す。也た倒退三千里せん。〕百川倒に流れて鬧𣿬𣿬たらん。〔嶮うし。徒労に佇思す。山僧は敢て口を開かず。投子老漢も也た須是らく拄杖を拗折って始めて得し。〕

＊闍黎替他　福本は「上座替他喫棒」。　＊＊両箇　福本に無し。

一 ～ということは明白だ。二 誤った導き方で人を駄目にしてしまう。三 回転する車輪のような禅機のはたらきをさえぎるものは何も無い。四 （投子には）なかなか見どころがある。五 一石二鳥。二度同じく「是なり」と答えたこと。六 銭塘江の海嘯（潮津波）に波乗りを挑む命知らずの若者。つまり、性懲りもなく投子に立ち向かった僧。七 ごうごうと水の流れるさま。高潮が満ちてくる轟き。

【評唱】投子投子、機輪無阻。投子尋常道、你総道、投子実頭、忽然下山三歩、有人問你道、如何是投子実頭処、你作麼生抵対。古人道、機輪転処、作者猶迷。他機輪転轆轆地、

【評唱】「投子、投子、機輪阻むもの無し」と。投子尋常道う、「你総も『投子は実頭なり』と道うも、忽然山を下ること三歩にして、人の你に問うて「如何なるか是れ投子実頭の処」と道うもの有らば、你作麼生か抵対えん」と。古人道く、「機輪転ずる処、作者す

全無阻隔。所以雪竇道、放一得二。不見僧問、如何是仏。投子云、仏。又問、如何是道。投子云、道。又問、如何是禅。投子云、禅。又問、月未円時如何。投子云、呑却三箇四箇。円後如何。吐却七箇八箇。投子接人、常用此機。答這僧、只是一箇是字。這僧両回被打。所以雪竇道、同彼同此。四句一時頌投子了也。末後頌這僧道、可憐無限弄潮人。這僧敢攙旗奪鼓道、和尚莫冢沸碗鳴声。又道、喚和尚作一頭驢、得麼。此便是弄潮処。這僧做尽伎倆、依前死在投子句中。投子便打、此僧便是畢竟還落潮中死。雪竇出這僧云、忽然活、便与掀倒禅床、投子也須倒退三千里。直得百川倒流閙𣸪𣸪。非唯禅床震動、

ら猶お迷う」と。他の機輪転轆轆地にして、全く阻隔無し。所以に雪竇道く、「一を放って二を得たり」と。見ずや僧問う、「如何なるか是れ仏」。投子云く、「仏」。又た問う、「如何なるか是れ道」。投子云く、「道」。又た問う、「如何なるか是れ禅」。投子云く、「禅」。又た問う、「月未だ円ならざる時如何」。投子云く、「三箇四箇を呑却む」。「円なりし後如何」。「七箇八箇を吐却す」と。投子は人を接するに、常に此の機を用う。這の僧に答うるに、只だ是れ一箇の「是」の字のみ。這の僧両回打たる。所以に雪竇道く、「彼に同じく此に同じ」と。四句、一時に投子を頌し了れり。末後に這の僧を頌して道く、「憐むべし限り無き潮を弄する人」と。這の僧敢て旗を攙り鼓を奪って道う、「和尚、冢沸碗鳴声すること莫れ」。又た道う、「和尚を喚んで一頭の驢と作して得しきや」と。此れ便ち是れ潮を弄する処なり。這の僧、伎倆を做し尽すも、依前として投子の句中に死在す。投子便ち打つ、此の僧便ち是れ

亦乃[三]山川岌嶇、天地陡暗。苟或箇箇如此、山僧且打[四]退鼓。諸人向什麼処、安身立命。

「畢竟還た潮の中に落ちて死す」。雪竇這の僧を出だして云く、「忽然活して、便ち与に禅床を掀倒さば、投子も也た須ずや倒退三千里せん。直得には百川倒に流れて閙潺潺たらん」と。唯だ禅床震動するのみに非ず、亦乃ち山川岌嶇として、天地陡に暗し。苟或箇箇此の如くならば、山僧且は退鼓を打たん。諸人什麼処に向いてか安身立命せん。

＊作麼生抵対　福本は「又如何支遣」。＊＊仏　福本は「仏法」。投子の答も同様。＊＊＊又問〜云道〔一〇字〕　福本に無し。＊＊＊＊如何是禅投子云禅　福本は「如何是法中法、子云、法中法」。＊＊＊＊＊忽然活　福本では、この下に「適来道」の三字が有る。

一 雪竇の語。二 水中から救い出す。三 山がそそりたち、深い谷ができる。四 住持が寺を退くに際して行う上堂を知らせる鼓。

第八〇則　趙州孩子六識

【本則】 挙。僧問趙州[一]、初生孩子還具六識[二]也無。〔閃電之機。説什麼初生孩児子。〕趙州云、急水上打毬子[三]。〔*過也。俊鷂趁不及。也要験過。〕僧復問投子[四]、急水上打毬子、意旨如何。〔也是作家、同験過。還会麼。過也。〕子云、念念不停流[五]。〔打葛藤漢。〕

第八〇則　趙州の孩子の六識

【本則】 挙す。僧、趙州に問う、「初生の孩子は還た六識を具する也無」。〔閃電の機。什麼の初生の孩児子とか説わん。〕趙州云く、「急水上に毬子を打つ」。〔過ぎされり。俊鷂も趁い及ばず。也た験過さんと要す。〕僧、復た投子に問う、「急水上に毬子を打つと、意旨は如何」。〔也た是れ作家、同じく験過す。還た会すや。過ぎされり。〕子云く、「念念、流れを停めず」。〔葛藤を打する漢。〕

*過　福本に無し。

一 趙州従諗(七七八―八九七)。二 眼・耳・鼻・舌・身・意の六種の認識作用。三 急流上でポロの球を打つ。目にもとまらぬ速い動き。四 投子大同(八一九―九一四)。五 一念一念の流れがとどまることはない。

〔評唱〕 此六識、教家立為正本[一]。山河大地、日月星辰、因其所以生[二]。来[三]

〔評唱〕 此の六識、教家立てて正本と為す。山河大地、日月星辰、其の生ずる所以の因たり。来たるときは先

為先鋒、去為殿後。古人道、三界唯心、万法唯識。若証仏地、以八識転為四智。教家謂之改名不改体。根塵識是三。前塵元不会分別、勝義根能発生識、識能顕色分別、即是第六意識。第七識末那識、能去執持世間一切影事、令人煩悩不得自由自在、皆是第七識。到第八識、亦謂之阿頼耶識、亦謂之含蔵識。含蔵一切善悪種子。這僧知教意、故将来問趙州道、初生孩子還具六識也無。初生孩児、雖具六識、眼能見耳能聞、然未曾分別六塵。好悪長短、是非得失、他恁麼時総不知。学道之人、要復如嬰孩。栄辱功名、逆情順境、都動他不得。眼見色与盲等、耳聞声与聾等。如痴似兀、其心不動、如須彌山。這箇是

鋒と為り、去るときは殿後と為る。古人道く、「三界唯心、万法唯識」と。若し仏地を証すれば、八識を以て転じて四智と為す。教家は之を「名を改めて体を改めず」と謂う。根・塵・識是れ三つ。前塵は元より分別を会せず、勝義根能く識を発生し、識能く色を顕して分別す、即ち是れ第六の意識なり。第七識の末那識、能く去きて世間一切の影事を執持え、人を煩悩わして自由自在を得ざらしむ、皆な是れ第七識なり。第八識に到り、亦た之を阿頼耶識と謂い、亦た之を含蔵識と謂う。一切善悪の種子を含蔵す。這の僧は教意を知りて、故に将ち来たりて趙州に問うて道く、「初生の孩子は還た六識を具する也無」と。初生の孩児は六識を具して、眼は能く見、耳は能く聞くと雖も、然れども未だ曾て六塵を分別せず。好悪長短、是非得失を、他は恁麼の時には総く知らず。学道の人、復た嬰孩の如くなるを要す。栄辱功名、逆情順境、都て他を動かし得ず。眼は色を見るも盲と等しく、耳は声を聞くも

衲僧家真実得力処。[二三]古人道、衲被蒙[二四]頭万事休、此時山僧都不会。若能如此、方[二五]有少分相応。雖然如此、争奈一点也瞞他不得。山依旧是山、水依旧是水。無造作、無縁慮[二六]。如日月運於大虚、未嘗暫止。亦不道、我有許多名相[二七]。如天普蓋、似地普擎。為無心故、所以長養万物。亦不道、我有許多功行[二八]。天地為無心故、所以長久。若有心則有限斉。得道之人亦復如是。於無功用中施功用。一切違情順境、皆以慈心摂受。到這裏、古人尚自呵責道、了了[二九]了時無可了、玄玄玄処直須呵。又道、事事[三〇]通兮物物明、達者聞之暗裏驚。又云、入[三一]聖超凡不作声、臥龍長怖碧潭清。人生若得長如此、大地那能留一名。然雖恁麼、更須跳

聾と等し。痴の如く兀の似く、其の心の動ぜざること、須彌山の如し。這箇は是れ衲僧家の真実得力の処なり。古人道く、「衲被を頭に蒙り万事休す、此の時山僧都て会せず」と。若し能く此の如くならば、方めて少分の相応有らん。此の如くなりと雖然も、争奈せん一点也他を瞞り得ず。山は旧の依に是れ山、水は旧の依に是れ水。造作無く、縁慮無し。日月の大虚に運りて、未だ嘗て暫も止らざるが如し。亦た「我に許多の名相有り」と道わず。天の普く蓋うが如く、地の普く擎ぐるが似し。無心なるが為の故に、所以に万物を長養す。亦た「我に許多の功行有り」と道わず。天地は無心なるが為の故に、所以に長久なり。若し有心ならば則ち限斉有らん。得道の人も亦復是の如し。無功用の中に功用を施す。一切の違情順境、皆な慈心を以て摂受す。這裏に到ってすら、古人は尚自呵責して道く、「了了了の時了ずべき無し、玄玄玄の処直だ須らく呵すべし」と。又た道く、「事事通じて物物明か、

出窠窟始得。

達者之を聞いて暗裏に驚く」と。又た云く、「聖に入り凡を超えて声を作さず、臥龍は長に怖る碧潭の清きことを。人生若し長に此の如きを得ば、大地那ぞ能く一名を留めん」と。恁麼なりと然雖も、更に須らく窠窟を跳出して始めて得し。

＊以八　福本は「此六」。

一 禅家に対して、講論講経を事とする学問僧。 二 この箇所は解し難い。「其」は「山河大地、日月星辰」を指す。 三 生まれるときは六識が始めに生じ、死ぬときは六識が最後に滅する。 四 一切世界は心の顕現であり、一切存在は意識が織り成す。法眼文益(八八五—九五八)の頌の句。 五 仏の境地。 六 六識に末那識・阿頼耶識を加えた八つ。 七 大円鏡智・平等性智・妙観察智・成所作智の四つの智慧。 八 妄心の前に現れる対象としての六塵(色・声・香・味・触・法)。 九 感覚機能としての五根(眼・耳・鼻・舌・身)。 一〇 幻影のような世間の事象。 一一 仏の説いた理論的な教え。祖意(不立文字の祖師禅の立場)に対する。 一二 初生の時。 一三 力量を身につける。 一四 石頭希遷(七〇〇—七九〇)の「草庵歌」の句。第六一則・本則の評唱に既出。 一五 少しは深奥の消息と通じ合えるだろう。 一六 他律的な考え方。 一七 名称と様相。表面的で非本質的なもの。 一八 功(効果)を生じる行、すなわち修行。 一九 同安常察の頌の句。第六二則・本則の評唱に既出。『伝灯録』二九には「了了了時無所了、玄玄玄処亦須訶」と。 二〇『禅門諸祖偈頌集』一に見える紫塞野人の「雪子吟」。ただし「聞之」を「須知」とする。 二一 龍牙居遁(八三五—九二三)の頌。第二句は第一八則・頌の評唱に既出。

豈不見教中道、第八不動地菩薩、

豈に見ずや教中に道く、「第八の不動地の菩薩は、

以無功用智、於一微塵中、転大法輪、於一切時中、行住坐臥、不拘得失、任運流入[三]薩婆若海。衲僧家到這裏、亦不可執著。但随時自在。遇茶喫茶、遇飯喫飯。這箇向上事、著箇定字也不得、著箇不定字也不得。石室善道和尚示衆云、[四]汝不見、小児出胎時、何曾道我会看教。[五]当恁麼時、亦不知有仏性義無仏性義。及至長大、便学種種知解、出来便道我能我解。不知是[六]客塵煩悩。[七]十六観行中、嬰児行為最。[八]哆哆啝啝時、喩学道之人、離分別取捨心、故讃歎嬰児。可況喩取之。若謂嬰児是道、今時人錯会。[九]南泉云、我十[一〇]八上、解作活計。趙州道、我十八上、解[一一]破家散宅。又道、我在南方二十年、除[一二]粥飯二時是[一三]雑用心処。[一四]曹

無功用の智を以て一微塵の中に大法輪を転じ、一切時中、行住坐臥に、得失に拘らず、任運に薩婆若海に流入す」と。衲僧家這裏に到るも亦た執著すべからず。但だ時に随って自在なり。茶に遇っては茶を喫し、飯に遇っては飯を喫す。這箇向上の事、箇の「定」の字を著くるも也た得ず、箇の「不定」の字を著くるも也た得ず。石室善道和尚、衆に示して云く、「汝見ずや、小児出胎の時、何ぞ曾て我会く看教すと道わん。恁麼の時に当って、亦た有仏性の義、無仏性の義を知らず。長大なるに至るに及んで、便ち種種の知解を学び、出で来たりて便ち道う、『我能し我解す』と。知らず是れ客塵煩悩なることを。十六観行の中、嬰児行を最と為す。哆哆啝啝の時を学道の人の、分別取捨の心を離るるに喩え、故に嬰児を讃歎す。況喩えて之を取るべし。若し嬰児是れ道と謂わば、今時の人錯り会せん」と。南泉云く、「我十八上にして、解く活計を作つ」と。趙州道く、「我十八上にして、解く家を破り宅を

山問僧、菩薩定[15]中聞香象渡河歴歴地、出什麼経。僧云、涅槃経。山云、定前聞、定後聞。僧云、和尚流也。山云、[16]灘下接取。又楞厳経云、[17]湛入合湛、入識辺際。又楞伽経云、[18]相生執礙、想生妄想、流注生則逐妄流転。若到無功用地、猶在流注相中。須是出得第三流注生相、方始快活自在。所以潙山問仰山云、寂子如何。仰山云、和尚問他見解、問他行解。若問他行解、某甲不知。若是見解、如一瓶水注一瓶水。若得如此、皆可以為一方之師。趙州云、急水上打毬子。早是転轆轆地、更向急水上打時、眨眼便過。*[20]譬如[19]楞厳経云、如急流水、望為恬静。古人云、譬如駛流水、水流無定止。各各不相知、諸法亦如是。

散ず」と。又た道く、「我南方に在って二十年、粥飯の二時の、是れ雑用心の処なるを除く」と。曹山、僧に問う、「菩薩定中に、香象の河を渡るを聞くこと歴歴地なりとは、什麼なる経に出づるや」。僧云く、『涅槃経』なり」。山云く、「定前に聞くか定後に聞くか」。僧云く、「和尚流れたり」。山云く、「灘下に接取めよ」と。又た『楞厳経』に云く、「湛入りて湛に合すれば、識の辺際に入る」と。又た『楞伽経』に云く、「相生は執礙、想生は妄想、流注生は則ち妄を逐って流転す」と。若し無功用の地に到るも、猶お流注相の中に在り。須是らく第三の流注生相を出得して、方始めて快活自在なるべし。所以に潙山、仰山に問うて云く、「寂子は如何」。仰山云く、「和尚他の見解を問うか、他の行解を問うか。若し他の行解を問わば、某甲は知らず。若是見解ならば、一瓶の水を一瓶の水に注ぐが如し」と。若し此の如くなるを得ば、皆な以て一方の師と為る可し。趙州云く、「急水上に

趙州答処、意渾類此。其僧又問投子、急水上打毬子、意旨如何。子云、念念不停流。自然与他問処恰好。古人行履綿密、答得只似一箇、更不消計較。你纔問他、早知你落処了也。孩子六識、雖然無功用、争奈念念不停、如密水流。投子恁麼答、可謂深辨来風。雪竇頌云、

毬子を打つ」と。早是に転轆轆地なるを、更に急水上に打つ時は、眨眼すれば便ち過ぐ。譬如えば『楞厳経』に云く、「急流水の如きも、望めば恬静と為る」と。古人云く、「譬えば駛流水の如し、水流れて定止無し。各各相知らず、諸法も亦た是の如し」と。趙州の答処、意は渾て此れに類す。其の僧又た投子に問う、「急水上に毬子を打つと、意旨如何」。子云く、「念念流れを停めず」と。自然に他の問処に恰好えり。古人の行履は綿密にして、答え得て只だ一箇の似く、更に計較を消いず。你、他に問うや纔や、早に你の落処を知り了れり。孩子の六識、無功用なりと雖然も、争奈せん念念停めずして、密水の流るるが如きを。投子恁麼に答うるは深く来風を辨ずと謂うべし。雪竇の頌に云く、

＊譬如　福本に無し。

一『華厳経』十地品。二 菩薩としては最高の境地である十地の第八位にある菩薩。三 仏の智の広大さを海に喩えていう。四『伝灯録』一四に見える。五 経典を読む。六 外界から付着しておこる煩悩。

七 一説に五行（聖行・梵行・天行・嬰児行・病行）の誤り。また一説には天行を除いた四行を蔵・通・別・円の四教に配して十六とする。 八 嬰児の発する声の擬音語。 九 南泉普願（七四八—八三四）。 一〇 十八歳のころ、修行者として自立できた。 一一 身上をつぶす。修行上の一切の教条を払い捨てて身ひとつになったこと。 一二 朝の粥と昼の飯との一日二食。 一三『趙州録』では「これを除いては、ほかに心を用いることは全くなかった」と続く。 一四 曹山本寂（八四〇—九〇一）。 一五 禅定。 一六 浅瀬。 一七『楞厳経』一〇に見える。「湛」は水を湛えたように静かなさま。はじめの「湛」は六識、後の「湛」は第八識。感覚的な意識である六識を根源の第八識と一体化させたところが究極の識である。 一八 このままの文は見えない。「相生」は対象が歴然として在ること。「想生」は妄念が生ずること。「流注生」は微細な煩悩が絶え間なく起こること。 一九 巻一〇。 二〇『華厳経』五・菩薩明難品に「譬如駛水流、流流無絶已」と。

【頌】 六識無功一問を伸ぶ、〔眼有るも盲の如く、耳有るも聾の如し。明鏡台に当り、明珠掌に在り。一句に道尽す。〕作家曾て共に来端を辨ず。〔何ぞ必ずしもせん。也た箇の緇素を辨ぜんことを要す。唯だ証して乃ち知る。〕茫茫たる急水に毬子を打つ、〔始終一貫。過ぎされり。什麼を道うぞ。〕落処停まらず、誰か解く看ん。〔看れば即ち瞎す。過ぎされり。灘下に接取る。〕

【頌】 六識無功伸一問、〔有眼如盲、有耳如聾。明鏡当台、明珠在掌。一句道尽。〕作家曾共辨来端。〔何必。也要辨箇緇素。唯証乃知。〕茫茫急水打毬子、〔始終一貫。過也。道什麼。〕落処不停誰解看。〔看即瞎。過也。灘下接取。〕

一 無功用の用。 二 質問のポイント。

【評唱】六識無功伸一問、古人学道養到這裏、謂之無功之功。与嬰児一般。雖有眼耳鼻舌身意、而不能分別六塵。蓋無功用也。既到這般田地、便乃降龍伏虎、坐脱立亡。如今人但将目前万境、一時歇却。何必八地以上方乃如是。雖然無功用処、依旧山是山、水是水。雪竇前面頌云、活中有眼還同死、薬忌何須鑑作家。蓋為趙州・投子是作家、故云、作家曾共辦来端、茫茫急水打毬子。投子道、念念不停流。諸人還知落処麼。雪竇末後教人自著眼看。是故云、落処不停誰解看。此是雪竇活句、且道落在什麼処。

【評唱】「六識無功一問を伸ぶ」と、古人、道を学び養いて這裏に到り、之を無功の功と謂う。嬰児と一般なり。眼耳鼻舌身意有りと雖も、而も六塵を分別すること能わず。蓋し無功用なればなり。既に這般る田地に到らば、便乃ち龍を降し虎を伏して、坐脱立亡す。如今の人但だ目前の万境を一時に歇却す。何ぞ必ずしも八地以上にして方乃めて是の如くならん。無功用の処なりと雖然も、依旧として山は是れ山、水は是れ水なり。雪竇前面に頌して云く、「活中に眼有り還た死に同じ、薬忌何ぞ須いん作家を鑑みるに」と。蓋し趙州・投子は是れ作家なるが為に、故に云う、「作家曾て共に来端を辨ず、茫茫たる急水に毬子を打つ」と。投子道く、「念念、流れを停めず」と。諸人還た落処を知るや。雪竇末後に人をして自ら眼を著けて看しむ。是の故に云く、「落処停まらず、誰か解く看ん」と。

此れは是れ雪竇の活句、且道（さて）、什麼処（いずこ）にか落在する。

一 坐ったまま、あるいは立ったまま死ぬこと。生死自在の手ぎわ。 二 十地（菩薩が修行すべき五十二の段階のうちの第四十一位から第五十位まで）の第八、不動地。 三 第四一則。

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第八

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第八

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第九

第八一則　薬山射麈中麈

垂示云、攙旗奪鼓、千聖莫窮。坐断誵訛、万機不到。不是神通妙用、亦非本体如然。且道、憑箇什麼、得恁麼奇特。

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第九

第八一則　薬山、麈中の麈を射る

垂示に云く、旗を攙り鼓を奪うは、千聖も窮むること莫し。誵訛を坐断して、万機到らず。是れ神通妙用にあらず、亦た本体如然に非ず。且道、箇の什麼に憑ってか、恁麼に奇特なるを得たる。

一 敵軍の旗と鼓とをひったくって動きがとれなくすること。第七一則・本則の著語に既出。 二 いりくんで難解なところをすぱりと裁断する。 三 あらゆる作用を寄せつけない。 四 神通力の絶妙なはたらき。 五 もともとありのままに真実としてある。

【本則】 挙。僧問薬山、平田浅草、麈鹿成群。如何射得麈中麈。〔把髻投衙。撃頭帯角出来。脳後抜箭。〕山云、看箭。〔就身打劫。下坡不走、快便難逢。著。〕僧放身便倒。〔灼然

【本則】 挙す。僧、薬山に問う、「平田浅草に、麈と鹿と群を成す。如何か麈中の麈を射得ん」。〔髻を把んで衙に投ず。頭を撃げ角を帯びて出で来たる。脳後に箭を抜け。〕山云く、「箭を看よ」。〔身に就いて打劫す。坡を下りて走らざれば、快便には逢い難し。著れ

＊不同。一死更不再活。弄精魂漢。〕[九]
山云、侍者拖出這死漢。〔拠令而行。[一〇]
不労再勘。前箭猶軽後箭深。〕僧便
走。〔棺木裏瞠眼。死中得活。猶有[二]
気息在。〕山云、弄泥団漢、有什麼[三]
限。〔可惜許、放過。拠令而行。雪
上加霜。〕雪竇拈云、三歩雖活、五
歩須死。〔一手擡、一手搦。直饒走
百歩、也須喪身失命。＊＊復云、看箭。
且道、雪竇意、落在什麼処。[四]若是同[三]
死同生、薬山直得目瞪口呿。一向似[五]
無孔鉄鎚、堪作何用。〕

り。〕僧、身を放って便ち倒る。〔灼然(あきらか)に同じからず。
一たび死すれば更に再びは活きず。精魂を弄する漢。〕
山云く、「侍者、這(こ)の死漢を拖出(ひきずりだ)せ」。〔令に拠(よ)って行
う。再び勘(しら)ぶるを労せず。前の箭は猶お軽きも後の箭
は深し。〕僧、便ち走(にげだ)す。〔棺木(ひつぎ)の裏(なか)に眼を瞠(みひら)く。死中
に活を得たり。猶お気息(いき)の在る有り。〕山云く、「泥団
を弄する漢、什麼(なん)の限りか有らん」。〔可惜許(おしむべし)、放過(みのが)せ
り。令に拠って行う。雪上に霜を加う。〕雪竇拈(とりあ)げて
云く、「三歩は活すと雖も、五歩には須らく死すべし」。
〔一手には擡(もた)げ、一手には搦(おさ)う。直饒(たとい)走(にぐ)ること百歩す
るも、也(ま)た須らく喪身失命すべし。復た云く、「箭を
看よ」と。且道(さて)、雪竇の意は什麼処(いずこ)にか落在す。若是(もし)
同死同生せば、薬山は直得(つい)に目瞪(みは)り口呿(あ)かん。一向(ひたすら)に
無孔(むく)の鉄鎚の似(ごと)くならば、何の用をか作(な)すに堪えん。〕

＊不同　福本に無し。　＊＊復云～何用〔三九字〕　福本に無し。

一 薬山惟儼(いげん)(七五一?―八三四?)。 二 ひろびろとした草地。 三 自分で頭のまげをひっつかんで役所に自首する。自ら罪人と名乗って出る。 四 頭にすっくと角を生やして現れた。 五 頭の後に刺さった

矢を抜いてやれ。六 飛んでくる矢に気をつけろ。七 自分自身を身ぐるみ剥ぐ。八 早く堤を下りないと、便船に乗り遅れるぞ。チャンスを逸したらおしまいだ。九 狐つきをやらかす男。一〇 法令どおりに実施する。一一 往生ぎわが悪い。一二 泥のかたまりをいじくるやからに、きりのつく日はない。一三 あくまで人のためをはかる。一四 度肝を抜かれたさま。一五 柄をつける穴のない鉄鎚。手にあまるしろもの。

【評唱】這公案、洞下[一]謂之借事問、亦謂之辨主問[二]、用明当機。鹿与麈尋常易射。唯有麈中麈、是鹿中之王、最是難射。此麈鹿常於崖石上利其角、如鋒鋩穎利、以身護惜群鹿、虎亦不能近傍。這僧亦似惺惺、引来問薬山、用明第一機。山云、看箭。作家宗師、不妨奇特。如撃石火、似閃電光。

豈不見、三平[三]初参石鞏[四]。鞏才見来、便作彎弓勢云看箭。三平撥開胸云、

【評唱】這の公案、洞下に之を借事問と謂い、亦た之を辨主問と謂い、用て当機を明す。鹿と麈と尋常は射易し。唯有麈中の麈のみ、是れ鹿の中の王にして最も是れ射難し。此の麈鹿は常に崖石の上に於て其の角を利くすること、鋒鋩の穎利なるが如く、身を以て群鹿を護惜り、虎も亦た近傍ること能わず。這の僧も亦た惺惺るるが似くして、引き来たりて薬山に問い、用て第一機を明かさんとす。山云く、「箭を看よ」と。作家の宗師、不妨に奇特なり。撃石火の如く、閃電光の似し。

豈に見ずや、三平初め石鞏に参ず。鞏、来たるを見るや才や、便ち弓を彎く勢を作て云く、「箭を看よ」

*此是殺人箭、活人箭。鞏弾弓弦三下。三平便礼拝。鞏云、三十年、一張弓、両隻箭、今日只射得半箇聖人[五]。便拗折弓箭。三平後挙似大顛[六]。顛云、既是活人箭、為什麼向弓弦上辨。三平無語。顛云、三十年後、要人挙此話也難得。法灯[七]有頌云、古有石鞏師、架弓矢而坐。如是三十年、知音無一箇。三平中的来、父子相投和。子細返思量、元伊是射垜[八]。

石鞏作略[九]与薬山一般。三平頂門具眼、向一句下便中的。一似薬山道看箭。其僧便作麈放身倒。這僧也似作家。只是有頭無尾。既做圏繢、要陥薬山、争奈薬山是作家、一向逼将去。山云、侍者、拖出這死漢。如展陣向

と。三平、胸を撥開けて云く、「此れは是れ殺人箭か、活人箭か」。鞏、弓弦を弾くこと三下。三平、便ち礼拝す。鞏云く、「三十年、一張の弓と両隻の箭、今日只だ半箇の聖人を射得たり」と。便ち弓箭を拗折る。三平、後に大顛に挙似す。顛云く、「既に是れ活人箭、為什麼にか弓弦の上に辨ず」。三平、語無し。顛云く、「三十年後、人の此の話を挙せんと要するも、得難からん」。法灯に頌有り、云く、「古 石鞏師有り、弓矢を架えて坐す。是の如くすること三十年、知音一箇も無し。三平的に中り来たり、父子相投和す。子細に返って思量すれば、元より伊是れ垜を射る」と。

石鞏の作略は薬山と一般なり。三平は頂門に眼を具して、一句下に便ち的に中る。一に薬山の「箭を看よ」と道うに似たり。其の僧便ち麈と作り、身を放って倒る。這の僧も也た作家に似たり。只だ是れ頭有って尾無し。既に圏繢を做けて薬山を陥れんと要るも、争奈せん薬山は是れ作家にして一向に逼め将ち去く。

前相似。其僧便走、也好。是則是、争奈不脱灑、粘脚粘手。所以薬山云、弄泥団漢、有什麼限。薬山当時、若無後語、千古之下、遭人検点。山云、看箭。這僧便倒。且道、是会是不会。若道是会、薬山因什麼却恁麼道、弄泥団漢。這箇最悪。

正似[二]僧問徳山。学人仗鏌鎁剣、擬取師頭時如何。山引頸近前云、囫。僧云、師頭落也。徳山低頭帰方丈。又[三]巌頭問僧、什麼処来。僧云、西京来。巌頭云、黄巣過後曾収得剣麼。僧云、収得。巌頭引頸近前云、囫。僧云、師頭落也。巌頭呵呵大笑。這

山云く、「侍者、這の死漢を拖出せ」と。陣を展えて向前むが如くに相似たり。其の僧便ち走すは、也た好し。是なることは則ち是なるも、争奈せん脱灑ならずして脚に粘わり手に粘わる。所以に薬山云く、「泥団を弄する漢、什麼の限りか有らん」と。薬山当時、若し後語無ければ、千古之下に人の検点に遭わん。山云く、「箭を看よ」と。這の僧、便ち倒る。且道、是れ会すか是れ会せざるか。若し是れ会すと道わば、薬山什麼に因ってか却って恁麼に道う、「泥団を弄する漢」と。這箇最も悪し。

正に僧、徳山に問うが似し。「学人鏌鎁の剣に仗って、師の頭を取らんと擬する時如何」。山、頸を引べて近前て云く、「囫」。僧云く、「師の頭落ちたり」と。徳山低頭れて方丈に帰る。又た巌頭、僧に問う、「什麼処より来たる」。僧云く、「西京より来たる」と。巌頭云く、「黄巣過ぎし後、曾て剣を収得せしや」。僧云く、「収得せり」。巌頭、頸を引べて近前て云く、

般公案、都是陥虎之機。正類此。恰是薬山不管他、只為識得破、只管逼将去。

　雪竇云、這僧三歩雖活、五歩須死。這僧雖甚解看箭、便放身倒、山云、侍者拖出這死漢。僧便走。雪竇道、只恐三歩外不活。当時若跳出五歩外、天下人便不奈他何。作家相見、須是三賓主始終互換、無有間断、方有自由自在分。這僧当時既不能始終、所以遭雪竇検点。後面亦自用他語、頌云、

「囮」。僧云く、「師の頭落ちたり」と。巌頭、呵呵大笑す。這般る公案、都て是れ陥虎の機なり。正に此れに類す。恰も是れ薬山は他に管わず、只だ識得破せるが為に、只管に逼め将ち去く。

　雪竇云く、「這の僧三歩は活すと雖も、五歩には須らく死すべし」と。這の僧甚だ解く箭を看て便ち身を放って倒ると雖も、山云く、「侍者、這の死漢を拖出せ」と。僧便ち走す。雪竇道く、「只だ恐らくは三歩の外には活せざらん」と。当時若し五歩の外に跳出せば、天下の人便ち他を奈何ともせじ。作家の相見、須是らく賓主始終互換し、間断有ること無くして、方めて自由自在の分有るべし。這の僧当時既に始終すること能わず、所以に雪竇の検点に遭う。後面に亦た自ら他の語を用い、頌して云く、

＊此是殺人箭活人箭　福本は「此是殺人箭、如何是活人箭」。

一 洞山門下。二 いま直面している場。三 三平義忠(七八一—八七二)。四 石鞏慧蔵。馬祖の法嗣。五 滅多にいない聖人。六 大顛宝通(七三二—八二四)。七 法灯泰欽(?—九七四)。八 弓の的をたて

かけるための盛り土。九 巧妙な活手段。一〇 洒脱。スマート。一一 第二〇則・本則の評唱、第六六則・本則の評唱にも。一二 第六六則・本則。一三 主客たがいにその位置を取りかえる禅問答。

【頌】　麈中麈、〔[一]高著眼看。[四]擎頭戴角去也。〕君[二]看取。〔[三]何似生。第二頭走*。要射便射。看作什麼。〕下一箭、〔中也。須知薬山好手。〕走三歩。〔活鱍鱍地、只得三歩。死了多時。〕五歩若活、〔作什麼。跳百歩。忽有箇死中得活時如何。〕成群趁虎。〔二俱並照**。須与他倒退始得。天下衲僧[五]放他出頭、也只在[六]草窠裏。〕[七]正眼従来付猟人。〔争奈薬山未肯承当這話。薬山則故是、雪竇又作麼生。也不干薬山事、也不干雪竇事、也不干山僧事、也不干[八]上座事。〕雪竇高声云、看箭。〔[九]二状領過。也須与他倒退始

【頌】　麈(しゅ)中の麈(しゅ)、〔高く眼を著けて看よ。頭を擎(ささ)げ角を戴き去(さ)れり。〕君、看取せよ。〔何似生(いかん)。第二頭に走(ゆ)く。射んと要(ほっ)せば便ち射よ。看て什麼(なに)か作(せ)ん。〕一箭を下(つが)うれば、〔中(あた)れり。須らく知るべし薬山好手(やりて)なることを。〕走(にげだ)すこと三歩。〔活鱍鱍地なるは、只だ三歩を得たるのみ。死し了りて多時(ひさし)。〕五歩にして若(も)し活せば、〔什麼(なに)か作(せ)ん。跳(は)ぬること百歩。忽(も)し箇(こ)の死中に活を得ること有らん時は如何(いかん)。〕群を成して虎を趁(お)わん。〔二(ふた)り俱に並べ照す。須らく他(かれ)の与(ため)に倒退(ひきさが)って始めて得(よ)し。天下の衲僧(のうそう)、他(かれ)に出頭を放(ゆる)すも、也(ま)た只だ草窠裏に在り。〕正眼(しょうげん)は従来猟人(かりうど)に付(あた)う。〔争奈(いかん)せん薬山は未だ肯(あえ)て這(こ)の話を承当(うけが)わず。薬山は則ち故是(もとより)、雪竇は又た作麼生(いかん)。也た薬山の事に干(かかわ)らず、也た雪竇の事に干らず、也た山僧(それがし)の事に干らず、也た上座(じょうざ)の事

得。打云、已塞却你咽喉了也。〕

に干らず。〕雪竇高声に云く、「箭を看よ」。〔一状に領過す。也た須らく他の与に倒退って始めて得し。打って云く、「已に你の咽喉を塞却ぎ了れり」。〕

＊走　福本に無し。　＊＊照　福本は「然」。

一 視線を上に向けよ。 二 じっくりと見てとれ。 三 どうだ。「何如」に同じ。「生」は意味のない接尾語。 四 後手に回った。 五 まかり出る。 六 草ぶかい窠窟(ねぐら)。 七 仏法の眼目は始めから薬山という狩人に与えられている。 八 薬山に質問した僧を指す。 九 同罪として処断した。

〔評唱〕麈中麈、君看取。衲僧家須是具麈中麈底眼、有麈中麈底頭角、有機関有作略。任是挿翼猛虎、戴角大虫、也只得全身遠害。這僧当時放身便倒、自道、我是麈。下一箭、走三歩。山云、看箭。僧便倒。山云、侍者拖出這死漢。這僧便走。也甚好。争奈只走得三歩。五歩若活、成群趁虎。雪竇道、只恐五歩須死。当時若跳得出五歩外活時、便能成群去趁虎。

〔評唱〕「麈中の麈、君、看取せよ」と。衲僧家は須是らく麈中の麈たる眼を具し、麈中の麈たる頭角有り、機関有り作略有るべし。任是い翼を挿けたる猛虎、角を戴せる大虫も、也た只だ身を全うして害を遠ざくるを得るのみ。這の僧当時身を放って便ち倒れ、自ら道う、「我は是れ麈なり」と。一箭を下うれば、走すこと三歩。山云く、「箭を看よ」と。僧便ち倒る。山云く、「侍者、這の死漢を拖出せ」と。這の僧便ち走す。也た甚だ好し。争奈せん只だ走し得たること三歩なるのみ。五歩に若し活せば、群を成して虎を趁わん。雪

其麈中麈、角利如鎗。虎見亦畏之而走。麈為鹿中王、常引群鹿、趁虎入別山。雪竇後面頌薬山亦有当機出身処、正眼従来付猟人。薬山如能射猟人、其僧如麈。雪竇是時因上堂、挙此語、束為一団話、高声道一句云、看箭。坐者立者、一時起不得。

竇道く、「只だ恐らくは五歩せば須らく死すべし。当時若し五歩の外に跳得出(ぬけだ)して活せん時は、便ち能く群を成し去って虎を趁(お)わん」と。其の麈中の麈、角の利(と)きこと鎗(やり)の如し。虎見るや亦た之を畏れて走す。麈は鹿の中の王為(た)り、常に群鹿を引(ひき)い、虎を趁(お)って別山に入らしむ。雪竇、後面に薬山も亦た当機出身の処有るを頌す、「正眼は従来猟人に付(あた)う」と。薬山は射を能くする猟人の如く、其の僧は麈の如し。雪竇、是の時因(ちなみ)に上堂して此の語を挙(とりあ)げ、束(まと)めて一団の話と為(な)して、高声に一句を道(い)いて云く、「箭を看よ」と。坐者立者、一時(しばし)起つことを得ず。

第八二則　大龍堅固法身

垂示云、竿頭糸線、具眼方知。格外之機、作家方辨。且道、作麼生是竿頭糸線、格外之機。試挙看。

一 釣竿の先から垂れた糸の動きは釣り上げるべき本物を見て取る眼をもつ者のみが知る。 二 常識を超えた活機は練達した禅匠のみが弁別できる。

【本則】挙。僧問大龍、色身敗壊、如何是堅固法身。〔話作両橛。分開也好。〕龍云、山花開似錦、澗水湛如藍。〔無孔笛子、撞著氈拍板。渾崙擘不破。人従陳州来、却往許州去。〕

一 大龍智洪。 二 肉体は滅ぶ。『仏遺教経』による。 三 真理の身体、真理そのもの。 四 谷川の水は深く澄んだ藍の色。 五 フェルト製のカスタネット。音の出ない楽器。 六 コンロン山は鑿も受けつけぬ。

第八二則　大龍の堅固法身

垂示に云く、竿頭の糸線は、具眼にして方めて知る。格外の機は、作家にして方めて辨ず。且道、作麼生か是れ竿頭の糸線、格外の機。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。僧、大龍に問う、「色身は敗壊す、如何なるか是れ堅固法身」。〔話、両橛と作る。分開くるも也た好し。〕龍云く、「山花開いて錦に似、澗水湛えて藍の如し」。〔無孔の笛子、氈拍板に撞著る。渾崙、擘き破れず。人、陳州より来たり、却って許州に往き去る。〕

『臨済録』勘弁（岩波文庫一六七頁）参照。七 すれちがい。陳州と許州とは近い。ちなみに、『趙州録』に「人従陳州来、不得許州信」と。

【評唱】此事若向言語上覓、一如掉棒打月。且得没交渉。古人分明道、欲得親切、莫将問来問。何故。問在答処、答在問処。這僧担一担莽鹵、換一担鶻突。致箇問端、敗欠不少。若不是大龍、争得蓋天蓋地。他恁麼問、大龍恁麼答、一合相、更不移易一糸毫頭。一似見兎放鷹、看孔著楔。三乗十二分教、還有這箇時節麼。也不妨奇特、只是言語無味、杜塞人口。是故道、一片白雲横谷口、幾多帰鳥夜迷巣。有者道、只是信口答将去。若恁麼会、尽是滅胡種族漢。殊不知、古人一機一境、敲枷打鎖、一句一言、

【評唱】此の事、若し言語の上に覓むれば、一に棒を掉げ月を打つが如し。且得没交渉。古人分明と道う、「親切ならんと欲得せば、問を将ち来たりて問うこと莫れ。何故ぞ。問は答処に在り、答は問処に在り」と。這の僧一担の莽鹵を担いて、一担の鶻突に換う。箇の問端を致すは、敗欠少なからず。若し是れ大龍にあらずんば、争か天を蓋い地を蓋うを得ん。他恁麼に問い、大龍恁麼に答うるは、一合相にして更に一糸毫頭も移易わず。一に兎を見て鷹を放ち、孔を看て楔を著つが似し。三乗十二分教に還た這箇の時節有りや。也た不妨に奇特なるも、只だ是れ言語無味にして、人の口を杜塞ぐ。是の故に道う、「一片の白雲谷口に横たわり、幾多の帰鳥か夜に巣に迷う」と。有る者は道う、「只だ是れ口に信せて答え将ち去くのみ」と。若し恁麼に

渾金璞玉。若是衲僧眼脳、有時把住、有時放行、照用同時、人境倶奪、双放双収、臨時通変。若無大用大機、争解恁麼籠天罩地。大似明鏡当台、胡来胡現、漢来漢現。此公案与花薬欄話一般、然意却不同。這僧問処不明、大龍答処恰好。不見僧問雲門、樹凋葉落時如何。門云、体露金風。此謂之箭鋒相拄。這僧問大龍、色身敗壊、如何是堅固法身。大龍云、山花開似錦、澗水湛如藍。一如君向西秦、我之東魯。他既恁麼行、我却不恁麼行。与他雲門一倍相返。那箇恁麼行、却易見、這箇却不恁麼行、却難見。大龍不妨三寸甚密。雪竇頌云、

会せば、尽く是れ胡種族を滅ぼすの漢なり。殊に知らず、古人の一機一境は枷を敲き鎖を打ち、一句一言は渾金璞玉なるを。若し是れ衲僧の眼脳ならば、有る時は把住み、有る時は放行し、照用同時、人境倶奪、双放双収、時に臨んで通変す。若し大用大機無くんば、争か解く恁麼に天を籠い地を罩まん。明鏡の台に当って、胡来たれば胡現り、漢来たれば漢現るに大いに似たり。此の公案、花薬欄の話と一般なり、然れども意は却って同じからず。這の僧の問処明らかならざるも、大龍の答処は恰好なり。見ずや僧、雲門に問う、「樹凋み葉落つる時、如何」。門云く、「体露金風」と。此れ之を箭鋒相拄ると謂う。這の僧、大龍に問う、「色身は敗壊す、如何なるか是れ堅固法身」。大龍云く、「山花開いて錦に似、澗水湛えて藍の如し」と。一に君は西秦に向かい、我は東魯に之くが如し。他は既に恁麼に行き、我は却って恁麼には行かず。他の雲門と一倍相返けり。那箇の恁麼に行くは却って見易く、這箇の

却って恁麼には行かざるは却って見難し。大龍は不妨(さすが)に三寸甚だ密なり。雪竇頌して云く、

【頌】 問うこと曾(かつ)て知らず、〔東西辨ぜず。物を弄して名を知らず。帽(ぼうし)を買うに頭を相(はか)る。〕答うること還(ま)た会(よ)くせず。〔南北分たず。髑髏(どくろ)を換却(とりか)う。江南にも

【頌】 [一]問曾不知、〔東西不辨。弄物不知名。[二]買帽相頭。〕答還不会。〔[五]南北不分。[三]換却髑髏。[四]江南江北。〕月

＊処不明　福本は「大龍処分明」。

一 禅の極則。二 首山省念(九二六―九九三)。第一四則・頌の評唱に既出。「親切」は自分にとってグサリとくること。切実さ。三 がさつ。おおまか。「鹵莽」とも。四 うすぼんやり。いい加減。「糊塗」に同じ。五 ぴたりと合体してツボを押さえているさま。六 機会をぴたりと捉え、巧みにツボを押さえた対応。七 一切の教学、経典。八「無味之談、塞断人口」(第五八則・頌)に同じ。九 一片の白雲が谷の入り口に横たわったために、どれだけの帰鳥が夜になって巣を見失ったことか。楽普(らくほ)(洛浦)元安(げんあん)の語(『伝灯録』一六)。一〇 釈迦や達磨の血すじ。仏法。一一 枷をはめ鎖でつないだ囚人を拷問する。唐の曹鄴の詩「奉命斉州推事畢寄本府尚書」に「敲枷打鎖声、終日在目旁」と。一二 精錬していない金と磨いていない宝玉。素朴で飾らない生地のまま。一三 相手の内実を見抜く働きと相手の出方に対応する働きとを同時に機能させる。『臨済録』示衆(岩波文庫四五頁)を参照。一四「人」は主体、「境」は主体が依って立つ場。『臨済録』示衆(岩波文庫三一頁)を参照。一五 互いに相手の出方に任せたり、押さえこんだり。一六 全人格の力量の全面的な顕現。一七 第二四則・本則の評唱にも。一八 第三九則。一九 第二七則。二〇 見事な互角の応酬。第七則・本則の評唱などに既出。二一 第七〇則・本則の著語に既出。二二 舌のこと。

冷風高、〔何似生。今日正当這時節、天下人有眼不曾見、有耳不曾聞。〕古巌寒檜。〔不雨時更好。無孔笛子撞著氈拍板。〕堪笑[六]路逢達道人、〔也須是親到這裏始得。還我拄杖子来。成群作隊恁麼来。〕不将語黙対。〔向什麼処見大龍。将箇什麼対他好。〕手把白玉鞭、[七]〔一至七拗折了也。〕[八]驪珠尽撃砕。〔留与後人看、可惜許。〕不撃砕、〔放過一著、又恁麼去。〕増瑕類。〔弄泥団作什麼。転見郎当。過犯弥天。〕国有憲章、〔識法者懼。朝打三千、暮打八百。〕三千条罪。〔只道得一半在。八万四千。[九]無量劫来、堕無間業、也未還得一半在。〕

江北にも。〕月冷かにして風高く、〔何似生。今日正当這の時節、天下の人、眼有るも曾て見ず、耳有るも曾て聞かず。〕古巌に寒檜あり。〔雨ふらざる時更に好し。無孔の笛子、氈拍板に撞著る。〕笑う堪し、「路に達道の人に逢わば、〔也た須是らく親ら這裏に到って始めて得し。我に拄杖子を還し来たれ。群を成し隊を作し恁麼に来たる。〕語黙を将て対せず」とは。〔什麼処にか大龍を見ん。箇の什麼を将てか他に対せば好からん。〕手に白玉の鞭を把り、〔一より七に至るまで拗折り了れり。〕驪珠尽く撃砕かん。〔後人に留与めて看しめんに、可惜許。〕撃砕かざれば、〔一著を放過めしに、又た恁麼にし去る。〕瑕類を増さん。〔泥団を弄して什麼か作ん。転た見る郎当を。過犯天に弥つ。〕国に憲章有りて、〔法を識る者は懼る。朝打三千、暮打八百。〕三千条の罪あり。〔只だ一半を道い得たる在。八万四千あり。無量劫来、無間業に堕つれども、也た未だ一半を還し得ざる在。〕

一 そもそも「堅固法身」というものは、問うすべもなく答えもできぬ。二 帽子を買うには頭のサイズを計るものだ。三 頭全部を取り替えて別人格にする。四 いたるところの意か。五 人情をよせつけぬ冷厳孤高の風光。大龍の「山花澗水」を撥ねつける。六 達道の人に出会ったら、言葉によっても沈黙によっても対応しない。香厳智閑の「譚道」の頌(『伝灯録』二九)。また、『伝灯録』一六・覆船洪荐章にも。七 未詳。八「驪珠」は驪龍のあごの下の宝珠。ここは、堅固法身を喩える。九 無限の時間、無間地獄に堕ちる。

【評唱】雪竇頌得、最有工夫。前来頌[一]雲門話、却云、問既有宗、答亦攸同。這箇却不恁麼[二]、却云、問曾不知、答還不会。大龍答処傍瞥、直是奇特。分明是誰恁麼問、未問已前、早納敗欠了也。他答処俯能恰好。応機宜道、山花開似錦、澗水湛如藍。你諸人、如今作麼生会大龍意。答処傍瞥、直是奇特。所以雪竇頌出、教人知道月冷風高、更撞著古巌寒檜。且道、他意作麼生会。所以適来道、無孔笛子

【評唱】雪竇頌し得て、最も工夫有り。前来(さき)に雲門の話を頌するに、却って云く、「問に既に宗(しゅう)有り、答も亦た同じき攸(ところ)」と。這箇(これ)は却って恁麼(さよう)にあらず却って云く、「問うこと曾て知らず、答うること還た会(よ)くせず」と。大龍の答処(こたえ)は傍瞥にして、直(まさ)に是れ奇特なり。分明(あきらか)に是れ誰か恁麼(さよう)に問うも、未だ問わざる已前(いぜん)、早(つと)に納敗(しくじ)欠り了れり。他(かれ)の答処(こたえ)俯(みおろ)して能く恰好(みごと)なり。機宜に応じて道(い)う、「山花開いて錦に似、澗水湛えて藍の如し」と。你諸人如今(いまいかに)作麼生か大龍の意を会(え)せん。答処(こたえ)傍瞥にして、直(まさ)に是れ奇特なり。所以(ゆえ)に雪竇頌出し、人をして月冷かに風高きを知道(し)らしめ、更に古巌

撞著氈拍板。只[三]這四句頌了也。

　雪竇又怕人作道理、却云、堪笑路逢達道人、不将語黙対。此事且不是見聞覚知、亦非思量分別。所以云、的的無兼帯、独運何依頼。路逢達道人、不将語黙対。此是香厳頌。雪竇引用也。不見僧問[四]趙州、不将語黙対。未審将什麼対。州云[五]、呈漆器。這箇便同適来話。不落你[六]情塵意想、一似什麼。手把白玉鞭、驪珠尽撃砕。是故祖[七]令当行、十方坐断。此是[八]剣刃上事、須是有[九]恁麼作略。若不恁麼、総辜負従上諸聖。到這裏、要無些子事、自有好処。便是[一〇]向上人行履処也。既不撃砕、必増瑕纇、便見漏逗。畢竟

寒檜に撞著しむ。且道、他の意作麼生か会せん。所以に適来に道う、「無孔の笛子、氈拍板に撞著る」と。只だ這の四句にて頌し了れり。

　雪竇又た人の道理を作てんことを怕れて、却って云く、「笑う堪し、『路に達道の人に逢わば、語黙を将て対せず』とは」と。此の事は且も是れ見聞覚知にあらず、亦た思量分別に非ず。所以に云う、「的的として兼帯無し、独り運ぶに何にか依頼せん。路に達道の人に逢わば、語黙を将て対せず」と。此れは是れ香厳の頌なり。雪竇、引用す。見ずや僧、趙州に問う、「語黙を将て対せず、と。未審、什麼を将てか対せん」。州云く、「漆器を呈す」と。這箇便ち適来の話に同じ。你の情塵意想に落ちず、一に什麼にか似たる。「手に白玉の鞭を把り、驪珠尽く撃砕かん」と。是の故に祖令当に行われ、十方坐断せらる。此れは是れ剣刃上の事にして、須是らく恁麼の作略有るべし。若し恁麼ならざれば、総て従上の諸聖に辜負かん。這裏に到らば、

是作麼生得是。国有憲章、三千条罪。[一一]五刑之属三千、莫大於不孝。憲是法、章是条。三千条罪、一時犯了也。何故如此。只為不以本分事接人。若是大龍、必不恁麼也。

要ず些子の事も無く、自ずから好処有り。便ち是れ向上の人の行履の処なり。既に撃砕かずんば、必ず瑕纇を増して、便ち漏逗を見ん。畢竟是れ作麼生せば是なるを得ん。「国に憲章有りて、三千条の罪あり」と。五刑の属三千、不孝より大なるは莫し。「憲」は是れ法、「章」は是れ条。三千条の罪、一時に犯し了れり。何故に此の如くなる。只だ本分事を以て人を接せざるが為なり。若是大龍ならば、必ず恁麼ならじ。

一 第二七則。 二 傍らからちらと見ただけ。 三「問曾不知、答還不会。月冷風高、古巌寒檜」の四句。 四 趙州従諗（七七八―八九七）。 五 まっ黒な漆の器を差し出す。漆器は、一切の判断を受けつけぬ原初の本来態の喩え。なお、『趙州録』では、この語は別の問答の中に見える。 六 思弁の働き。 七 仏祖の提起した理法によって天下は押さえこまれた。 八 抜き身の剣に直面した事態。 九 巧妙な活手段。 一〇 至高の境地に在る人の在り方。 一一 五種の刑罰。いれずみ・鼻きり・足きり・宮刑・死刑。『書経』呂刑に「墨罰之属千、劓罰之属千、剕罰之属五百、宮罰之属三百、大辟之属二百、五刑之属三千」と。

第八三則　雲門露柱相交

【本則】挙。雲門示衆云、古仏与露柱相交、是第幾機。〔三千里外没交渉。七花八裂。〕自代云、〔東家人死、西家人助哀。一合相不可得。〕南山起雲、〔乾坤莫覩、刀斫不入。〕北山下雨。〔点滴不施。半河南、半河北。〕

第八三則　雲門の露柱相交る

【本則】挙す。雲門、衆に示して云く、「古仏は露柱と相交る、是れ第幾機ぞ」。〔三千里外に没交渉。七花八裂。〕自ら代って云く、〔東家の人死して、西家の人哀を助く。一合相にして得べからず。〕「南山に雲起こり、〔乾坤も観ること莫く、刀も斫り入らず。〕北山に雨下る」。〔点滴も施さず。半は河南、半は河北。〕

＊東家〜可得（一五字）　福本では「北山下雨」の下に在り。　＊＊乾坤〜不入　福本に無し。
＊＊＊点滴〜河北　福本に無し。

一 雲門文偃（八六四―九四九）。二（その交合は）どういう次元での仏の機能（はたらき）か。三 散り散り、ばらばら。四 ピタリ一枚の物は分析によって認識できない。五 刀でも切り込めない。六 雨つぶ一滴も降らぬではないか。七（一つに「交る」といいながら）その雨は反対の二方向に降っておる。
「雲雨」は両性交合の表徴。

〔評唱〕雲門大師、出八十餘員善知

〔評唱〕雲門大師は八十餘員の善知識を出だす。遷化

識。遷化後七十餘年、開塔観之、儼然如故。他見地明白、機境迅速。大凡垂語・別語・代語、直下孤峻。只這公案、如撃石火、似閃電光、直是神出鬼没。慶蔵主云、一大蔵教、還有這般説話麼。如今人多向情解上作活計道、仏是三界導師、四生慈父。既是古仏、為什麼却与露柱相交。若恁麼会、卒摸索不著。有者喚作無中唱出。殊不知宗師家説話、絶意識、絶情量、絶生死、絶法塵、入正位、更不存一法。你纔作道理計較、便纏脚纏手。且道、他古人意作麼生。但只使心境一如、好悪是非、撼動他不得。便説有也得、無也得、有機也得、無機也得。到這裏、拍拍是令。五祖先師道、大小雲門、元来胆小。若是

の後、七十餘年にして塔を開いて之を観るに、儼然として故の如し。他は見地明白にして、機境迅速なり。大凡そ垂語・別語・代語するに、直下に孤峻なり。只だ這の公案は撃石火の如く、閃電光の似く、直是に神出鬼没なり。慶蔵主云く、「一大蔵教に還た這般る説話有りや」と。如今の人多く情解の上に活計を作して道く、「仏は是れ三界の導師、四生の慈父。既に是れ古仏なるに、為什麼にか却って露柱と相交る」と。若し恁麼に会せば、卒に摸索不著ざらん。有る者は喚んで「無中に唱出す」と作す。殊に知らず、宗師家の説話は意識を絶ち、情量を絶ち、生死を絶ち、法塵を絶ちて、正位に入り、更に一法も存せざることを。你が道理計較を作すや纔や、便ち脚に纏わり手に纏わらん。且道、他の古人の意作麼生。但只心境をして一如ならしむれば、好悪是非、他を撼動かすことを得ず。便ち有と説うも也た得く、無も也た得く、有機も也た得く、無機も也た得し。這裏に到らば、拍拍是れ令な

山僧只向他道、第八機。他道、古仏与露柱相交、是第幾機、一時間且向目前包裹。僧問、未審意旨如何。門云、一条條三十文買。[三]他有定乾坤底眼。既無人会、後来自代云、南山起雲、北山下雨。且与後学、通箇入路。[四]所以雪竇、只拈他定乾坤処、教人見。若纔犯計較、露箇鋒鋩、則当面蹉過。只要原他雲門宗旨、明他峻機。所以頌出云、

り。五祖先師道く、「大小の雲門も、元来胆小なり。若是山僧ならば、只だ他に向って『第八機』と道わん」と。他の、「古仏と露柱と相交る、是れ第幾機ぞ」と道うは、一時の間且く目前に包裹くなり。僧問う、「未審、意旨如何」。門云く、「一条の條を三十文に買う」と。他は乾坤を定むる眼有り。既に人の会する無く、後来に自ら代って云く、「南山に雲起こり、北山に雨下る」と。且く後学の与に箇の入路を通ず。所以に雪竇は只だ他の乾坤を定むる処を拈げて、人をして見しむ。若し纔に計較を犯して、箇の鋒鋩を露さば、則ち当面に蹉過わん。只だ他の雲門の宗旨に原いて、他の峻機を明すことを要す。所以に頌出して云く、

＊拍拍是令　福本はこの上に「著著全真」の四字有り。

一『雲門録』、『会元』一五などでは「十七載」。二 見解、見識。三 修行者を導く方便、手だて。四 問答における問題提起やコメントを下すこと。五 圜悟の同学。蔵主は経蔵を管理する役。六 欲界・色界・無色界。生物が輪廻する三つの境域。七 胎生・卵生・湿生・化生。あらゆる生き物。八 執着を惹き起こすもろもろの現象。九 本来究極の境地。一〇 拍子を取る一つ一つのあいの手が歌の調べ

になる。　一一　圜悟の師、五祖法演。　一二　〜ともあろうものが。　一三　『雲門録』には「買」が無い。　一四　悟入への手がかり。

【頌】　南山雲、〔乾坤莫覩、刀斫不入。〕北山[一]雨。〔点滴不施。半河南、半河北。〕四七二三面相覩[二]。〔幾処覓[三]不見。帯累傍人。露柱掛灯籠。〕新羅国裏曾上堂[四]、〔東湧西没[五]。東行[六]不見西行利。那裏得這消息[七]来。〕大唐国裏未打鼓。〔遅一刻。還我話頭来。先行不到、末後太過。〕苦中楽、〔教[*]阿誰知。〕楽中苦。〔両重[**]公案、使誰挙。苦便苦、楽便楽。那裏有両頭三面来。〕誰道黄金如糞土[九]。〔具眼者辨。試払拭看。阿剌[一〇]剌。可惜許。且道、是古仏、是露柱。〕

【頌】　南山の雲、〔乾坤も観ること莫く、刀も斫り入らず。〕北山の雨。〔点滴も施さず。半は河南、半は河北。〕四七と二三と面のあたりに相観る。〔幾処に覓むるも見えず。傍の人を帯累す。露柱に灯籠を掛く。〕新羅国裏曾て上堂するに、〔東湧西没。東行は西行の利を見ず。那裏よりか這の消息を得来たる。〕大唐国裏未だ鼓を打たず。〔遅きこと一刻。我に話頭を還し来たれ。先行は到らず、末後は太だ過ぎたり。〕苦中の楽、〔阿誰をしてか知らしめん。〕楽中の苦。〔両重の公案、誰をしてか挙せしめん。苦は便ち苦、楽は便ち楽。那裏にか両頭三面の有り来たらん。〕誰か道う黄金も糞土の如しと。〔具眼の者辨ぜよ。試みに払拭って看よ。阿剌剌。可惜許。且道、是れ古仏か是れ露柱か。〕

＊教阿誰知　福本は「両重公案、使誰挙。苦是楽、楽是苦。更有両頭三面」。＊＊両重〜面来〔二一字〕　福本は「教阿誰知」。

一 西天の二十八祖、唐土の六祖が一堂に会する。二 完璧な一対の無情物。一切の思量を受けつけずに厳として在るもの。三 あちらの新羅ではもう上堂説法が始まった。四 東に西に出没自在。五 東の店には西の店の利益が見えない。全き断絶。「行」は行市(同業商店の集まった所)。六 こちらの唐土ではまだ上堂合図の太鼓が鳴らされていない。七 問題点を改めて出し直せ。八 先手はゴールに届かなかったのに、最後の手は行き過ぎた。九 どこにそんな二つも三つも顔をもった(苦楽の両面を具有した)化け物がおるものか。一〇 感歎や驚きを表す叫び。

〔評唱〕南山雲、北山雨、雪竇買帽相頭、看風使帆。向剣刃上、与你下箇注脚、直得四七二三面相覷。也莫錯会。此只頌古仏与露柱相交、是第幾機了也。後面劈開路、打葛藤、要見他意。新羅国裏曾上堂、大唐国裏未打鼓。雪竇向電転星飛処便道、苦中楽、楽中苦。＊雪竇似堆一堆七珍八宝、在這裏了。所以末後有這一句子

〔評唱〕「南山の雲、北山の雨」とは、雪竇は帽を買うに頭を相り、風を看て帆を使う。剣刃上に向いて、你の与に箇の注脚を下し、直得に「四七と二三と面のあたりに相覷る」。也た錯り会すること莫れ。此れ只だ「古仏と露柱と相交る、是れ第幾機ぞ」というを頌し了れり。後面に路を劈開き葛藤を打して、他の意を見らしめんと要す。「新羅国裏曾て上堂するに、大唐国裏未だ鼓を打たず」と。雪竇、電転じ星飛ぶ処に向いて便ち道う、「苦中の楽、楽中の苦」と。雪竇は七

云、誰道黄金如糞土。此一句是[三]禅月行路難詩。雪竇引来用。禅月云、山高海深人不測、古往今来転青碧。浅近軽浮莫与交、地卑只解生荊棘。誰道黄金如糞土、[四]張耳陳餘断消息。[五]行路難、行路難、君自看。且莫土曠人[六]稀、[七]雲居羅漢。

珍八宝を堆み堆げて這裏に在き了るに似たり。所以に末後に這の一句子有りて云く、「誰か道う黄金も糞土の如し」と。此の一句は是れ禅月の行路難の詩なり。雪竇引き来たって用う。禅月云く、「山高く海深くして人測らず、古往今来転た青碧。浅近軽浮与に交わること莫れ、地卑くして只だ解く荊棘を生ずるのみ。誰か道う黄金は糞土の如しと、張耳と陳餘と消息を断つ。行路難、行路難、君自ら看よ」と。且て、土曠く人稀なるところに、雲居の羅漢たる莫れ。

*雪竇〜自看〔一〇〇字〕　福本は「此是禅月送皓首座住院詩。云、霜風劈石鳥鵲聚、帆凍軽颸吹不挙。芬陀利花失虚席、幡幢冒雪争迎取春光主。芙蓉堂窄堆花乳、手提金桴撃金鼓。天花娉婷下如雨、俊猊座下獅子子。苦中楽、楽中苦、廬老黄金如糞土。雪竇如堆一堆七珍八宝、在這裏了也。所以末後有這一句、誰道黄金如糞土」。ただし、この「送皓首座住院詩」は『禅月集』五には「送顥雅法師」として見え、文字に多少の異同がある。

一 風向きを見て帆を上げる。時機を見定めて発動する。二 間髪を入れずに。三 禅月大師、貫休（八三二—九一二）。『禅月集』一に見える。四 ともに秦末の群雄で、はじめ親交があったが、後に離反し、張耳は陳餘を斬った。五 なんと世わたりの難しいことよ。六 人影もない曠野に我ひとり。七 奥深い雲居山に納まりかえって自得しているラカンども（と同類になってはならぬぞ）。上冊の一六八

頁・一七六頁・三〇六頁、中冊の二七〇頁に既出。

第八四則　維摩不二法門

垂示云、道是是無可是、言非非無可非。是非已去、得失両忘、浄裸裸、赤灑灑。且道、面前背後、是箇什麼。或有箇衲僧出来道、面前是仏殿三門、背後是寝堂方丈。且道、此人還具眼也無。若辨得此人、許你親見古人来。

第八四則　維摩の不二法門

垂示に云く、「是」と道うも是の是とすべき無く、「非」と言うも非の非とすべき無し。是非已に去り、得失両つながら忘るれば、浄裸裸、赤灑灑。且道、面前背後、是れ箇の什麼ぞ。或は箇の衲僧の出で来たる有りて道わん、「面前は是れ仏殿三門、背後は是れ寝堂方丈」と。且道、此の人還た眼を具する也無。若し此の人を辨得せば、你に許む親しく古人に見え来たれりと。

一 きれいさっぱり、すっぱだか。二 住持が公的に応接するための堂。三 住持の居室。四 正体を見て取る。

【本則】挙。維摩詰問文殊師利、〔這漢太煞合閙一場。＊合取口。〕何等是菩薩入不二法門。〔知而故犯。〕文

【本則】挙す。維摩詰、文殊師利に問う、〔這の漢太煞だ合閙ぐこと一場。口を合取じよ。〕「何等か是れ菩薩、不二の法門に入るとは」。〔知りて故さらに犯

殊曰、如我意者、〔道什麼。直得分疎不下、担枷過状、把髻投衙。〕[四]於一切法、〔喚什麼作一切法。〕無言無説、〔道什麼。〕無示無識、〔瞞別人即得。〕離諸問答。〔道什麼。〕是為入不二法門。〔用入作什麼。用許多葛藤作什麼。〕於是文殊師利問維摩詰、我等各自説已、[五]仁者当説、何等是菩薩入不二法門。〔[六]這一靠、莫道[七]金粟如来、設使三世諸仏、也開口不得。倒転鎗頭来也、刺殺一人。中箭還似射人時。〕

雪竇云、維摩道什麼。〔咄。[へ]万箭攢心。替他説道理。〕復云、勘破了也。〔非但当時、即今也恁麼。雪竇也是賊過後張弓。雖然為衆竭力、争

す。〕文殊曰く、「我が意の如きは、〔什麼を道うぞ。直得に分疎不下、枷を担て状を過し、髻を把んで衙に投す。〕一切の法に於て、〔什麼を喚んでか一切の法と作す。〕無言無説、〔什麼を道うぞ。〕無示無識、〔別人を瞞すことは即ち得し。〕諸の問答を離る。〔什麼を道うぞ。〕是を不二の法門に入ると為す」。〔入ることを用て什麼か作ん。許多しき葛藤を用て什麼か作ん。〕是に於て文殊師利、維摩詰に問う、「我等各自説き已る。仁者当に説くべし、何等か是れ菩薩、不二の法門に入るとは」と。〔這の一靠、金粟如来は莫道、設使三世の諸仏も也た口を開くこと得ず。倒に鎗頭を転じ来たるや、一人を刺殺す。箭に中るは還って人を射る時に似たり。〕

雪竇云く、「維摩は什麼と道いしぞ」。〔咄。万箭、心に攢まる。他に替って道理を説く。〕復た云く、「勘破了せり」。〔但だ当時のみに非ず、即今も也た恁麼。雪竇也た是れ賊過ぎし後に弓を張る。衆の為に力を竭

奈禍出私門。且道、雪竇還見得落処麼。夢也未夢見。説什麼勘破。嶮。金毛獅子、也摸索不著。〕

すと雖然も、争奈せん禍は私門より出づ。且道、雪竇還た落処を見得するや。夢にも也た未だ夢見ず。什麼の勘破けりとか説わん。嶮うし。金毛の獅子なるも、也た摸索不著。〕

＊合取口　福本は「合取狗口」。

一『維摩経』の主人公で学識すぐれた在家信者。維摩居士。二文殊菩薩。三相対差別を超えた絶対平等の教え。四すべてのものについて。五あなた。丁寧な二人称。六「靠」は、体ごと寄っていく、肉迫する。七維摩詰をいう。八無数の矢が心臓につき刺さる。

〔評唱〕維摩詰令諸大菩薩、各説不二法門。時三十二菩薩、皆以二見、有為無為、真俗二諦、合為一見、為不二法門。後問文殊。文殊云、如我意者、於一切法無言無説、無示無識、離諸問答。是為入不二法門。蓋為三十二人以言遣言、文殊以無言遣言、一時掃蕩総不要。是為入不二法門。殊不知霊亀曳尾、払迹成痕。又如掃

〔評唱〕維摩詰、諸の大菩薩をして各不二の法門を説かしむ。時に三十二の菩薩、皆な二見の有為と無為と、真と俗との二諦を以て、合して一見と為し、不二の法門と為す。後に文殊に問う。文殊云く、「我が意の如きは、一切の法に於て無言無説、無示無識、諸の問答を離る。是を不二の法門に入ると為す」と。蓋し三十二人は言を以て言を遣り、文殊は無言を以て言を遣るが為に、一時に掃蕩して総て要せず。是を不二の法門に入ると為す。殊に知らず、霊亀尾を曳き、迹を

箒掃塵相似、塵雖去箒迹猶存、末後依前除蹤跡。於是文殊却問維摩詰云、我等各自説已、仁者当自説。何等是菩薩入不二法門。維摩詰黙然。若是活漢、終不去死水裏浸却。若作恁麼見解、似狂狗逐塊。雪竇亦不説良久、亦不説黙然拠坐、只去急急処云、維摩道什麼。只如雪竇恁麼道、還見維摩麼。夢也未夢見在。維摩乃過去古仏、亦有眷属、助仏宣化、具不可思議辯才、有不可思議境界、有不可思議神通妙用。於方丈室中、容三万二千獅子宝座与八万大衆、亦不寛狭。且道、是什麼道理。喚作神通妙用、得麼。且莫錯会。若是不二法門、雖*同得同証、方乃相共証知、独有文殊可与酬対。雖然恁麼、還免得雪竇検

払えば痕を成すを。又た掃箒もて塵を掃うが如くに相似たり、塵は去ると雖も箒の迹は猶お存し、末後依前として蹤跡を除く。是に於て文殊、却って維摩詰に問うて云く、「我等各自説き已る。仁者当に自ら説くべし。何等か是れ菩薩、不二の法門に入るとは」と。維摩詰黙然たり。若是活漢ならば、終に死水の裏に浸却らじ。若し恁麼の見解を作さば、狂狗の塊を逐うに似たり。雪竇亦た「良久す」と説わず、亦た「黙然として拠坐す」とも説わず、只だ急急の処に云う、「維摩什麼と道いしぞ」と。只だ雪竇の恁麼に道うが如きは、還た維摩を見るや。夢にも也た未だ夢見ざる在。維摩は乃ち過去の古仏、亦た眷属有りて、仏の宣化を助け、不可思議の辯才を具し、不可思議の境界有り、不可思議の神通妙用有り。方丈室中に三万二千の獅子宝座と八万の大衆を容るるも亦た寛狭くあらず。且道、是れ什麼なる道理ぞ。喚んで神通妙用と作して得しきや。且は錯り会すること莫れ。若是不二の法門ならば、

責也無。雪竇恁麼道、也要与這二人相見。云、維摩道什麼。又云、勘破了也。你且道、是什麼処是勘破処。只這些子、不拘得失、不落是非、如万仞懸崖。向上捨得性命、跳得過去、許你親見維摩。如捨不得、大似羝羊触藩。雪竇故然是捨得性命底人、所以頌出云、

同得同証して、方乃めて相共に証知すと雖も、独り文殊のみ可く与に酬対する有り。恁麼なりと雖然も、還た雪竇の検責を免れ得ん也無。雪竇恁麼に道うは也た這の二人と相見えんと要す。云く、「維摩什麼と道いしぞ」。又た云く、「勘破了せり」と。你且ず道え、是れ什麼処か是れ勘破ける処。只だ這の些子は得失に拘らず、是非に落ちず、万仞の懸崖の如し。向上に性命を捨得てて、跳得過去さば、你に許む親しく維摩に見えたりと。如し捨て得ざれば、羝羊の藩に触るるに大いに似たり。雪竇は故然より是れ性命を捨て得たる底の人、所以に頌出して云く、

＊雖　福本は「唯有」。　＊＊故然　福本に無し。

一 維摩の問に答えた文殊以下三十二人の菩薩。 二 因縁によって生滅変化する存在と絶対不変の真実。 三 真実の世界と世俗の世界。 四 霊験あらたかな亀が泥の中を這い、痕跡を消そうとしてかえって尾の痕跡を残す。方便としての言葉が痕跡となって残っている。第二四則の垂示を参照。 五「除」を一本が「餘」とする(底本校記)のが正しい。 六 ぎりぎりの勘どころに向けて。 七 ここは、妻子。 八 教化、布教。 九 体認する。 一〇 大死一番する。 一一 まがきに突っ込んで角をひっかけた牡羊のように動きがとれない。第八則の垂示に既出。

【頌】咄、這維摩老、〔咄他作什麼。朝打三千、暮打八百。咄得不済事。好与三十棒。〕悲生空懊悩。〔悲他作什麼。自有金剛王宝剣。為他閑事長無明。労而無功。〕臥疾毘耶離、〔因誰致得。帯累一切人。〕全身太枯槁。〔病則且置、為什麼口似匾担。飯也喫不得、喘也喘不得。〕七仏祖師来、〔客来須看、賊来須打。成群作隊。也須是作家始得。〕一室且頻掃。〔猶有這箇在。元来在鬼窟裏作活計。〕請問不二門、〔若有可説、被他説了也。打云、和闍黎也尋不見。〕当時便靠倒。〔蒼天蒼天。道什麼。〕不靠倒。〔死中得活。猶有気息在。〕金毛獅子無処討。〔咄。還見麼。蒼天蒼天。〕

【頌】咄、這の維摩老、〔他を咄って什麼か作ん。朝打三千、暮打八百。咄り得るとも事は済まじ。好し三十棒を与うるに。〕生を悲んで空しく懊悩す。〔他を悲んで什麼か作ん。自ずから金剛王宝剣有り。他の閑事の為に無明を長ず。労して功無し。〕疾に毘耶離に臥し、〔誰に因ってか致し得たる。一切の人を帯累す。〕全身太だ枯槁たり。〔病むことは則ち且て置き、為什麼にか口匾担に似たる。飯も喫し得ず、喘ぐにも喘ぎ得ず。〕七仏の祖師来たる、〔客来たらば須らく看るべく、賊来たらば須らく打つべし。群を成し隊を作す。也た須是らく作家にして始めて得し。〕一室且は頻りに掃う。〔猶お這箇の在る有り。元来鬼窟裏に在いて活計を作す。〕不二の門を請問せられ、〔若し説くべき有りとも他に説き了らる。打って云く、闍黎和も也た尋ね見られず。〕当時便ち靠倒さる。〔蒼天、蒼天。什麼を道うぞ。〕靠倒されず。〔死中に活を得たり。猶お気息の在る有り。〕金毛の獅子討ぬるに処無し。〔咄。

還た見るや。蒼天(ああ)、蒼天(ああ)。」

＊和闍黎也尋不見　福本は「闍黎尋常不見。咄。還見麼」。＊＊蒼天蒼天道什麼　福本は「死中得活、猶有気息在」。＊＊＊死中〜息在〔九字〕　福本に無し。＊＊＊＊蒼天蒼天　福本に無し。

一 一切のものを自在に断ち切る宝剣。二 真理に暗いこと。迷いの根源。三『荘子』天運、『管子』形勢などに見える句。四 ヴァイシャーリー。維摩の住む町。五 口をへの字に結んで黙り込む。六「七仏」は毘婆尸(びばし)仏(ぶつ)以下の六仏と釈迦とを併せていい、「七仏祖師」とは文殊を指す。七 まだふっきれていないものがある。八 雪竇を指す。九 文殊の乗り物。転じて、文殊を指す。一〇 維摩の所在（位置するところ）を突きとめられぬという意。

〔評唱〕雪竇道、咄這維摩老。頭上先下一咄、作什麼。以金剛王宝剣、当頭直截。須朝打三千、暮打八百始得。梵語云維摩詰、此云無垢称、亦云浄名。乃過去金粟如来也。不見僧問雲居簡和尚、既是金粟如来、為什麼却於釈迦如来会中聴法。簡云、他不争人我。大解脱人、不拘成仏不成仏。若道他修行、務成仏道、転没交

〔評唱〕雪竇道(いわ)く、「咄、這の維摩老」と。頭上(はじめ)に先(ま)ず一咄を下して什麼(なに)か作(せ)ん。金剛王宝剣を以て当頭(そくざ)に直截(たちき)る。須(すべか)らく朝打三千、暮打八百して始めて得(よ)し。梵語には維摩詰(ゆいまきつ)と云い、此(ここ)には無垢称(むくしょう)と云い、亦た浄名(じょうみょう)と云う。乃ち過去の金粟(こんぞく)如来なり。見(しら)ずや僧、雲居(うんご)の簡(かん)和尚に問う、「既に是れ金粟如来なれば、為什麼(なにゆえ)にか却って釈迦如来の会(え)中に於て聴法する」。簡云く、「他(かれ)は人我(にんが)を争わず」と。大解脱(だいげだつ)の人は成仏不成仏に拘(とらわ)れず、若(も)し「他(かれ)修行して、務めて仏道を成(じょう)ず」と道(い)

渉。譬*如円覚経云、以輪廻心生輪廻見、入於如来大寂滅海、終不能至。永嘉云、或是或非人不識、逆行順行天莫測。若順行則趣仏果位中、若逆行則入衆生境界。寿禅師道、直饒你磨錬得到這田地、亦未可順汝意在。直待証無漏聖身、始可逆行順行。所以雪竇道、悲生空懊悩。維摩経云、為衆生有病故、我亦有病。懊悩則悲**絶也。臥疾毘耶離、維摩示疾於毘耶離城也。唐時王玄策、使西域、過其居、遂以手板縦横量其室、得十笏。因名方丈。全身太枯槁、因以身疾、広為説法云、是身無常無強、無力無堅、速朽之法、不可信也。為苦為悩、衆病所集。乃至陰界入所共合成。七仏祖師来、文殊是七仏祖師。承世尊

わば、転た没交渉。譬えば『円覚経』に云う、「輪廻の心を以て輪廻の見を生じ、如来の大寂滅海に入らんとせば、終に至ること能わず」と。永嘉云く、「或いは是或いは非、人識らず、逆行順行、天も測ること莫し」と。若し順行すれば則ち仏果の位中に趣き、若し逆行すれば則ち衆生の境界に入る。寿禅師道く、「直饒你磨錬して這の田地に到るを得るも、亦た未だ汝の意に順うべからざる在。直に無漏の聖身を証するを待って、始めて逆行順行すべし」と。所以に雪竇道く、「生を悲んで空しく懊悩す」と。『維摩経』に云く、「衆生に病有るが為の故に、我も亦た病有り」と。「懊悩」は則ち悲絶なり。「疾に毘耶離に臥す」とは、維摩、疾を毘耶離城に示すなり。唐の時王玄策、西域に使して其の居を過る。遂に手板を以て縦横其の室を量るに、十笏を得たり。因って方丈と名づく。「全身太だ枯槁たり」とは、身を以て疾むに因る。広く為に説法して云く、「是の身は無常無強、無力無堅にして、

旨、往彼問疾。一室且頻掃、方丈内皆除去所有、唯留一榻[四]、等文殊至、請問不二法門也。所以雪竇道、請問不二門、当時便靠倒。維摩口似匾担。如今禅和子便道、無語是靠倒。且莫[五]錯認定盤星。雪竇拶到万仞懸崖上却云、不靠倒。一手擡、一手搦。他有這般手脚。直是用得玲瓏。此頌前回拈云維摩道什麼。金毛獅子無処討、非但当時、即今也恁麼。還見維摩老麼。尽山河大地、草木叢林、皆変作金毛獅子、也摸索不著。

速朽の法なり、信ずべからず。苦を為し悩を為し、衆病の集まる所。乃至、陰界入の共に合成する所なり」と。「七仏の祖師来たる」とは、文殊は是れ七仏の祖師。世尊の旨を承けて、彼に往きて疾を問う。「一室且は頻に掃う」とは、方丈の内皆な所有を除去し、唯だ一榻を留め、文殊の至るを等って、不二の法門を請門す。所以に雪竇道く、「不二の門を請問せられ、当時便ち靠倒さる」と。維摩は口匾担に似たり。如今の禅和子、便ち道う、「語無きは是れ靠倒されしなり」と。且は定盤星を錯り認むること莫れ。雪竇は万仞の懸崖の上に拶到め、却って云く、「靠倒されず」と。一手には擡げ、一手には搦う。他、這般る手脚有り。直是に用い得て玲瓏なり。此れは前回に拈げて「維摩は什麼と道いしぞ」と云うを頌す。「金毛の獅子討ぬるに処無し」とは、但だ当時のみに非ず、即今も也た恁麼なり。還た維摩老を見るや。尽山河大地、草木叢林、皆な変じて金毛の獅子と作るも、也た摸索不著ざらん。

＊譬如　福本は「不見」。　＊＊悲絶　福本は「愁悶」。

一 漢語では。 二 雲居道簡。『伝灯録』二〇に見える。 三 人我見(個人の主体としての自我が存在する、という誤った見解)に執われない。 四 金剛蔵菩薩章。 五 永嘉玄覚(げんかく)(六七五―七一三)。以下、その作とされる『証道歌』の句。私が肯定(表顕)に出るか否定(遮遣)に出るか誰も見分けられぬ。順でゆくか逆でゆくか天も予測できぬ。 六 仏陀の位。 七 永明延寿(九〇四―九七五)。その垂誡の語(『緇門警訓』二に見える)。 八 証得。体得する。 九 清浄な身体。仏身。 一〇 問疾品の意を取る。 一一 唐の太宗・高宗朝の北インド使節。 一二 位階ある人が束帯を装う時に手に持つ板。笏のこと。ふつう長さ一尺。 一三 五陰(五蘊)・十八界・十二入(十二処)。あらゆる存在の構成要素。 一四 寝台。 一五 秤の目盛りを読みそこなう。

第八五則　桐峰庵主大虫

垂示云、[一]把定世界、不漏繊毫、尽大地人、[二]亡鋒結舌、是衲僧正令。[三]頂門放光、照破四天下、是衲僧[四]金剛眼睛。[五]点鉄成金、点金成鉄、忽擒忽縦、是衲僧拄杖子。[六]坐断天下人舌頭、直得[七]無出気処、[八]倒退三千里、是衲僧気宇。且道、総不恁麼時、畢竟是箇什麼人。試挙看。

第八五則　桐峰庵主の大虫

垂示に云く、世界を把定んで、繊毫も漏らさず、尽大地の人、鋒を亡い舌を結ぶ、是れ衲僧の正令なり。頂門に光を放ち、四天下を照破す、是れ衲僧の金剛眼睛なり。鉄を点じて金と成し、金を点じて鉄と成し、忽ちに擒え忽ちに縦つ、是れ衲僧の拄杖子なり。天下の人の舌頭を坐断して、直得に気を出だす処無く、倒退三千里ならしむ、是れ衲僧の気宇なり。且道、総て恁麼ならざる時、畢竟是れ箇の什麼なる人ぞ。試みに挙し看ん。

一 世界をしかと掌握して毛すじほどのぬかりもない。 二 気勢を殺がれてものが言えなくなる。 三 第三の眼を開いて。 四 ダイヤモンドの瞳。本智の喩え。 五 気合い一つで鉄を金に、金を鉄に変える。修行者を導く練達した手ぎわをいう。 六 天下の人びとの舌の根を押えこんでものが言えなくする。 七 ぐうの音も出ない。 八 地の果てまで退却。

【本則】挙。僧到[一]桐峰庵主処、便問、

【本則】挙す。僧、桐峰庵主の処に到って便ち問う、

這裏忽逢大虫時、又作麼生。〔作家[二]弄影漢。草窠裏一箇半箇。〕庵主便作虎声。〔将[三]錯就錯。却有牙爪。[四]同生同死。[五]承言須会宗。〕僧便作怕勢。〔両箇弄泥団漢、見機而作。似則也似、是則未是。〕庵主呵呵大笑。〔猶較些子。笑中有刀。亦能放、亦能収。〕僧云、這老賊。〔也須識破。敗也。両箇都放行[六]。〕庵主云、争奈老[八]僧何。〔[七]劈耳便掌。可惜放過。雪上加霜又一重。〕僧休去[九]。〔恁麼休去、二俱不了。[一〇]蒼天蒼天。〕

雪竇云、是則是、両箇悪賊、只解[一一]掩耳偸鈴。〔言猶在耳。遭他雪竇点検。且道、当時合作麼生免得点検。

「這裏に忽し大虫に逢わん時、又た作麼生」。〔作家にして影を弄する漢。草窠裏の一箇半箇。〕庵主、便ち虎の声を作す。〔錯を将て錯を就す。却って牙爪有り。同生同死。言を承けては須らく宗を会すべし。〕僧便ち怕るる勢を作す。〔両箇の泥団を弄する漢、機を見て作す。似たることは則ち也た似たるも、是なることは則ち未だ是ならず。〕庵主、呵呵大笑す。〔猶お些子く較えり。笑いの中に刀有り。亦た能く放ち、亦た能く収む。〕僧云く、「這の老賊」。〔也た須らく識破すべし。敗れたり。両箇都に放行さん。〕庵主云く、「老僧を争奈何せん」。〔劈耳に便ち掌せん。惜しむべし、放過したり。雪上に霜を加うること又た一重。〕僧、休し去る。〔恁麼に休し去らば、二り倶に了ぜず。蒼天、蒼天。〕

雪竇云く、「是は則ち是なるも、両箇の悪賊、只だ耳を掩って鈴を偸むを解くするのみ」と。〔言猶お耳に在り。他の雪竇の点検に遭う。且道、当時合た作麼

天下衲僧不到。〕

生か点検を免れ得ん。天下の衲僧も到らじ。〕

一 臨済義玄(?—八六七)の法嗣。「庵主」は一庵に主たる人。二 いわくありげなしぐさをやらかす男。三 自分の過ちをうまく丸めあげる。四 あくまで人のためをはかる。五 石頭希遷(七〇〇—七九〇)の『参同契』の句。六 大目に見てやろう。七 耳めがけてピシャリと。八 無用なことを重ねてする。九 僧は黙ってしまった。一〇 収まりがつかぬ。決着なしの宙ぶらりんのまま。一一 愚かな自己欺瞞の喩え。一二 彼のチェックを免れ得るまでには至れまい。

【評唱】大雄宗派下、出四庵主。大梅・白雲・虎渓・桐峰。看他両人恁麼眼親手辨。且道、誵訛在什麼処。古人一機一境、一言一句、雖然出在臨時、若是眼目周正、自然活鱍鱍地。雪竇拈、教人識邪正、辨得失。雖然如此、在他達人分上、雖処得失、却無得失。若以得失見他古人、則没交渉。如今人須是各各窮到無得失処、然後以得失辨人。若一向去揀択言句処用心、又到幾時得了去。不見雲門

【評唱】大雄の宗派の下に、四庵主を出だす。大梅・白雲・虎渓・桐峰なり。看よ他の両人恁麼に眼親しく手辨ずることを。且道、誵訛什麼処にか在る。古人の一機一境、一言一句、出だすこと臨時に在りと雖然も、若是眼目周正しければ、自然に活鱍鱍地なり。雪竇拈げて、人をして邪正を識り得失を辨ぜしむ。此の如くなりと雖然も、他の達人の分上に在りて、得失に処すと雖も、却って得失無し。若し得失を以て他の古人を見れば、則ち没交渉。如今の人須是らく各各得失無き処に窮め到って、然る後に得失を以て人を辨ずべし。若し一向に言句を揀択る処に去いて心を用かさば、又

大師道、行脚漢、莫只空[六]遊州猟県。只欲得[七]提搦閑言語、待老和尚口動、便問禅問道、向上向下、如何若何、大巻抄将去、窖向肚皮裏卜度、到処火炉辺、三箇五箇、聚頭挙口、喃喃地便道、這箇是[八]公才語、這箇是[九]就身打出語、這箇是事上道底語、這箇是[一〇]体裏語、体你[一一]屋裏老爺老娘。噇却飯了、只管説夢、便道我会仏法了也。将知恁麼行脚、[一二]驢年得休歇去。古人暫時間[一三]拈弄、豈有勝負得失是非等見。

た幾時に到ってか了ずることを得去らん。見(しら)ずや、雲門大師道(いわ)く、「行脚(あんぎゃ)の漢、只だ空しく遊州猟県すること莫れ。只だ欲得(ほっ)す、閑言語を提搦(ていじゃく)し、老和尚の口の動くを待って、便ち禅を問い道を問い、向上(うえ)は向下(した)は、如何若何(いかんいかん)と、大巻に抄(かきうつ)し将(も)ち去(ゆ)き、肚皮裏(はらのなか)に窖向(つめこ)みて卜度(おしはか)り、到る処の火炉辺(いろりばた)に、三箇五箇(さんにんごにん)、頭を聚(あつ)め口を挙(こぞ)って、喃喃地(ぺちゃくちゃ)と便ち道(い)う、『這箇(これ)は是れ公才の語、這箇は是れ身に就いて打出する語、這箇は是れ事上に道(い)う底(てい)の語、這箇は是れ体裏の語、你の屋裏(いえ)の老爺老(ちちは)娘(は)を体せり』と。飯を噇却(むさぼ)り了(つく)して、只管(ひたすら)に夢を説き、便ち『我(われ)仏法を会し了れり』と道(い)う。将(まさ)に知る、恁麼(さよう)に行脚(あんぎゃ)せば驢年にして休歇(やすら)ぐを得去らん」と。古人暫時の間の拈弄(ねんろう)、豈に勝負・得失・是非等の見(けん)有らんや。

一 大雄は百丈山の別名。百丈懐海(ひゃくじょうえかい)(七四九―八一四)の門流。 二『伝灯録』一二に見える臨済下の四庵主は、桐峰・杉洋・虎谿・覆盆。 三 ピタリと見て取り、適切に対応する。第三七則の垂示に「眼辨手親」と。 四 本来の在り方。 五 雲門文偃(ぶんえん)(八六四―九四九)。 六 各地を渡り歩く。 七 空疏な言句をあやつる。『雲門広録』上では「捏搦」。 八 すぐれた才能のある人(?)のことば。第九則・本則の

評唱では「上才語句」。九 その人自身の体験から出たことば。『広録』では「就処打出語」。一〇『広録』では「体語」。一一 自己本来の主人公を指す。一二 いくら年を重ねても究極の安楽は得られぬ。「去」は『広録』が「麼」とするのが正しい。一三 古則や公案を取り上げて吟味する。

桐峰見臨済。其時在深山卓庵。這僧到彼中遂問、這裏忽逢大虫時、又作麼生。峰便作虎声。也好就事便行。這僧也会将錯就錯、便作怕勢。庵主呵呵大笑。僧云、這老賊。峰云、争奈老僧何。是則是、二倶不了。千古之下、遭人点検。所以雪竇道、是則是、両箇悪賊、只解掩耳偸鈴。他二人雖皆是賊、当機却不用。所以掩耳偸鈴。此二老如排百万軍陣、却只闘掃箒。若論此事、須是殺人不眨眼底手脚。若一向縦而不擒、一向殺而不活、不免遭人怪笑。

桐峰、臨済に見ゆ。其の時、深山に庵を卓つ。這の僧、彼中に到って遂に問う、「這裏に忽し大虫に逢わん時、又た作麼生」と。峰、便ち虎の声を作す。也た好し事に就いて便ち行ず。這の僧、也た会く錯を将て錯を就して、便ち怕るる勢を作す。庵主、呵呵大笑す。僧云く、「這の老賊」。峰云く、「老僧を争奈何せん」と。是なることは則ち是なるも、二り倶に了ぜず。千古の下、人の点検に遭う。所以に雪竇道く、「是なることは則ち是なるも、両箇の悪賊、只だ解く耳を掩って鈴を偸むのみ」と。他の二人皆な是れ賊なりと雖も、機に当って却って用かず。所以に耳を掩って鈴を偸む。此の二老、百万の軍陣を排ねて、却って只だ掃箒を闘わしむるが如し。若し此の事を論ぜば、須是らく人を殺すに眨眼もせざる底の手脚なるべし。若し一向に縦

雖然如是、他古人亦無許多事。看他両箇恁麼、総是見機而作。五祖道、神通游戯三昧、慧炬三昧、荘厳王三昧。自是後人脚跟不点地、只去点検古人便道、有得有失。有底道、分明是庵主落節。且得没交渉。雪竇道、他二人相見、皆有放過処。其僧道、這裏忽逢大虫時又作麼生。峰便作虎声。此便是放過処。乃至道、争奈老僧何。此亦是放過処。著著落在第二機。雪竇道、要用便用。如今人聞恁麼道便道、当時好与行令。且莫盲枷瞎棒。只如徳山入門便棒、臨済入門便喝、且道、古人意如何。雪竇後面、便只如此頌出。且道、畢竟作麼生免

ちて擒えず、一向に殺して活さざれば、人の怪笑うに遭うを免れず。

是の如くなりと雖然も、他の古人も亦た許多の事無し。看よ他の両箇、恁麼にして総じて是れ機を見て作す。五祖道く、「神通游戯三昧、慧炬三昧、荘厳王三昧」と。自是より後人は脚跟地に点かず、只だ去きて古人を点検して便ち道う、「得有り失有り」と。有る底は道う、「分明に是れ庵主落節す」と。且得没交渉。雪竇道う、「他の二人の相見、皆に放過す処有り」と。其の僧道う、「這裏に忽し大虫に逢わん時、又た作麼生」と。峰、便ち虎の声を作す。此れ便ち是れ放過す処なり。乃至「老僧を争奈何せん」と道うも、此れ亦た是れ放過す処なり。著著と第二機に落在めり。雪竇道く「用いんと要せば便ち用いよ」と。如今の人恁麼に道うを聞いて便ち道う、「当時に好し与に令を行うに」と。且は盲枷瞎棒すること莫れ。只だ徳山は門に入れば便ち棒し、臨済は門に入れば便ち喝すが如きは、

得掩耳偸鈴去。頌云、

且道（さて）、古人の意如何。雪竇後面に、便ち只だ此の如く頌出す。且道（さて）、畢竟作麼生（いかに）か耳を掩って鈴を偸（ぬす）むことを免れ得去らん。頌に云く、

一 五祖法演（?—一一〇四）。以下の語は『法華経』妙音菩薩品の句による。**二** 無礙自在の境地。**三** 智慧のたいまつの境地。**四** 福徳や智慧によって飾られた王者の境地。**五** 足が地に着いていない。**六** 損をする。**七** 一手ごとに方便に堕した。**八**（見逃してやるのでなく）ぴたりと処断する。**九** やみくもに首かせをはめて打ちすえる。**一〇** 徳山宣鑑（七八二—八六五）は棒を使って弟子を鍛えた禅匠として知られる。**一一** 臨済義玄（?—八六七）は弟子を指導するのによく大喝を与えた。

【頌】　[一]見之不取、〔蹉過了也。已是千里万里。〕思之[二]千里。〔悔不慎当初。蒼天蒼天。〕[三]好箇斑斑、〔[四]闍黎自領出去。[五]争奈未解用在。〕爪牙未備。〔只恐用処不明。待爪牙備、向你道。〕君不見、[六]大雄山下忽相逢、〔[七]有条攀条、無条攀例。〕[八]落落声光皆振地。〔這大虫却恁麼去。猶較些子。[九]幾箇男児是丈夫。〕大丈夫、見也無、〔老

【頌】　之を見て取らざれば、〔蹉過（すれちが）い了（おわ）れり。已（すで）に是れ千里万里。〕之を思うこと千里ならん。〔当初を慎しまざりしことを悔ゆ。蒼天（ああ）、蒼天（ああ）。〕好（よ）き斑斑（けなみ）なるも、〔闍黎自（そなた）ら領して出で去れ。争奈（いかん）せん未だ解（よ）く用（はたら）かざる在（なり）。〕爪牙未だ備わらず。〔只だ恐らくは用処（はたらき）明らかならず。爪牙の備わるを待って你に道（い）わん。〕君見ずや、大雄山下（だいゆうさんか）に忽（はた）と相逢（であ）い、〔条有れば条に攀（よ）り、条なければ例に攀（よ）る。〕落落たる声光皆な地に振うを。〔這（こ）の大虫（とら）却って恁麼（さよう）にし去る。猶お些子（すこし）く較（たが）えり。

婆心切。若解開眼、同生同死。雪竇打葛藤。〕[10]収虎尾兮捋虎鬚。〔忽然突出、如何収。収天下衲僧在這裏。忽有箇出来、便与一拶。若無収、放你三十棒、教你転身吐気。喝。打云、何不道這老賊。〕

幾箇の男児か是れ丈夫なる。〕大丈夫、見る也無、〔老婆心切。若し解く眼を開かば、同生同死せん。雪竇、葛藤を打す。〕虎尾を収め虎鬚を捋くを。〔忽然突出せば如何か収めん。天下の衲僧を収めて這裏に在り。忽し箇の出で来たる有らば、便ち一拶を与えん。若し収むること無ければ、你に三十棒を放し、你をして身を転じて気を吐かしめん。喝。打って云く、何ぞ「這の老賊」と道わざる。〕

一 目に触れたときに摑まなければ、ずっと後にまで悔いを残す。 二 後悔先に立たず。 三 見たところは見事な虎だが。「斑斑」は虎の斑紋。 四 自分で自分をしょっぴいて出て行け。 五 虎の本領をまだ発揮していない。 六 大雄山は、百丈山の別名。百丈と黄檗との話。評唱を参照。 七 法律に明文の条項が有れば、それに照らして判決し、無ければ判例によって処理する。 八 「落落」は独脱して、世俗の拘束を受けないさま。磊落、おおらか。「声光」は、百丈と黄檗との声。 九 唐末・宋初の道士、呂洞賓の詩句。『全唐詩』八五八。 一〇 第五四則・頌に「虎頭虎尾一時収」と。

〔評唱〕見之不取、思之千里、正当嶮処、都不能使。等他道争奈老僧何、好与[1]本分草料。当時若下得這手脚、

〔評唱〕「之を見て取らざれば、之を思うこと千里ならん」と、正に嶮処に当って、都く使うこと能わず。他の「老僧を争奈何せん」と道うを等って、好し本分

他必須有後語。二人只解放、不解収。見之不取、早是白雲万里、更説什麼思之千里。好箇斑斑、爪牙未備。是則是箇大虫也解蔵牙伏爪、争奈不解咬人。君不見、大雄山下忽相逢、落落声光皆振地。百丈一日問黄檗云、什麼処来。檗云、山下採菌子来。丈云、還見大虫麼。檗便作虎声。丈於腰下取斧作斫勢。檗約住便掌。丈至晩上堂云、大雄山下有一虎。汝等諸人出入切須好看。老僧今日親遭一口。後来潙山問仰山、黄檗虎話作麼生。仰云、和尚尊意如何。潙山云、百丈当時合一斧斫殺。因什麼到如此。仰山云、不然。潙山云、子又作麼生。仰山云、不唯騎虎頭、亦解収虎尾。潙山云、寂子甚有嶮崖之句。雪竇引

の草料を与えん。当時若し這の手脚を下し得ば、他必ず後語有らん。二人は只だ解く放つのみにして解く収めず。之を見て取らざれば、早是に白雲万里、更に什麼の「之を思うこと千里」とか説わん。「好箇き斑斑なるも、爪牙未だ備わらず」と。是則是も箇の大虫、也た解く牙を蔵し爪を伏すも、争奈せん人を咬むこと解わず。君見ずや、大雄山下に忽と相逢い、落落たる声光皆な地に振うを。百丈、一日黄檗に問うて云く、「什麼処よりか来たる」。檗云く、「山下に菌子を採り来たる」。丈云く、「還た大虫を見るや」。檗、便ち虎の声を作す。丈、腰下より斧を取って斫る勢を作す。檗、約住えて便ち掌す。丈、晩に至って上堂して云く、「大雄山下に一の虎有り。汝等諸人、出入に切に須らく好く看るべし。老僧は今日、親ら一口に遭えり」と。後来に潙山、仰山に問う、「黄檗の虎の話は作麼生」。仰云く、「和尚の尊意は如何」。潙山云く、「百丈は当時合に一斧もて斫殺すべし。什麼に因って

用明前面公案。声光落落振於大地也。這箇些子、転変自在、要句中有出身之路。大丈夫見也無。還見麼、収虎尾兮捋虎鬚。也須是本分。任你収虎尾捋虎鬚、未免一時穿却鼻孔。

か此の如くなるに到る」。仰山云く、「然らず」。潙山云く、「子又た作麼生」。仰山云く、「唯だ虎の頭に騎るのみにあらず、亦た解く虎の尾を収む」。潙山云く、「寂子、甚だ嶮崖の句有り」と。雪竇、引用して前面の公案を明す。「声光落落として大地に振う」。這箇の些子、転変自在にして、句中に出身の路有らんことを要す。「大丈夫見る也無」。還た見るや、「虎の尾を収め虎の鬚を捋くを」。也た須是らく本分なるべし。任你い虎の尾を収め虎の鬚を捋くも、未だ免れず、一時に鼻孔を穿却たるるを。

一 その人が本来人として生きてゆくための糧。 二 万里の彼方の白雲ほどにかけ離れる。 三「いかにも〜だが」と転じてゆく言い方。なお、「是則是」を「いえども」と解する説もある。 四 百丈懐海(七四九―八一四)。 五 百丈の法嗣、黄檗希運。以下、第二一則・本則の評唱(上冊二九四頁)を参照。 六 潙山霊祐(七七一―八五三)。 七 潙山の法嗣、仰山慧寂(八〇七―八八三)。 八『臨済録』行録(岩波文庫一八四頁)に「非但騎虎頭、亦解把虎尾」と。

第八六則　雲門有光明在

垂示云、把[一]定世界、不漏糸毫。截[二]断衆流、不存涓滴。開口便錯、擬議即差。＊且道、作麼生是透関底眼。試道看。

＊且道〜道看〔一三字〕　福本は「畢竟如何」。

一　第八五則の垂示にも。　二　意識の絶えざる流動を断ち切って微塵もとどめない。

【本則】挙。雲[一]門垂語云、人[二]人尽有光明在。〔黒[三]漆桶。〕看時不見暗昏昏。〔看[四]時瞎。〕作麼生是諸人光明。〔山[五]是山、水是水。漆桶裏洗黒汁。〕自代云、厨[六]庫三門。〔老婆心切。打葛藤作什麼。〕又云、好[七]事不如無。〔自知較一半。猶[八]較些子。〕

第八六則　雲門(うんもん)、光明の在る有り

垂示に云く、世界を把定(おさえこ)んで、糸毫(けすじほど)も漏らさず。衆流を截断(たちき)って、涓滴(ひとしずく)も存(のこ)さず。口を開けば便ち錯(あやま)ち、擬議(おもいまど)えば即ち差(たが)う。且道(さて)、作麼生(いかなる)か是れ透関底眼(みとおせるまなこ)。試みに道(い)い看ん。

【本則】挙(こ)す。雲門、垂語して云く、「人人(にんにん)尽(ことごと)く光明の在る有り。〔黒漆桶(こくしっつう)。〕看る時は見えず暗昏昏(あんこんこん)たり。〔看る時瞎(かっ)す。〕作麼生(いかなる)か是れ諸人(しょにん)の光明」。〔山は是れ山、水は是れ水。漆桶裏(しっつうり)に黒汁(こくじゅう)を洗う。〕自(みずか)ら代って云く、「厨庫(ずく)、三門」。〔老婆心切。葛藤(ごんく)を打(ろう)して什麼(なに)か作(せ)ん。〕又た云く、「好事は無きに如(し)かず」。〔自ら知る較(たが)えたること一半(なかば)なるを。猶お些子(すこし)く較(たが)えり。〕

一 雲門文偃(ぶんえん)(八六四—九四九)。 二『雲門広録』中では、古人のことばとする。 三 まっくろのうるし桶。くらやみ。 四 第六二則・頌の著語に「看著則瞎」と。 五 山は山として、川は川として完結している。 六 七堂伽藍の二つ。厨庫は庫裡(台所)、三門は山門(禅院の正門)。「暗昏昏」どころか、ありありと眼前に存在しているもの。 七 うまい話は無い方がましだ。 八 まあそれでも少しはましだ。

〔評唱〕　雲門室中垂語接人。你等諸人脚跟下、各各有一段光明。輝騰今古、迥絶見知。雖然光明、恰到問著、又不会。豈不是暗昏昏地。二十年垂示、都無人会他意。香林後来請代語。門云、厨庫三門。又云、好事不如無。尋常代語只一句。為什麼、這裏却両句。前頭一句、為你略開一線路、教你見。若是箇漢、聊聞挙著、剔起便行。他怕人滞在此、又云、好事不如無。依前与你掃却。如今人纔聞挙著光明、便去瞠眼云、那裏是厨庫、那裏是三門。且得没交渉。所以道、識

〔評唱〕　雲門、室中に垂語して人を接す。你等諸人(なんじら)の脚跟下(あしもと)に、各各(おのおの)一段(ひとつ)の光明有り。今古に輝騰(かがや)いて、迥(はるか)に見知を絶す。光明なりと雖然(いえど)も、恰(まさ)に問著(と)わるるに到って又た会(え)せず。豈に是れ暗昏昏地なるにあらずや。二十年垂示するに、都(すべ)て人の他(そ)の意を会(え)する無し。香(きょう)林(りん)、後来(のち)に代語を請う。門云く、「厨庫、三門」。又た云く、「好事は無きに如(し)かず」と。尋常の代語は只だ一句のみ。為什麼(なにゆえ)にか這裏(ここ)は却って両句なる。前頭(まえ)の一句は你の為(ため)に略一線(ほぼひとすじ)の路を開いて你をして見しむ。若是(もし)箇(こ)の漢ならば、聊(いささ)か挙著(ことあげ)するを聞くや、剔起(てっき)して便ち行かん。他(かれ)、人の此(ここ)に滞在(とどこお)ることを怕(おそ)れて、又た云く、「好事は無きに如かず」と。依前として你の与(ため)に掃却(はらいの)く。如今(いま)の人光明を挙著するを聞くや纔(いな)や、便

取鉤頭意、莫認定盤星。此事不在眼上、亦不在境上。須是絶知見、忘得失、浄躶躶、赤灑灑、各各当人分上究取始得。

ち去きて瞠眼いて云く、「那裏か是れ厨庫、那裏か是れ三門」と。且得没交渉。所以に道う、「鉤頭の意を識取れ、定盤星に認ること莫れ」と。此の事は眼の上に在らず、亦た境の上にも在らず。須是らく知見を絶し得失を忘じ、浄躶躶、赤灑灑として、各各当人の分上に究取りて始めて得し。

一 香林澄遠(九〇八—九八七)。雲門の法嗣。 二 それとないヒントを与える。 三 問題を提起する。
四 地を蹴って一歩踏み出る。 五 (雲門が垂れた)釣り針の狙いを読み取れ。「定盤星」は秤りの目盛り。
六 提起された問題の眼目。 七 眼に見える現象。

雲門云、日裏来往、日裏辨人。忽然半夜無日月灯光、曾到処則故是、未曾到処、取一件物、還取得麼。参同契云、当明中有暗、勿以暗相覩。当暗中有明、勿以明相遇。若坐断明暗、且道、是箇什麼。所以道、心花発明、照十方刹。盤山云、光非照境、境亦非存。光境倶忘、復是何物。又

雲門云く、「日裏に来往すれば、日裏に人を辨ず。忽然半夜、日月も灯光も無きに、曾て到る処は則ち故是、未だ曾て到らざる処にて一件の物を取らんとして、還た取り得んや」と。『参同契』に云く、「明中に当って暗有り、暗相を以て覩ること勿れ。暗中に当って明有り、明相を以て遇すること勿れ」と。若し明暗を坐断せば、且道、是れ箇の什麼ぞ。所以に道う、「心花発明して、十方刹を照らす」と。盤山云く、「光、境

云、即此見聞、非見聞、無餘声色可呈君。箇中若了全無事、体用何妨分不分。但会取末後一句了、却去前頭游戯、畢竟不在裏頭作活計。古人道、以無住本、立一切法。不得去這裏弄光影、弄精魂。又不得作無事会。古人道、寧可起有見如須弥山、不可起無見如芥子許。二乗人多偏墜此見。雪竇頌云、

を照らすに非ず、境も亦た存するに非ず。光と境と倶に忘ぶ、復た是れ何物ぞ」。又た云く、「即ち此の見聞は見聞に非ず、餘の声色の君に呈すべき無し。箇中若し了せば全く無事、体用何ぞ妨げん分と不分と」と。但だ末後の一句を会取し了り、却に前頭に去いて游戯せよ、畢竟裏頭に在いて活計を作さず。古人道く、「無住の本を以て、一切の法を立つ」と。這裏に去いて光影を弄し精魂を弄すること不得れ。又た無事の会を作すこと不得れ。古人道く、「寧ろ有見を起すこと須弥山の如くなるべきも、無見を起すこと芥子許の如くもすべからず」と。二乗の人多く偏りて此の見に墜つ。雪竇の頌に云く、

一 石頭希遷（七〇〇―七九〇）の著。二 心の花が満開になり、智慧の光が世界を照らす。『円覚経』普覚菩薩章の句。三 盤山宝積。馬祖の法嗣。四 見るもの（光）と見られるもの（境）とがともに無くなったところに残るのは一体なにか。五 三平義忠（七八一―八七二）の頌。『会元』五に見える。六 ぎりぎり決着の一語。七 道そのものを自在に楽しむ。八『維摩経』観衆生品の維摩の語。「無住」は、執著の無い悟りの境地。九 いわくありげにちらつかせ、物の怪に憑かれたように振舞う。一〇 仏法とは修むべきなく証すべきなしとして、平穏無事に収まりかえっていること。一一 龍樹とされる。なお

『摩訶止観』に「寧起我見如須弥山、不悪取空」（岩波文庫上三四六頁）と。 一二 有に拘われた見方。 一三 無に拘われた見方。 一四 声聞乗と縁覚乗。利他の行を忘れた者として、大乗の立場から「小乗」と貶称された。

【頌】 自照列孤明、[一]〔森羅万象。賓主交参。裂転鼻孔。瞎漢作什麼。〕為君通一線。〔何止一線。十日並照。[二]放一線道即得。〕[三]花謝樹無影、〔打葛藤、有什麼了期。向什麼処摸索。*[四]黒漆桶裏盛黒汁。〕看時誰不見。〔瞎。不可総扶籬摸壁。[五]両瞎三瞎。[七]〕見不見、〔両頭倶坐断。[六]瞎。〕[八]倒騎牛兮入仏殿。〔中三門合掌。還我話頭来。打云、向什麼処去也。[九]雪竇也只向鬼窟裏作活計。還会麼。半夜日頭出、日午打三更。〕

*黒漆〜黒汁〔七字〕　福本に無し。

【頌】 自ら照らして孤明を列ね、〔森羅万象。賓主交参わる。鼻孔を裂転る。瞎漢、什麼をか作す。〕君が為に一線を通ず。〔何ぞ止だ一線のみならん。十日並び照らす。一線の道を放つことは即ち得し。〕花謝りて樹に影無し、〔葛藤を打せば什麼の了期か有らん。什麼処にか摸索らん。黒き漆桶の裏に黒き汁を盛る。〕看る時誰にか見えざる。〔瞎。総に扶籬摸壁すべからず。両瞎三瞎。〕見ゆるや見えざるや、〔両頭倶に坐断せよ。瞎。〕倒に牛に騎って仏殿に入るを。〔中三門に合掌す。我に話頭を還し来たれ。打って云く、什麼処に去くや。雪竇も也た只だ鬼窟裏に活計を作す。還た会すや。半夜に日頭出で、日午に三更を打す。〕

一 独自に輝くもの。本智。 二 十個の太陽が照り輝く。あまりにも明明白白で、白白しい。 三 さりげ

ないヒントを与えるだけで宜しい。四 迷妄の上塗りをする。五 外がわの垣や壁を手さぐりするだけ。内なる本体には辿りつけぬ。六 どちらとも押さえ込んでしまえ。七 達人の自由自在ぶり。牛の背のさかさ乗りは無心な牧童のイメージ。『洛陽伽藍記』二に「倒騎水牛」と。八 問題点に立ち返ろう。九 夜中にお天道さまが顔を出し、真昼に深夜の時報が鳴る。

〔評唱〕　自照列孤明、自家脚跟下、本有此一段光明。只是尋常用得暗。所以雲門大師与你羅列此光明、在你面前。且作麼生是諸人光明。厨庫三門、此是雲門列孤明処也。盤山道、[一]心月孤円、光呑万像。這箇便是[二]真常独露。然後与君通一線、亦怕人著在厨庫三門処。厨庫三門則[三]且従却、朝花亦謝、樹亦無影。日又落、月又暗。尽乾坤大地、黒漫漫地。諸人還見麼。看時誰不見、且道、是誰不見。到這裏、当明中有暗、[*]暗中有明、皆如前後歩、自可見。雪竇道、見不見、頌

〔評唱〕「自ら照らして孤明を列ぬ」とは、自家(おのれ)の脚跟(あし)下(もと)に、本(もと)より此の一段の光明有り。只だ是れ尋常用い得て暗し。所以(ゆえ)に雲門大師、你の与(ため)に此の光明を羅列して、你の面前に在(お)く。且(さ)て作麼生(いかなる)か是れ諸人の光明。「厨庫、三門」とは、此れは是れ雲門の孤明を列ねし処なり。盤山道(ばんざんいわ)く、「心月孤(ひと)り円(まど)かにして、光は万像を呑む」と。這箇(これ)便ち是れ真常独露。然る後、君の与(ため)に一線を通ずるは、亦た人の「厨庫、三門」の処に著在(いすわ)るを怕(おそ)るればなり。「厨庫、三門」は則ち且(さ)て従却(お)き、朝花亦た謝(ち)り、樹亦た影無し。日又た落ち、月又た暗し。尽乾坤大地、黒漫漫地。諸人還(は)た見るや。「看る時誰にか見えざる」と、且道(さて)、是れ誰にか見えざる。這裏(ここ)に到って、明中に当って暗有り、暗中に明有り、

好事不如無。合見又不明。倒騎牛兮入仏殿、入黒漆桶裏去也。須是你自騎牛入仏殿、看道[四]＊＊是箇什麼道理。

皆な前後の歩(あゆ)みの如く、自(おの)ずから見るべし。雪竇道く、「見ゆるや見えざるや」とは、「好事は無きに如かず」というを頌す。見える合(べ)くして又た見えず、明なる合(べ)くして又た明ならず。「倒(さかしま)に牛に騎って仏殿に入る」とは、黒漆桶裏に入り去るなり。須是(すべか)らく你自(みずか)ら牛に騎って仏殿に入り、是れ箇(こ)の什麼(いか)なる道理かを看道(み)るべし。

＊暗中有明　福本は「勿以暗相覩、当暗中有明、勿以明相遇、明暗各相対」。＊＊道　福本に無し。

一 満月にも似た我が心はひとり円(まど)かで、その光は森羅万象を呑みつくす。二 永遠の真実のありのままの露呈。三 〜はともかく。四「道」は接尾語。

第八七則　雲門薬病相治

垂示云、明眼漢没窠臼。有時孤峰頂上草漫漫、有時閙市裏頭赤灑灑。忽若忿怒那吒現三頭六臂、忽若日面月面放普摂慈光、於一塵現一切身、為随類人、和泥合水。忽若撥著向上竅、仏眼也覷不著。設使千聖出頭来、也須倒退三千里。還有同得同証者麽。試挙看。

一 収まりかえった生き方。固定した枠組。 二 那吒太子。毘沙門天五太子の一。 三 日面仏と月面仏。第三則・本則を参照。 四 さまざまな人それぞれに適切な対応のできる人。 五 相手が浸っている泥水にまみれていく。 六 九竅のもう一つ上で機能する竅。第三の眼。

【本則】 挙。雲門示衆云、薬病相治。〔一合相不可得。〕尽大地是薬。〔苦瓠連根苦。擺向一辺。〕那箇是自己。

第八七則　雲門、薬病相治す

垂示に云く、明眼の漢に窠臼没し。有る時は孤峰頂上にて草漫漫、有る時は閙市裏頭にて赤灑灑。忽若忿れる那吒とならば、三頭六臂を現し、忽若日面月面とならば、普く摂き慈光を放ち、一塵に一切身を現し、随類の人と為って、泥に和し水に合す。忽若向上の竅を撥著かば、仏眼も也た覷ること著ず。設使千聖出頭し来たるも、也た須らく倒退三千里すべし。還た同得同証の者有りや。試みに挙し看ん。

【本則】 挙す。雲門、衆に示して云く、「薬病相治す。〔一合相にして得べからず。〕尽大地是れ薬。〔苦瓠は根に連るまで苦し。一辺に擺向け。〕那箇か是れ自己」。

〔甜瓜徹蔕甜。那裏得這消息来。〕[六]

〔甜瓜(あまうり)は蔕(へた)に徹(いた)るまで甜(あま)し。那裏(いずこ)よりか這(こ)の消息を得来たる。〕

一 雲門文偃(ぶんえん)(八六四―九四九)。二 薬は病のためのものであり、病は薬を必要とする。仏法を薬に喩える。『臨済録』示衆(岩波文庫五七頁)にも。三 第八三則・本則の著語に既出。四 にがうりは根までにがい。五 そっちの方へ片付けてしまえ。六 あまうりは蔕(へた)まであまい。

〔評唱〕　雲門道、薬病相治、尽大地是薬、那箇是自己。諸人還有出身処[一]麼。二六時中、管取壁立千仞。徳山棒如雨点、臨済喝似雷奔則且致、釈迦自釈迦、弥勒自弥勒。未知落処者、往往喚作薬病相投会去。[二]世尊四十九年、三百餘会、応機説教、皆是応病与薬。如将蜜果換苦葫蘆相似。既淘汝諸人業根、[三]令灑灑落落。尽大地是薬、你向什麼処挿觜。若挿得觜、許你有転身吐気処、便親見雲門。你若回顧躊躇、管取挿觜不得。雲門在你

〔評唱〕　雲門道(いわ)く、「薬病相治す、尽大地是れ薬、那箇か是れ自己」と。諸人還(は)た出身の処有りや。二六時中、壁立(へきりゅう)千仞なること管取(うけあい)なり。徳山(とくさん)の棒の雨点の如く、臨済(りんざい)の喝の雷奔の似(ごと)きは則ち且(しばら)く致(お)くも、釈迦は自(おの)ずから釈迦、弥勒は自ずから弥勒なり。未だ落処(かんどころ)を知らざる者は、往往(しばしば)「薬病相投ず」と喚び作(な)して会(え)し去る。世尊四十九年、三百餘会(え)、機に応じて教を説くは、皆な是れ病に応じて薬を与う。蜜(あま)き果(くだもの)を将(もっ)て苦(にが)き葫蘆(ひょうたん)と換(とりか)うるが如くに相似たり。既に汝諸人の業根(ごうこん)を淘(あらいなが)して、灑灑落落(きれいさっぱり)ならしむ。「尽大地是れ薬」、你什麼処(いずこ)にか觜(くちばし)を挿(さしはさ)まん。若し觜を挿み得ば、你は身を転じ気を吐く処有りて、便ち親しく雲門に見(まみ)えたりと許(みと)めん。

脚跟底。薬病相治、也只是尋常語論。你若著有、与你説無、你若著無、与你説有。你若著不有不無、与你去[四]糞掃堆上、現丈六金身、頭出頭没。只如今尽大地、森羅万象、乃至自己、一時是薬。当恁麼時、却喚那箇是自己。你一向喚作薬、[五]弥勒仏下生、也未夢見雲門在。畢竟如何。識取鉤頭意、莫認定盤星。

你若し回顧躊躇せば、觜を挿み得ざることを管取わん。雲門は你の脚跟底に在り。「薬病相治す」とは、也た只だ是れ尋常の語論。你若し有に著すれば、你の与に無と説い、你若し無に著すれば、你の与に有と説い、你若し不有不無に著すれば、你の与に糞掃堆上に丈六の金身を現じて、頭出頭没せん。只だ如今尽大地、森羅万象、乃至自己、一時に是れ薬。恁麼る時に当たって、却って那箇を喚んでか自己と是さん。你一向に喚んで薬と作さば、弥勒仏下生にも、也た未だ夢にも雲門を見ざる在。畢竟如何。鉤頭の意を識取れ、定盤星に認るること莫れ。

一 超脱した在り方。二 ブッダの一生涯における説法の数。第一四則・本則の評唱などでは「三百六十会」。三 悪業の根源。四 第三九則・本則の著語に「塩圾堆頭、見丈六金身」と。五 弥勒仏がこの世に現れるまで。永遠に。

[一]文殊、一日令[二]善財去採薬云、不是薬者採将来。善財偏採、無不是薬。却来白云、無不是薬者。文殊云、是

文殊、一日、善財をして去きて薬を採らしめて云く、「是れ薬ならざる者を採り将ち来たれ」と。善財偏く採るに、是れ薬ならざる無し。却り来たりて白して云

薬者採将来。善財乃拈一枝草、度与文殊。文殊提起示衆云、此薬亦能殺人、亦能活人。此薬病相治話、最難看。雲門室中、尋常用接人。[三]金鵝長老、一日訪雪竇。他是箇作家、乃[四]臨済下尊宿。与雪竇論此薬病相治話。*一夜至天光、方能尽善。到這裏、学解思量計較、総使不著。雪竇後有頌[五]、送他道、薬病相治見最難、万重関鎖[六]太無端。金鵝道者来相訪、学海波瀾一夜乾。雪竇後面頌得最有工夫。他意亦在賓、亦在主、自可見也。頌云、

く、「是れ薬ならざる者無し」。文殊云く、「是れ薬なる者を採り将ち来たれ」と。善財乃ち一枝の草を拈みて、文殊に度与す。文殊、提起して衆に示して云く、「此の薬亦た能く人を殺し、亦た能く人を活す」と。此の「薬病相治す」の話、最も看難し。雲門室中に尋常用いて人を接す。金鵝長老、一日、雪竇を訪う。他は是れ箇の作家、乃ち臨済下の尊宿なり。雪竇と此の「薬病相治す」の話を論ず。一夜、天の光るに至り、方めて能く善を尽す。這裏に到って、学解も思量も計較も総て使不著。雪竇、後に頌有り、他に送って道わく、「薬病相治すは見ること最も難し、万重の関鎖太だ端無し。金鵝道者来たりて相訪い、学海の波瀾一夜に乾く」と。雪竇後面に頌し得て最も工夫有り。他の意は亦た賓にも在り亦た主にも在ること、自ずから見るべし。頌に云く、

*一夜至天光　福本は「二人一夜到暁」。

一 文殊菩薩。二 善財童子。『華厳経』入法界品の主人公。三 開先善暹。四 実は雲門下。五『祖英

集』下に見える。ただし、「万重」を「百重」とする。六 手のつけようがない。

【頌】尽大地是薬、〔教誰辨的。[一]撒[二]沙撒土。[三]架高処著。〕古今何太錯。〔言中有響。[四]一筆勾下。咄。〕閉門不造車、[五]〔大小雪竇、為衆竭力、禍出私門。[*六]坦蕩不掛一糸毫。阿誰有閑工夫。向鬼窟裏作活計。〕[七]通途自寥廓。〔脚下便入草、上馬見路。信手拈来、不妨奇特。〕[八]錯錯。〔[九]双剣倚空飛。[一〇]一箭落双鵰。〕[一一]鼻孔遼天亦穿却。〔頭落也。打云、穿却了也。〕

【頌】尽大地是れ薬、〔誰をしてか的を辨ぜしめん。沙を撒き土を撒く。高き処に架著せよ。〕古今何ぞ太だ錯る。〔言中に響有り。一筆に勾下す。咄。〕門を閉じて車を造らず、〔大小の雪竇、衆の為に力を竭すも、禍は私門より出づ。坦蕩として一糸毫も掛からず。阿誰か閑工夫有らん。鬼窟裏に向いて活計を作す。〕通途自ずから寥廓たり。〔脚下は便ち草に入り、馬に上って路を見る。手に信せて拈り来たり、不妨に奇特なり。〕錯、錯。〔双剣、空に倚りて飛ぶ。一箭もて双鵰を落とす。〕鼻孔遼天たるも亦た穿却たれたり。〔頭落ちたり。打って云く、穿却ち了せり。〕

*坦蕩　福本は「坦蕩蕩地」。

一 核心を見抜く。第一則・頌に既出。二 既定の価値観の否定。三 高い所に放り上げておけ。四 サッと一筆に線を引いて抹消した。五 〜ともあろうものが。六 広びろとして毛筋ほども引っかかるものが無い。七 大通りはもともと広びろとしている。「通途」は天下の大道。八 おっと間違った。こ

んな割り切った提言は危ない。自分の言葉に待ったをかける。九「錯錯」という一対の名剣が空を飛ぶ。一〇 一本の矢で二羽のワシを射おとした。一一 鼻高だかの鼻づらにも綱が通されてしまった。

〔評唱〕尽大地是薬、古今何太錯、你若喚作薬会、自古自今、一時錯了也。雪竇云、有般漢不解截断大梅脚跟、只管道、貪程太速。他解截雲門脚跟。為雲門這一句、惑乱天下人。雲門云、拄杖子是浪、許你七縦八横。尽大地是浪、看你頭出頭没。

〔評唱〕「尽大地是れ薬、古今何ぞ太だ錯れる」と、你若し薬と喚び作して会すれば、自古自今、一時に錯り了れり。雪竇云く、「有般漢、大梅の脚跟を截断する解わずして、只管に道う、『程を貪ぐこと太だ速し』と」と。他は雲門の脚跟を截つことを解す。雲門の這の一句、天下の人を惑乱するが為なり。雲門云く、「拄杖子是れ浪ならば、你に許む七縦八横なるを。尽大地是れ浪ならば、看よ你の頭出頭没するを。

一『禅林類聚』一三に見える。大梅の臨終の時の話。二 大梅法常（七五二―八三九）。「截断脚跟」は急所を押さえこむこと。三 ずいぶんと死に急いだものだ。四 以下、雲門の語ではなく、雲門の垂示に対する雪竇の拈語による。『雪竇語録』二に「若拄杖子是浪、衲僧七縦八横。忽乾坤大地是浪、便見扶籬摸壁。且道、放行好、把定好」と。五 縦横無尽、天下無敵の暴れかた。

閉門不造車、通途自寥廓、雪竇道、為你通一線路。你若閉門造車、出門

「門を閉じて車を造らず、通途自ずから寥廓たり」とは、雪竇道く、「你の為に一線の路を通ず。你若し

合轍、済箇甚事。我這裏閉門、也不造車、出門自然寥廓。他這裏略露些子縫罅、教人見。又連忙却道、錯錯。前頭也錯、後頭也錯。誰知雪竇開一線路、也是錯。既然鼻孔遼天、為什麼也穿却。要会麼。且参三十年。[一]你有拄杖子、我与你拄杖子。你若無拄杖子、不免被人穿却鼻孔。

門を閉じて車を造り、門を出でて轍に合わば、箇の甚事をか済さん。我が這裏は、門を閉じて也た車も造らず、門を出づれば自然に寥廓たり」と。他、這裏に略ぼ些子の縫罅を露して人をして見しむ。又た連忙て却って道う、「錯、錯」と。前頭も也た錯、後頭も也た錯。誰か知る、雪竇一線の路を開くも、也た是れ錯なることを。既然に鼻孔遼天なるに、為什麼にか也た穿却たる。会せんと要すや。且は参ぜよ三十年。你に拄杖子有らば、我は你に拄杖子を与えん。你若し拄杖子無くんば、人に鼻孔を穿却たるるを免れじ。

一　芭蕉慧清の語に「你有拄杖子、我与你拄杖子。你無拄杖子、我奪你拄杖子」と。『無門関』四四・芭蕉拄杖（岩波文庫一六七頁）を参照。

第八八則　玄沙接物利生

垂示云、門庭施設[一]、且恁麼破二作三。[二]入理深談[三]、也須是七穿八穴。当機敲点[四]、撃砕金鎖玄関[五]。拠令而行、直得掃蹤滅跡。且道、誵訛在什麼処。具頂門眼者、請試挙看。

一 初心向けの手だて。方便。二 きまった型を打ちくだく。既存の図式をばらばらにほぐす。三 理法に分け入った深奥な談義。四 相手の核心をついて指摘する。五 黄金の錠前と奥深いところにあるかんぬき。

【本則】挙。玄沙[一]示衆云、諸方老宿[二]尽道、接物利生[三]。〔随分開箇鋪席。随家豊倹。〕忽遇三種病人来、作麼生接。〔打草只要蛇驚[四]。山僧直得目瞪口呿[五]。管取倒退三千里。〕患盲者、拈[六]鎚竪払、他又不見。〔端的瞎。是

第八八則　玄沙の接物利生

垂示に云く、門庭の施設は、且は恁麼に二を破して三と作す。入理の深談は、也た須是らく七穿八穴すべし。当機敲点して、金鎖玄関を撃砕く。令に拠って行い、直得に蹤を掃い跡を滅す。且道、誵訛什麼処にか在る。頂門の眼を具する者、請う試みに挙し看よ。

【本則】挙す。玄沙、衆に示して云く、「諸方の老宿は尽く道う、『接物利生』と。〔分に随って箇の鋪席を開く。家の豊倹に随う。〕忽し三種の病人の来たるに遇わば、作麼生か接せん。〔草を打つは只だ蛇の驚かんことを要む。山僧、直得に目瞪り口呿く。管取や倒退三千里せん。〕盲を患う者は、鎚を拈り払を竪つる

則接物利生。未必不見*在。〕患聾者、[七]語言三昧、他又不聞。〔端的聾。是則接物利生。未必聾在。是那箇未聞在。〕患啞者、教伊説、又説不得。〔端的啞。是則接物利生。未必啞在。是那箇未説在。〕且作麼生接。若接此人不得、仏法無霊験。〔誠哉是言。山僧拱手帰降。已接了也。便打。〕

僧請益[へ]雲門[九]。〔也要諸方共知。**著。〕雲門云、汝礼拝著[十]。〔風行草偃。咄。〕僧礼拝起。〔這僧拗折拄杖子也。〕雲門以拄杖挃[十一]。僧退後。門云、汝不是患盲。〔端的瞎。莫道這僧患盲好。〕復喚、近前来。僧近前。〔第二杓悪水澆。観音来也。当時好与一

も、他又た見えず。〔端的瞎す。是れ則ち接物利生。未だ必ずしも見ざるにあらざる在。〕聾を患う者は、語言三昧するも、他又た聞こえず。〔端的聾す。是れ則ち接物利生。未だ必ずしも聾せざる在。是れ那箇か未だ聞かざる在。〕啞を患う者は伊をして説わしむるも、又た説い得ず。〔端的啞す。是れ則ち接物利生。未だ必ずしも啞せざる在。是れ那箇か未だ説わざる在。〕且て作麼生か接せん。若し此の人を接し得ずんば、仏法は霊験無し」と。〔誠なるかな是の言。山僧は手を拱いて帰降せん。已に接し了れり。便ち打つ。〕

僧、雲門に請益す。〔也た諸方共に知らんことを要す。著。〕雲門云く、「汝礼拝著」。〔風行けば草偃す。咄。〕僧、礼拝して起つ。〔這の僧、拄杖子を拗折れり。〕雲門、拄杖を以て挃く。僧、退後る。門云く、「汝は是れ盲を患わず」。〔端的瞎す。「這の僧、盲を患う」と道うこと莫くんば好し。〕復た喚ぶ、「近前み来たれ」。僧、近前づ。〔第二杓の悪水澆ぐ。観音来た

喝。〕門云、汝不是患聾。〔端的聾。莫道這僧患聾好。〕門乃云、還会麽。＊＊＊〔何不与本分草料。当時好莫作声。〕僧云、不会。〔両重公案。蒼天蒼天。〕門云、汝不是患唖。〔端的唖。[12]口吧吧地。莫道這僧[13]唖好。〕僧於此有省。〔賊過後張弓。討什麽碗。〕

れり。当時に好し一喝を与うるに。〕門云く、「汝は是れ聾を患わず」。〔端的聾す。「這の僧、聾を患う」と道うこと莫くんば好し。〕門、乃ち云く、「還た会すや」。〔何ぞ本分の草料を与えざる。当時好し声を作すこと莫きに。〕僧云く、「会せず」。〔両重の公案。蒼天、蒼天。〕門云く、「汝は是れ唖を患わず」。〔端的唖す。口吧吧地。「這の僧唖なり」と道うこと莫くんば好し。〕僧此に於て省る有り。〔賊過ぎし後に弓を張る。什麽なる碗を討むるや。〕

＊不見　福本は「盲」。＊＊著　福本に無し。＊＊＊何不～作声（一三字）　福本では「僧云不会」の下、「両重公案」の上に在り。

一 玄沙師備（八三五―九〇八）。二 年長で徳望の高い僧。長老、尊宿。三 衆生済度。対機説法の意。四 草を打つのは蛇を驚かすためだ。五 目はぱちくり口はあんぐり。度肝を抜かれたさま。六 説法の手段。鎚は、打って大衆に知らせるための法具。七 修辞の妙を尽くした見事な説法。八 個人指導をうけること。九 雲門文偃（八六四―九四九）。一〇「著」は命令を表す。一一 どんと突く。一二 ぺちゃくちゃ。一三 第七六則・本則の著語に既出。

〔評唱〕玄沙参到絶情塵意想、浄躶

【評唱】玄沙、参じて情塵意想を絶し、浄躶躶赤灑灑

躶赤灑灑地処、方解恁麼道。是時諸方列刹相望。尋常示衆道、諸方老宿尽道、接物利生。忽遇三種病人来時、作麼生接。患盲者、拈鎚竪払、他又不見。患聾者、語言三昧、他又不聞。患唖者、教他説、又説不得。且作麼生接。若接此人不得、仏法無霊験。如今人若作盲聾瘖唖会、卒摸索不著。所以道、莫向句中死却。須是会佗玄沙意始得。

地の処に到って、方めて解く恁麼に道う。是の時諸方、列刹相望む。尋常、衆に示して道く、「諸方の老宿は尽く道う、『接物利生』と。忽し三種の病人の来たるに遇わん時、作麼生か接せん。盲を患う者は、鎚を拈り払を竪つるも、他又た見えず。聾を患う者は、語言三昧するも、他又た聞こえず。唖を患う者は、他をして説わしむるも、又た説い得ず。且て作麼生か接せん。若し此の人を接し得ざれば、仏法には霊験無し」と。如今の人若し盲聾瘖唖の会を作さば、卒に摸索不著らん。所以に道う、「句中に死却すること莫れ」と。須是らく佗の玄沙の意を会して始めて得し。

一 禅林の盛況をいう。　二 病で声の出せない人。　三 ことばに拘われて、自己を失ってはいけない。

玄沙常以此語接人。有僧久在玄沙処。一日上堂。僧問、和尚云、三種病人話、還許学人説道理也無。玄沙云、許。僧便珍重下去。沙云、不是

玄沙は常に此の語を以て人を接す。僧有り、久しく玄沙の処に在り。一日、上堂す。僧問う、「和尚の云う三種病人の話、還た学人に道理を説くことを許さん也無」。玄沙云く、「許さん」。僧、便ち珍重して下が

不是。這僧会得他玄沙意。後来法眼[2]云、我聞地蔵[3]和尚挙這僧語、方会三種病人話。若道這僧不会、法眼為什麼却恁麼道。若道他会、玄沙為什麼却道、不是不是。一日地蔵道、某甲聞、和尚有三種病人話、是否。沙云、是。蔵云、桂琛現有眼耳鼻舌、和尚作麼生接。玄沙便休去。若会得玄沙意、豈在言句上。他会底自然殊別。

り去る。沙云く、「是ならず、是ならず」と。這の僧、他の玄沙の意を会得す。後来に法眼云く、「我、地蔵和尚の這の僧の語を挙ぐるを聞いて、方めて三種病人の話を会す」と。若し這の僧「会せず」と道わば、法眼は為什麼にか却って恁麼に道う。若し他「会す」と道わば、玄沙は為什麼にか却って「是ならず、是ならず」と道う。一日、地蔵道く、「某甲聞く、和尚に三種病人の話有りと、是なり否」。沙云く、「是なり」。蔵云く、「桂琛には現に眼耳鼻舌有り、和尚作麼生か接せん」と。玄沙、便ち休め去る。若し玄沙の意を会得せば、豈に言句の上に在らんや。他の会する底は自然に殊別なり。

一　別れの挨拶。　二　法眼文益（八八五—九五八）。地蔵の法嗣。　三　地蔵桂琛（八六七—九二八）。羅漢桂琛ともいう。玄沙の法嗣。

後有僧挙似雲門。門便会他意云、汝礼拝著。僧礼拝起。門以拄杖挃。這僧退後。門云、汝不是患盲。復喚、

後に僧有り、雲門に挙似す。門、便ち他の意を会して云く、「汝礼拝著」。僧、礼拝して起つ。門、拄杖を以て挃く。這の僧退後る。門云く、「汝は是れ盲を患

近前来。僧近前。門云、汝不是患聾。乃云、会麼。僧云、不会。門云、汝不是患啞。其僧於此有省。当時若是箇漢、等他道礼拝著、便与掀倒禅床。豈見有許多葛藤。且道、雲門与玄沙、会処是同是別。佗両人会処、都只一般。看佗古人出来、作千万種方便。意在鉤頭上、多少苦口。只令諸人各各明此一段事。

わず」と。復た喚ぶ、「近前み来たれ」。僧近前ず。門云く、「汝は是れ聾を患うにあらず」。乃ち云く、「会すや」。僧云く、「会せず」。門云く、「汝は是れ啞を患うにあらず」と。其の僧此に於て省る有り。当時若是箇の漢ならば、他の「礼拝著」と道うを等って、便ち与に禅床を掀倒さん。豈に許多の葛藤有るを見んや。且道、雲門と玄沙と、会する処是れ同じか是れ別か。佗の両人の会する処都て只だ一般なり。看よ佗の古人出で来たりて、千万種の方便を作すことを。意は鉤頭の上に在るに、多少と苦口し。只だ諸人をして各各此の一段の事を明らめしめんとするなり。

一 第八六則・本則の評唱に「識取鉤頭意、莫認定盤星」と。 二 口が酸っぱくなるまで言う。

五祖老師云、一人説得却不会、一人却会説不得。二人若来参、如何辨得他。若辨這両人不得、管取為人解粘去縛不得在。若辨得、纔見入門、

五祖老師云く、「一人は説い得るも却って会せず、一人は却って会すも説い得ず。二人若し来参せば、如何か他を辨得せん。若し這の両人を辨じ得ずんば、管取や人の為に粘を解き縛を去り得ざる在。若し辨得せば、

我便著草鞋、向你肚裏走幾遭了也。猶自不省、討什麼碗出去。且莫作盲聾瘖啞会好。*三若恁麼計較。所以道、四眼見色如盲等、耳聞声如聾等。又道、五満眼不視色、満耳不聞声。文殊常触目、観音塞耳根。到這裏、眼見如盲相似、耳聞如聾相似、方能与玄沙意六不争多。諸人還識盲聾瘖啞底漢子落処麼。看取雪竇頌。云、

門に入るを見るや纔や、我便ち草鞋を著けて、你の肚の裏を走くこと幾遭も了らん。猶自省らずんば、什麼なる碗をか討め出で去らん」と。且は盲聾瘖唖の会を作すこと莫くんば好し。所以に道う、「眼は色を見るも盲の如くに等しく、耳は声を聞くも聾の如くに等し」と。又た道く、「満眼に色を視ず、満耳に声を聞かず。文殊は常に目に触れ、観音は耳根に塞る」と。這裏に到って、眼に見るも盲の如くに相似、耳に聞くも聾の如くに相似たらば、方めて能く玄沙の意と多きを争わず。諸人還た盲聾瘖唖底漢子の落処を識るや。雪竇の頌を看取せよ。云く、

＊好若恁麼計較　福本に無し。『種電鈔』は「若恁麼計較」を削除する。これに従うべきである。

一 五祖法演(?—一一〇四)。二 束縛から解放して、自由にしてやれない。三 この句は文意が次句へ続かないので、削除すべきである。四『維摩経』弟子品に「所見色与盲等、所聞声与響等」と。五 長沙景岑の偈に「満眼本非色、満耳本非声、〜」(『伝灯録』一〇)と。六 ほとんど違わない。「不較多」とも。

【頌】盲聾瘖瘂、〔已在言前。三竅俱明。已做一段了也。〕杳絶機宜。〔向什麼処摸索。還做計較得麼。有什麼交渉。〕天上天下、〔正理自由。我也恁麼。〕堪笑堪悲。〔笑箇什麼、悲箇什麼。半明半暗。〕離婁不辨正色、〔瞎漢。巧匠不留蹤。端的瞎。〕師曠豈識玄糸。〔聾漢。大功不立賞。端的聾。〕争如独坐虚窓下、〔須是恁麼始得。莫向鬼窟裏作活計。一時打破漆桶。〕葉落花開自有時。〔即今什麼時節。切不得作無事会。今日也従朝至暮、明日也従朝至暮。〕復云、還会也無、〔重説偈言。〕無孔鉄鎚。〔自領出去。可惜放過。便打。〕

【頌】盲聾瘖瘂、〔已に言前に在り。三竅俱に明らかなり。已に一段に做し了れり。〕杳として機宜を絶す。〔什麼処に向いてか摸索せん。還た計較を做して得しきや。什麼の交渉か有らん。〕天上天下、〔正理自由。我も也た恁麼。〕笑う堪し、悲しむ堪し。〔箇の什麼をか笑い、箇の什麼をか悲しまん。半は明るく半は暗し。〕離婁は正色を辨ぜず、〔瞎漢。巧匠は蹤を留めず。端的しく瞎す。〕師曠は豈に玄糸を識らんや。〔聾漢。大功は賞を立てず。端的しく聾す。〕争か如かん虚窓の下に独坐し、〔須是らく恁麼にして始めて得し。鬼窟裏に向いて活計を作すこと莫れ。一時に漆桶を打破す。〕葉落ち花開いて自ずから時有るに。〔即今は什麼なる時節ぞ。切に無事の会を作すこと不得れ。今日も也た朝より暮に至り、明日も也た朝より暮に至る。〕復た云く、「還た会す也無、〔重ねて偈を説いて言う。〕無孔の鉄鎚」。〔自ら領して出で去れ。可惜、放過せり。便ち打つ。〕

一 眼も耳も口も達者。二 対応する手だてが断たれている。三 理法の世界は自由自在。四 視力のすぐれた伝説上の人物。五 事物の真の姿。六 名工は細工のあとを残さない。七 聴力のすぐれた古代の宮廷音楽家。八 本来の音、真実のしらべ。九 あまりに偉大な功績には褒賞のしようがない。一〇 音も色も形もない世界。一一 迷蒙を打ち破って新境地へ打って出る。一二 頌の調子が美文化したのを自ら戒める。一三 手のつけようもない、頑強なしろもの。われわれの前に突きつけられたのはこれだぞ、という意。第一四則・頌に既出。

【評唱】盲聾瘖唖、杳絶機宜、尽你見与不見、聞与不聞、説与不説、雪竇一時与你掃却了也。直得盲聾瘖唖見解、機宜計較、一時杳絶、総用不著。這箇向上事、可謂真盲真聾真唖、無機無宜。天上天下、堪笑堪悲、雪竇一手擡、一手搦。且道、笑箇什麼、悲箇什麼。堪笑、是唖却不唖、是聾却不聾。堪悲、明明不盲却盲、明明不聾却聾。離婁不辨正色、不能辨青黄赤白。正是瞎。離婁、黄帝時人、

【評唱】「盲聾瘖唖、杳として機宜を絶す」と、你の見と不見と、聞と不聞と、説と不説とを尽して、雪竇一時に你の与に掃却け了れり。直得に盲聾瘖唖の見解、機宜計較、一時に杳として絶し、総て用に著たず。這箇の向上の事は、「真盲、真聾、真唖には、機無く宜無し」と謂うべし。「天上天下、笑う堪し悲しむ堪し」とは、雪竇、一手には擡げ、一手には搦うるなり。且道、箇の什麼をか笑い、箇の什麼をか悲しむ。「笑う堪し」とは、是れ唖却って唖ならず、是れ聾却って聾ならず。「悲しむ堪し」とは、明明に盲ならざるもの却って盲にして、明明に聾ならざるもの却って聾な

百歩外能見秋毫之末。其目甚明。[二]黄帝游於赤水沈[三]珠、令離朱尋之不見、令[四]契詬尋之亦不得、後令[五]象罔尋之方獲之。故云、[六]象罔到時光燦爛、離婁行処浪滔天。這箇高処一著、直是離婁之目、亦辨他正色不得。師曠豈識玄糸、周時[七]絳州晋景公之子、師曠字子野。〈一云、晋平公之楽太師也。〉善別[八]五音六律、隔山聞蟻闘。[九]時晋与楚争覇。師曠唯鼓琴、撥動風絃、知戦楚必無功。雖然如是、雪竇道、他尚未識玄糸在。不聾却是聾底人。這箇高処玄音、直是師曠亦識不得。

ればなり。「離婁は正色を辨ぜず」とは、青黄赤白を辨ずる能わず。正に是れ瞎。離婁は黄帝の時の人、百歩の外より能く秋毫の末を見る。其の目甚だ明らかなり。黄帝、赤水に游んで珠を沈め、離朱をして之を尋ねしむるに見つからず、契詬をして之を尋ねしむるに亦た得られず、後に象罔をして之を尋ねしめて方めて之を獲たり。故に云く、「象罔到る時は光燦爛、離婁行く処に浪滔天」と。這箇の高処の一著、直是い離婁の目なるも、亦た他の正色を辨じ得ず。「師曠豈に玄糸を識らんや」とは、周の時絳州晋の景公の子、師曠字は子野なり。〈一に云く、「晋の平公の楽太師なり」と。〉善く五音六律を別ち、山を隔てて蟻の闘うを聞く。時に晋、楚と覇を争う。師曠唯だ琴を鼓し、風絃を撥動いて、戦は楚の必ず功無しと知る。是の如くなりと雖然も、雪竇道く、「他は尚お未だ玄糸を識らざる在」と。聾せざる却って是れ聾底人なり。這箇の高処の玄音は、直是い師曠なるも亦た識り得ず。

一 古代伝説上の帝王。**二**『荘子』天地に見える。**三**『荘子』では「玄珠」で、道の比喩。**四** 口やかましさを擬人化したもの。**五** 無形を擬人化したもの。**六** 風穴延沼(八九六―九七三)の語。汾陽十八問の借事問「大海有珠、如何取得」の答(『人天眼目』二参照)。**七** 春秋戦国時代の侯国、晋(前一一〇六―前三七六)。献公の時、都を絳(今の山西省侯馬市)に移し、絳州晋と呼ばれた。**八** 音階の体系。**九**『左伝』襄公十八年に「晋人聞有楚師、師曠曰『不害。吾驟歌北風、又歌南風、南風不競、多死声。楚必無功』」と。

雪竇道、我亦不作離婁、亦不作師曠。争如独坐虚窓下、葉落花開自有時。若到此境界、雖然見似不見、聞似不聞、説似不説、飢即喫飯、困即打眠。任佗葉落花開、葉落時是秋、花開時是春、各各自有時節。雪竇与你一時掃蕩了也。又放一線道云、還会也無。雪竇力尽神疲、只道得箇無孔鉄鎚。這一句急著眼看方見。若擬議又蹉過。師挙払子云、還見麼。遂敲禅床一下云、還聞麼。下禅床云、

雪竇道く、「我亦た離婁と作らず、亦た師曠と作らず。争か如かん虚窓の下に独坐し、葉落ち花開いて自ずから時有るに」と。若し此の境界に到らば、見て見ざるが似く、聞いて聞かざるが似く、説いて説わざるが似しと雖然も、飢うれば即ち飯を喫い、困るれば即ち打眠る。任佗い葉落ち花開くも、葉落つる時は是れ秋、花開く時は是れ春、各各自ずから時節有り。雪竇は你の与に一時に掃蕩し了れり。又た一線の道を放って云く、「還た会す也無」と。雪竇、力尽き神疲れて、只だ箇の「無孔の鉄鎚」と道い得たるのみ。這の一句は急と眼を著けて看て方めて見えん。若し擬議かば又

還説得麼。

一圓悟。

た蹉過わん。師、払子を挙げて云く、「還た見るや」。遂に禅床を敲くこと一下して云く、「還た聞くや」。禅床を下りて云く、「還た説い得たるや」と。

第八九則　雲巌問道吾手眼

垂示云、通身是眼見不到、通身是耳聞不及、通身是口説不著、通身是心鑑不出。通身即且止、忽若無眼作麼生見、無耳作麼生聞、無口作麼生説、無心作麼生鑑。若向箇裏撥転得一線道、便与古仏同参。参則且止、且道、参箇什麼人。

【本則】挙。雲巌問道吾、大悲菩薩、用許多手眼作什麼。〔当時好与本分草料。你尋常走上走下作什麼。闍黎問作什麼。〕吾云、如人夜半背手摸枕子。〔何不用本分草料。一盲引衆

第八九則　雲巌、道吾に手眼を問う

垂示に云く、通身是れ眼なるも見到らず、通身是れ耳なるも聞き及ばず、通身是れ口なるも説い著せず、通身是れ心なるも鑑み出せず。通身は即ち且て止き、忽若眼無くんば作麼生か見ん、耳無くんば作麼生か聞かん、口無くんば作麼生か説わん、心無くんば作麼生か鑑みん。若し箇裏に向いて一線の道を撥転き得ば、便ち古仏と同参なり。参は則ち且く止く、且道、箇の什麼なる人にか参ぜん。

【本則】挙す。雲巌、道吾に問う、「大悲菩薩は許多の手眼を用いて、什麼をか作す」。〔当時に好し本分の草料を与うるに。你は尋常走上走下って什麼をか作す。闍黎、問うて什麼をか作す。〕吾云く、「人の夜半に背手して枕子を摸るが如し」。〔何ぞ本分の草料を用い

盲。〕巌云、我会也。〔将錯就錯。賺殺一船人。同坑無異土。未免傷鋒犯手。〕吾云、汝作麼生会。〔何労更問。也要問過。好与一拶。〕巌云、[五]偏身是手眼。〔有什麼交渉。鬼窟裏作活計。泥裏洗土塊。〕吾云、道即太煞道、只道得八成。〔同坑無異土。[六]奴見婢慇懃。[七]癩児牽伴。〕巌云、[八]師兄作麼生。〔取人処分争得＊。也好与一拶。〕吾云、通身是手眼。〔鰕跳不出斗。換却你眼睛、移却舌頭、還得十成也未。[九]喚爹作爺。〕

ざる。一盲、衆盲を引く。〕巌云く、「我会せり」。〔錯を将て錯を就す。一船の人を賺殺す。同坑に異土無し。未だ免れず、鋒に傷つき手を犯すことを。〕吾云く、「汝作麼生か会す」。〔何ぞ更に問うことを労せん。也た問過ることを要す。好し一拶を与うるに。〕巌云く、「偏身是れ手眼なり」。〔什麼の交渉か有らん。鬼窟裏に活計を作す。泥裏に土塊を洗う。〕吾云く、「道うことは即ち太煞だ道うも、只だ八成を道い得たるのみ」。〔同坑に異土無し。奴は婢を見て慇懃。癩児伴を牽く。〕巌云く、「師兄は作麼生」。〔人の処分に取わば争か得からん。也た好し一拶を与うるに。〕吾云く、「通身是れ手眼」なり。〔鰕は斗を跳び出でず。你の眼睛を換却え、舌頭を移却うるも、還た十成なるを得る也未。爹を喚んで爺と作す。〕

＊争得　福本は「又争得」。

一 雲巌曇晟（七八二―八四一）。二 道吾円智（七六九―八三五）。三 千手観音（千手千眼観音、大悲観音）のこと。四「摸著（さぐり当てる）」の意に解する。『祖堂集』では「把著（ぴたりとつかむ）」。五

身体一面。「通身」は身体まるごと。六 下男は下女と睦まじい。同じ穴のむじな。七 同病相あわれむ。八 あに弟子に対する呼びかけの語。九「おやじ」のことを「とっつぁん」とよぶ。ただ言い替えただけ。

〔評唱〕　雲巌与道吾、同参薬山。四十年脇不著席。薬山出曹洞一宗、有三人法道盛行。雲巌下洞山、道吾下石霜、船子下夾山。大悲菩薩有八万四千母陀羅臂。大悲有許多手眼、諸人還有也無。百丈云、一切語言文字、倶皆宛転帰于自己。

〔評唱〕　雲巌と道吾と同に薬山に参ず。四十年、脇を席に著けず。薬山は曹洞の一宗を出だし、三人有りて法道盛んに行わる。雲巌下の洞山、道吾下の石霜、船子下の夾山なり。大悲菩薩に八万四千の母陀羅臂有り。大悲には許多の手眼有り、諸人には還た有り也無。百丈云く、「一切の語言文字、倶に皆な宛転して自己に帰す」と。

一 薬山惟儼(七四五—八二八、あるいは、七五一—八三四)。二 横にならない。寝ない。三 洞山良价(八〇七—八六九)。四 石霜慶諸(八〇七—八八八)。五 船子徳誠。六 夾山善会(八〇五—八八一)。七 印相を結んだ手。八 百丈懐海(七四九—八一四)。『伝灯録』六に「読経看教、語言皆須宛転帰就自己」と。また、第二則・頌の評唱には「一切語言、山河大地、一一転帰自己」と。

雲巌常随道吾、咨参決択。一日問他道、大悲菩薩、用許多手眼作什麼。当初好与他劈脊便棒、免見後有許多

雲巌、常に道吾に随い、咨参決択す。一日、他に問うて道く、「大悲菩薩は許多の手眼を用いて什麼をか作す」と。当初に好し他の与に劈脊に便ち棒せば、後

葛藤。道吾慈悲不能如此、却与他説道理。意要教他便会、却道、如人夜半背手摸枕子。当深夜無灯光時、将手摸枕子。且道、眼在什麼処。他便道、我会也。吾云、汝作麼生会。巌云、偏身是手眼。吾云、道即太煞道、只道得八成。巌云、師兄又作麼生。吾云、通身是手眼。且道、偏身是底是、通身是底是。雖似爛泥、却脱灑。如今人多去作情解道、偏身底不是、通身底是。只管咬他古人言句、於古人言下死了。殊不知、古人意不在言句上、此皆是事不獲已而用之。如今下注脚、立格則道、若透得此公案、便作罷参会。以手摸渾身、摸灯籠露柱、尽作通身話会。若恁麼会、壊他古人不少。所以道、他参活句、不参

に許多の葛藤有るを見るを免れん。道吾は慈悲ありて、此の如くする能わず、却って他の与に道理を説く。意に他をして便ち会せしめんと要して、却って道う、「人の夜半に背手して枕子を摸るが如し」と。深夜、灯光無き時に当たり、手を将て枕子を摸る。且道、眼は什麼処にか在る。他便ち道う、「我会せり」と。吾云く、「汝作麼生か会す」。巌云く、「偏身是れ手眼なり」。吾云く、「道うことは即ち太煞だ道うも、只だ八成を道い得たるのみ」。巌云く、「師兄は又た作麼生」。吾云く、「通身是れ手眼なり」と。且道、「偏身是れ」底が是か、「通身是れ」底が是か。爛泥の似しと雖も却って脱灑たり。如今の人多く去きて情解を作して道う、「偏身底は是ならず、通身底は是なり」と。只管に他の古人の言句を咬り、古人の言下に死し了る。殊に知らず、古人の意は言句の上に在らず、此れ皆な是れ事已むを獲ず之を用う。如今注脚を下し、格則を立てて道う、「若し此の公案を透得せば、便ち罷参の会

死句。須是絶情塵意想、浄躶躶、赤灑灑地、方可見得大悲話。

一 仏法を問う。 二 洒脱。スマート。 三 格式、法則。 四 修行を完成して、師家の指導を免除されること。 五 ことばに引きずられた理解。 六 第三九則・本則の評唱などに既出。なお、『滄浪詩話』詩法に「須参活句、勿参死句」とあり、第二〇則・本則の評唱では「須参活句、莫参死句」(上冊二七二頁)と。

不見曹山問僧[一]、応物現形[二]、如水中月時如何。僧云、如驢覷井。山云、道即煞道、只道得八成。僧云、和尚又作麼生。山云、如井覷驢。便同此意也。你若去語上見、総出*道吾・雲巌圏繢不得。雪竇作家、更不向句下死、直向頭上行。頌云、

と作さん」と。手を以て渾身を摸り、灯籠露柱を摸って、尽く「通身」の話会を作す。若し恁麼に会せば、他の古人を壊うこと少なからず。所以に道う、「他は活句に参じて死句に参ぜず」と。須是らく情塵意想を絶し、浄躶躶赤灑灑地にして、方めて大悲の話を見得すべし。

見ずや曹山、僧に問う、「物に応じて形を現すこと、水中の月の如くなる時は如何」。僧云く、「驢、井を覷るが如し」。山云く、「道うことは即ち煞だ道うも、只だ八成を道い得たるのみ」。僧云く、「和尚は又た作麼生」。山云く、「井、驢を覷るが如し」と。便ち此の意に同じ。你若し語の上に見んとすれば、総て道吾・雲巌の圏繢を出づることを得ず。雪竇は作家なれば、更

に句下に死せず、直に頭上を行く。頌に云く、

＊道吾雲巌　福本は「道吾雲巌曹山」。

一　曹山本寂（八四〇―九〇一）。二「応物現形、如水中月」は『金光明経』四天王品の句。

【頌】偏身是、〔一四肢八節。未是衲僧極則処。〕通身是。〔頂門上有半辺。猶在窠窟裏。瞎。〕拈来猶較二十万里。〔放過則不可。何止十万里。〕展翅鵬＊三騰六合雲、〔些子境界、将謂奇特。点。〕搏四風鼓蕩四溟水。〔些子塵埃、将謂天下人不奈你何。過。〕是何埃壒兮忽生、〔重為禅人下注脚。斬。拈却著那裏。〕那箇毫釐兮未止。〔＊＊別別。吹散了也。截。〕君不見、〔又恁麼去。〕網五珠垂範影重重、〔大小大雪竇、作這箇去就。可惜許。依旧打葛藤。〕棒頭手眼従何起。〔咄。賊過後

【頌】偏身是か、〔四肢八節。未だ是れ衲僧の極則の処にあらず。〕通身是か。〔頂門上に半辺有り。猶お窠窟裏に在り。瞎。〕拈げ来たれば猶お十万里を較つ。〔放過せば則ち不可。何ぞ止だ十万里のみならん。〕翅を展げて鵬騰す六合の雲、〔些子の境界、奇特なりと将謂いしに。点。〕風を搏って鼓蕩す四溟の水。〔些子の塵埃、天下の人は你を奈何ともせざらんと将謂いしに。過。〕是れ何の埃壒ぞ忽ちに生ず、〔重ねて禅人の為に注脚を下す。斬。拈却げて那裏にか著かん。〕那箇の毫釐ぞ未だ止まざる。〔別別なり。吹き散じ了れり。截。〕君見ずや、〔又た恁麼にし去る。〕網珠、範を垂れて影重重たるを、〔大小大の雪竇も這箇の去就を作す。可惜許。依旧として葛藤を打ぶ。〕棒頭の手

張弓。放你不得。尽大地人、無出気処。放得又須喫棒。＊＊＊又打咄云、且道、山僧底是、雪竇底是。〕咄。〔三喝四喝後作麼生。〕

眼何よりか起る。〔咄。賊過ぎし後に弓を張る。你を放し得ず。尽大地の人、気を出だす処無し。放得せば又た須らく棒を喫すべし。又た打って咄して云く、且道、山僧底が是か、雪竇底が是か。〕咄。〔三喝四喝の後作麼生。〕

＊鵬騰　福本・蜀本は「崩騰」。＊＊別別吹散了也截　福本は「別吹教了也」。ただし、この「教」は「散」の誤りであろう。＊＊＊又打～是咄〔一五字〕　福本は「便打。」喝。〔且道、山僧底是、雪竇底是。〕」。

一 両手両足、身体すべて。二『荘子』逍遥遊の大鵬は「九万里」。三 六合(天地と四方)の雲を空高く舞い上げる。四 四方の大海の水をわきたたせる。五 帝釈天の宮殿にある網の目に連なった無数の宝珠。「帝網明珠」。

〔評唱〕偏身是、通身是、若道背手摸枕子底便是、以手摸身底便是。若作恁麼見解、尽向鬼窟裏作活計。畢竟偏身通身都不是。若要以情識去見他大悲話、直是猶較十万里。雪竇弄得一句活道、拈来猶較十万里。後句

〔評唱〕「偏身是か、通身是か」と、若しくは道う、背手に枕子を摸る底便ち是か、手を以て身を摸る底便ち是か、と。若し恁麼の見解を作さば、尽く鬼窟裏に向いて活計を作すなり。畢竟偏身通身都て是ならず。若し情識を以て去て他の大悲の話を見んと要せば、直に是れ猶お十万里を較てたり。雪竇、一句を弄し得て

頌雲巌・道吾奇特処云、展翅*鵬騰六合雲、搏風鼓蕩四溟水。大鵬呑龍、以翼搏風鼓浪。其水開三千里、遂取龍呑之。雪竇道、你若大鵬能搏風鼓浪、也太煞雄壮、若以大悲千手眼観之、只是些子塵埃忽生相似、又似一毫釐風吹未止相似。雪竇道、你若以手摸身、用作手眼、堪作何用。於是大悲話上、直是未在。所以道、是何埃壒兮忽生、那箇毫釐兮未止。雪竇自謂、作家一時払迹了也。争奈後面依旧漏逗、説箇諭子。依前只在圏繢裏。君不見、網珠垂範影重重。雪竇引帝網明珠、以用垂範。手眼且道落在什麼処。

活せしめて道く、「拈げ来たれば猶お十万里を較つ」と。後の句に雲巌と道吾との奇特の処を頌して云く、「翅を展げて鵬騰す六合の雲、風を搏って鼓蕩す四溟の水」と。大鵬は龍を呑むに、翼を以て風を搏ち浪を鼓す。其の水開くこと三千里、遂に龍を取り之を呑む。雪竇道く、「你若し大鵬にして能く風を搏ち浪を鼓して、也た太煞だ雄壮なるも、若し大悲の千手眼を以て之を観れば、只だ是れ些子の塵埃忽ち生ずるに相似たり、又た一毫釐の、風に吹かれて未だ止まざるが似くに相似たり。雪竇道く、「你若し手を以て身を摸り、用て手眼なりと作さば、何の用をか作す堪けん。是の大悲の話上に於ては、直是く未在」と。所以に道う、「是れ何の埃壒ぞ忽ちに生ず、那箇の毫釐ぞ未だ止まざる」と。雪竇自ら謂らく、「作家、一時に迹を払い了れり」と。争奈せん後面に依旧漏逗して箇の諭子を説くことを。依前として只だ圏繢の裏に在り。「君見ずや、網珠、範を垂れて影重重たるを」とは、雪竇、

帝網の明珠を引いて、以て範を垂るるに用う。手眼は且道、什麼処にか落在る。

＊鵬　蜀本・福本は「崩」。＊＊若　福本は「若得似」。

一 観念的な判断。二『荘子』逍遥遊の鵬と『華厳経』如来出現品などの金翅鳥の寓話をアレンジしたもの。三 まだだ、まだ不十分だ。

華厳宗中、立四法界。一理法界、明一味平等故。二事法界、明全理成事故。三理事無礙法界、明理事相融、大小無礙故。四事事無礙法界、明一事偏入一切事、一切事偏摂一切事、同時交参無礙故。所以道、一塵纔挙、大地全収。一一塵含無辺法界。一塵既爾、諸塵亦然。網珠者、乃天帝釈善法堂前、以摩尼珠為網。凡一珠中映現百千珠、而百千珠倶現一珠中。交映重重、主伴無尽。此用明事事無礙法界也。昔賢首国師、立為鏡灯諭。

華厳宗の中に、四法界を立つ。一には理法界、一味平等を明すが故に。二には事法界、理を全うして事を成すことを明すが故に。三には理事無礙法界、理事相融して、大小無礙なることを明すが故に。四には事事無礙法界、一事偏く一切事に入り、一切事偏く一切事を摂ねて、同時に交参無礙なることを明すが故に。所以に道う、「一塵おこるや纔や、大地全く収まる」と。一一の塵に無辺法界を含む。一塵既に爾り、諸塵も亦た然り。「網珠」とは、乃ち天帝釈の善法堂の前に、摩尼珠を以て網を為る。凡そ一珠の中に百千珠を映現し、而も百千珠倶に一珠の中に現る。交映重重にして、主伴無尽なり。此れ用て事事無礙法界を明すなり。昔

円列十鏡、中設一灯。若看東鏡、則九鏡鏡灯、歴然斉現。若看南鏡、則鏡鏡如然。所以世尊初成正覚、不離菩提道場、而偏昇忉利諸天、乃至於一切処七処九会、説華厳経。雪竇以帝網珠、垂示事事無礙法界。然六相義甚明白。即総、即別、即同、即異、即成、即壊。挙一相、則六相倶該。但為衆生日用而不知、雪竇拈帝網明珠、垂範況此大悲話、直是如此。

賢首国師、立てて鏡灯の諭を為す。円く十鏡を列ねて、中に一灯を設く。若し東の鏡を看れば、則ち九鏡の鏡灯、歴然として斉しく現る。若し南の鏡を看れば、則ち鏡鏡如然たり。所以て世尊は初めて正覚を成すや、菩提道場を離れずして、偏く忉利諸天に昇り、乃至は一切処に於て、七処に九会して『華厳経』を説く。雪竇、帝網珠を以て事事無礙法界を垂示す。然も六相の義甚だ明白なり。即総、即別、即同、即異、即成、即壊なり。一相を挙ぐれば則ち六相倶に該ぬ。但だ衆生は日に用いるも知らざるが為に、雪竇は帝網の明珠を拈げ、範を垂れて此の大悲の話に況う。直に是れ此の如し。

一 四種の存在領域。二 真理の世界。三 事象の世界。四 真理と事象とが妨げなく交流・融合する世界。五 事象と事象とが妨げなく交流・融合する世界。六 第一九則・本則の評唱などに既出。七 帝釈天のこと。八 宝玉。摩尼宝珠(第五五則・頌の評唱)。九 華厳宗の第三祖、法蔵(六四三―七一二)。一〇 六欲天の第二、忉利天。須弥山の頂上に在り、帝釈天が住む。一一 総・別・同・異・成・壊の六つの相(様態)から見た存在のあり方。一二 六相が互いに相即し円融していること。

三 『周易』繋辞上伝の句。

你若善能向此珠網中、明得拄杖子、神通妙用、出入無礙、方可見得手眼。所以雪竇云、棒頭手眼従何起。教你[一]棒頭取証、喝下承当。只如徳山入門便棒、且道、手眼在什麼処。臨済入門便喝、且道、手眼在什麼処。且道、雪竇末後為什麼更著箇咄字。[二]参。

你若し善能(よ)く此の珠網の中に拄杖子(つえ)を明得し、神通妙用、出入無礙(むげ)ならば、方(はじ)めて手眼を見得すべし。所以(ゆえ)に雪竇云く、「棒頭の手眼何(いずこ)よりか起る」と。你をして棒頭に取証(さと)り、喝下に承当(うけと)めしむ。只如(たと)えば徳山は門に入るや便ち棒す、且道(さて)、手眼什麼処(いずこ)にか在る。臨済(りんざい)は門に入るや便ち喝す、且道(さて)、手眼什麼処(いずこ)にか在る。且道(さて)、雪竇は末後に為什麼(なにゆえ)にか更に箇(こ)の「咄」の字を著く。参ぜよ。

一 第六〇則・本則の評唱に既出。　二 参究を促す気合いの語。

第九〇則　智門般若体

*垂示云、声前一句、千聖不伝。面前一糸、長時無間。浄裸裸、赤灑灑。頭鬖鬆、耳卓朔。且道、作麼生。試挙看。

第九〇則　智門般若の体

垂示に云く、声前の一句は、千聖も伝えず。面前の一糸は、長時無間なり。浄裸裸、赤灑灑。頭は鬖鬆、耳は卓朔。且道、作麼生。試みに挙し看ん。

*垂示云〜　福本は、第九〇則の次に第九四則が続き、第九四則には垂示が無い。『種電鈔』は、この垂示を削除している。

一 ことばになる以前の消息は、仏も祖師も伝授しようがない。第七則の垂示に既出。二 目の前の一本の糸は、永遠に連なっている。この二句は大慧『正法眼蔵』上に挙げる羅山和尚の語。そこでは「一糸」は「一思」。この方が解り易い。三 一糸まとわぬすっぱだか。本体そのままの露呈。四 頭髪はボウボウ、耳はピンと突っ立っている。

【本則】挙。僧問智門、如何是般若体。〔通身無影象。坐断天下人舌頭。用体作什麼。〕門云、蚌含明月。〔光呑万象即且止、棒頭正眼事如何。曲

【本則】挙す。僧、智門に問う、「如何なるか是れ般若の体」。〔通身影象無し。天下の人の舌頭を坐断す。体を用いて什麼か作ん。〕門云く、「蚌、明月を含む」。〔光万象を呑むは即ち且て止き、棒頭正眼の事は如何。

不蔵直。雪上加霜又一重。〕僧云、如何是般若用。〔倒退三千里。要用作什麼。〕門云、[五]兎子懐胎。〔嶮。[六]苦瓠連根苦、甜瓜徹蔕甜。向光影中作活計。[*]不出智門窠窟。若有箇出来、且道、是般若体、是般若用。且要土上加泥。〕

曲は直を蔵さず。雪上に霜を加うること又た一重。〕僧云く、「如何なるか是れ般若の用」。〔倒退三千里。用を要して什麼か作ん。〕門云く、「兎子懐胎す」。〔嶮うし。苦瓠は根に連るまで苦く、甜瓜は蔕に徹るまで甜し。光影の中に活計を作す。智門の窠窟を出でず。若し箇の出で来たるもの有らば、且道、是れ般若の体か是れ般若の用か。且く要す土上に泥を加うることを。〕

＊不出〜加泥〔二七字〕　福本に無し。

一　智門光祚。雪竇の師。以下、第二一則・本則の評唱に既出。　二　梵語 prajñā に相当する音写語。智慧の意。　三（般若の体という）体全体の影も形も無い。　四　蚌（カラスガイ）は中秋の明月の光を浴びると真珠を孕む、とされた。般若の智慧の光を体得することに喩える。　五　兎は中秋の明月の光を浴びると懐妊する、とされた。般若の智慧の輝きを自ら発することに喩える。　六　第八七則・本則の著語に既出。

【評唱】　智門道、蚌含明月、兎子懐胎。都用中秋意。雖然如此、古人意却不在蚌兎上。他是雲門会下尊宿、

【評唱】　智門道く、「蚌、明月を含む、兎子懐胎す」と。都て中秋の意を用う。此の如くなりと雖然も、古人の意は却って蚌兎の上に在らず。他は是れ雲門会下

一句語須具三句。所謂函蓋乾坤句、截断衆流句、随波逐浪句。亦不消安排、自然恰好。便去嶮処答這僧話、略露些子鋒鋩。不妨奇特。雖然恁麽、他古人終不去弄光影、只与你指些路頭、教人見。這僧問、如何是般若体。智門云、蚌含明月。漢江出蚌、蚌中有明珠。到中秋月出、蚌於水面浮、開口含月光、感而産珠。合浦珠是也。若中秋有月則珠多、無月則珠少。如何是般若用。門云、兎子懐胎。此意亦無異。兎属陰、中秋月生、開口呑其光、便乃懐胎、口中産児。亦是有月則多、無月則少。他古人答処、無許多事。他只借其意、而答般若光也。雖然恁麽、他意不在言句上。自是後人去言句上作活計。不見盤山道、心

の尊宿なれば、一句の語に須ず三句を具す。所謂函蓋乾坤の句、截断衆流の句、随波逐浪の句なり。亦た安排を消いずして自然に恰好れり。便ち嶮処に去いて、這の僧の話に答えて、略些子の鋒鋩を露す。不妨に奇特なり。恁麽なりと雖然も、他の古人終に去きて光影を弄せず、只だ你の与に些の路頭を指して人をして見しむ。這の僧問う、「如何なるか是れ般若の体」。智門云く、「蚌、明月を含む」と。漢江に蚌を出だし、蚌中に明珠有り。中秋の月の出づるに到るや、蚌は水面に浮かび、口を開いて月光を含み、感じて珠を産む。合浦の珠、是れなり。若し中秋に月有るときは則ち珠多く、月無きときは則ち珠少なし。「如何なるか是れ般若の用」。門云く、「兎子懐胎す」と。此の意亦た異なること無し。兎は陰に属し、中秋の月生ずるに、口を開いて其の光を呑み、便乃ち懐胎し、口中より児を産む。亦た是れ月有るときは則ち多く、月無きときは則ち少なし。他の古人の答処に許多の事無し。他只だ

月孤円、光呑万象。光非照境、境亦非存。光境倶亡、復是何物。如今人但瞠眼、喚作光、只去情上生解、[四]空裏釘橛。[五]古人道、汝等諸人、[六]六根門頭昼夜放大光明、照破山河大地。不[七]只止眼根放光、鼻舌身意亦皆放光也。到這裏、直須打畳六根下、無一星事、浄裸裸、赤灑灑地、方見此話落処。雪竇正恁麼頌出。

其の意を借りて、般若の光に答う。恁麼なりと雖然も、他の意は言句の上に在らず。自ずから是れ後人の、言句の上に活計を作すのみ。見ずや盤山道く、「心月孤り円かにして、光は万象を呑む。光、境を照らすに非ず、境も亦た存するに非ず。光と境と倶に亡ぶ、復た是れ何物ぞ」と。如今の人但だ瞠眼いて喚んで光と作し、只だ情の上で解を生し、空裏に橛を釘つ。古人道く、「汝等諸人、六根の門頭に昼夜大光明を放って、山河大地を照破す。只止眼根より光を放つのみならず、鼻舌身意も亦た皆な光を放つ」と。這裏に到って直に須らく六根を打畳し下して、一星事も無く、浄裸裸、赤灑灑地にして、方めて此の話の落処を見るべし。雪竇正に恁麼に頌出す。

一 いわくありげにちらつかせる。二 漢水。とすると、合浦(もと広東省に属し、いま広西壮族自治区に編入)とは遠く隔たる。『管子』や『淮南子』に「江漢之珠」とあり、あるいは「江漢」か。三 盤山宝積。以下、第八六則の本則の評唱と頌の評唱とに既出。四 虚空に杭を打ち込む。五 福州大安(七九三—八八三)の語に「汝諸人各自有無価大宝。従眼門放光、照山河大地。〜六門昼夜常放光明」

(『伝灯録』九)と。 六 六つの感覚器官の末端。 七「止」は衍字か。

【頌】[一]一片虚凝絶謂情、〔[二]擬心即差、動念即隔。仏眼也覰不見。〕[三]人天従此見[四]空生。〔須菩提、好与三十棒。用這老漢作什麼。設使須菩提、也倒退三千里。〕蚌含[五]玄兎深深意、〔也須是当人始得。有什麼意。何須更用深深意。〕曾与[六]禅家作[七]戦争。〔[八]干戈已息、天下太平。還会麼。打云、闍黎喫得多少。〕

【頌】一片の虚凝、謂情を絶し、〔心を擬ければ即ち差い、念を動かせば即ち隔たる。仏眼も也た覰れども見えず。〕人天此れより空生を見る。〔須菩提、好し三十棒を与うるに。這の老漢を用いて什麼か作ん。設使須菩提なるも、也た倒退三千里せん。〕蚌、玄兎を含む深深たる意、〔也た須是らく当人にして始めて得し。什麼なる意か有らん。何ぞ須いん更に深深たる意を用うることを。〕曾て禅家と戦争を作す。〔干戈已に息んで天下太平。還た会すや。打って云く、闍黎は多少をか喫し得るや。〕

一 一片の澄明な結晶(明月)は、言語や分別によっては捉えられない。 二『臨済録』示衆に「擬心即差、動念即乖」(岩波文庫一一三頁)と。 三 人間界と天界。人々と神々。六道のうちの二つ。 四 須菩提 Subhūti。仏の十大弟子の一人で、解空第一と称される。第六則・頌および評唱を参照。 五 月のこと。 六 プロの修行者。 七 法戦。 八 たてとほこ、転じて戦い。

〔評唱〕一片虚凝絶謂情、雪竇一句

〔評唱〕「一片の虚凝、謂情を絶す」と、雪竇の一句

便頌得好、自然見得古人意。六根湛[一]然、是箇什麼。只這一片、虚明凝寂。不消去天上討、也不必向別人求。自然常光現前、[二]是処壁立千仭。謂情、即是絶言謂情塵也。[*三]法眼円成実性頌云、理極忘情謂、如何得諭斉。到頭霜夜月、任運落前渓。果熟兼猿重、山遥似路迷。挙頭残照在、元是住居西。所以道、[四]心是根、法是塵、両種猶如鏡上痕。塵垢尽時光始現、心法双忘性即真。又道、[五]三間茅屋従来住、一道[六]神光万境閑。莫把是非来辨我、浮生穿鑿不相関。只此頌亦見、[七]一片虚凝絶謂情也。人天従此見空生。不見須菩提巌中宴坐、諸天雨花讃歎。尊者云、空中雨花讃歎、復是何人。天云、我是梵天。尊者云、汝云何讃

便ち頌し得て好く、自然に古人の意を見得す。六根湛然たる、是れ箇の什麼ぞ。只だ這の一片、虚明にして凝寂なり。天上に去きて討ぬることを消いざれ、也た必ずしも別人に求めざれ。自然に常光現前し、是処に壁立千仭なり。「謂情（を絶す）」とは即ち是れ言謂情塵を絶するなり。法眼の『円成実性の頌』に云く、「理極まりて情謂を忘る、如何ぞ諭斉うるを得ん。到頭霜夜の月、任運として前渓に落つ。果熟して猿の重きを兼ね、山遥かにして路迷うに似たり。頭を挙ぐれば残照在り、元是れ住居の西」と。所以に道う、「心は是れ根、法は是れ塵、両種猶お鏡上の痕の如し。塵垢尽くる時、光始めて現れ、心法双び忘れて性即ち真なり」と。又た道く、「三間の茅屋に従来住み、一道の神光あり万境閑なり。是非を把り来たりて我を辨ずること莫れ、浮生の穿鑿相関らず」と。只だ此の頌亦た「一片の虚凝、謂情を絶す」を見すなり。「人天此れより空生を見る」と。見ずや須菩提、巌中に宴坐

歎。天云、我重尊者善説般若波羅蜜多。尊者云、我於般若未嘗説一字。汝云何讃歎。天云、尊者無説、我乃無聞。無説無聞、是真般若。又復動地雨花。看他須菩提善説般若。且不説体用。若於此見得、便可見智門道、蚌含明月、兎子懐胎。古人意雖不在言句上、争奈答処有深深之旨、惹得雪竇道、蚌含玄兎深深意。到這裏、曾与禅家作戦争。天下禅和子、鬧浩浩地商量、未嘗有一人夢見在。若要与智門・雪竇同参、也須是自著眼始得。

するに、諸天は花を雨らして讃歎す。尊者云く、「空中に花を雨らして讃歎するは、復た是れ何人ぞ」。天云く、「我は是れ梵天なり」。尊者云く、「汝云何にか讃歎す」。天云く、「我は尊者の善く般若波羅蜜多を説くを重んず」。尊者云く、「我は般若に於て未だ嘗て一字をも説かず。汝云何にか讃歎す」。天云く、「尊者説くこと無く、我乃ち聞くこと無し。説くこと無く、聞くこと無き、是れ真の般若なり」と。又復地を動して花を雨らす。看よ他の須菩提の善く般若を説くを。且も体用を説かず。若し此に於て見得せば、便ち智門の「蚌明月を含み、兎子懐胎す」と道うを見るべし。古人の意は言句の上に在らずと雖も、争奈せん答処に深深の旨有って、雪竇の「蚌、玄兎を含む深深たる意」と道うを惹き得たり。這裏に到って、「曾て禅家と戦争を作す」。天下の禅和子、鬧浩浩地と商量するも、未だ嘗て一人も夢にさえ見るもの有らざる在。若し智門・雪竇と同参ならんと要せば、也た須是らく自ら眼

を著けて始めて得し。

＊法眼～居西（四八字）　福本は「法眼頌云、理極忘情謂、如何得諭斉」。

一 落ち着いて静かなさま。 二 この「是」は、あらゆる、すべての意。 三 法眼文益（八八五―九五八）。以下、第三四則・頌の評唱に既出。 四『証道歌』の句。第九則・本則の評唱、第三四則・頌の評唱を参照。 五 馬祖の法嗣、龍山（隠山とも）の頌。『伝灯録』八に見える。 六 霊妙な心のかがやき。 七 第六則・頌の評唱を参照。 八 勘どころに目を着ける。

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第九

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第九

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第十

第九一則　塩官犀牛扇子

垂示云、超情離見、去縛解粘、提起向上宗乗、扶竪正法眼蔵、也須十方斉応、八面玲瓏、直到恁麼田地。且道、還有同得同証、同死同生底麼。試挙看。

【本則】挙。塩官一日喚侍者、与我将犀牛扇子来。〔打葛藤不少。何似這箇。好箇消息。〕侍者云、扇子破也。〔可惜許。好箇消息。道什麼。〕

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第十

第九一則　塩官の犀牛の扇子

垂示に云く、情を超え見を離れ、縛を去り粘を解き、向上の宗乗を提起し、正法眼蔵を扶竪するには、也た須らく十方斉しく応じ、八面玲瓏として、直に恁麼なる田地に到るべし。且道、還た同得同証、同死同生する底有りや。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。塩官、一日、侍者を喚ぶ、「我が与に犀牛の扇子を将ち来たれ」。〔葛藤を打ぶこと少なからず。這箇に何似ぞ。好箇消息なり。〕侍者云く、「扇子破れたり。」〔可惜許。好箇消息なり。什麼と道うぞ。〕

一 分別を超える。二 執着を捨てる。三 究極の禅の核心。第二則の垂示に既出。四 仏法の眼目。五 あらゆることに自由自在に対応する。六 心身すべてがからりと澄みきる。

官云、扇子既破、還我[四]犀牛児来。〔漏逗不少。[五]幽州猶自可、最苦是新*羅。和尚用[六]犀牛児作什麼。〕侍者無対。〔果然是箇無孔鉄鎚。可惜許。〕[七]投子云、不辞将出、恐頭角不全。〔似則似、争奈[八]両頭三面。也是説道理。〕雪竇拈云、我要不全底頭角。〔堪作何用。将錯就錯。〕[九]石霜云、若還和尚即無也。〔道什麼。[一〇]撞著鼻孔。〕雪竇拈云、犀牛児猶在。〔嶮。洎乎錯認。収頭去。〕[一一]資福画一円相、於中書一牛字。〔[一二]草藁不労拈出。[一三]弄影漢。〕[一四]雪竇拈云、[一五]適来為什麼不将出。〔金鍮不辨。也是草裏漢。〕[一六]保福云、[一七]和尚年尊、別請人好。〔[一八]僻地裏罵官人。[一九]辞辛道苦作什麼。〕雪竇拈云、可惜[二〇]労而無功。〔[二一]兼身在内。也

官云く、「扇子既に破れたれば、我に犀牛児を還し来たれ」。〔漏逗少なからず。幽州は猶自可なり、最も苦なるは是れ新羅。和尚、犀牛児を用いて什麼か作ん。〕侍者対うること無し。〔果然して是れ箇の無孔の鉄鎚。可惜許。〕投子云く、「将き出だすことを辞せざるも、恐らくは頭角全からざらん」。〔似たることは則ち似たるも、争奈せん両頭三面なり。也た是れ道理を説う。〕雪竇拈げて云く、「我は全からざる底の頭角を要す」。〔何の用をか作す堪き。錯を将て錯を就す。〕石霜云く、「若し和尚に還さば即ち無からん」。〔什麼と道うぞ。鼻孔に撞著れり。〕雪竇拈げて云く、「犀牛児は猶お在り」。〔嶮うし。洎乎錯り認む。頭を収め去れ。〕資福、一円相を画き、中に一つの牛の字を書く。〔草藁は拈出だすを労せず。影を弄する漢。〕雪竇拈げて云く、「適来、為什麼にか将き出ださざる」。〔金鍮辨ぜず。也た是れ草裏の漢。〕保福云く、「和尚は年尊し、別に人に請えば好し」。〔僻地裏に官人を罵る。辛を辞し苦

好与三十棒。灼然。〕

を道って什麼か作ん。〕雪竇拈げて云く、「惜しむべし、労して功無し」。〔身を兼ねて内に在り。也た好し三十棒を与うるに。灼然たり。〕

＊新羅　福本は「崖州」。
一 塩官斉安(?―八四二)。 二 犀牛の角で作った団扇。 三 これとくらべてどうだ。 四「児」は接尾語。 五 幽州の風土はつらいとはいっても、まだましだ。一番つらいのは新羅(地の果て)だ。 六 第八八則・頌に既出。 七 投子大同(八一九―九一四)。 八 第七八則・本則の著語などに既出。 九 石霜慶諸(八〇七―八八八)。 一〇 鼻(本来の面目)にぶち当たる。骨身にこたえる衝撃を受ける。 一一 資福如宝。第三三則を参照。 一二 書きなぐりは見せてくれなくて結構。 一三 第八五則・本則の著語に既出。 一四 金と真鍮との違いも見て取れない。 一五 第一六則・本則にも。 一六 保福従展(?―九二八)。 一七 耄碌している。 一八 ものかげで役人をののしる。 一九 辛い苦しいと泣きごとを並べてどうする。 二〇 第八四則・頌の著語にも。 二一 そう言うあなたもその仲間。

〔評唱〕　塩官一日喚侍者、与我将犀牛扇子来。此事雖不在言句上、且要験人平生意気作略、又須得如此藉言而顕。＊於臘月三十日、著得力、作得主、万境縦然、観之不動。可謂無功之功、無力之力。塩官廼斉安禅師。

〔評唱〕　塩官、一日、侍者を喚ぶ、「我が与に犀牛の扇子を将ち来たれ」と。此の事は言句の上に在らずと雖も、且ず人の平生の意気作略を験せんと要せば、又た須らく此の如く言を藉りて顕すべし。臘月三十日に、力を著得て主と作得らば、万境縦然たりとも、之を観て動ぜず。無功の功、無力の力と謂うべし。塩官

古時以犀牛角為扇。時塩官豈不知犀牛扇子破。故問侍者、侍者云、扇子破也。看他古人十二時中、常在裏許、撞著磕著。塩官云、扇子既破、還我犀牛児来。且道、他要犀牛児作什麼。也只要験人知得落処也無。投子云、不辞将出、恐頭角不全。雪竇云、我要不全底頭角。亦向句下便投機。石霜云、若還和尚、即無也。雪竇云、犀牛児猶在。資福画一円相、於中書一牛字。為他承嗣仰山、平生愛以境致接人、明此事。雪竇云、適来為什麼不将出。又穿他鼻孔了也。保福云、和尚年尊、別請人好。此語道得穏当。前三則語却易見。此一句語有遠意。雪竇亦打破了也。山僧旧日在慶蔵主処理会。道、和尚年尊、老耄得頭忘

は廼ち斉安禅師なり。古時、犀牛の角を以て扇を為る。時に塩官は豈に犀牛の扇子の破れたることを知らざらんや。故に侍者に問うに、侍者云く、「扇子破れたり」と。看よ他の古人は十二時中、常に裏許に在って、撞著磕著することを。塩官云く、「扇子既に破れたれば、我に犀牛児を還し来たれ」と。且道、他は犀牛児を要めて什麼か作ん。也た只だ人の落処を知得る也無を験せんと要す。投子云く、「将き出だすことを辞せざるも、恐らくは頭角全からざらん」。雪竇云く、「我は全からざる底の頭角を要す」と。亦た句下に便ち機に投ず。石霜云く、「若し和尚に還さば、即ち無からん」。雪竇云く、「犀牛児は猶お在り」と。資福は一円相を画き、中に一つの牛の字を書く。他は仰山を承嗣ぐが為に、平生愛んで境致を以て人を接し、此の事を明す。雪竇云く、「適来、為什麼にか将き出ださざる」と。又た他の鼻孔を穿ち了れり。保福云く、「和尚は年尊し、別に人に請えば好し」と。此の語道

尾。適来索扇子、如今索犀牛児、難為執侍。故云、別請人好。雪竇云、可惜労而無功。此皆是下語格式。[九]古人見徹此事、各各雖不同、道得出来、百発百中、須有出身之路、句句不失血脈。如今人問著、只管作道理計較。所以十二時中、要人咬嚼、[一〇]教滴水滴[一一]凍、求箇証悟処。看他雪竇頌一串云。

い得て穏当なり。前の三則の語は却って見易し。此の一句の語は遠意有り。雪竇も亦た打破し了れり。山僧は旧日、慶蔵主の処に在って理会す。「和尚は年尊し」と道うは、老耄にして頭を得ては尾を忘る。適来は扇子を索め、如今は犀牛児を索めて、執侍を為し難し。故に云う、「別に人に請えば好し」と。雪竇云く、「惜しむべし労して功無きことを」と。此れ皆な是れ下語の格式なり。古人此の事を見徹すれば、各各同じからずと雖も、道得い出だし来たれば、百発百中、須ず出身の路有って、句句血脈を失わず。如今の人は問著れば、只管に道理計較を作す。所以に十二時中、人に咬嚼するを要め、滴水滴凍にして、箇の証悟する処を求めしむ。看よ他の雪竇一串に頌して云うを。

＊於　福本・蜀本は「於理」。　＊＊遠意　福本は「深遠処」。

一 人生の決着をつけるべきどたん場。 二 ずらりと隆起するさま。縦然。 三 撞いたり磕いたりして叩き上げる。第七八則・本則の著語にも。 四 相手の機微をつかむ。 五 仰山慧寂(八〇七—八八三)。 六 具体的な呈示によって教導する。第三三則・本則の評唱にも。 七 投子・石霜・資福の語。 八 圜悟

の同学。蔵主は経蔵を管理する役。九 コメントをつけること。一〇（その理屈のままに）咀嚼する。
一一 水のしたたりがポトポト。間断の無いさま。

【頌】犀牛扇子用多時、〔遇夏則涼、遇冬則暖。人人具足。為甚不知。阿誰不曾用。〕問著元来総不知。〔知則知、会則不会。莫瞞人好。也怪別人不得。〕無限清風与頭角、〔在什麼処。不向自己上会、向什麼処会。天上天下、*頭角重生。是什麼。無風起浪。〕尽同雲雨去難追。〔蒼天蒼天。也是失銭遭罪。〕

雪竇復云、若要清風再復、頭角重生、〔**人人有箇犀牛扇子。十二時中、全得他力。因什麼、問著総不知。還道得麼。〕請禅客各下一転語。〔***塩官

【頌】犀牛の扇子用うること多時(ひさし)、〔夏に遇いては則ち涼しく、冬に遇いては則ち暖か。人人具足す。為甚(なにゆえ)にか知らざる。阿誰(たれ)か曾て用いざる。〕問著(といつめ)れば元来(なんと)総(み)な知らず。〔知ることは則ち知るも、会することは則ち会せず。人を瞞(あなど)ること莫くんば好し。也た別人を怪(とが)むることを得ず。〕限り無き清風と頭角と、〔什麼処(いずこ)にか在る。自己の上に向(お)いて会せずんば什麼処(いずこ)に向(お)いてか会せん。天上天下、頭角重(かさ)ねて生ず。是れ什麼(なん)ぞ。風無きに浪を起す。〕尽(ことごと)く雲雨と同(とも)に去って追い難し。〔蒼天(ああ)、蒼天(ああ)。也た是れ銭を失い罪に遭う。〕

雪竇復(ま)た云く、「若し清風再び復し、頭角重ねて生ぜんことを要(ほっ)せば、〔人人箇(こ)の犀牛の扇子有り。十二時中、全く他(そ)の力を得たり。什麼(なに)に因(よ)ってか問著(といつめ)れば総(み)な知らざる。還(は)た道(い)い得るや。〕請う禅客、各(おのおの)一転

猶在。三転了也。〕問云、扇子既破、還我犀牛児来。〔也有一箇半箇。咄。也好推倒禅床。〕時有僧出云、大衆参堂去。〔賊過後張弓。被奪却槍。前不搆村、後不迭店。〕雪竇喝云、抛鉤釣鯤鯨、釣得箇蝦蟆。便下座。〔招得他恁麼地。賊過後張弓。〕＊＊＊＊仏果自徴此語云、又直問你諸人。這僧道大衆参堂去、是会不会。若是不会、争解恁麼道。若道会時、雪竇又道、抛鉤釣鯤鯨、只釣得箇蝦蟆、便下座。且道、誵訛在什麼処。試請参詳看。〕

語を下せ」。〔塩官猶お在り。三転し了れり。〕問うて云く、「扇子既に破れたれば、我に犀牛児を還し来たれ」。〔也た一箇半箇有り。咄。也た好し禅床を推し倒すに。〕時に有る僧出でて云く、「大衆、参堂し去け」。〔賊過ぎし後に弓を張る。槍を奪却わる。前むも村に搆らず、後るも店に迭ばず。〕雪竇、喝して云く、「鉤を抛って鯤鯨を釣りしに、箇の蝦蟆を釣り得たり」と。便ち下座す。〔他の恁麼地なるを招き得たり。賊過ぎし後に弓を張る。仏果自ら此の語を徴して云く、又た直に你諸人に問わん。這の僧の「大衆、参堂し去け」と道うは、是れ会するか会せざるか。若是会せざれば争か解く恁麼に道う。若し会すと道う時は、雪竇又た「鉤を抛って鯤鯨を釣りしに、只だ箇の蝦蟆を釣り得たり」と道いて、便ち下座す。且道、誵訛は什麼処にか在る。試みに請う参詳し看よ。〕

＊頭角〜起浪〔一一字〕　福本は「唯我独尊」。　＊＊人人〜不知〔二四字〕　福本に無し。　＊＊＊塩官〜了也〔八字〕　福本は「還道得三転了、塩官猶在」。　＊＊＊＊仏果〜又直〔九字〕　福本は「又且」。

一 投子以下四人の対応を指す。 二 圜悟。 三 入り組んで難解なところ。

【評唱】 犀牛扇子用多時、問著元来総不知。人人有箇犀牛扇子。十二時中、全得他力。為什麼問著、総不知去著。侍者、投子、乃至保福、亦総不知。且道、雪竇還知麼。不見無著訪文殊。喫茶次、文殊挙起玻璃盞子云、南方還有這箇麼。著云、無。殊云、尋常用什麼喫茶。著無語。若知得這箇公案落処、便知得犀牛扇子有無限清風、亦見犀牛頭角崢嶸。四箇老漢恁麼道、如朝雲暮雨一去難追。雪竇復云、若要清風再復、頭角重生、請禅客各下一転語。問云、扇子既破、還我犀牛児来。時有一禅客出云、大衆参堂去。這僧奪得主家権柄。道得

【評唱】「犀牛の扇子用うること多時、問著れば元来総な知らず」と。人人箇の犀牛の扇子有り。十二時中、全く他の力を得たり。為什麼にか問著れば総な去著を知らざる。侍者、投子、乃至保福も、亦た総な知らず。且道、雪竇は還た知るや。見ずや無著、文殊を訪う。茶を喫する次、文殊、玻璃の盞子を挙起げて云く、「南方に還た這箇有りや」。著云く、「無し」。殊云く、「尋常什麼を用てか茶を喫す」。著、語無し。若し這箇の公案の落処を知得らば、便ち犀牛の扇子に限り無き清風有ることを知得り、亦た犀牛の頭角崢嶸たるを見ん。四箇の老漢恁麼に道うは、朝雲暮雨の一たび去って追い難きが如し。雪竇復た云く、「若し清風再び復し、頭角重ねて生ぜんことを要せば、請う禅客、各一転語を下せ」。問うて云く、「扇子既に破れたれば、我に犀牛児を還し来たれ」と。時に有る一の禅客出でて云

也煞道、只道得八成。若要十成、便与掀倒禅床。你且道、這僧会犀牛児不会。若不会、却解恁麼道。若会、雪竇因何不肯伊。為什麼道、抛鉤釣鯤鯨、只釣得箇蝦蟆。且道、畢竟作麼生。諸人無事、試[二]拈掇看。

く、「大衆、参堂し去け」と。這の僧、主家の権柄を奪い得たり。道い得ることは也た煞だ道うも、只だ八成を道い得たるのみ。若し十成を要せば、便ち与に禅床を掀倒さん。你、且て道え、這の僧は犀牛児を会するか会せざるか。若し会せずとせば、却って解く恁麼に道えり。若し会すとせば、雪竇は何に因ってか伊を肯わざる。為什麼にか道う、「鉤を抛って鯤鯨を釣りしに、只だ箇の蝦蟆を釣り得たり」と。且道、畢竟作麼生。諸人無事ならば、試みに拈掇し看よ。

＊去著　福本に無し。

一　第三五則・本則の評唱を参照。　二　とりあげて話題にする。

第九二則　世尊一日陞座

垂示云、動[一]絃別曲、千載難逢。見[二]兎放鷹、一時取俊。総一切語言為一句、摂[三]大千沙界為一塵。同死同生、七穿八穴。還有証[四]拠者麼。試挙看。

一 弾き手が絃を動かしたとたんに曲の内容がわかる。第三九則・頌の評唱に既出。 二 機会をぴたりと把えた対応をする。 三 ありとあらゆる世界。全宇宙。 四 確認する。

【本則】 挙。世尊一日陞[一]座。〔賓主倶失。不是一回漏逗。〕文殊白槌[二]云、[三]諦観法王法、法王法如是。〔一子親得。〕世尊便下座。〔愁人莫[四]向愁人説、説向愁人愁殺人。打[五]鼓弄琵琶、相逢[六]両会家。〕

第九二則　世尊、一日座に陞る

垂示に云く、絃を動くや曲を別く、千載にも逢い難し。兎を見て鷹を放つ、一時に俊を取る。一切の語言を総べて一句と為し、大千沙界を摂めて一塵と為す。同死同生、七穿八穴。還た証拠する者ありや。試みに挙し看ん。

【本則】 挙す。世尊、一日、座に陞る。〔賓主倶に失す。是れ一回漏逗するのみにあらず。〕文殊、白槌して云く、「法王の法を諦観せよ、法王の法は是の如し」と。〔一子のみ親しく得たり。〕世尊、便ち座を下る。〔愁人は愁人に説うこと莫れ、愁人に説向わば人を愁殺せしむ。鼓を打ち琵琶を弄し、相逢う両会家。〕

一 説法のために座にのぼること。 二 列席者の注意を喚起するために槌をたたいて合図すること。 三 本来、説法の最後に唱える文句。『華厳経』(八十巻本)四の偈に「汝応観法王、法王法如是」と。 四 第七九則・頌の著語にも。 五 真浄克文(一〇二五―一一〇二)の頌。第二二則・本則の評唱(上冊二九六頁)を参照。 六 その道の達人。

【評唱】 世尊未拈花已前、早有這箇消息。始従[一]鹿野苑、終至[二]抜提河、幾曾用著金剛王宝剣。当時衆中、若有衲僧[三]気息底漢[四]綽得去、免得他末後拈花、[五]一場狼籍。世尊良久間、被文殊一摎、便下座。那時也有這箇消息。[六]釈迦掩室、浄名杜口。皆似此這箇、則已説了也。如[七]粛宗問忠国師、造無縫塔話、又如[八]外道問仏、不問有言、不問無言之語。看佗[九]向上人行履、幾曾入鬼窟裏作活計。有者道、意在黙然処。有者道、在良久処。[一〇]有言明無言底事、無言明有言底事。永嘉道、

【評唱】 世尊未だ花を拈らざる已前、早に這箇の消息有り。始め鹿野苑より、終り抜提河に至るまで、幾ぞ曾て金剛王宝剣を用著いたるや。当時衆中に、若し衲僧の気息有る底の漢、綽得し去かば、他の末後に花を拈り、一場の狼籍なるを免れ得ん。世尊良久の間、文殊に一摎されて、便ち座を下る。那時也た這箇の消息有り。釈迦は室を掩し、浄名は口を杜ず。皆な此の這箇に似て、則ち已に説き了れり。粛宗の忠国師に問うて無縫塔を造る話の如く、又た外道の仏に問う、「有言を問わず、無言を問わず」の語の如し。看よ佗の向上の人の行履、幾ぞ曾て鬼窟裏に入りて活計を作さんや。有る者は道う、「意は黙然の処に在り」と。有る者は道う、「良久の処に在り」と。有言は無言底の

[11]黙時説、説時黙。総恁麼会、[12]三生六十劫、也未夢見在。你若便直下承当得去、更不見有凡有聖。[13]是法平等、無有高下。日日与三世諸仏把手共行。後面看雪竇自然見得頌出。

事を明し、無言は有言底の事を明す。永嘉道く、「黙する時説き、説く時黙す」と。総て恁麼に会せば、三生六十劫なるも、也た未だ夢にも見ざる在なり。你若し便ち直下に承当得め去らば、更に凡有り聖有るを見ず。「是の法は平等にして、高下有ること無し」と。日日三世の諸仏と手を把って共に行かん。後面に雪竇の自然に見得り頌出するを看よ。

一 世尊(ブッダ)が最初の説法をした地。二 世尊の入滅地を流れていた河。第二八則・頌の評唱には「始従光耀土、終至跋提河、於是二中間、未嘗説一字」と。三 意気ごみ。四 (世尊が拈ろうとした花を)ひっつかんで奪い去る。五 滅茶苦茶の一幕。六 釈迦(世尊)は成道の後、法を説くことをためらい、浄名(維摩)は「入不二法門」を問われて沈黙した(第八四則)。『肇論』に「言之者、失其真。所以釈迦掩室於摩竭、浄名杜口於毘耶」と。七 第一八則を参照。八 第六五則を参照。九 悟りを超えた境地の人のあり方。一〇 永嘉玄覚(六七五―七一三)。一一 『証道歌』の句。一二 未来永劫。一三 『金剛般若経』(岩波文庫一〇八頁)に見える句。

【頌】 [1]列聖叢中作者知、〔莫謗釈迦老子好。還佗臨済徳山。千箇万箇中、[2]難得一箇半箇。〕 法王法令不如斯。

【頌】 列聖叢中作者は知る、〔釈迦老子を謗ること莫くんば好し。佗の臨済・徳山に還す。千箇万箇の中、一箇半箇は得難し。〕 法王の法令は斯の如くならざる

〔随他走底、如麻似粟。[三]三頭両面。灼然能有幾人到這裏。〕会中若有仙[四]陀客、〔就中難得伶俐人。文殊不是作家。闍黎定不是。〕何必文殊下一槌。〔更下一槌又何妨。第二第三槌総不要。当機一句作麼生道。嶮。〕

を。〔他に随って走く底、麻の如く粟の似し。三頭両面。灼然なり、能く幾人か這裏に到る有らん。〕会中若し仙陀の客有らば、〔就中得難きは伶俐き人。文殊は是れ作家にあらず。闍黎、定めて是らず。〕何ぞ文殊の一槌を下すを必せん。〔更に一槌を下すも又た何ぞ妨げん。第二第三の槌、総て要せず。当機の一句、作麼生か道わん。嶮うし。〕

一 世尊の説法を聞くために集まった高弟たち。 二 得難い人物をいう。 三 とらえどころのない、したたかな奴。 四「仙陀（婆）」というだけで、その意味を正しく判断できる達人。評唱を参照。

〔評唱〕 列聖叢中作者知、霊山八万[一]大衆、皆是列聖。文殊普賢乃至弥勒、主伴同会。須是巧中之巧、奇中之奇、方知他落処。雪竇意謂、列聖叢中無一箇人知有。若有箇作家者、方知不恁麼。何故。文殊白槌云、諦観法王法、法王法如是。雪竇道、法王法令

〔評唱〕「列聖叢中作者は知る」と、霊山八万の大衆は皆な是れ列聖なり。文殊・普賢乃至弥勒、主伴同に会す。須是らく巧中の巧、奇中の奇にして、方めて他の落処を知るべし。雪竇の意に謂えらく、列聖叢中に一箇人も有ることを知るもの無し。若し箇の作家の者有らば、方めて恁麼ならざるを知らん、と。何故ぞ。文殊は白槌して「法王の法を諦観せよ、法王の法は是

不如斯。何故如此。当時会中若有箇漢、[二]頂門具眼、肘後有符、向世尊未陞座已前覰得破、更何必文殊白槌。*涅槃経云、仙陀婆一名四実。一者塩、二者水、三者器、四者馬。有一智臣、善会四義。王若欲灑洗、要仙陀婆、臣即奉水。食索奉塩、食訖奉器飲漿。欲出奉馬。随意応用無差。灼然須是箇伶俐漢始得。只如僧問[三]香厳、如何是王索仙陀婆。厳云、過這辺来。僧過。厳云、[四]鈍置殺人。又問[五]趙州、如何是王索仙陀婆。州下禅床、[六]曲躬叉手。当時若有箇仙陀婆、向世尊未陞座已前[七]透去、猶較些子。世尊更陞座、便下去。已是不著便了也。那堪文殊更白槌。不妨鈍置他世尊一上提唱。且作麼生是鈍置処。

の如し」と云い、雪竇は「法王の法令は斯の如くならず」と道う。何故に此の如くなる。当時、会中に若し箇の漢有り、頂門に眼を具え、肘後に符有って、世尊未だ座に陞らざる已前に覰得破さば、更に何ぞ文殊の白槌するを必せん。『涅槃経』に云く、「仙陀婆は一名にして四実あり。一には塩、二には水、三には器、四には馬なり。一の智臣有って、善く四義を会す。王若し灑洗わんと欲して仙陀婆を要すれば、臣即ち水を奉ず。食するときに索むれば塩を奉じ、食べ訖れば器を奉じて漿を飲ましむ。出でんと欲すれば馬を奉ず。意に随い応用差うこと無し」と。灼然に、須是らく箇の伶俐き漢にして始めて得し。只如ば、僧、香厳に問う、「如何なるか是れ王、仙陀婆を索む」。厳云く、「這辺に過来せ」と。僧、過す。厳云く、「人を鈍置殺す」と。又た趙州に問う、「如何なるか是れ王、仙陀婆を索む」。州、禅床を下りて、曲躬叉手す。当時若し箇の仙陀婆有りて、世尊未だ座に陞らざる已前に

透(み)去(ぬ)かば、猶お較(たが)うも些子(わずか)なり。世尊更に座に陞り、便ち下り去る。已是(すで)に便(たより)を著(え)ずして了れり。那(なん)ぞ堪(た)えん、文殊更に白槌するに。不妨(なかなか)に他(か)の世尊の一上(ひとしきり)の提唱を鈍置(こけに)す。且(さ)て作麼生(いかなる)か是れ鈍置(こけに)せる処。

＊涅槃～始得〔七四字〕　福本に無し。

一 世尊が説法したという山。霊鷲山。二 常人を超えた眼力を具え、魔よけの護符を身に着けて。三 香厳智閑(ちかん)(?—八九八)。四 この私をとことんコケにしてくれた。五 趙州従諗(じゅうしん)(七七八—八九七)。六 丁寧におじぎをする。七 透脱する。八 首尾よく事が運ばなかった。つけこむ隙がなかった。

第九三則　大光師作舞

【本則】挙。僧問大光[一]、長慶道[二]、因[三]斎慶讃、意旨如何。〔重光[四]。這漆桶[五]、不妨疑著。不問不知。〕大光作舞。〔莫賺殺人。依旧従前恁麼来。〕僧礼拝。〔又恁麼去也。是則是、只恐錯会。〕光云、見箇什麼、便礼拝。〔也好一拶。須辨過始得[六]。〕僧作舞。〔依[七]様画猫児。果然錯会。弄光影漢[八]。〕光云、這[九]野狐精。〔此恩難報。三十[一〇]二祖、只伝這箇。〕

第九三則　大光師、舞を作す

【本則】挙す。僧、大光に問う、「長慶道く、『斎に因って慶讃す』と。意旨如何」。〔重ねて光れり。這の漆桶、不妨に疑著う。問わざれば知らず。〕大光、舞を作す。〔人を賺殺すこと莫れ。依旧として従前より恁麼にし来たる。〕僧、礼拝す。〔又た恁麼にし去る。是なることは則ち是なるも、只だ恐らくは錯り会せん。〕光云く、「箇の什麼を見てか、便ち礼拝する」。〔也た好し一拶するに。須らく辨過して始めて得し。〕僧、舞を作す。〔様に依りて猫児を画く。果然して錯り会す。光影を弄する漢。〕光云く、「這の野狐精」。〔此の恩は報い難し。三十二祖只だ這箇を伝うのみ。〕

一 大光居誨(八三七―九〇三)。 二 長慶慧稜(八五四―九三二)。 三 第七四則・本則に既出。食事の時に便乗して「ありがたや」と唱える。 四 (第七四則に続いて)再び光があてられた。 五 真黒で見てとれぬもの。 六 吟味を加える。 七 手本どおりに猫を描く。猿真似。 八 いわくありげなしぐさをやら

かす男。九　このイカサマ野郎。一〇　評唱の「西天四七、唐土二三」と同じ。西天の二十八祖と東土の六祖。第一五則・頌では「三十三人」とする。それが正しい。

〔評唱〕西天四七、唐土二三、只伝這箇些子。諸人還知落処麼。若知、免得此過。若不知、依旧只是野狐精。有者道、是裂転他鼻孔来瞞人。若真箇恁麼、成何道理。大光善能為人、他句中有出身之路。大凡宗師、須与人抽釘抜楔、去粘解縛、方謂之善知識。大光作舞、這僧礼拝。末後僧却作舞、大光云、這野狐精。不是転這僧、畢竟不知*一的当。你只管作舞、遞相恁麼、到幾時得休歇去。大光道、野狐精。此語截断二金牛。不妨奇特。所以道、三他参活句、不参死句。雪竇只愛他道、這野狐精。所以頌出。且

〔評唱〕西天の四七、唐土の二三、只だ這箇些子を伝う。諸人還た落処を知るや。若し知らば、此の過を免れ得ん。若し知らずんば、依旧として只だ是れ野狐精。有る者は道う、「是れ他の鼻孔を裂転げ来たりて人を瞞すなり」と。若し真箇に恁麼ならば、何の道理をか成さん。大光は善能く人の為にし、他の句中に出身の路有り。大凡そ宗師は須らく人の与に釘を抽き楔を抜き、粘を去り縛を解いて、方めて之を善知識と謂う。大光舞を作し、這の僧礼拝す。末後に僧却って舞を作し、大光「這の野狐精」と云う。是れ這の僧を転ずるにあらず、畢竟的当を知らざるなり。你只管に舞を作し、遞相に恁麼にすれば、幾時に到りて休歇り去るを得ん。大光道く、「野狐精」と。此の語、金牛を截断す。不妨に奇特なり。所以に道う、「他活句に参じて

道、這野狐精、与蔵頭白海頭黒、是同是別。這漆桶、又道、好師僧。且道、是同是別。還知麼。触処逢渠。雪竇頌云、

死句に参ぜず」と。雪竇只だ他の「這の野狐精」と道うを愛す。所以に頌出す。且道、「這の野狐精」と「蔵頭は白く海頭は黒し」と、是れ同じか是れ別か。「這の漆桶」と、又た道く、「好き師僧」と。且道、是れ同じか是れ別か。還た知るや。触処に渠に逢う。雪竇の頌に云く、

＊不知的当　福本は「這僧不知端的」。

一 端的。勘どころをつかむこと。 二 第七四則を参照。 三 第三九則・本則の評唱などに既出。 四 第七三則を参照。 五 雪峰義存（八二二―九〇八）の語（『宗門統要集』一六）に見える。 六 主人公（絶対主体）を指す。

【頌】前箭猶軽後箭深、〔百発百中。向什麼処廻避。〕誰云黄葉是黄金。〔且作止啼。瞞得小児、也無用処。〕曹渓波浪如相似、〔弄泥団漢、有什麼限。依様画猫児、放行一路。〕無限平人被陸沈。〔遇著活底人。帯累天下衲僧、摸索不著、帯累闍黎、出

【頌】前の箭は猶お軽きも後の箭は深し、〔百発百中。什麼処にか廻避せん。〕誰か云う黄葉は是れ黄金と。〔且く啼くを止むるを作すのみ。小児は瞞し得るも、也た用処無し。〕曹渓の波浪如し相似たらば、〔泥団を弄する漢、什麼の限りか有らん。様に依りて猫児を画き、一路を放行す。〕限り無き平人は陸沈せられん。〔活底人に遇著す。天下の衲僧を帯累して摸索不著らしめ、

頭不得。」

闍黎を帯累して頭を出だし得ざらしむ。」

一『涅槃経』嬰児品にある話。泣く子をあやすため、父母が黄葉を黄金だと言って与えた。二 曹渓すなわち六祖慧能(六三八―七一三)以来の禅の流派。三 金牛・長慶・大光が一つの型にはまっていたなら。四 ほしいままに同じことをしている。五 普通の人、罪もない人。まともなふつうの修行者たち。六 生きながら滅びる。

〔評唱〕前箭猶軽後箭深。大光作舞、是前箭。復云、這野狐精、是後箭。此是従上来爪牙。誰云黄葉是黄金。仰山示衆云、汝等諸人、各自回光返照、莫記吾言。汝等無始劫来、背明投暗、妄想根深、卒難頓抜。所以仮設方便、奪汝麤識。如将黄葉止小児啼。如将蜜果換苦葫蘆相似。古人権設方便為人。及其啼止、黄葉非金。世尊説一代時教、也只是止啼之説。這野狐精、只要換他業識。於中也有権実、也有照用、方見有衲僧巴鼻。

〔評唱〕「前の箭は猶お軽きも後の箭は深し」と。大光、舞を作す、是れ前の箭なり。復た云く、「這の野狐精」と、是れ後の箭なり。此れは是れ従上来の爪牙なり。「誰か云う黄葉は是れ黄金と」と。仰山、衆に示して云く、「汝等諸人、各自に回光返照せよ、吾が言を記すること莫れ。汝等は無始劫来、明に背いて暗に投じ、妄想の根深くして、卒に頓には抜き難し。所以に仮に方便を設けて、汝の麤識を奪う。黄葉を将て小児の啼くを止むるが如し」と。蜜き果を苦き葫蘆と換うるが如くに相似たり。古人権に方便を設けて人の為にす。其の啼き止むに及ぶや、黄葉は金に非ず。世尊の一代時教を説くも、也た只だ是れ啼くを止むる

若会得、如虎挿翼。曹渓波浪如相似。儻忽四方八面学者、只管大家如此作舞、一向恁麼、無限平人被陸沈、有什麼救処。

の説なり。「這の野狐精」とは、只だ他の業識を換えんと要す。中に也た権実有り、也た照用有りて、方めて衲僧の巴鼻有るを見ん。若し会得せば、虎に翼を挿むが如くならん。「曹渓の波浪如し相似たらば」と。儻忽四方八面の学者、只管大家で此の如く舞を作し、一向に恁麼にせば、限り無き平人は陸沈せられて、什麼の救う処か有らん。

一 つめときば。教導のための厳しい手段。 二 仰山慧寂（八〇七―八八三）。語は『伝灯録』一一・仰山章に見える。 三 自らの内なる智慧の光で自らを照明する。『伝灯録』では「回光返顧」。 四 業識、妄心。 五 『伝灯録』では「如将黄葉止啼、有什麼是処」。 六 第八七則・本則の評唱にも。 七 仮の手立てと真実究極のもの。 八 相手の内実を見て取るはたらきと相手へ仕向けるはたらき。 九 禅僧の本領。

第九四則　楞厳経若見不見

一垂示云、声前一句、千聖不伝。面前一糸、長時無間。浄裸裸、赤灑灑、二露地白牛。三眼卓朔、耳卓朔、金毛獅子則且置。且道、作麼生是露地白牛。

第九四則　楞厳経(りょうごんきょう)、若(も)し不見を見れば

垂示に云く、声前の一句は、千聖も伝えず。面前の一糸は、長時無間(むけん)なり。浄裸裸(じょうらら)、赤灑灑(しゃくしゃしゃ)、露地(ろじ)の白牛(びゃくご)。眼卓朔(たくさく)、耳卓朔、金毛の獅子は則ち且(さ)て置く。且道(さて)、作麼生(いかなる)か是れ露地の白牛。

一 第九〇則の垂示を参照。 二『法華経』譬喩品に見える、屋外に駐められた車を牽く白い牛。一仏乗（唯一絶対の悟りに至る道）の喩え。 三 眼はギロリと見開かれ、耳はピンと突っ立っている。

【本則】挙。一楞厳経云、二吾不見時、何不見吾不見之処。〔*好箇消息。用見作什麼。釈迦老子、漏逗不少。〕若見不見、自然非彼不見之相。〔咄。有甚閑工夫。**不可教山僧作両頭三面去也。〕若不見吾不見之地、〔向什麼処去也。釘鉄橛相似。咄。〕自然非

【本則】挙(こ)す。『楞厳経(りょうごんきょう)』に云く、「吾れ見ざる時、何ぞ吾が不見の処を見ざる。〔好箇(よき)消息なり。見ることを用いて什麼(なに)か作(せ)ん。釈迦老子、漏逗(ぼろだし)少なからず。〕若し不見を見れば、自然に彼(か)の不見の相に非ず。〔咄(とつ)。甚(なん)の閑工夫(ひま)か有らん。山僧(それがし)をして両頭三面と作(な)り去らしむべからず。〕若し吾が不見の地を見ざれば、〔什麼(いず)処(こ)にか去(ゆ)く。鉄橛(てつけつ)を釘(くぎう)つに相似たり。咄(とつ)。〕自然に物

物[三]。〔按牛頭喫草。更[四]説什麼口頭声色。〕云何非汝。〔説你説我、総没交渉。打云、還見釈迦老子麼。争奈古[五]人不肯承当。打云、脚跟下自家看取。還会麼。〕

に非ず。〔牛の頭を按えて草を喫わしむ。更に什麼の口頭の声色とか説わん。〕云何ぞ汝に非ざる」と。〔你と説い我と説うも総て没交渉。打って云く、還た釈迦老子を見るや。争奈せん古人肯て承当わず。打って云く、脚跟下自ら看取せよ。還た会すや。〕

＊好箇消息　福本は「吾不見時」の下に在る。＊＊不可〜去也（一二字）　福本は「釈迦既是不見、両頭三面」。＊＊＊説你説我　福本は「説得」。＊＊＊＊争奈〜会麼（二〇字）　福本に無し。
一『楞厳経』二による。二 以下、世尊が阿難に対して語る。三（見の）対象。四 口先で言える物など何だというのだ。五 阿難を指す。

【評唱】楞厳経云、吾不見時、何不見吾不見之処。若見不見、自然非彼不見之相。若不見吾不見之地、自然非物。云何非汝。雪竇到此、引経文不尽。全引則可見。経云、若見是物、則汝亦可見吾之見。若同見者、名為見吾、吾不見時、何不見吾不見之処。若見不見、自然非彼不見之相。若不

〔評唱〕『楞厳経』に云く、「吾れ見ざる時、何ぞ吾が不見の処を見ざる。若し不見を見れば、自然に彼の不見の相に非ず。若し吾が不見の地を見ざれば、自然に物に非ず。云何ぞ汝に非ざる」と。雪竇此に到って、経文を引き尽さず。全て引かば則ち見るべし。経に云く、「若し見是れ物ならば、則ち汝も亦た吾が見を見るべし。若し同じく見る者を、名づけて吾れを見ると為さば、吾れ見ざる時、何ぞ吾が不見の処を見ざる。

見吾不見之地、自然非物。云何非汝。辞多不録。阿難意道、世界灯籠露柱、皆可有名。亦要世尊指出此妙精元明、喚作什麼物、教我見仏意。世尊云、我見香台。阿難云、我亦見香台、即是仏見。世尊云、我見香台則可知、我若不見香台時、你作麼生見。阿難云、我不見香台時、即是見仏。仏云、我云不見、自是我知。汝云不見、自是汝知。他人不見処、你如何得知。古人云、到這裏、只可自知。与人説不得。只如世尊道、吾不見時、何不見吾不見之処。若見不見、自然非彼不見之相。若不見吾不見之地、自然非物。云何非汝。若道認見為有物、未能払迹。吾不見時、如羚羊掛角、声響蹤跡気息都絶。你向什麼処摸索。

若し不見を見れば、自然に彼の不見の相に非ず。若し吾が不見の地を見ざれば、自然に物に非ず。云何か汝に非ざる」と。辞多ければ録せず。阿難の意に道く、「世界の灯籠露柱は皆な名有るべし。亦た要めん、世尊の、此の妙精元明を指出して喚んで什麼物と作し、我をして仏の意を見しむるを」と。世尊云く、「我は香台を見る」。阿難云く、「我も亦た香台を見る、即ち是れ仏見るなり」。世尊云く、「我の香台を見るは則ち知るべきも、我若し香台を見ざる時、你作麼生か見る」。阿難云く、「我香台を見ざる時、即ち是れ仏を見るなり」。仏云く、「我見ずと云わば、自ずから是れ我知る。汝見ずと云わば、自ずから是れ汝知る。他人の見ざる処、你如何か知るを得ん」と。古人云く、「這裏に到って、只だ自知すべし。人には説き得ず」と。只如ば、世尊の「吾見ざる時、何ぞ吾が不見の処を見ざる。若し不見を見れば、自然に彼の不見の相に非ず。若し吾が不見の地を見ざれば、自然に物に非ず。云何

経意、初縦[六]破、後奪[七]破。雪竇出教眼[八]頌。亦不頌物、亦不頌見与不見、直只頌見仏也。

か汝に非ざる」と道うは、若し「見を認めて物有りと為す」と道わば、未だ迹を払う能わず。「吾れ見ざる時」は、羚羊の角を掛くるが如く、声響も蹤跡も気息も都て絶ゆ。你什麼処にか摸索せん。経の意、初めは縦破し、後は奪破す。雪竇は教眼を出だして頌す。亦た物を頌せず、亦た見と不見とを頌せず、直に只だ仏を見るを頌するのみ。

一 仏の十大弟子の一人。この時の仏との対話者。 二 自性清浄心のこと。 三 香炉・香合を置く台。 四 未詳。 五 羚羊は眠るとき角を木の枝に掛け、脚を地から離して痕跡を絶つという。 六 好きなようにさせる。 七 身動きもさせない。 八 教えの眼目。

【頌】全象全牛[一]瞖不殊、〔半辺瞎漢[*]、半開半合[二]。扶籬摸壁[三]作什麼。一刀両段。〕従来作者共名模。〔西天四七、唐土二三。天下老和尚、如麻似粟、猶自少在[**]。〕如今要見黄頭老[四]、〔咄。這老胡[五]。瞎漢[***]在你脚跟下。〕刹刹塵[六]塵在半途。〔脚跟下蹉過了也。更教

【頌】全象全牛瞖なるは殊ならず、〔半辺の瞎漢、半は開き半は合ず。籬に扶り壁を摸りて什麼か作ん。一刀両段せん。〕従来作者も共に名模す。〔西天の四七、唐土の二三。天下の老和尚、麻の如く粟の似きも、猶自少くる在。〕如今黄頭老を見んと要せば、〔咄。這の老胡。瞎漢、你の脚跟下に在り。〕刹刹塵塵、半途に在り。〔脚跟下に蹉過い了れり。更に山僧をして什麼

山僧説什麼。驢[七]年還曾夢見麼。」

をか説わしめん。驢年にも還た曾て夢に見しや。」

＊半辺瞎漢　福本に無し。　＊＊猶自少在　福本は「自在自在」。　＊＊＊瞎漢在你脚跟下　福本は「在你脚跟下、瞎漢」。

一 象や牛の全体を見たといっても眼病のせいで在りもしない物が見えたに過ぎない。 二 ただ言葉でそれをなぞるだけ。 三 その物に名称を与える。「名邈」と同じ。 四 世尊のこと。第五一則・頌にも。 五 世尊を指す。胡とはインド人。 六 刹塵は無数の国土。それらを一つ一つ尋ねても到達できない。 七 いくら年をとっても、夢にさえ見ることはなかろう。

【評唱】全象全牛瞖不殊、衆盲摸象、各説異端、出涅槃経。[一] 僧問仰山和尚、[二] 見人問禅問道、便作一円相、於中書牛字。意在於何。仰山云、這箇也是閑事。[三] 忽若会得、不従外来。忽若不会、決定不識。我且問你、諸方老宿、於你身上、指出那箇是你仏性。為復語底是、黙底是。莫是不語不黙底是。為復総是、為復総不是。你若認語底是、如盲人摸著象尾。若認黙底是、

【評唱】「全象全牛瞖なるは殊ならず」と、衆盲、象を摸り、各 異端を説うこと、『涅槃経』に出づ。僧、仰山和尚に問う、「人の禅を問い道を問うを見て、便ち一円相を作し、中に牛の字を書く。意何にか在る」。仰山云く、「這箇也た是れ閑事。忽若会得せば、外より来たらず。忽若会せざれば、決定ずや識らず。我且ず你に問わん、諸方の老宿、你の身の上に於て那箇か是れ你の仏性と指出すや。為復語る底是か黙する底是か。是れ語らず黙せざる底是なら莫ずや。為復総て是か、為復総て是ならざるか。你若し語る底是と認むれば、

如盲人摸著象耳。若認不語不黙底是、如盲人摸著象鼻。若道物物都是、如盲人摸著象四足。若道総不是、抛本象落在空見。如是衆盲所見、只於象上、名邈差別。你要好、切莫摸象。莫道見覚是、亦莫道不是。祖師云、菩提本無樹、明鏡亦無台。本来無一物、争得染塵埃。

又云、道本無形相、智慧即是道。作此見解者、是名真般若。明眼人見象、得其全体、如仏見性亦然。全牛者出荘子。庖丁解牛、未嘗見其全牛、順理而解、游刃自在、更不須下手。纔挙目時、頭角蹄肉、一時自解了。

盲人の象の尾を摸著るが如し。若し黙する底是なりと認むれば、盲人の象の耳を摸著るが如し。若し語らず黙せざる底是なりと認むれば、盲人の象の鼻を摸著るが如し。若し物物都て是なりと道わば、盲人の象の四足を摸著るが如し。若し総て是ならずと道わば、本象を抛って空見に落在す。是の如く衆盲の見る所、只だ象の上に於て名邈し差別す。你好からんと要せば、切に象を摸ること莫れ。道うこと莫れ見覚是なりと、亦た道うこと莫れ是ならずと。祖師云く、『菩提は本より樹無く、明鏡も亦た台無し。本来無一物、争か塵埃に染むることを得ん』と」と。

又た云く、「道は本より形相無し、智慧即ち是れ道。此の見解を作す者、是を真の般若と名づく」と。明眼の人は象を見て其の全体を得、仏の性を見るが如きも亦た然り。「全牛」とは『荘子』に出づ。庖丁は牛を解くに、未だ嘗て其の全牛を見ず。理に順って解き、刃を游ばしむること自在にして、更に手を下すことを

如是十九年、其刃利如新発於硎。謂之全牛。雖然如此奇特、雪竇道、縦使得如此、全象全牛与眼中瞖、更不殊。従来作者共名模。直是作家、也去裏頭摸索不著。[二]自従迦葉、乃至西天此土祖師、天下老和尚、皆只是名模。雪竇直截道、如今要見黄頭老。所以道、要見即便見。更要尋覓方見、則[三]千里万里也。黄頭老、乃黄面老[四]子也。你如今要見、刹刹塵塵在半途。尋常道、[五]一塵一仏刹、一葉一釈迦。尽三千大千世界所有微塵、只向一塵中見、当恁麼時、猶在半途。那辺更有半途在。且道、在什麼処。釈迦老子、尚自不知、教山僧作麼生説得。

須いず。纔に目を挙ぐる時、頭角蹄肉、一時に自ずから解け了る。是の如くすること十九年、其の刃の利きこと新たに硎より発せるが如し。之を全牛と謂う。此の如く奇特なりと雖然も、雪竇道く、「縦使此の如くなるを得るも、全象全牛と眼中の瞖と更に殊ならず。従来作者も共に名模す」と。直是い作家なるも、也た裏頭に去いて摸索不著。迦葉より、西天と此土との祖師まで、天下の老和尚、皆な只だ是れ名模するのみ。雪竇直截に道く、「如今黄頭老を見んと要す」と。所以に道う、「見んと要せば即便ち見よ。更に尋覓して方めて見んと要せば、則ち千里万里」と。「黄頭老」は乃ち黄面の老子なり。你如今見んと要すや、「刹刹塵塵、半途に在り」。尋常道う「一塵一仏刹、一葉一釈迦」と。尽三千大千世界の所有微塵、只だ一塵の中に見るも、恁麼なる時に当って、猶お半途に在り。那辺には更に半途の在れる有り。且道、什麼処にか在る。釈迦老子も尚自知らず、山僧をして作麼生か説得わし

めん。

一 師子吼菩薩品。 二 仰山慧寂(八〇七—八八三)。 三 つまらぬこと。 四 (かってに)名称をつけ形象化する。 五 見聞覚知。 六 六祖慧能(六三八—七一三)。 七 『六祖壇経』(通行本)では「非台」。敦煌本は「無台」。 八 『六祖壇経』では「何処有塵埃」、または「何処惹塵埃」。 九 『六祖壇経』では「般若無形相、智慧心即是。若作如是解、即名般若智」と。 一〇 養生主篇。 一一 料理の名人。 一二 カーシャパ。摩訶迦葉。十大弟子の一人で、西天の第一祖。 一三 全く縁が無い。 一四 おやじ。 一五 『梵網経』に見える。

第九五則　長慶有三毒

垂示云、有仏処不得住、住著頭角生。無仏処急走過、不走過、草深一丈。直饒浄躶躶、赤灑灑、事外無機、機外無事、未免守株待兎。且道、総不恁麼、作麼生行履。試挙看。

一 趙州の語に「有仏処不得住、無仏処急走過」(『伝灯録』二七)と。 二 執着心が生じる。 三「事」は現象、「機」は心のはたらき。徳山の語に「無事於心、無心於事」(『伝灯録』一五)と。 四 同じ処に止まり、自らを転換できない喩え。『韓非子』五蠹による。

【本則】 挙。長慶有時云、寧説阿羅漢有三毒、〔焦穀不生芽。〕不説如来有二種語。〔已是謗釈迦老子了。〕不道如来無語、〔猶自顢頇。早是七穿八穴。〕只是無二種語。〔周由者也。

第九五則　長慶(ちょうけい)、三毒有り

垂示に云く、有仏の処は住(とど)まること不得(なか)れ、住著(とど)まれば頭角生ず。無仏の処は急ぎ走過(とおりす)ぎよ、走過(とおりす)ぎざれば草深きこと一丈。直饒(たとい)浄躶躶(じょうらら)、赤灑灑(しゃくしゃしゃ)にして、事外に機無く、機外に事無きも、未だ株(きりかぶ)を守(まも)りて兎を待つを免れず。且道(さて)、総(すべ)て恁麼(さよう)ならざれば、作麼生(いかに)か行履(あんり)せん。試みに挙(こ)し看ん。

【本則】 挙す。長慶(ちょうけい)有る時云く、「寧(むし)ろ阿羅漢(あらかん)に三毒有りと説(い)うも、〔焦穀は芽を生ぜず。〕如来に二種の語有りと説(い)わず。〔已(す)でに釈迦老子を謗(そし)り了れり。〕如来に語無しとは道(い)わず、〔猶自(なお)顢頇(まんかん)たり。早是(すで)に七穿八穴(あなだらけ)。〕只だ是れ二種の語無し」。〔周由者也。什麼(なん)の第三第四

説什麼第三第四種。〕保福云、作麼生是如来語。〔好一拶。道什麼。〕慶云、聾人争得聞。〔望空啓告。七花八裂。〕保福云、情知你向第二頭道。〔争瞞得明眼人。裂転鼻孔、何止第二頭。〕慶云、作麼生是如来語。〔錯。却較些子。〕保福云、喫茶去。〔領。復云、還会麼。蹉過了也。〕

種とか説わん。〕保福云く、「作麼生か是れ如来の語」。〔好し一拶せん。什麼を道うぞ。〕慶云く、「聾人争か聞くを得ん」。〔空を望いで啓告う。七花八裂なり。〕保福云く、「情に知れり、你が第二頭に向いて道うを」。〔争か明眼の人を瞞し得ん。鼻孔を裂転ぐること、何ぞ止だ第二頭のみならん。〕慶云く、「作麼生か是れ如来の語」。〔錯れり。却って些子く較えり。〕保福云く、「喫茶去」。〔領。復た云く、還た会すや。蹉過い了れり。〕

＊周由者也　福本は「之乎者也」。＊＊領　蜀本は「謹」、楊本は「一」。＊＊領復云還会麼　福本は「須還会著」。

一 長慶慧稜（八五四―九三二）。二 最高位の修行者。三 三つの根本的な煩悩。貪欲（むさぼり）・瞋恚（いかり）・愚痴（おろか）。阿羅漢には有り得ないもの。四 焦げた穀物の種は芽を生じない。菩提心をおこす可能性のないこと。五 方便と真実と。六 ピンぼけ。まがぬけている。七 持って回った言い様。福本の「之乎者也」は、文語調のもったいぶった言い回し。八 保福従展（?―九二八）。九 第二義。方便。10 お茶を飲みに行きなさい（目を覚ましてこい）。11 領解した。よし。

〔評唱〕長慶・保福、在雪峰会下、

〔評唱〕長慶・保福は、雪峰の会下に在って、常に互

常互相[二]挙覚商量。一日平常如此説話云、寧説阿羅漢有三毒、不説如来有二種語。梵語阿羅漢、此云殺賊。以功能彰名。能断九九八十一品煩悩、[三]諸漏已尽、[四]梵行已立。此是[五]無学阿羅漢位。三毒即是貪瞋痴、根本煩悩。八十一品、尚自断尽、何況三毒。

相に挙覚商量す。一日、平常に此の如く説話して云く、「寧ろ阿羅漢に三毒有りと説うも、如来に二種の語有りと説わず」と。梵語には阿羅漢、此には殺賊と云う。功能を以て名を彰す。能く九九八十一品の煩悩を断ち、諸漏已に尽き、梵行已に立つ。此れは是れ無学阿羅漢の位なり。三毒は即ち是れ貪瞋痴の根本煩悩なり。八十一品すら、尚自断ち尽せり、何ぞ況んや三毒をや。

一 雪峰義存（八二二―九〇八）。 二 啓発し、問答する。 三 もろもろの煩悩。 四 戒律に従った修行生活。 五「無学」は、もはや学修すべきことの無い段階。

長慶道、寧説阿羅漢有三毒、不説如来有二種語。大意要顕如来無不実語。[一]法華経云、唯此一事実、餘二則非真。[二]又云、唯有一乗法、無二亦無三。[三]世尊三百餘会、観機逗教、応病与薬。万種千般説法、畢竟無二種語。他意到這裏。諸人作麼生見得。[四]仏以

長慶道く、「寧ろ阿羅漢に三毒有りと説うも、如来に二種の語有りと説わず」と。大意は、如来に不実の語無きを顕さんと要す。『法華経』に云く、「唯だ此の一事のみ実なり、餘の二は則ち真に非ず」。又た云く、「唯だ一乗の法のみ有りて、二無く亦た三無し」と。世尊は三百餘会、機を観て教を逗れ、病に応じて薬を与う。万種千般の説法、畢竟二種の語無し。他の意這

一音演説法、則不無。長慶要且未夢見如来語在。何故。大似人説食、終不能飽。保福見他[五]平地上説教、遂問、作麼生是如来語。慶云、聾人争得聞。這漢知他幾時在鬼窟裏作活計来也。保福云、情知你向第二頭道。果中其言。却問、師兄、作麼生是如来語。福云、喫茶去。鎗頭倒被別人奪却了也。大小長慶、失銭遭罪。且問諸人、如来語還有幾箇。須知恁麼見得、方見這両箇漢[六]敗欠。子細検点将来、尽合喫棒。放一線道、与他理会。

裏に到る。諸人作麼生か見得せん。「仏は一音を以て法を演説ぶ」は、則ち無きにあらず。長慶は要且に未だ夢にも如来の語を見ざる在。何故ぞ。人の食を説いて、終に飽くこと能わざるに大いに似たり。保福は他の平地上に教を説くを見て、遂に問う、「作麼生か是れ如来の語」。慶云く、「聾人争か聞くを得ん」と。這の漢は知他幾時か鬼窟裏に活計を作し来たる。保福云く、「情に知れり、你が第二頭に向いて道うを」と。果して其の言に中れり。却に問う、「師兄、作麼生か是れ如来の語」。福云く、「喫茶去」と。鎗頭は倒に別人に奪却われ了る。大小の長慶も銭を失い罪に遭えり。且て諸人に問わん、「如来の語還た幾箇か有る」。須らく知るべし、恁麼に見得して、方めて這の両箇の漢の敗欠を見んことを。子細に検点し将ち来たらば、尽く合に棒を喫すべし。一線の道を放って、他に理会せしむ。

一 方便品の偈。岩波文庫『法華経』上(一〇六頁)。 二 同上。 三 世尊の生涯にわたる説法の概数。第

六則・頌の評唱などでは「三百六十会」。四『維摩経』仏国品の偈。五 安穏に。型通りに。六 一つのヒントを与えてやる。

有底云、保福道得是、長慶道得不是。只管随語生解便道、有得有失。殊不知、古人如撃石火、似閃電光。如今人不去他古人転処看、只管去句下走便道、長慶当時不便用、所以落第二頭、保福云、喫茶去、便是第一頭。若只恁麼看、到弥勒下生、也不見古人意。若是作家、終不作這般見解。跳出這窠窟、向上自有一条路。你若道、聾人争得聞、有什麼不是処、保福云喫茶去、有什麼是処、転没交渉。是故道、他参活句、不参死句。這因縁与偏身是通身是因縁一般、無你計較是非処。須是你脚跟下浄裸裸地、方見古人相見処。五祖老師云、

有る底は云う、「保福は道い得て是なり、長慶は道い得て是ならず」と。只管に語に随って解を生じて、便ち道う、「得有り失有り」と。殊に知らず、古人は撃石火の如く、閃電光の似きを。如今の人他の古人の転処に去いて看ず、只管に句下を走きて、便ち道う、「長慶は当時便ち用いず、所以に第二頭に落つ、保福の『喫茶去』と云うは便ち是れ第一頭」と。若し只だ恁麼に看れば、弥勒下生に到るも也た古人の意を見ざらん。若是作家ならば、終に這般る見解を作さず。這の窠窟を跳出して、向上に自ずから一条の路有り。你若し「『聾人争か聞くを得ん』というに什麼の是ならざる処か有らん、保福『喫茶去』と云うに什麼の是なる処か有らん」と道わば、転た没交渉。是の故に道う、「他活句に参じて死句に参ぜず」と。這の因縁は「偏身是か、通身是か」の因縁と一般く、你が計較是非す

如馬前相撲相似。須是眼辨手親。這箇公案、若以正眼観之、倶無得失処、辨箇得失、無親疎処、分箇親疎、長慶也須礼拝保福始得。何故。這箇些子巧処、用得好。如電転星飛相似。保福不妨牙上生牙、爪上生爪。頌云、

る処無し。須是らく你の脚跟下、浄裸裸地として、方めて古人相見の処を見るべし。五祖老師云く、「馬前の相撲の如くに相似たり」と。須是らく眼辨じ手親しかるべし。這箇の公案、若し正眼を以て之を観て、倶に得失無き処に箇の得失を辨じ、親疎無き処に箇の親疎を分たば、長慶も也た須らく保福を礼拝して始めて得し。何故ぞ。這箇の些子なる巧処は用い得て好し。電転じ星飛ぶが如くに相似たり。保福は不妨に牙上に牙を生じ、爪上に爪を生ず。頌に云く、

＊処辨〜親疎〔一三字〕 蜀本は「却於無得失処、弁箇得失、無親疎処、分箇親疎」。福本は「是非、却於無得失処、弁箇得失、分箇親疎」。

一 転換された視点の勘どころ。一段上へ転ずる機用。 二 一切の人が救われるというめでたい世になっても。未来永劫に。 三 第八九則・頌。 四 五祖法演(?—一一〇四)。語は第二六則・本則の評唱に既出。 五 それと見て取るなり手もピタリと対応する。 六 第三七則・本則の評唱などに既出。

【頌】 頭兮第一第二、〔我王庫中、無如是事。古今榜様。随邪逐悪作什麼。〕臥龍不鑑止水。〔同道方知。〕

【頌】 頭たり第一第二、〔我が王の庫の中に是の如き事無し。古今の榜様。邪に随い悪を逐って什麼か作ん。〕臥龍は止水に鑑さず。〔同道にして方めて知る。〕

無処有月波澄、〔四海孤舟独自行。徒労卜度。討什麼椀。〕有処無風浪起。〔嚇殺人。還覚寒毛卓竪麼。打云、来也。〕[四]稜禅客、稜禅客、〔勾賊破家。鬧市裏莫出頭。失銭遭罪。〕[五]三月禹門遭点額。〔退己譲人、万中無一。只得飲気呑声。〕

無き処には月有って波澄み、〔四海孤舟独り行く。徒らに卜度る。什麼なる椀を討むるや。〕有る処には風無くして浪起る。〔人を嚇殺す。還た寒毛の卓竪つことを覚ゆるや。打って云く、来たれり。〕稜禅客、稜禅客、〔賊を勾いて家を破らる。鬧市裏に出頭すること莫れ。銭を失い罪に遭う。〕三月の禹門、点額に遭わん。〔己を退けて人に譲るもの、万の中に一も無し。只だ気を飲み声を呑むことを得たり。〕

一 第一頭、第二頭と。二 昔から変わらぬ標識、お手本。三 潜龍は静まりかえった水面に姿を現さない。「止水」は一つの境地に収まりかえることの象徴。四 長慶慧稜のこと。五 三月に禹門（龍門）を突破した魚は龍になれるが、そこで額を打ちつけたら引き下がるしかない。第七則・頌および第六〇則・頌を参照。

〔評唱〕頭兮第一第二、人只管理会[一]第一第二、正是死水裏作活計。這箇機巧、你只作第一第二会、且摸索不著在。雪竇云、臥龍不鑑止水。死水裏豈有龍蔵。若是第一第二、正是止

〔評唱〕「頭たり第一第二」とは、人只管に第一第二を理会せば、正に是れ死水裏に活計を作す。這箇の機巧、你只だ第一第二の会を作さば、且ず摸索不著ざる在。雪竇云く、「臥龍は止水に鑑さず」と。死水裏に豈に龍の蔵ること有らんや。若是第一第二ならば、正

水裏作活計。須是洪波浩渺、白浪滔天処、方有龍蔵。正似前頭云、[二]澄潭不許蒼龍蟠。不見道、[三]死水不蔵龍。又道、[四]臥龍長怖碧潭清。所以道、無龍処有月波澄、風恬浪静。有龍処無風起浪。大似保福道喫茶去。正是無風起浪。雪竇到這裏、一時与你打畳情解頌了也。佗有餘韻、教成文理、依前就裏頭著一隻眼。也不妨奇特。却道、稜禅客、稜禅客、三月禹門遭点額。長慶雖是透龍門底龍、却被保福[五]驀頭一点。

に是れ止水裏に活計を作す。須是らく洪波浩渺、白浪天に滔く処にして、方めて龍の蔵ること有り。正に前頭に「澄潭は許さず蒼龍の蟠るを」と云うに似たり。見道ずや、「死水は龍を蔵さず」と。又た道う、「臥龍は長に怖る碧潭の清きを」と。所以に道う、「龍無き処には月有って波澄み、風恬かに浪静かなり。龍有る処には風無くして浪を起す」と。保福の「喫茶去」と道うに大いに似たり。正に是れ風無きに浪を起すなり。雪竇這裏に到って、一時に你の与に情解を打畳して、頌し了れり。佗、餘韻有って、文理を成さしめ、依前として裏頭に就いて、一隻眼を著く。也た不妨に奇特なり。却って道う、「稜禅客、稜禅客、三月の禹門、点額に遭わん」と。長慶は是れ龍門を透る底の龍なりと雖も、却って保福に驀頭に一点せらる。

一 かまいつける、とりあう。 二 第一八則・頌の句。 三 第二〇則・頌の評唱に既出。 四 第一八則・頌の評唱などに既出。 五 頭めがけてまっこうから一撃された。

第九六則　趙州三転語

【本則】　挙。趙州示衆三転語。〔道什麼。三段不同。〕

第九六則　趙州の三転語

【本則】　挙す。趙州、衆に三転語を示す。〔什麼を道うぞ。三段同じからず。〕

一 趙州従諗(七七八―八九七)。二「転語」は、心機一転させる語句。『趙州録』中に「金仏不度炉、木仏不度火、泥仏不度水、真仏内裏坐」とある、はじめの三句。

〔評唱〕　趙州示此三転語了、末後却云、真仏屋裏坐。這一句忒煞郎当。他古人出一隻眼、垂手接人、略借此語通箇消息、要為人。你若一向正令全提、法堂前草深一丈。雪竇嫌他末後一句漏逗、所以削去、只頌三句。泥仏若渡水、則爛却了也。金仏若渡鑪中、則鎔却了也。木仏若渡火、便焼却了也。有什麼難会。雪竇一百則

【評唱】　趙州、此の三転語を示し了り、末後に却って云く、「真仏は屋裏に坐す」と。這の一句忒煞だ郎当。他の古人は一隻眼を出だして、手を垂れて人を接し、略ぼ此の語を借りて箇の消息を通じ、人の為にせんと要す。你若し一向に正令全提せば、法堂の前に草深きこと一丈ならん。雪竇他の末後の一句の漏逗するを嫌い、所以に削り去って、只だ三句のみを頌す。泥仏若し水を渡らば、則ち爛却れ了らん。金仏若し鑪中を渡らば、則ち鎔却け了らん。木仏若し火を渡らば、便ち

頌古、[四]計較葛藤、唯此三頌、直下有衲僧気息。只是這頌、也不妨難会。你若透得此三頌、便許你[五]罷参。

焼却け了らん。什麼の会し難きことか有らん。雪竇一百則の頌古、計較葛藤するも、唯だ此の三頌、直下に衲僧の気息有り。只是し這の頌、也た不妨に会し難し。你若し此の三頌を透得せば、便ち你に罷参を許めん。

一 自分の家の中、己れ自身。二 手を差し延べて。三 欽定の法令を全面的に発動する。四 あれこれと言句をひねくりまわす。五 参禅の修了。

【頌】泥仏不渡水、〔浸爛鼻孔。無風起浪。〕[一]神光照天地。〔干他什麼事。[二]見兎放鷹。〕[三]立雪如未休、〔[四]一人伝虚、万人伝実。将錯就錯。阿誰曾見你来。〕何人不[五]雕偽。〔入寺看額。二六時中、走上走下、是什麼。闍黎便是。〕

【頌】泥仏は水を渡らず、〔鼻孔を浸爛す。風無きに浪を起す。〕神光、天地を照す。〔他の什麼なる事にか干らん。兎を見て鷹を放つ。〕雪に立つこと如し未だ休めざれば、〔一人虚を伝えて、万人実を伝う。錯を将て錯を就す。阿誰か曾て你を見来たる。〕何人か雕偽せざらん。〔寺に入りて額を看る。二六時中、走上走下す、是れ什麼ぞ。闍黎便ち是なり。〕

一 霊妙な光。また、二祖慧可（四八七—五九三）のこと。二 機会をぴたりと捉えた対応。三 慧可が雪の中に立ちつくしたように、いつまでも水を渡り切れぬ泥仏であり続けたとしたら。評唱を参照。四 虚構が伝承されるうちに事実とされる。五 巧みをこらして取りつくろう。

【評唱】泥仏不渡水、神光照天地、這一句頌分明了。且道、為什麼却引神光。二祖初生時、神光燭室、亙於霄漢。又一夕神人現、謂二祖曰、何久于此。汝当得道時至、宜[一]即南之。二祖以神遇、遂名神光。久居伊洛、博極群書。毎嘆曰、孔老之教、祖述*風規。近聞、達磨大師住少林。乃往彼、晨[二]夕参扣。達磨端坐面壁、莫聞誨励。光自忖曰、昔人求道、敲[三]骨出髄、刺血済飢、布髪掩泥、投崖飼虎。古尚若此、我又何如。其年十二月九日夜、大雪。二祖立於砌[四]下、遅明積雪過膝。達磨憫之曰、汝立雪於此、当求何事。二祖悲涙曰、惟願慈悲、開甘[五]露門、広度群品。達磨曰、諸仏妙道、曠劫精勤、難行能行、非忍而

【評唱】「泥仏は水を渡らず、神光、天地を照す」と、這の一句の頌もて分明にし了る。且道、為什麼にか却って神光を引く。二祖の初め生まるる時、神光室を燭し、霄漢に亙る。又た一夕神人現れ、二祖に謂いて曰く、「何ぞ此に久しき。汝当に道を得べき時至れり、宜しく即ち南に之くべし」と。二祖、神遇を以て、遂に神光と名づく。久しく伊洛に居い、博く群書を極む。毎に嘆じて曰く、「孔老の教は、風規を祖述す。近ごろ聞くに、達磨大師少林に住す」と。乃ち彼に往きて晨夕参扣す。達磨、端坐面壁して、誨励を聞くこと莫し。光自ら忖りて曰く、「昔人、道を求むるに、骨を敲いて髄を出だし、血を刺りて飢を済い、髪を布いて泥を掩い、崖に投して虎を飼う。古尚お此の若し、我又た何如せん」と。其の年の十二月九日夜、大いに雪ふる。二祖、砌下に立つに、遅明積雪膝を過ぐ。達磨之を憫んで曰く、「汝雪に此に立ち、当も何事をか求むる」。二祖、悲涙して曰く、「惟だ願わくは慈悲

忍。豈以小徳小智、軽心慢心、欲冀[六]真乗。[七]無有是処。二祖聞誨励、向道益切。潜取利刀、自断左臂、致于達磨前。磨知[八]是法器、遂問曰、汝立雪断臂、当為何事。二祖曰、某甲心未安。乞師安心。磨曰、将心来、与汝安。祖曰、覓心了不可得。達磨云、与汝安心[10]竟。後達磨為易其名曰慧可。[九]後接得三祖璨大師。

して、甘露門を開き、広く群品を度いたまえ」。達磨曰く、「諸仏の妙道、曠劫に精勤みて、行い難きを能く行い、忍ぶに非ざるをも忍ぶ。豈に小徳小智、軽心慢心を以て、真乗を欲冀わんや。是の処有ること無し」と。二祖、誨励を聞いて、道に向かうこと益ます切なり。潜に利刀を取って、自ら左臂を断ち、達磨の前に致く。磨、是れ法器なりと知り、遂に問うて曰く、「汝雪に立ちて臂を断つは当た何事の為にするや」。二祖曰く、「某甲心未だ安らかならず。乞う師、安心せしめよ」。磨曰く、「心を将ち来たれ、汝の与に安んぜん」。祖曰く、「心を覓むるに了に得べからず」と。達磨云く、「汝の与に安心し竟れり」と。後に達磨為に其の名を易えて慧可と曰う。後に三祖の璨大師を接得す。

＊祖述　福本・蜀本および『伝灯録』三などは「礼術」。

一 洛陽のあたり。 二 師に参じ、その門をたたくこと。 三 以下、『大般若経』・『賢愚経』・『宝積経』・『金光明経』に見える故事による。 四 石の階段の下。 五 仏の教えをいう。 六 真実の教え。 七 そう

いうことは有り得ない。「無是処」とも。もとは経典の常套語。 八 法を伝えるに足る器量の人物。 九 受け入れる。 一〇 僧璨(?—六〇六)。

既伝法、隠於舒州皖公山[一]。属後周武帝[二]、破滅仏法[三]、沙汰僧[四]、師往来太湖県司空山[五]。居無常処、積十餘載、無人知者。宣律師高僧伝[六]、載二祖事不詳。三祖伝云、二祖妙法、不伝於世。頼値末後依前悟他当時立雪。所以雪竇道、立雪如未休、何人不離偽。立雪若未休、足恭[七]諂詐之人皆効之、一時只成離偽、則是諂詐之徒也。雪竇頌泥仏不渡水、為什麼却引這因縁来用。他参得、意根下[八]無一星事、浄躶躶地、方頌得如此。

(三祖僧璨は)既に法を伝えて舒州の皖公山に隠る。後周の武帝、仏法を破滅し、僧を沙汰するに属いて、師(三祖)は太湖県の司空山に往来す。居に常処無く、十餘載を積むも、人の知る者無し。宣律師の『高僧伝』に、二祖の事を載すること詳らかならず。三祖の伝に云く、「二祖の妙法、世に伝わらず。頼に末後に依前のごとく他の当時雪に立つことを悟るに値う」と。所以に雪竇道く、「雪に立つこと如し未だ休めざれば、何人か離偽せざらん」と。雪に立つこと若し未だ休めざれば、足恭諂詐の人皆な之に効い、一時に只だ離偽を成さん、則ち是れ諂詐の徒なり。雪竇、「泥仏は水を渡らず」を頌すに、為什麼にか、却って這の因縁を引き来たりて用う。他参得して意根下に一星事も無く、浄躶躶地にして、方めて頌し得ること此の如し。

一 安徽省の西北の山。皖山、潜山、天柱山とも。 二 北周の武帝(五四三—五七八)。 三 いわゆる三武

一宗の法難の一つ。四 仏僧を淘汰する。五 安徽省太湖県。六 南山(律)宗の開祖、道宣(五九六—六六七)の『続高僧伝』。ただし、『続高僧伝』に三祖伝は無い。七 度を過ぎてうやうやしくする。「足恭」は『論語』公冶長に「巧言令色足恭」と。八 分別をいささかもはたらかさず。

五祖尋常教人看此三頌。豈不見、[一]洞山初和尚有頌。示衆云、五台山上雲蒸飯、古仏堂前狗尿天。刹竿頭上[二]煎䭔子、三箇胡孫夜[三]簸銭。又[四]杜順和尚道、[五]懐州牛喫禾、益州馬腹脹。天下覓医人、灸猪左膊上。又[六]傅大士頌云、[七]空手把鋤頭、歩行騎水牛。人従橋上過、橋流水不流。又云、石人[八]機似汝、也解唱巴歌。汝若似石人、雪曲応須和。若会得此語、便会他雪竇頌。

五祖は尋常人をして此の三頌を看しむ。豈に見ずや、洞山の初和尚に頌有り。衆に示して云く、「五台山上に雲は飯を蒸し、古仏堂前に狗は天に尿す。刹竿頭上に䭔子を煎き、三箇の胡孫夜に銭を簸ぶ」。又た杜順和尚道く、「懐州に牛は禾を喫い、益州に馬は腹脹る。天下に医人を覓めて、猪の左膊の上に灸す」。又た傅大士の頌に云く、「空手にして鋤頭を把り、歩行にして水牛に騎る。人は橋上を過り、橋は流れて水は流れず」。又た云く、「石人の機汝に似たらば、也た解く巴歌を唱わん。汝若し石人に似たらば、雪曲も応須らく和すべし」と。若し此の語を会得せば、便ち他の雪竇の頌を会せん。

一 洞山守初(九一〇—九九〇)。二 餅の一種。三 銭投げばくち。賭博の一種。四 華厳宗の開祖、杜順(五五七—六四〇)。五 打てば響くツーカーの消息。六 傅翕(四九七—五六九)。「大士」は有徳の

すぐれた人物。七 有無の自在な操縦ぶり。『伝灯録』二七・善慧大士章に見える。八 洛浦元安（八三四—八九八）の語。『会元』六に見える。ただし「応須和」を「也応和」とする。「巴歌」は俗曲、「雪曲」は余りにも調べが高くて和すること不可能とされた名曲。

【頌】 金仏不渡炉、〔燎却眉毛。天上天下、唯我独尊。＊〕人来訪紫胡。[一]〔又恁麼去也。只恐喪身失命。〕牌中[二]数箇字、〔不識字底、猫児也無話会処。＊＊天下衲僧、挿觜不得。只恐喪身失命。〕清風何処無。[三]〔又恁麼去也。頭上漫漫、脚下漫漫。[四]又云、来也。〕

【頌】 金仏は炉を渡らず、〔眉毛を燎却く。天上天下、唯我独尊。〕人来たりて紫胡を訪う。〔又た恁麼にし去れり。只だ恐らくは喪身失命せん。〕牌の中の数箇の字、〔字を識らざる底は、猫児も也た話会する処無し。天下の衲僧、觜を挿み得ず。只だ恐らくは喪身失命せん。〕清風、何処にか無からん。〔又た恁麼にし去れり。頭上漫漫、脚下漫漫。又た云く、来たれり。〕

＊唯我独尊　福本に無し。　＊＊不識〜会処（一一字）　福本は「不識字、猫児也無話会」。
一 紫胡利蹤（八〇〇—八八〇）。子湖とも。 二 評唱を参照。 三 炉の火焔との対比。牌に書かれた文字のお蔭で金仏はめでたく炉を渡りぬけた。 四 思弁の手がかりを断絶された状況。

【評唱】 金仏不渡炉、人来訪紫胡、此一句亦頌了也。為什麼却引人来訪紫胡。須是作家炉韛始得。紫胡和尚

【評唱】「金仏は炉を渡らず、人来たりて紫胡を訪う」と、此の一句に亦た頌し了れり。為什麼にか却って「人の来たりて紫胡を訪う」を引く。須是らく作家

山門立一牌。牌中有字云、紫[二]胡有一狗。上取人頭、中取人腰、下取人脚。擬議則喪身失命。凡見新到、便喝云、看狗。僧纔回首、紫胡便帰方丈。且道、為什麼却[三]咬趙州不得。紫胡又一夕夜深、於後[四]架叫云、捉賊、捉賊。黒地逢著一僧、攔[五]胸捉住云、捉得也、捉得也。僧云、和尚不是某甲。胡云、是則是、只是不肯承当。你若会得這話、便許你咬殺一切人、処処清風凛凛。若也未然、牌中数箇字、決定不奈何。若要見他、但透得尽方見。頌*云、

の炉鞴にして始めて得し。紫胡和尚の山門に一の牌を立つ。牌の中に字有りて云く、「紫胡に一ぴきの狗有り。上は人の頭を取り、中は人の腰を取り、下は人の脚を取る。擬議かば則ち喪身失命す」と。凡そ新到を見ては、便ち喝して云く、「狗を看よ」と。僧、回首くや纔や、紫胡便ち方丈に帰る。且道、為什麼にか、却って趙州を咬み得ざる。紫胡、又た一夕夜深けて、後架に於て叫んで云く、「賊を捉えよ、賊を捉えよ」と。黒地に一僧に逢著すや、胸を攔え捉住えて云く、「捉え得たり、捉え得たり」と。僧云く、「和尚、是れ某甲にあらず」。胡云く、「是なることは則ち是なるも、只だ是れ肯て承当わず」と。你若し這の話を会得せば、便ち你に許む、一切の人を咬殺して、処処清風凛凛たることを。若也未だ然らずんば、牌の中の数箇の字、決定ずや奈何ともならず。若し他を見んと要せば、但だ透得し尽して方めて見ん。頌に云く、

*頌云　福本は「雪竇頌」。

一 ふいご。修行僧を鍛える手段の喩え。二 第二三則・本則の評唱にも。三 趙州に「狗子無仏性」の語があることに因むか。四 洗面所、または便所。五「攔」は、まっこうから、ずばりと。

【頌】木仏不渡火、〔焼却了也。唯我能知。〕常思破竈堕。〔東行西行、有何不可。癩児牽伴。〕杖子忽撃著、〔在山僧手裏。山僧不用人。*阿誰手裏無。〕方知辜負我。〔似你相似。摸索不著、有什麼用処。蒼天蒼天。三十年後始得。寧可永劫沈淪、不求諸聖解脱。若向箇裏薦得、未免辜負。作麼生得不辜負去。拄杖子未免在別人手裏。〕

【頌】木仏は火を渡らず、〔焼却け了れり。唯だ我のみ能く知る。〕常に思う破竈堕。〔東に行き西に行くこと、何の不可か有らん。癩児伴を牽く。〕杖子もて忽ち撃著うるや、〔山僧の手の裏に在り。山僧は人を用いず。阿誰の手の裏にか無き。〕方めて知れり、我に辜負けるを。〔你の似くに相似たり。摸索不著れば什麼の用処か有らん。蒼天、蒼天。三十年後始めて得し。寧ろ永劫に沈淪すべくとも、諸聖に解脱するを求めず。若し箇裏に向いて薦得むるも、未だ辜負けることを免れず。作麼生か辜負かざるを得去らん。拄杖子は未だ別人の手の裏に在るを免れず。〕

＊人阿誰手裏無　福本は「在誰手裏」。

一 竈を撃ちくだいた、あの破竈堕和尚。二（竈神は）せっかくの自分を生かし切れないでいたことに自ら気づき、そのおかげで木仏としてめでたく火を渡りぬけた。「辜負」は、せっかくのものを台な

しにすること。三 石頭希遷(七〇〇―七九〇)の語に「寧可永劫沈淪、終不求諸聖出離」(『祖堂集』四)と。

〔評唱〕 木仏不渡火、常思破竈堕、此一句亦頌了。雪竇因此木仏不渡火、常思破竈堕。嵩山破竈堕和尚、不称姓字、言行叵測、隠居嵩山。一日領徒、[一]入山塢間、有廟甚霊。殿中唯安一竈、遠近祭祀不輟、烹殺物命甚多。師入廟中、以拄杖敲竈三下云、咄。汝本塼[二]土合成、霊従何来、聖従何起、恁麼烹殺物命。又乃撃三下、竈乃自傾破堕落。須臾有一人青衣峨冠、忽然立師前設拝曰、我乃竈神、久受業[三]報。今日蒙師説[四]無生法、已脱此処、生在天中、特来致謝。師曰、汝本有之性、非吾強言。神再拝而没。侍者

〔評唱〕「木仏は火を渡らず、常に思う破竈堕」と、此の一句に亦た頌し了れり。雪竇、此の「木仏は火を渡らず」に因りて、常に破竈堕を思う。嵩山の破竈堕和尚は、姓字を称せず、言行測り叵く、嵩山に隠居す。一日、徒を領いて、山塢の間に入るに、廟の甚だ霊なる有り。殿中に唯だ一つの竈を安き、遠近祭祀して輟めず、物命を烹殺すること甚だ多し。師、廟の中に入り、拄杖を以て竈を敲くこと三下して云く、「咄。汝は本と塼土より合成さるに、霊何よりか来たり、聖何よりか起りて、恁麼に物命を烹殺する」と。又た乃ち撃つこと三下するや、竈乃ち自ら傾き破れ堕落す。須臾して一人の青衣峨冠なるもの有れて、忽然と師の前に立ち、設拝して曰く、「我は乃ち竈神なり、久しく業報を受く。今日、師の無生の法を説くを蒙り、已に

曰、某甲等、久参侍和尚、未蒙指示。竈神得何徑旨、便乃生天。師曰、我只向伊道、汝本塼土合成、霊従何来、聖従何起。侍僧倶無対。師云、会麼。僧云、不会。師云、礼拝著。僧礼拝。師云、破也破也、堕也堕也。侍者忽然大悟。後有僧、挙似安国師。師歎云、此子会尽物我一如。竈神悟此則故是、其僧乃五蘊成身、亦云、破也堕也、二倶開悟。且四大五蘊、与塼瓦泥土、是同是別。既是如此、雪竇為什麼道、杖子忽撃著、方知辜負我。因甚却成箇辜負去。只是未得拄杖子在。且道、雪竇頌木仏不渡火、為什麼却引破竈堕公案。老僧直截与伱説。他意只是絶得失情塵意想、浄躶躶地、自然見他親切処也。

此処を脱し、生じて天中に在り。特に来たりて謝を致す」。師曰く、「汝本有の性なり、吾が強いて言うに非ず」。神、再び拝して没す。侍者曰く、「某甲等、久しく和尚に参侍すれども、未だ指示を蒙らず。竈神は何の徑旨を得てか、便乃ち天に生ずる」。師曰く、「我只だ伊に道う、『汝は本と塼土より合成さるに、霊何よりか来たり、聖何よりか起る』と」。侍僧倶に対うるもの無し。師云く、「会すや」。僧云く、「会せず」。師云く、「礼拝著」。僧、礼拝す。師云く、「破れたり破れたり、堕れたり堕れたり」と。侍者忽然と大悟す。後に僧有り、安国師に挙似す。師歎じて云く、「此の子物我一如を会し尽せり」と。竈神の此れを悟ることは則ち故是、其の僧乃ち五蘊より身を成すに、亦た「破れたり、堕れたり」と云うや、二り倶に開悟す。且て四大五蘊と塼瓦泥土と、是れ同じか是れ別か。既是に此の如くなるに、雪竇は為什麼にか道う、「杖子もて忽ち撃著うるや、方めて知れり、我に辜負ける

を」と。甚に因ってか却って箇の辜負くことを成し去る。只だ是れ未だ拄杖子を得ざる在。且道、雪竇「木仏は火を渡らず」を頌すに、為什麼にか却って破竈堕の公案を引く。老僧直截と伱に説わん。他の意は只だ是れ得失も情塵も意想も絶して浄躶躶地として、自然に他の親切なる処を見せるなり。

＊侍僧　福本・蜀本は「有僧」。

一 山間の部落。二 瓦や土。三 過去の行為の報い。四 一切のものは生滅変化を超えているという理。五 径は捷径。悟りへの近道。六 嵩山慧安(五八二―七〇九)。弘忍の十大弟子の一。七 ものとわれとが一体であること。八 人の肉体と精神とを構成する五つの要素。九 物質を構成する四つの元素、地・水・火・風。

第九七則　金剛経軽賤

垂示云、拈一放一、未是作家。挙一明三、猶乖宗旨。直得天地陡変、四方絶唱、雷奔電馳、雲行雨驟、傾湫倒嶽、甕瀉盆傾、也未提得一半在。還有解転天関、能移地軸底麼。試挙看。

一 手当り次第につかんでは手放す。『龐居士語録』に「拈一放一、未為好手」と。二 第一則の垂示に「挙一明三、目機銖両、是衲僧家尋常茶飯」と。三 四方のだれ一人も唱和できない。四 池の水をくつがえし、高い山をさかさまにする。第六三則の垂示にも。以上は驚天動地の大弁舌のこと。五 それでも問題の半分も言いとめられていない。

【本則】挙。金剛経云、若為人軽賤、〔放一線道。又且何妨。〕是人先世罪業、〔驢駝馬載。〕応堕悪道、〔陥堕了也。〕以今世人軽賤故、〔酬本及末。

第九七則　金剛経の「軽賤」

垂示に云く、一を拈って一を放つは、未だ是れ作家ならず。一を挙げて三を明らむるも、猶お宗旨に乖く。直得い天地陡に変じ、四方絶唱し、雷奔り電馳せ、雲行き雨驟に、湫を傾け嶽を倒し、甕瀉ぎ盆傾くも、也た未だ一半すら提得せざる在。還た解く天関を転じ、能く地軸を移す底有りや。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。『金剛経』に云く、「若し人に軽賤められなば、〔一線の道を放つ。又且何ぞ妨げん。〕是の人は先世の罪業ありて、〔驢に駝せ馬に載す。〕応に悪道に堕すべきを、〔陥堕し了れり。〕今世の人の軽賤むる

只得忍受。〕先世罪業、〔向什麼処摸索。種穀不生豆苗。〕則為消滅。〔雪上加霜又一重。如湯消氷。〕

＊放一線道又且何妨　福本は「放一線也何妨」。　＊＊及　福本は「返」。

一『金剛般若経』能浄業障分。岩波文庫『般若心経・金剛般若経』では八六頁。　＝ずっしりと重いさま。第三三則・頌に「馬載驢駞上鉄船」と。　≡原因に応じて結果が生じる。

【評唱】金剛経云、若為人軽賤、是人先世罪業、応堕悪道、以今世人軽賤故、先世罪業、則為消滅。只拠平常講究、乃経中常論。雪竇拈来頌這意、欲打破教家鬼窟裏活計。昭明太子科此一分、為能浄業障。教中大意、説此経霊験。如此之人、先世造地獄業、為善力強未受、以今世人軽賤故、先世罪業、則為消滅。此経故能消無

を以ての故に、〔本を酬いて末に及ぼす。只だ忍受するを得るのみ。〕先世の罪業は、〔什麼処にか摸索せん。穀を種うれば豆の苗は生えず。〕則ち為に消滅す」と。〔雪上に霜を加うること又た一重。湯の氷を消すが如し。〕

【評唱】『金剛経』に云く、「若し人に軽賤められなば、是の人は先世の罪業ありて、応に悪道に堕すべきを、今世の人の軽賤むるを以ての故に、先世の罪業は、則ち為に消滅す」と。只だ平常の講究に拠らば、乃ち経中の常論なり。雪竇拈り来げて這の意を頌し、教家の鬼窟裏の活計を打破せんと欲す。昭明太子此の一分を科して、能浄業障と為す。教中の大意は、此の経の霊験を説く。此の如き人、先世に地獄の業を造すも、善力強きが為に未だ受けず、今世の人の軽賤むるを以

量劫来罪業、転重成軽、転軽不受、復得仏果菩提。拠教家、転此二十餘張経、便喚作持経。有什麼交渉。有底道、経自有霊験。若恁麼、你試将一巻、放在閑処看。他有感応也無。

ての故に、先世の罪業は、則ち為に消滅す。此の経故より能く無量劫来の罪業を消して、重を転じて軽と成し、軽を転じて受けざらしめ、復た仏果菩提を得せしむ。教家に拠らば、此の二十餘張の経を転ずるを便ち喚んで持経と作す。什麼の交渉か有らん。有る底は道う、「経に自ずから霊験有り」と。若し恁麼ならば、你試みに一巻を閑処に放在いて看よ。他に感応有り也無。

一 講論講経を事とする学問僧。二 梁の武帝の長子、蕭統（五〇一—五三一）。三「科」は段落に分けること。『金剛経』は三十二に区分され、能浄業障分はその第十六。四 仏としての悟りの境界。さとり。五 経典を読誦する。転読。六『金剛経』を指す。「張」は紙の枚数を数えることば。

法眼云、証仏地者、名持此経。経中云、一切諸仏及諸仏阿耨多羅三藐三菩提法、皆従此経出。且道、喚什麼作此経。莫是黄巻赤軸底是麼。且莫錯認定盤星。金剛諭於法。体堅固故、物不能壊、利用故、能摧一切物。擬山則山摧、擬海則海竭。就諭彰名。

法眼云く、「仏地を証する者を、此の経を持すと名づく」と。経中に云く、「一切の諸仏及び諸仏阿耨多羅三藐三菩提の法は、皆な此の経より出づ」と。且道、什麼を喚んでか此の経と作さん。莫是黄巻赤軸の底、是なりや。且も定盤星を錯り認むること莫れ。金剛は法に諭う。体堅固なるが故に物壊する能わず、利用きが故に、能く一切の物を摧く。山に擬すれば則ち山摧

其法亦然。

け、海に擬すれば則ち海竭く。諭に就いて名を彰す。

其の法も亦た然り。

一 法眼文益（八八五—九五八）。ただし、以下の二句は法眼の語ではないらしい。二 完全な悟り。三 「莫是～麼」は推測の句法。～なのか。四 仏典のこと。

此般若有三種。一実相般若、二観照般若、三文字般若。実相般若者、即是真智。乃諸人脚跟下一段大事、輝騰今古、迥絶知見、浄裸裸、赤灑灑者是。観照般若者、即是真境。二六時中、放光動地、聞声見色者是。文字般若者、即能詮文字。即如今説者聴者、且道、是般若、不是般若。古人道、人人有一巻経。又道、手不執経巻、常転如是経。若拠此経霊験、何止転重令軽、転軽不受。設使敵聖功能、未為奇特。

此の般若に三種有り。一に実相般若、二に観照般若、三に文字般若。実相般若とは、即ち是れ真智なり。乃ち諸人脚跟下の一段の大事、今古に輝騰いて、迥に知見を絶し、浄裸裸赤灑灑したる者是れなり。観照般若とは、即ち是れ真境なり。二六時中、光を放ち地を動がし、声を聞き色を見る者是れなり。文字般若とは、即ち能詮の文字。即ち如今説く者聴く者は、且道、是れ般若か、是れ般若にあらざるか。古人道く、「人人一巻の経有り」。又た道く、「手に経巻を執らずして、常に是の如き経を転ず」と。若し此の経の霊験に拠らば、何ぞ止だ重を転じて軽ならしめ、軽を転じて受けざらしむるのみならん。設使聖に敵する功能も、未だ奇特と為ず。

一 第八六則・本則の評唱に「你等諸人脚跟下、各各有一段光明。輝騰今古、迥絶見知」と。 二 言語によって説明すること。 三 天台智顗(五三八—五九七)とされる。 四 経本を手に取って読むことはせず、しかも常に心の中の経を誦えている。

不見[一]龐居士、聴講金剛経、問座主曰、俗人敢有小問、不知如何。主云、有疑請問。士云、[二]無我相、無人相。既無我人相、教阿誰講、阿誰聴。座主無対。却云、某甲依文解義、不知此意。居士乃有頌云、無我亦無人、作麼有[三]疎親。勧君休歴座、争似直求真。金剛般若性、外絶一繊塵。[四]我聞幷信受、総是仮称名。此頌最好、分明一時説了也。

見ずや、龐居士は『金剛経』を講ずるを聴いて、座主に問うて曰く、「俗人敢て小問有り、知らず如何」。主云く、「疑い有らば請う問え」。士云く、「我相も無く人相も無し。既に我人の相無ければ、阿誰をしてか講ぜしめ、阿誰をしてか聴かしめん」と。座主対え無し。却って云く、「某甲は文に依って義を解き、此の意を知らず」と。居士乃ち頌有り、云く、「我も無く亦た人も無し、作麼か疎親有らん。君に勧む、座を歴るを休めよ、争か直に真を求むるに似かん。金剛般若の性、外一繊塵を絶す。我聞幷びに信受、総て是れ仮りに名を称す」と。此の頌最も好し、分明と一時に説き了れり。

一 龐蘊(?—八〇八)。 二 人間には固定的・実体的な自我など無い。 三 疎遠と親縁。遠いと近い。 四 『金剛経』の冒頭の「如是我聞」から、末尾の「信受奉行金剛般若波羅蜜経」まで。つまり、この経

の全文。なお、『龐居士語録』では末句は「総是仮名陳」。

[一]圭峰科四句偈云、[二]凡所有相、皆是虚妄。若見諸相非相、即見如来。此四句偈義、全同証仏地者、名持此経。又道、[三]若以色見我、以音声求我、是人行邪道、不能見如来。此亦是四句偈、但中間取其義全者。僧問[四]晦堂、如何是四句偈。晦堂云、[五]話堕也不知。

圭峰、四句の偈を科して云く、「凡そ所有相は、皆な是れ虚妄なり。若し諸相は相に非ずと見るときは、即ち如来を見る」と。此の四句の偈の義は「仏地を証する者を、此の経を持すと名づく」と全く同じ。又た道く、「若し色を以て我を見、音声を以て我を求むるときは、是の人は邪道を行ずるもの、如来を見ること能わざるなり」と。此れ亦た是れ四句の偈、但だ中間に其の義の全き者を取る。僧、晦堂に問う、「如何なるか是れ四句の偈」。晦堂云く、「話堕するも也た知らず」と。

[一]圭峰宗密（七八〇―八四一）。[二]『金剛経』如理実見分の文。[三]『金剛経』法身非相分の偈。[四]晦堂祖心（一〇二五―一一〇〇）。[五]自分の述べた言葉自体が破綻しているのに気づかない。

雪竇於此経上指出。若有人持此経者、即是諸人[一]本地風光、[二]本来面目。若[三]拠祖令当行、本地風光、本来面目、亦[四]斬為三段。三世諸仏、十二分教、

雪竇、此の経の上に指出す。若し人の此の経を持する者有らば、即ち是れ諸人の本地の風光、本来の面目なり、と。若し祖令当に行わるるに拠らば、本地の風光、本来の面目も、亦た斬って三段と為さん。三世の諸仏、

不消一捏。到這裏、設使有万種功能[五]、亦[六]不能管得。如今人只管転経、都不知是箇什麼道理。只管道、我一日転得多少、只認[七]黄巻赤軸、巡行数墨。殊不知、全従自己本心上起。這箇唯是転処些子。

十二分教も、一捏すら消いず。這裏に到って、設使万種の功能有るも、亦た管得する能わず。如今の人只管に経を転じて、都て是れ箇の什麼なる道理なるかを知らず。只管に「我一日に転得すること多少なり」と道いて、只だ黄巻赤軸の巡行数墨を認むるのみ。殊に知らず、全く自己本心の上より起ることを。這箇唯だ是れ転処の些子なり。

一 本来の落ち着きどころの風景。二 本来の自己。主人公。三 仏祖の提起した理法が目の当たりに実施される。四 バラバラに解体する。五 功徳、霊験。六 この自分を拘束することはできない。七 経典の行を追って墨(文字)を数えるばかり。「巡行数墨」は、字句に拘泥して内容を理解しないことで、「尋行数墨」とも。

大珠[一]和尚云、向空屋裏、堆数函経看。他放光麼。只以自家一念発底心是功徳。何故。万法皆出於自心。一念是霊、既霊即通、既通即変。古人道、青青[二]翠竹尽是真如、鬱鬱黄花無非般若。若見得徹去、即是真如。忽

大珠和尚云く、「空屋裏に数函の経を堆げて看よ。他光を放つや。只だ自家一念発する底の心是れ功徳なるを以てなり。何故ぞ。万法は皆な自心より出づ。一念是れ霊なり、既に霊なれば即ち通じ、既に通ずれば即ち変ず」と。古人道く、「青青たる翠竹は尽く是れ真如、鬱鬱たる黄花は般若に非ざる無し」と。若し見

未見得、且道、作麼生喚作真如。華厳経云、若人欲了知三世一切仏、応観法界性一切唯心造。你若識得去、逢境遇縁、為主為宗。若未能明得、且伏聴処分。雪竇出眼頌大概、要明経霊験也。頌云、

得徹し去らば、即ち是れ真如。忽し未だ見得せずんば、且道、作麼生か喚んで真如と作さん。『華厳経』に云く、「若し人、三世一切の仏を了知せんと欲せば、応に法界の性は一切唯心の造なることを観ずべし」と。你若し識得し去らば、境に逢い縁に遇うに、主と為り宗と為らん。若し未だ明得する能わずんば、且く伏して処分に聴え。雪竇、眼を出だして大概を頌すは、経の霊験を明かさんと要す。頌に云く、

一　馬祖道一の法嗣、大珠慧海。『伝灯録』二八には「師曰、生人持孝、自有感応。非是白骨能有感応。経是文字、紙墨性空、何処有霊験。霊験者在持経人用心。所以神通感物。試将一巻経安著案上、無人受持、自能有霊験否」と。二　『祖庭事苑』五に、道生(?—四三四)の語として見えるが、『伝灯録』六および『会元』三・大珠章では馬鳴の語の中に見える(ただし「尽是真如」を「総是法身」とする)。なお、『祖堂集』一四・大珠章には「青青翠竹是法身、鬱鬱黄花是般若」とある。三　八十巻本『華厳経』一九・昇夜摩天宮品に見える覚林菩薩の偈。

【頌】　明珠在掌、〔上通霄漢、下徹黄泉。道什麼。四辺諳訛、八面玲瓏。〕有功者賞。〔多少分明。随他去

【頌】　明珠は掌に在り、〔上は霄漢に通じ、下は黄泉に徹す。什麼を道うぞ。四辺諳訛なるも、八面玲瓏なり。〕功有る者は賞す。〔多少に分明なり。他に随い

也。忽若無功時、作麼生賞。〕胡漢不来、〔内外絶消息。猶較些子。〕全無伎倆。〔展転没交渉。向什麼処摸索。打破漆桶来、相見。〕伎倆既無〔休去歇去。阿誰恁麼道。〕波旬失途。〔勘破了也。這外道魔王、尋蹤跡不見。〕瞿曇瞿曇、〔仏眼覰不見。咄。*〕識我也無。〔咄。勘破了也。**〕復云、勘破了也。〔一棒一条痕。已在言前。〕

去らん。忽若功無き時は作麼生か賞せん。〕胡漢来たらざれば、〔内外に消息を絶す。猶お些子く較えり。〕全く伎倆無し。〔展転して没交渉。什麼処にか摸索せん。漆桶を打破し来たれば、相見せん。〕伎倆既に無くして、〔休し去り歇し去る。阿誰か恁麼に道う。〕波旬も途を失う。〔勘破了せり。這の外道の魔王、蹤跡を尋ぬるも見えず。〕瞿曇、瞿曇、〔仏眼も覰れども見えず。咄。〕我を識る也無。〔咄。勘破了せり。〕復た云く、「勘破了せり」。〔一棒一条の痕。已に言前に在り。〕

＊咄　福本に無し。　＊＊勘破了也　福本に無し。

一（明珠は）空のはてから地の底まで照らし出す。二 明珠そのものの働き、本領。三 けりをつけた。四 天魔、魔王も手の出しようがない。五 釈迦の姓、ゴータマ。六 棒の一打ちごとに傷あとを残すように、徹底的に叩き上げること。第七八則・本則の著語にも。

【評唱】明珠在掌、有功者賞。若有人持得此経、有功験者、則以珠賞之。他得此珠、自然会用。胡来胡現、漢

【評唱】「明珠は掌に在り、功有る者は賞す」。若し人の、此の経を持し得て、功験有る者有らば、則ち珠を以て之を賞す。他此の珠を得ば、自然に会く用いん。

来漢現。万象森羅、縦横顕現。此是有功勲。法眼云、証仏地者、名持此経。此両句頌公案畢。胡漢不来、全無伎倆。雪竇裂転鼻孔也。有胡漢来、則教你現。若忽胡漢倶不来時、又且如何。到這裏、仏眼也覰不見。且道、是功勲是罪業、是胡是漢。直似[一]羚羊掛角。莫道声響蹤跡、気息也無。向什麼処摸索。至使諸天捧花無路、魔外潜覰無門。是故[二]洞山和尚、一生住院、[三]土地神覓他蹤跡不見。一日厨前[四]抛撒米麪。洞山起心曰、[五]常住物色、何得[六]作践如此。土地神遂得一見、便礼拝。

胡来たれば胡現じ、漢来たれば漢現ぜん。万象森羅、縦横に顕現せん。此れは是れ功勲有るなり。法眼云く、「仏地を証する者を、此の経を持すと名づく」と。此の両句に公案を頌し畢る。「胡漢来たらざれば、全く伎倆無し」と。雪竇鼻孔を裂転げたり。胡漢の来たる有らば、則ち你をして現ぜしめん。若忽胡漢倶に来たらざる時は、又且如何。這裏に到るや、仏眼も也た覰れども見えず。且道、是れ功勲か是れ罪業か、是れ胡か是れ漢か。直に羚羊の角を掛くるに似たり。声響、蹤跡は莫道、気息も也た無し。什麼処にか摸索せん。諸天をして花を捧ぐるに路無く、魔外をして潜に覰うに門無からしむるに至る。是の故に洞山和尚、一生住院のあいだ、土地神、他の蹤跡を覓むるも見えず。一日、厨の前に米麪抛撒さる。洞山、心を起して曰く、「常住の物色、何ぞ作践すること此の如きを得たる」と。土地神、遂に一見するを得て、便ち礼拝す。

一 第九四則・本則の評唱に既出。　二 洞山良价(八〇七—八六九)とされる。　三 鎮守の守り神。　四 米

穀や小麦粉。五 禅院に蓄えてある資材、食料。六 踏みつけにする。

雪竇道、伎倆既無。若到此無伎倆処、波旬也教失途。世尊以一切衆生為赤子。若有一人、発心修行、波旬宮殿、為之振裂。他便来悩乱修行者。雪竇道、直饒波旬恁麼来、也須教失却途路、無近傍処。雪竇更自点胸云、瞿曇瞿曇、識我也無。莫道是波旬、任是仏来、還識我也無。釈迦老子、尚自不見。諸人向什麼処摸索。復云、勘破了也。且道、是雪竇勘破瞿曇、瞿曇勘破雪竇。具眼者、試定当看。

雪竇道く、「伎倆既に無し」と。若し此の伎倆無き処に到れば、波旬も也た途を失わしむ。世尊は一切衆生を以て赤子と為す。若し一人の発心修行するもの有れば、波旬の宮殿、之が為に振裂ぐ。他便ち来たりて修行者を悩乱す。雪竇道く、「直饒波旬恁麼に来たるも、也た須らく途路を失却い、近傍る処無からしむべし」と。雪竇更に自ら点胸して云く、「瞿曇、瞿曇、我を識る也無」と。是れ波旬は莫道、任是仏来たるも、還た我を識る也無、というなり。釈迦老子すら、尚自見えず。諸人什麼処にか摸索せん。復た云く、「勘破了せり」と。且道、是れ雪竇が瞿曇を勘破けるか、瞿曇が雪竇を勘破けるか。具眼の者、試みに定当し看よ。

一 自分の胸を指でトンと突く。自信たっぷりのしぐさ。二 勘どころをつかむ。

第九八則　天平和尚両錯

垂示云、一夏嘮嘮打葛藤、幾乎絆倒五湖僧。金剛宝剣当頭截、始覚従来百不能。且道、作麼生是金剛宝剣。眨上眉毛、試請露鋒鋩看。

一夏安居。四月一六日より七月一五日までの九〇日間の修行。　二 べちゃくちゃとしゃべるさま。　三 国中の僧すべて。五湖には諸説があるが、要するに中国全土のこと。　四 「百不」は強い否定を表す。さっぱり役に立たない。　五 目を見開く。

【本則】挙。天平和尚行脚時、参西院。常云、莫道会仏法、覓箇挙話人也無。〔漏逗不少。〕這漢是則是、争奈霊亀曳尾。〕一日西院遥見、召云、従漪。〔鐃鉤搭索了也。〕平挙頭。〔著。両重公案。〕西院云、錯。〔也須是炉裏煅過始得。劈腹剜心。三要

第九八則　天平和尚の両錯

垂示に云く、一夏嘮嘮と葛藤を打び、幾乎ど五湖の僧を絆倒かす。金剛の宝剣もて当頭に截り、始めて覚く、従来百不能なることを。且道、作麼生か是れ金剛の宝剣。眉毛を眨上して、試みに請う鋒鋩を露し看よ。

【本則】挙す。天平和尚行脚しおりし時、西院に参ず。(西院)常に云く、「仏法を会するは莫道、箇の挙話の人を覓むるも也た無し」と。〔漏逗少なからず。這の漢是なることは則ち是なるも、争奈せん霊亀尾を曳く。〕一日、西院遥かに見て召して云く、「従漪」。〔鐃鉤搭索し了れり。〕平、頭を挙ぐ。〔著れり。両重の公案。〕西院云く、「錯」。〔也た須是らく炉の裏に煅過

印開、朱点窄、未容擬議主賓分。〕這漢平行三両歩。〔已是半前落後。這漢泥裏洗土塊。〕西院又云、錯。〔劈腹剜心。人皆喚作両重公案。殊不知、似水入水、如金博金。〕平近前。〔依前不知落処。展転摸索不著。〕西院云、適来這両錯、是西院錯、是上座錯。〔前箭猶軽後箭深。〕平云、従漪錯。〔錯認馬鞍橋、喚作爺下頷。似恁麼衲僧、打殺千箇万箇、有什麼罪。〕西院云、錯。〔雪上加霜。〕平休去。〔錯認定盤星。果然不知落処。軒知你鼻孔在別人手裏。〕西院云、且在這裏過夏。待共上座商量這両錯。〔西院尋常脊梁硬似鉄。当時何不趕将出去。〕平当時便行。〔也似衲僧。似則似、是則未是。〕

いて始めて得し。腹を劈き心を剜る。三要印開して朱点窄し、未だ擬議を容れずして主賓分かる。〕平、行くこと三両歩す。〔已に是れ半前落後。這の漢、泥裏に土塊を洗う。〕西院又た云く、「錯」。〔腹を劈き心を剜る。人皆な喚んで両重の公案と作す。殊に知らず、水を水に入るるに似、金を金に博うるが如きことを。〕平、近前る。〔依前として落処を知らず。展転して摸索不著。〕西院云く、「適来の這の両錯、是れ西院の錯か、是れ上座の錯か」。〔前の箭は猶お軽きも後の箭は深し。〕平云く、「従漪の錯なり」。〔馬鞍橋を錯り認めて、喚んで爺の下頷と作す。恁麼の似き衲僧、千箇万箇を打殺すとも、什麼の罪か有らん。〕西院云く、「錯」。〔雪上に霜を加う。〕平、休去る。〔定盤星を錯り認む。果然して落処を知らず。軒かに知る、你の鼻孔は別人の手の裏に在り。〕西院云く、「且は這裏に在いて夏を過せ。待に上座と這の両錯を商量せん」と。〔西院は尋常、脊梁の硬きこと鉄の似し。当時何ぞ趕

後住院、謂衆云、〔貧児思旧債。也須是点過。〕我当初行脚時、被業風吹到思明長老処、連下両錯、更留我過夏、待共我商量。我不道恁麼時錯、我発足向南方去時、早知道錯了也。〔争奈這両錯何。千錯万錯。争奈没交渉。転見郎当愁殺人。〕

将出去さざる。〕平、当時ち便ち行く。〔也た衲僧に似たり。似たることは則ち似たるも、是なることは則ち未だ是ならず。〕

後に住院して、衆に謂いて云く、〔貧児、旧債を思う。也た須是らく点過すべし。〕「我当初、行脚しおりし時、業風に吹かれて、思明長老の処に到るや、連けざまに両錯を下して、更に我を留めて夏を過し、待に我と商量せんとせらる。我恁麼の時は錯と道わざりしも、我南方に発足し去りし時には、早に錯なることを知道り了れり」と。〔這の両錯を争奈何せん。千錯万錯。争奈せん没交渉。転た見る郎当くして人を愁殺しむを。〕

一 天平従漪。 二 西院思明。以下は西院の語。 三 仏法について話し合える人物。 四 霊験あらたかな亀が尾をひきずって跡を残している。 五 がんじがらめにして身動きできなくする。 六 ダメだ。叱る言葉。 七 臨済の語。『臨済録』上堂(岩波文庫二八頁)を参照。第三八則・頌の評唱にも。 八 一般には「驢鞍橋」で、ロバの鞍のくらぼね。一説に、くらぼねに似たロバの骨。なお、玉峰刊本では「錯認馬鞍橋、喚作驢下頷」とする。 九「待〜」は、〜してみよう。「要」より物やわらかな願望を示す。 10『伝灯録』一二では「漪不肯、便去」。 一一 点検する。 一二 南へ(名師をもとめて)旅に出たとき。

【評唱】思明先参大覚[一]、後承嗣前宝[二]寿。一日問、踏破化[三]城来時如何。寿云、利剣不斬死漢。明云、斬。寿便打。思明十*回道斬、寿十*回打云、這[四]漢著甚死急、将箇死屍、抵[五]他痛棒。遂喝出。其時有一僧、問宝寿云、適来問話底僧、甚有道理。和尚方便接他。宝寿亦打趕出這僧。且道、宝寿亦趕這僧、[六]唯当道他説是説非、且別有道理。意作麼生。後来倶承嗣宝寿。思明一日出見南[七]院。院問云、甚処来。明云、許州来。院云、将得什麼来。明云、将得箇江西剃刀、献与和尚。院云、既従許州来、因甚却有江西剃刀。明把院手掐一掐。院云、侍者収取。思明以衣袖払一払、便行。院云、[八]阿剌剌、阿剌剌。

【評唱】思明は先ず大覚に参じ、後に前宝寿を承嗣ぐ。一日、問う、「化城を踏破し来たる時如何」。寿云く、「利剣は死漢を斬らず」。明云く、「斬」。寿、便ち打つ。思明は十回「斬」と道い、寿は十回打って云く、「這の漢、甚の死急を著てか、箇の死屍を将て他の痛棒に抵う」と。遂に喝出す。其の時一僧有り、宝寿に問うて云く、「適来問話底僧、甚だ道理有り。和尚、方便して他を接せよ」。宝寿亦た打って、這の僧を趕い出す。且道、宝寿亦た這の僧を趕いだすは、唯当他は是と説い非と説うのみと道えるか、且て別に道理有るか。意作麼生。後来に倶に宝寿を承嗣ぐ。思明、一日出でて南院に見ゆ。院問うて云く、「甚処よりか来たる」。明云く、「許州より来たる」。院云く、「什麼をか将ち得来たる」。明云く、「箇の江西の剃刀を将ち得たり、和尚に献与げん」。院云く、「既に許州より来たるに、甚に因ってか却って江西の剃刀有る」。明、院の手を把り掐一掐す。院云く、「侍者、収取めよ」。思

明、衣の袖を払一払して便ち行く。院云く、「阿剌剌、阿剌剌」と。

＊十回　福本は両所とも「二十回」。

一 魏府大覚。二 宝寿延沼。三 幻の都城。教導のための方便をいう。四 何をムキになって。五 張りあう。向うを張る。六 二者択一を問う疑問詞。「為当」と同じ。七 南院慧顒(八六〇―九三〇ころ)。八 感嘆や驚きを表す叫び。

天平曾参進山主来。為他到諸方、参得此蘿蔔頭禅、在肚皮裏、到処便軽開大口道、我会禅会道、常云、莫道会仏法、覓箇挙話人也無。屎臭気薫人、只管放軽薄。

天平曾て進山主に参じ来たる。他諸方に到り、此の蘿蔔頭の禅に参得して、肚皮の裏に在め、到る処に便ち軽しく大口を開いて「我は禅を会し道を会す」と道うが為に、常に云く、「仏法を会するは莫道、箇の挙話の人を覓むるも也た無し」と。屎臭の気、人に薫じ、只管に軽薄を放にす。

一 清谿洪進。山主は一山の主人、住持の意。二 だいこん禅。大安売りの印可を受けて得た禅。三 鼻もちならぬ。

且如諸仏未出世、祖師未西来、未有問答、未有公案已前、還有禅道麼。古人事不獲已、対機垂示、後人喚作

且如えば、諸仏未だ出世せず、祖師未だ西来せず、未だ問答有らず、未だ公案有らざる已前は、還た禅道有りや。古人は事已むを獲ず、機に対して垂示し、後

公案。因*[一]世尊拈花、迦葉微笑、後来阿難問迦葉、世尊伝金襴外、別伝何法。迦葉云、阿難。阿難応諾。迦葉云、倒却門前刹竿著。只如未拈花、阿難未問已前、甚処得公案来。只管被諸方冬瓜**[二]印子印定了、便道、我会仏法奇特、莫教人知。

人喚んで公案と作す。因に世尊花を拈り、迦葉微笑し、後来に阿難は迦葉に問う、「世尊は金襴を伝うる外、別に何の法を伝えしや」。迦葉云く、「阿難」と。阿難応諾す。迦葉云く、「門前の刹竿を倒却著」と。只如えば、未だ花を拈らず、阿難未だ問わざる已前は、甚処よりか公案を得来たらん。只管諸方の冬瓜の印子もて印定され了って便ち道う、「我は仏法の奇特を会す、人をして知らしむること莫れ」と。

＊因　福本は「因縁」。　＊＊冬瓜　福本は「蘿蔔」。

一　第一五則・頌の評唱を参照。　二　冬瓜（トウガン）で作った印。いい加減な印可証明。

天平正如此、被西院叫来、連下両錯、直得周憧惶怖、分疎不下。前不搆村、後不迭店。有者道、説箇西来意、早錯了也。殊不知、西院這両錯落処。諸人且道、落在什麼処。所以道、他参活句、不参死句。天平挙頭、已是落二落三了也。西院云錯、他却

天平は正に此の如く、西院に叫ばれ来たり、連けざまに両錯を下され、直得に周憧惶怖いて、分疎不下。前むも村に搆らず、後るも店に迭ばざるなり。有る者は道う、「箇の西来意を説く、早に錯り了れり」と。殊に西院の這の両錯の落処を知らず。諸人且く道え、什麼処に落在するかを。所以に道う、「他は活句に参じて死句に参ぜず」と。天平、頭を挙ぐるは、已に是

一不薦得当陽用処、只道我肚皮裏有禅、莫管他、又行三両歩。西院又云錯、却依旧黒漫漫地。天平近前、西院云、適来両錯、是西院錯、是上座錯。天平云、従漪錯。且喜没交渉。已是第七第八頭了也。西院云、且在這裏度夏。待共上座商量這両錯。天平当時便行。似則也似、是則未是。也不道他不是、只是趕不上*。雖然如是、却有些子衲僧気息。

＊趕不上　福本は「跳不出」。

一　まっこうから、正面切った。

天平後住院、謂衆云、我当初行脚

れ二に落ち三に落ち了れり。西院の「錯」と云うに、他（かれ）却って当陽（まっこう）の用処（はたらき）を薦得（うけとめ）ず、只だ「我が肚皮（はら）の裏（うち）に禅有り」と道（おも）いて、他（かれ）に管（かま）うこと莫（な）く、又た行くこと三両歩するのみ。西院又た「錯」と云うも、却って依旧（いぜん）として黒漫漫地（まっくら）。天平、近前（すすみよ）るや、西院云く、「適来（いましがた）の両錯、是れ西院の錯か、是れ上座の錯か」。天平云く、「従漪の錯なり」と。且喜（おめで）たくも没交渉（まとはずれ）。已に是れ第七第八頭になり了れり。西院云く、「且（まず）は這裏（ここ）に在（お）いて夏（げ）を度（すご）せ。待（まさ）に上座と這の両錯を商量せん」と。天平、当時（ただち）に便ち行く。似たることは則ち也（ま）た他（かれ）に似たるも、是（ぜ）なることは則ち未だ是（ぜ）ならず。也た他は是（ぜ）ならずとは道（い）わざるも、只だ是れ趕不上（おいつかざ）るなり。是（かく）の如くなりと雖然（いえど）も、却って些子（いささか）の衲僧（のうそう）たる気息（いきごみ）有り。

天平、後に住院して、衆に謂いて云く、「我当初（そのかみ）、

時、被業風吹到思明和尚処、連下両錯、更留我度夏、待共我商量。我不道恁麼時錯、我発足向南方去時、早知道錯了也。這漢也煞道、只是落第七第八頭、料掉没交渉。如今人聞他道、発足向南方去時、早知道錯了也、便去卜度道、未行脚時、自無許多仏法禅道。及至行脚、被諸方熱瞞。不可未行脚時、喚地作天、喚山作水。幸無一星事。若総恁麼作流俗見解、何不買一片帽戴、大家過時。有什麼用処。仏法不是這箇道理。若論此事、豈有許多般葛藤。你若道我会他不会、担一担禅、遶天下走、被明眼人勘破、一点也使不著。雪竇正如此頌出。

行脚しおりし時、業風に吹かれて、思明和尚の処に到るや、連けざまに両錯を下して、更に我を留めて夏を度し、待に我と商量せんとせらる。我恁麼の時は錯と道わざりしも、我南方に発足し去りし時には、早に錯なることを知道り了れり」と。這の漢、也た煞に道うも、只だ是れ第七第八頭に落ちて、料掉と没交渉。如今の人、他の「南方に発足し去りし時には、早に錯なることを知道り了れり」と道うを聞いて、便ち去きて卜度りて道う、「未だ行脚せざりし時は、自ずから許多の仏法禅道無し。行脚するに及至んで、諸方に熱瞞せらる。未だ行脚せざりし時に、地を喚んで天と作し、山を喚んで水と作すことは不可なり。幸に一星事も無し」と。若し総て恁麼に流俗の見解を作さば、何ぞ一片の帽を買って戴り、大家で時を過さざる。什麼の用処に有たん。仏法は是れ這箇の道理にあらず。若し此の事を論ぜば、豈に許多般しき葛藤有らんや。你若し我は会し他は会せずと道い、一担の禅を担いて天下を

遶って走くも、明眼の人に勘破かるるや、一点也使い著せざらん。雪竇、正に此の如く頌出す。

一 勘どころからかけ離れてしまう。 二 コケにする。 三 第九則・本則の評唱に「祖師未来時、那裏喚天作地、喚山作水来」(上冊一四六頁)とあるのを参照。 四 この「大家」は副詞。みんな一緒になって(修行者ではない俗人として)。第九三則・頌の評唱の「只管大家如此作舞」と同じ用法。 五 この究極の事。禅の極則。

【頌】 禅家流、〔漆桶、一状領過。〕愛軽薄。〔也有些子。呵仏罵祖、如麻似粟。〕満肚参来用不著。〔只宜有用処。方木不逗円孔。闍黎与他同参。〕堪悲堪笑天平老、〔天下衲僧跳不出。不怕旁人攢眉。也得人鈍悶。〕却謂当初悔行脚。〔未行脚已前錯了也。踏破草鞋、堪作何用。一筆勾下。〕錯錯、〔是什麼。雪竇已錯下名言了也。〕西院清風頓銷鑠。〔西院在什麼処。何似生。莫道西院、三世諸

【頌】 禅家流、〔漆桶、一状に領過す。〕軽薄を愛す。〔也た些子有り。仏を呵り祖を罵るもの、麻の如く粟の似し。〕満肚に参じ来たるも用い著せず。〔只だ宜しく用処有るべし。方木は円孔に逗らず。闍黎は他と同参なり。〕悲しむ堪し笑う堪し天平老、〔天下の衲僧跳け出せず。旁人の眉を攢むるを怕れず。也た人の鈍悶むを得たり。〕却って謂う、当初悔ゆらくは行脚せしことをと。〔未だ行脚せざる已前に錯り了れり。草鞋を踏破して、何の用をか作す堪き。一筆に勾下す。〕錯、錯、〔是れ什麼ぞ。雪竇已に錯って名言を下し了れり。〕西院の清風頓に銷鑠せり。〔西院什麼処に

仏、天下老和尚、亦須倒退三千始得。於斯会得、許你天下横行。〕

復云、忽有箇衲僧、出云錯、〔一状領過。猶較些子。〕雪竇錯何似天平錯。〔西院又出世、拗款結案。総没交渉。且道、畢竟如何。打云、錯。〕

か在る。何似生。西院は莫道、三世の諸仏、天下の老和尚も、亦た須らく倒退三千して始めて得し。斯に於て会得せば、你に許む天下に横行することを。〕

復た云く、「忽し箇の衲僧有り、出でて錯と云わば、〔一状に領過す。猶お些子く較えり。〕雪竇の錯は天平の錯に何似ぞ」。〔西院又た世に出で、款に拠って案を結す。総て没交渉。且道、畢竟如何。打って云く、錯。〕

一 一通の判決書でまとめて処断する。二 軽々と行動する。三 それにしても人の心を滅入らせるわい。四 サッと一筆に線を引いて抹消する。五 おっと間違った、間違った。第八七則・頌にも。六 どんな(ふうに消えうせたの)だ。第八一則・頌の著語、第八二則・頌の著語などに既出。七 以下、頌とは別の語。八 「A何似B」という句は、普通は、Bの方がましだという含みをもつ。

【評唱】　禅家流愛軽薄、満肚参来用不著。這漢会則会、只是用不得。尋常目視雲霄道、他会得多少禅。及至向烘炉裏纔烹、元来一点使不著。五祖先師道、有一般人参禅、如琉璃瓶

【評唱】　「禅家流、軽薄を愛む、満肚に参じ来たるも用い著せず」と。這の漢会することは則ち会するも、只だ是れ用い得ず。尋常目に雲霄を視て道う、「他は多少の禅を会得す」と。烘炉の裏に纔に烹らるるに及至んでは、元来一点も使い著せず。五祖先師道く、

裏搗[四]糍糕相似。更動転不得、抖擻不出、触著便破。若要活潑潑地、但参[五]皮殻漏子禅。[六]直向高山上撲将下来、亦不破、亦不壊。[七]古人道、設使言前[八]薦得、猶是[九]滞殻迷封。直饒句下精通、未免[一〇]触途狂見。堪悲堪笑天平老、却謂当初悔行脚。雪竇道、堪悲他対人説不出。堪笑他会[一一]一肚皮禅、更使些子不著。

「有る人の参禅するに、琉璃瓶の裏に糍糕を搗くが如くに相似たり。更に動転し得ず、抖擻い出だせず、触るれば便ち破る。若し活潑潑地ならんと要せば、但だ皮殻漏子の禅に参ぜよ。直い高山の上より撲将下来すも、亦た破れず、亦た壊れず」と。古人道く、「設使言前に薦得るも、猶お是れ殻に滞り封に迷う。直饒句下に精通するも、未だ触途狂見するを免れず」と。「悲しむ堪し笑う堪し天平老、却って謂う、当初悔ゆらくは行脚せしことを」と。雪竇道く、「悲しむ堪し、他は人に対して説き出ださざるを。笑う堪し、他は一肚皮の禅を会するも、更に些子も使い著せざるを」と。

一 高邁ぶった格好をする。二 熔鉱炉。三 圜悟の師、五祖法演(?—一一〇四)。四 穀粉を蒸して甘味をつけた食品。羊羹、外郎の類。『東京夢華録』三に「糍糕団子」が見える。五 野性的で強靱な禅。但し『虚堂録』八に引く五祖の語では、自らの禅を「皮栲栳(柳の枝や竹で編んだ穀物を入れる堅牢な器)禅」と称し、「虚空から投げ落としても跳ねるだけ(壊れはしない)」と言っている。革製のそれだから更に頑丈。「皮殻漏子」は人の肉体をさげすんでいう言葉だから、ここでは明らかに誤用である。六 たとい〜でも。唐・五代の俗語。七 風穴延沼(八九六—九七三)。第六一則・本則の評唱を参

照。八 主体的に把握するというニュアンス。九 カラから出られず、一定の限界に封じこまれている。10 どこでもその独断を振り廻す。11 腹いっぱい詰めこんだ禅。

錯錯、這両錯、有者道、天平不会是錯。又有底道、無語底是錯。有什麼交渉。殊不知、這両錯、如撃石火、似閃電光。是他向上人行履処。如仗剣斬人、直取人咽喉、命根方断。若向此剣刃上行得、便七縦八横。若会得両錯、便可以見西院清風頓銷鑠。雪竇上堂、挙此話了、意道、錯。我且問你、雪竇這錯、何似天平錯。且参三十年。

「錯、錯」、這の両錯、有る者は道う、「天平会せざる是れ錯」と。又た有る底は道う、「語無き底是れ錯」と。什麼の交渉か有らん。殊に知らず這の両錯、撃石火の如く、閃電光の似きを。是れ他の向上の人の行履の処なり。剣に仗って人を斬るに、直と人の咽喉を取って、命根方に断たるるが如し。若し此の剣刃の上を行き得ば、便ち七縦八横ならん。若し両錯を会得せば、便ち西院の清風の頓に銷鑠せたるを見る可し。雪竇上堂し、此の話を挙し了って、意に道く、「錯」と。雪竇我且ず你に問わん、雪竇の這の錯は、天平の錯と何似ぞ。且は参ぜよ三十年。

一 第八二則・頌の評唱にも。

第九九則　粛宗十身調御

垂示云、龍吟霧起、虎嘯風生。出世宗猷、金玉相振、通方作略、箭鋒相拄。偏界不蔵、遠近斉彰、古今明辨。且道、是什麼人境界。試挙看。

第九九則　粛宗の十身調御

垂示に云く、龍吟りて霧起り、虎嘯えて風生ず。出世の宗猷は金玉相振い、通方の作略は箭鋒相拄る。偏界蔵さず、遠近斉しく彰れ、古今明らかに辨ず。且道、是れ什麼なる人の境界ぞ。試みに挙し看ん。

一 第五五則・本則の著語にも。 二 説法の玄旨。 三 合奏の始めの金(鐘)から終わりの玉(磬)までが一貫して備わる。見事な調和の喩え。「金声玉振」(第七三則・頌の著語)と同じ。 四 方便に通じた巧妙な活手段。 五 見事な互角の名人芸。弓の名人どうしが相対して射合った二本の矢が空中で正面衝突したという故事(『列子』湯問)による。 六 世界中あまねく隠しだてしない。

【本則】 挙。粛宗帝問忠国師、如何是十身調御。〔作家君主、大唐天子。也合知恁麼。頭上捲輪冠、脚下無憂履。〕国師云、檀越踏毘盧頂上行。〔須弥那畔、把手共行。猶有這箇在。〕帝云、寡人不会。〔何不領話。

【本則】 挙す。粛宗帝、忠国師に問う、「如何なるか是れ十身調御」。〔作家の君主、大唐の天子。也た合に恁麼なることを知るべし。頭上には捲輪冠、脚下には無憂履。〕国師云く、「檀越、毘盧の頂上を踏み行け」。〔須弥の那畔、手を把って共に行く。猶お這箇の在る有り。〕帝云く、「寡人会せず」。〔何ぞ話を領せざる。

可惜許。好彩不分付。*帝当時便喝。**
更用会作什麼。〕国師云、莫認自己
清浄法身。〔雖然葛藤、却有出身処。
酔後郎当愁殺人。〕

可惜許。好彩にも分付されず。帝ならば当時に便ち喝
せん。更に会することを用いて什麼か作ん。〕国師云
く、「自己の清浄法身を認むること莫れ」。〔葛藤すと
雖然も、却って出身の処有り。酔後に郎当くして人を
愁殺しむ。〕

*不　福本に無し。　**帝当時便喝　福本は「当時好与一喝」。

一 唐の第七代の皇帝。 二 南陽慧忠（?—七七五）。 三「十身」は、『華厳経』に説く十種の仏身。「調御」は仏の十号の一つ、調御丈夫。衆生を調伏制御して悟りに導く者。つまり、人民を統御する天子の在り方。 四 頭に捲輪冠をいただき、足に無憂履をはく。天子のいでたちだとされるが、未詳。 五 布施をする在家帰依者。ここは、粛宗を指す。 六 毘盧遮那仏。仏の尊称。 七 須弥山のあるこの世界の向こう、つまり異次元の世界を手をたずさえて歩く。 八 まだふっきれていないものがある。第八四則・頌の著語にも。 九 王侯が自分をさして使う謙称。 一〇 つまり、自分を聖人天子と見てはいけない。 一一 ことばをもてあそぶ。 一二 次の評唱の注四を参照。

〔評唱〕粛宗皇帝、在東宮時、已参
忠国師。後来即位、敬之愈篤。出入
迎送、躬自捧車輦。一日致箇問端来、
問国師云、如何是十身調御。師云、
檀越踏毘盧頂上行。国師平生、一条

〔評唱〕粛宗皇帝、東宮に在りし時、已に忠国師に参
ず。後来に即位して、之を敬すること愈篤し。出入
迎送、躬自ら車輦を捧ぐ。一日、箇の問端を致し来た
り、国師に問うて云く、「如何なるか是れ十身調御」。
師云く、「檀越、毘盧の頂上を踏み行け」と。国師は

脊梁骨硬如生鉄、及至帝王面前、如爛泥相似。雖然答得廉纖、却有箇好処。他道、你要会得、檀越須是向毘盧頂𩕳上行始得。他却不薦、更道、寡人不会。国師後面忒煞郎当落草、更注頭上底一句云、莫錯認自己清浄法身。所謂人人具足、箇箇円成。看他一放一収、八面受敵。

平生、一条の脊梁骨の硬きこと生鉄の如きも、帝王の面前に至るに及んで、爛泥の如くに相似たり。答え得て廉纖なりと雖然も、却って箇の好処有り。他道う、「你会得せんと要せば、檀越、須是らく毘盧の頂𩕳の上を行きて始めて得し」。他却って薦らず、更に道う、「寡人会せず」と。国師、後面に忒煞だ郎当落草し、更に頭上底一句に注して云く、「錯って自己の清浄法身を認むること莫れ」と。所謂人人具足し、箇箇円成す、なり。看よ他の一放一収し、八面に敵を受くるを。

一 皇太子の住む宮殿。二 第一八則・本則の評唱には「師退朝、帝自攀車而送之」と。「輦」は人がひく車、天子の乗る手びき車。三 微妙で繊細。四 威儀をくずして、相手の低い立場にまで降りる。五 誰もがそなえており、ひとりひとりが欠けるところなく成就している。玄沙禅師の語。六 ゆるめたり、ひきしめたりして、八方を相手に力量を発揮する。

不見道、善為師者、応機設教、看風使帆。若只僻守一隅、豈能回互。看佗黄檗老、善能接人。遇著臨済、三回便痛施六十棒。臨済当下便会去。

見道ずや、善く師と為る者は、機に応じて教を設け、風を看て帆を使う。若し只だ僻に一隅を守らば、豈に能く回互せんや。看よ佗の黄檗老、善能く人を接するを。臨済に遇著いて、三回便ち痛く六十棒を施す。臨

及至為[四]裴相国、葛藤忉煞。此豈不是善為人師。忠国師善巧方便、接粛宗帝。蓋為他有八面受敵底手段。十身調御者、即是十種[五]他受用身。[六]法報化三身、即法身也。何故。報化非真仏、亦非説法者。拠法身、則[七]一片虚凝、[八]霊明寂照。

済当下に便ち会し去る。裴相国の為にするに及至んで、葛藤すること忉煞だし。此れ豈に是れ善く人の師と為るにあらずや。忠国師善巧に方便して、粛宗帝を接す。蓋し他は八面に敵を受くる底の手段有るが為なり。「十身調御」とは、即ち是れ十種の他受用身なり。法報化の三身は即ち法身なり。何故ぞ。報化は真仏に非ず、亦た説法者に非ず。法身に拠るときは、則ち一片の虚凝にして霊明寂照なり。

一 立場を自在に相互転換する。 二 黄檗希運。 三 臨済義玄(?—八六七)。『臨済録』行録(岩波文庫一七九頁〜)参照。 四 裴休(七九一—八六四)。「相国」は宰相。「葛藤忉煞」は黄檗の懇切な教えぶり。 五 衆生に悟りの楽しみを享受させようとする仏の報身。 六 仏の三つの身体。法身は、真理の身体。報身は、修行の報いとしての完全な功徳を備えた身体。化身は、衆生救済のために化現した身体。 七 第九〇則・頌に既出。 八 真理の本体を寂といい、智慧のはたらきを照という。

[一]太原孚上座、在揚州光孝寺、講涅槃経。有[二]游方僧、即[三]夾山典座。在寺阻雪、因往聴講。講至[四]三因仏性、[五]三徳法身、広談法身妙理。典座忽然失

太原の孚上座、揚州の光孝寺に在って、『涅槃経』を講ず。游方の僧有り、即ち夾山の典座なり。寺に在って雪に阻まれ、因りて往き講を聴く。講じて三因仏性、三徳法身に至り、広く法身の妙理を談ず。典座、

笑、孚乃目顧。講罷令請禅者[六]、問云、某素智狭劣、依文解義。適来講次、見上人失笑。某必有所短乏処。請上人説。典座云、座主不問、即不敢説。座主既問、則不可不言。某実是笑座主不識法身。孚云、如此解説、何処不是。典座云、請座主更説一偏。孚曰、法身之理、猶若太虚。竪窮三際[七]、横亙十方、弥綸八極、包括二儀。随縁赴感、靡不周徧。典座曰、不道座主説不是。只識得法身量辺[八]事、実未識法身在。孚曰、既然如是、禅者当為我説。典座曰、若如是、座主暫輟講、旬日於静室中、端然静慮[九]、収心摂念、善悪諸縁、一時放却、自窮究看。孚一依所言、従初夜[一〇]至五更[一一]、聞鼓[一二]角鳴、忽然契悟。便去叩禅者門。

忽然に失笑するや、孚乃ち目顧く。講じ罷りて禅者を請かしめ、問うて云く、「某は素より智狭劣にして、文に依って義を解す。適来講ぜし次、上人の失笑するを見る。某に必ず短乏たる処有らん。請う上人説え」と。典座云く、「座主問わざれば、即ち敢て説わず。座主既に問えば、則ち言わざるべからず。某実に是れ座主の法身を識らざるを笑う」。孚云く、「此の如く解説するに、何処か是ならざる」。典座云く、「請う座主、更に説くこと一偏せよ」。孚曰く、「法身の理は、猶お太虚の若し。竪は三際を窮め、横は十方に亙り、八極に弥綸ち、二儀を包括む。縁に随い感に赴き、周偏からざる靡し」。典座曰く、「座主の説くこと是ならずとは道わず。只だ法身量辺の事を識り得たるのみにして、実に未だ法身を識らざる在」。孚曰く、「既然に是の如くならば、禅者当に我が為に説くべし」。典座曰く、「若し是の如くならば、座主暫く講を輟め、旬日静室の中にて端然として静慮し、心を収め念を摂

典座曰、阿誰。孚曰、某甲。典座咄曰、教汝伝持大教、代仏説法。夜半為什麼、酔酒臥街。孚曰、自来講経、将生身父母鼻孔扭捏。従今日已後、更不敢如是。看他奇特漢、豈只去認箇昭昭霊霊、落在驢前馬後。須是打破業識、無一糸毫頭可得、猶只得一半在。古人道、不起繊毫修学心、無相光中常自在。但識常寂滅底、莫認声色。但識霊知、莫認妄想。所以道、仮使鉄輪頂上旋、定慧円明終不失。

め、善悪の諸縁を一時に放却して、自ら窮究め看よ」と。孚一に言う所に依い、初夜より五更に至り、鼓角の鳴るを聞いて、忽然と契悟る。便ち去きて禅者の門を叩く。典座曰く、「阿誰ぞ」。孚曰く、「某甲」。典座咄して曰く、「汝をして大教を伝持し、仏に代って説法せしむ。夜半に為什麼にか酒に酔うて街に臥す」。孚云く、「自来経を講ぜしは、生身父母の鼻孔を扭捏せり。今日より已後、更に敢て是の如くせじ」と。看よ他の奇特なる漢、豈に只だ去きて箇の昭昭霊霊をのみ認めて、驢前馬後に落在まんや。須是い業識を打破して、一糸毫頭も得べきもの無きも、猶お只だ一半を得たる在。古人道く、「繊毫も修学の心を起さずんば、無相の光の中に常に自在なり」と。但だ常寂滅底を識って、声色を認むること莫れ。但だ霊知を識って、妄想を認むること莫れ。所以に道う、「仮使鉄輪頂の上を旋るも、定慧は円明にして終に失せず」と。

一 雪峰義存の法嗣。以下、第四七則・本則の評唱を参照。 二 諸方を遊歴する僧。行脚僧。 三 名は不

明。典座は禅院で僧の食事をつかさどる職位。四 成仏のための三つの要因。正因仏性(本性としてそなわっている仏性)・了因仏性(智慧として発現した仏性)・縁因仏性(智慧として発現するのに縁となる善行)。五 三因仏性に対応する三つの徳相。法身徳・般若徳・解脱徳。六 禅門の達者。七 無限の時空に広がっている。八 法身の周辺的、外面的なこと。九 瞑想する。一〇 午後八時ころ。一一 午前三時から五時ころ。一二 軍中の号令に用いる太鼓と角笛。杜甫の詩「閣夜」に「五更鼓角声悲壮」と。一三 輝きわたる霊妙さ。本来の主人公(自己の法身)そのものではなく、それの光明。一四 主人の後について回るだけの従者。一五 ここの「須是」は「雖是」の意。一六 宝誌(ほうし)(四一八―五一四)。「十二時頌」の句(『伝灯録』二九)。一七 煩悩がすっかり断滅されたところ。一八 『証道歌』の句。たとえ熱鉄輪が私の頭を狙って転回しても、禅定と智慧の力は完全にそなわっており、けっして損なわれない。

[一]達磨問二祖、汝立雪断臂、当為何事。祖曰、某甲心未安。乞師安心。磨云、将心来、与汝安。祖曰、覓心了不可得。磨曰、与汝安心竟。二祖忽然領悟。且道、正当恁麼時、法身在什麼処。[二]長沙云、学道之人不識真、只為従前認識神。[三]無量劫来生死本、[四]痴人喚作本来人。[五]如今人只認得箇昭昭霊霊、便瞠[六]眼努目弄精魂。有什麼

達磨、二祖に問う、「汝(なんじ)雪に立ちて臂を断(た)つは、当(は)た何事の為にするや」。祖曰く、「某甲(それがし)心未だ安らかならず。乞う師、安心せしめよ」。磨云く、「心を将(も)ち来たれ、汝の与(ため)に安んぜん」。祖曰く、「心を覓(もと)むるに了(つい)に得べからず」。磨曰く、「汝の与に安心し竟(おわ)れり」と。二祖忽然(はた)と領悟す。且道(さて)、正当恁麼(まさにかよう)なる時、法身は什(い)麼処(ずこ)にか在る。長沙(ちょうさ)云く、「学道の人、真を識らざるは、只だ従前(これまで)識神を認むるが為(ため)なり。無量劫来生死(しょうじ)の本(もと)、痴人喚んで本来人(ほんらいにん)と作(な)す」と。如今(いま)の人只だ箇の

交渉。只如他道莫認自己清浄法身、且如自己法身、你也未夢見在。更説什麼莫認。教家以清浄法身為極則。為什麼却不教人認。不見道、[七]認著依前還不是。咄。好便与棒。会得此意者、始会他道莫認自己清浄法身。雪竇嫌他老婆心切、争奈爛泥裏有刺。

昭昭霊霊をのみ認め得て、便ち瞠眼努目いて精魂を弄す。什麼の交渉か有らん。只如、他の「自己の清浄法身を認むること莫れ」と道うは、且如えば自己の法身すら、你は也た未だ夢にも見ざる在。更に什麼の認むること莫れとか説わん。教家は清浄法身を以て極則と為す。為什麼にか却って人をして認めしめざる。見道ずや、「認著むれば依前として還た是ならず」と。咄。好し便ち棒を与うるに。此の意を会得せば、始めて他の「自己の清浄法身を認むること莫れ」と道うを会せん。雪竇は他の老婆心切なるを嫌うも、争奈せん爛泥裏に刺有り。

一 以下、第九六則・頌の評唱を参照。 二 長沙景岑。以下の語は、第六〇則・本則の評唱に既出。 三 認識主体。 四 生死流転を引き起こす根本である識神。 五 根源的主体。 六 「瞠眉瞠眼」「瞠眉努眼」(第六二則・頌の評唱)と同じ。 七 宝誌の「十二時頌」の句。

豈不見、[一]洞山和尚接人有三路。所謂[二]玄路・[三]鳥道・[四]展手。初機学道、且向此三路行履。僧問、師尋常教学人

豈に見ずや、洞山和尚、人を接するに三路有り。所謂玄路・鳥道・展手なり。初機の学道には、且ず此の三路に向いて行履せしむ。僧問う、「師は尋常学人に

行鳥道。未審如何是鳥道。洞山云、不逢一人。僧云、如何行。山云、直須足下無私去。僧云、只如行鳥道、莫便是本来面目否。山云、闍黎因什麼顛倒。僧云、什麼処是学人顛倒処。山云、若不顛倒、為什麼認奴作郎。僧云、如何是本来面目。山云、不行鳥道。須是見到這般田地、方有少分相応。直下打畳、教削迹呑声、猶是衲僧門下、沙弥童行見解在。更須回首塵労、繁興大用始得。雪竇頌云、

鳥道を行かしむ。未審、如何なるか是れ鳥道」。洞山云く、「一人にも逢わず」。僧云く「如何か行かん」。山云く、「直に須らく足下無私にし去るべし」。僧云く、「只だ鳥道を行くが如きは、便ち是れ本来の面目なること莫し否」。山云く、「闍黎は什麼に因ってか顛倒す」。僧云く、「什麼処か是れ学人の顛倒する処」。山云く、「若し顛倒せざれば、為什麼にか奴を認えて郎と作す」。僧云く、「如何なるか是れ本来の面目」。山云く、「鳥道を行かざれ」と。須是らく見て這般田地に到って、方めて少分の相応有るべし。直下に打畳して、迹を削り声を呑ましむるも、猶お是れ衲僧門下の沙弥童行の見解なる在。更に須らく首を塵労に回し、大用を繁興して始めて得し。雪竇の頌に云く、

＊私　福本および『祖堂集』六や『伝灯録』一五は「糸」。
一 洞山良价(八〇七—八六九)。二 玄妙の路。三 鳥の通い道。痕跡をとどめぬ行き方。四 手をさしのべて導く。五「無糸」ならば、「足にくつをはいていない」ということ。黄檗の言う「終日歩いても一片の土も踏まない」と同趣旨。「糸」は麻のくつの麻糸。六 少しは深奥の消息と通じ合えるだろ

う。七 修行未熟の小僧。八 心を疲れさせるもの、煩悩。

【頌】一国之師亦強名、〔何必空花水月。風過樹頭揺。〕南陽独許振嘉声。〔果然坐断要津。千箇万箇中、難得一箇半箇。〕大唐扶得真天子、〔可憐生。接得堪作何用。接得瞎衲僧、済什麼事。〕曾踏毘盧頂上行。〔一切人、何不恁麼去、直得天上天下。上座作麼生踏。〕鉄鎚撃砕黄金骨、〔暢快平生。已在言前。〕天地之間更何物。〔茫茫四海少知音。全身担荷。撒沙撒土。〕三千刹海夜沈沈、〔高著眼。把定封疆。你待入鬼窟裏去那。〕不知誰入蒼龍窟。〔三十棒、一棒也少不得。拈了也。還会麼。咄。諸人鼻孔被雪竇穿了也。莫錯認自己

【頌】一国の師も亦た強いて名づく、〔何ぞ必ずしも空花水月のみならん。風過ぎて樹頭揺ぐ。〕南陽独り許す、嘉声を振うを。〔果然して要津を坐断す。千箇万箇の中、一箇半箇を得難し。〕大唐扶け得たり真の天子、〔可憐生。接得して何の用をか作す堪し。瞎衲僧を接得して、什麼なる事をか済さん。〕曾て毘盧の頂上を踏んで行く。〔一切の人、何ぞ恁麼にし去って直得に天上天下ならざる。上座は作麼生か踏まん。〕鉄鎚もて撃砕く黄金の骨、〔平生を暢快す。已に言前に在り。〕天地の間に更に何物ぞ。〔茫茫たる四海に知音少し。全身に担荷う。沙を撒き土を撒く。〕三千の刹海夜沈沈、〔高く眼を著けよ。封疆を把定せよ。你は鬼窟裏に入り去らんと待す那。〕知らず誰か蒼龍の窟に入る。〔三十棒、一棒も也た少くこと不得れ。拈了れり。還た会すや。咄。諸人の鼻孔は雪竇に穿たげ了れり。

清浄法身。」

れ了れり。自己の清浄法身を錯り認むること莫れ。」

一「一国の師」とは何とも強引な呼び方だ。慧忠が「国師」と称されたこと。二 眼花(眼病でちらついて見えるもの)と水に映った月。三 慧忠は南陽(河南省)の白崖山に四〇余年隠れ住み、その名声は天子をも動かした。四 勘どころを押さえる。五 下に「唯我独尊」を略した言い方。あとの「天地之間更何物」と照応する。六 果てしなき天下に知己もなし。七 (仏も天子も奪い去られて)全世界は沈沈たる夜に閉ざされた。『雪竇頌古』では「沈沈」を「澄澄」とする。評唱でも「澄澄地」とパラフレーズしている。八 自分の世界をしかと守れ。九 句末に添えて、軽くなじるような語気を示す。一〇 第三則・頌にも。ここでは国師がたてこもっている独尊の世界をいう。

【評唱】一国之師亦強名、南陽独許振嘉声。此頌一似箇真賛相似。不見道、至人無名。喚作国師、亦是強安名了。国師之道、不可比倫。善能恁麼接人。独許南陽是箇作家。大唐扶得真天子、曾踏毘盧頂上行。若是具眼衲僧眼脳、須是向毘盧頂上行、方見此十身調御。仏謂之調御、便是十号之一数也。一身化十身、十身化百

〔評唱〕「一国の師も亦た強いて名づく、南陽独り許す、嘉声を振うことを」。此の頌一に箇の真賛の似くに相似たり。見道ずや、「至人名無し」と。喚んで国師と作すも、亦た是れ強いて名を安け了れり。国師の道は比倫ぶべからず。善能く恁麼に人を接す。独り南陽のみ是れ箇の作家なりと許む。「大唐扶け得たり真の天子、曾て毘盧の頂上を踏んで行く」。若是具眼の衲僧の眼脳ならば、須是らく毘盧の頂上を行きて、方めて此の十身調御を見るべし。仏、之を「調御」と謂

身、乃至千百億身、大綱只是*一身。這一頌却易説。後頌他道莫認自己清浄法身。頌得水灑不著、直是難下口説。鉄鎚撃砕黄金骨。此頌莫認自己清浄法身。雪竇忒煞讃歎佗、黄金骨一鎚撃砕了也。天地之間更何物、直須浄躶躶赤灑灑、更無一物可得、乃是[四]本地風光。一似三千刹海夜沈沈。三千大千世界、[五]香水海中、[六]有無辺刹。一刹有一海。正当夜静更深時、天地一時澄澄地。且道、是什麼。切忌作閉目合眼会。若恁麼会、正堕在毒海。不知誰入[七]蒼龍窟。展脚縮脚、且道是誰。諸人鼻孔一時被雪竇穿却了也。

うは、便ち是れ十号の一数なり。一身十身と化し、十身百身と化し、乃至千百億身も、大綱は只だ是れ一身なり。這の一頌却って説き易し。後に他の「自己の清浄法身を認むること莫れ」と道うを頌す。頌し得て水も灑ぎ著めず、直是に口を下して説き難し。「鉄鎚もて撃砕く黄金の骨」。此れは「自己の清浄法身を認むること莫れ」というを頌す。雪竇忒煞だ佗を讃歎して、黄金の骨を一鎚に撃砕き了れり。「天地の間に更に何物ぞ」。直須く浄躶躶赤灑灑として、更に一物の得べき無し、乃ち是れ本地の風光なり。一に「三千の刹海夜沈沈」たるに似たり。三千大千世界、香水海の中に無辺刹有り。一刹に一海有り。正当に夜静かに更深くる時、天地一時に澄澄地なり。且道、是れ什麼ぞ。切に忌む目を閉じ眼を合る会を作すことを。若し恁麼に会せば、正に毒海に堕在つ。「知らず誰か蒼龍の窟に入る」。脚を展べ脚を縮むるは、且道、是れ誰ぞ。諸人の鼻孔は一時に雪竇に穿却たれ了れり。

＊一身　福本は「十身」。

一 肖像画に書き添えられた詩、偈頌（げじゅ）。 二『荘子』逍遥遊に「至人無己、神人無功、聖人無名」と。 三 仏を指す十種の呼び名。 四 本来の落ち着きどころの風景。 五 須弥山の周囲をとりまく海。 六 無限の国土。 七 及び腰でぬき足さし足する。

第一〇〇則　巴陵吹毛剣

垂示云、収因結果、尽始尽終。対面無私、元不曾説。忽有箇出来道、一夏請益、為什麼不曾説、待你悟来向你道。且道、為復是当面諱却、為復別有長処。試挙看。

一よい点。

【本則】挙。僧問巴陵、如何是吹毛剣。〔斬。嶮。〕陵云、珊瑚枝枝撐著月。〔光呑万象。四海九州。〕

第一〇〇則　巴陵の吹毛剣

垂示に云く、因を収め果を結び、始めを尽し終りを尽す。対面するに私無く、元より曾て説かず。忽し箇の出で来たりて、「一夏請益するに、為什麼にか曾て説かざる」と道うもの有らば、你の悟り来たるを待って、你に道わん。且道、為復是れ当面して諱却るか、為復別に長処有るか。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。僧、巴陵に問う、「如何なるか是れ吹毛剣」。〔斬。嶮。〕陵云く、「珊瑚は枝枝に月を撐著う」。〔光、万象を呑む。四海九州。〕

一巴陵顥鑑。二吹きかけた毛が切れたという伝説の名剣。三ばさり。すぱり。一刀のもと。四すごい、すさまじい。五珊瑚の枝の一つ一つが月光を受けとめて美しく輝いている。

【評唱】巴陵不動干戈、四海五湖多少人、舌頭落地。雲門接人正如此。他是雲門的子、亦各具箇作略。是故道、我愛韶陽新定機、一生与人抽釘抜楔。這箇話、正恁麼地也。於一句中、自然具三句。函蓋乾坤句、截断衆流句、随波逐浪句。答得也不妨奇特。浮山遠録公云、未透底人、参句不如参意。透得底人、参意不如参句。雲門下有三尊宿、答吹毛剣、倶云了。唯是巴陵、答得過於了字。此乃得句也。且道、了字与珊瑚枝枝撐著月、是同是別。前来道、三句可辨、一鏃遼空。要会這話、須是絶情塵意想浄尽、方見他道珊瑚枝枝撐著月。若更作道理、転見摸索不著。此語是禅月*懐友人詩曰、厚似鉄囲山上鉄、薄似

【評唱】巴陵は干戈を動いずして、四海五湖の多少の人は舌頭地に落つ。雲門の人を接するは正に此の如し。他は是れ雲門の的子なれば、亦た各箇の作略を具す。是の故に道う、「我は愛す韶陽新定の機、一生人の与に釘を抽き楔を抜く」と。這箇の話、正に恁麼地なり。一句の中に、自然に三句を具す。函蓋乾坤の句、截断衆流の句、随波逐浪の句なり。答え得て也た不妨に奇特なり。浮山の遠録公云く、「未透底の人、句に参ずるは意に参ずるに如かず。透得底の人、意に参ずるは句に参ずるに如かず」と。雲門下に三尊宿有り、「吹毛剣」に答えて、倶に「了」と云う。唯だ是れ巴陵のみ答え得て「了」の字に過ぎたり。此れ乃ち句を得たり。且道、「了」の字と「珊瑚は枝枝に月を撐著う」と、是れ同じか是れ別か。前来に道う、「三句辨ずべし、一鏃空に遼なり」と。這の話を会せんと要せば、須是らく情塵意想を絶ち浄尽して方めて他の「珊瑚は枝枝に月を撐著う」と道うを見るべし。若し更に道理

[一〇]双成仙体綃。[一一]蜀機鳳雛動蹩躄、珊瑚
枝枝撐著月。[一二]王凱家中蔵難掘、[一三]顔回
飢漢愁天雪。[一四]古檜筆直雷**不折、[一五]雪衣
石女蟠桃缺。佩入龍宮歩遅遅、[一六]繡簾
銀簞何参差。[一七]即不知、[一八]驪龍失珠、知***
不知。巴陵於句中取一句、答吹毛剣、
則是快。剣刃上吹毛試之、其毛自断。
乃利剣謂之吹毛也。巴陵只就他問処
便答、這僧話****頭落也不知。頌云、

を作さば、転た摸索不著るを見ん。此の語は是れ禅月の「友人を懐う詩」に曰く、「鉄囲山の上の鉄よりも厚く、双成仙の体の綃よりも薄し。蜀機の鳳雛動くこと蹩躄、珊瑚は枝枝に月を撐著う。王凱の家の中、蔵して掘り難く、顔回のごとき飢漢、天の雪ふらすを愁う。古檜のごとき筆直くして雷にも折れず、雪衣の石女、蟠桃の缺(玦)。佩びて龍宮に入りて歩むこと遅遅たり、繡簾銀簞何ぞ参差たる。即ち知らず、驪龍珠を失うを知るや知らずや」と。巴陵は句中より一句を取って「吹毛剣」に答う、則ち是れ快なり。剣刃上に毛を吹いて之を試すに、其の毛自ずから断つ。乃ち利剣之を吹毛と謂う。巴陵は只だ他の問処に就いて便ち答え、這の僧は話頭落つるも也た知かず。頌に云く、

＊懐　福本は「答」。　＊＊雷　福本は「雪」。　＊＊＊知不知　『不二鈔』は、本文を「只不知」と標記し、福本は「知不知」である、とする。　＊＊＊＊話　福本に無し。

一 舌が失われてしまう。言葉が用をなさなくなる。　二 雲門文偃(八六四―九四九)。　三 雪竇の語。「韶陽」は雲門を、「新定」は睦州を指し、「韶陽新定機」とは、雲門が用いた睦州の鋭く核心を突く

機略。 四 浮山法遠(九九一―一〇六七)。 五「了」と答えたのは羅漢匡果のみで、「倶に」ではない。本文に誤脱があるか。 六 第二七則・頌の句。 七 すっかり無くしてしまう。 八 貫休(八三二―九一二)。その『禅月集』二に見える詩「還挙人歌行巻」。難解。 九 仏教的宇宙観における中心(須弥山)を囲む鉄の大山脈。 一〇 董双成という仙女の着る薄い衣。 一一 錦の名産地である蜀の織機で織り成された鳳雛がぴょんぴょんと飛びはねている(ようだ)。 一二 王凱(王愷)は西晋の武帝の叔父で、珊瑚を愛蔵していた(『晋書』三三・石崇伝)。 一三 陋巷で貧乏暮しをした有徳の賢者。 一四「古檜」は『禅月集』では「古松」。 一五『禅月集』では「雪衣女啄蟠桃缺」。「蟠桃」は、仙人の住む山で三千年に一度実るという大きな桃。『種電鈔』は「缺」を「玦」に改める。これが正しい。 一六 刺繍で飾られたすだれと銀の敷物がきらびやかに並び連なる。「銀簟」は『禅月集』では「銀殿」。 一七「即不知」の三字、『種電鈔』は福本に従って削る。なお、『不二鈔』には記載がない。 一八 第六二則・頌の著語に「驪龍玩珠」と。

【頌】 要平不平、〔細若蚍蜉。大丈夫漢、須是恁麼。〕 大巧若拙。〔不動声色、蔵身露影。〕 或指或掌、〔看。果然這箇不是。〕 倚天照雪。〔斬。覰著則瞎。〕 大冶兮磨礱不下、〔更用煆煉作什麼。 干将莫能求。〕 良工兮払拭未歇。〔人莫能行。直饒干将出来、

【頌】 不平を平めんと要して、〔細かきこと蚍蜉の若し。大丈夫の漢須是らく恁麼なるべし。〕 大巧は拙なるが若し。〔声色を動ぜず。身を蔵して影を露す。〕 或は指し或は掌して、〔看よ。果然して這箇是ならず。〕 天に倚りて雪を照らす。〔斬。覰著れば則ち瞎せん。〕 大冶も磨礱ぎ下せず、〔更に煆煉を用て什麼か作す。〕 干将も能く求むること莫し。〕 良工も払拭するこ

也倒退三千。〕別、別。〔咄。有什麼別処。讃歎有分。〕珊瑚枝枝撐著月。〔三更月落、影照寒潭。且道、向什麼処去。直得天下太平。酔後郎当愁殺人。〕

と未だ歇めず。〔人能く行うこと莫し。直饒干将出で来たるも、也た倒退三千。〕別なり、別なり。〔咄。什麼の別の処か有らん。讃歎するに分有り。〕珊瑚は枝枝に月を撐著う。〔三更に月落ち、影は寒潭を照らす。且道、什麼処にか去く。直得に天下太平なり。酔後に郎当くして人を愁殺しむ。〕

＊蚍蜉　蜀本は「芙渠」。　＊＊三更〜殺人（二八字）　福本は「光呑万象」。
一 大蟻。微細なところまで食い込む鋭利なもの。蜀本の「芙渠」は蓮のこと。二『老子』四五章の句。至芸は素人目には下手に見える。三 声も立てず顔にも現わさずに。四 ひっそりと隠れこんで、ちらちらとのぞかせている。五 巴陵の名刀の高峻なきらめきぶり。六「大冶」は『荘子』大宗師に見える鉄工の名匠。どんな名工でも鍛え作れないほどのみごとさ。七 精錬する。八 刀匠の名。評唱を参照。九 格別だ。第一四則・頌にも。一〇 よくぞ讃嘆させてもらいました。第一四則・頌の著語にも。
一一 とは、なんともわびしい限りのだらしなさだ。第九九則・本則の著語にも。

【評唱】要平不平、大巧若拙。古有俠客、路見不平、以強凌弱、即飛剣取強者頭。所以宗師家、眉蔵宝剣、袖掛金鎚、以断不平之事。大巧若拙、

【評唱】「不平を平めんと要して、大巧は拙なるが若し」と。古に俠客有り、路に不平の、強きを以て弱きを凌ぐを見て、即ち剣を飛ばして強き者の頭を取る。所以に宗師家は眉に宝剣を蔵し、袖に金鎚を掛けて、

巴陵答処、要平不平之事、為他語忞煞傷巧、返成拙相似。何故。為佗不当面揮来、却去僻地裏、一截暗取人頭、而人不覚。或指或掌、倚天照雪、会得則如倚天長剣、凜凜神威。古人道、心月孤円、光呑万象。光非照境、境亦非存。光境倶忘、復是何物。此宝剣或現在指上、忽現掌中。昔日慶蔵主説到這裏、竪手云、還見麼。也不必在手指上也。雪竇借路経過、教你見古人意。且道、一切処不可不是吹毛剣也。所以道、三級浪高魚化龍、痴人猶戽夜塘水。

以て不平の事を断ず。「大巧は拙なるが若し」とは、巴陵の答処、不平の事を平めんと要して、他の語忞煞だ傷にも巧なるが為に、返って拙と成るに相似たり。何故ぞ。佗当面に揮い来たらずして、却って僻地裏に去き、一截して暗に人の頭を取り、而も人覚かざるが為なり。「或は指し或は掌して、天に倚りて雪を照らす」とは、会得せば則ち天に倚る長剣の、凜凜たる神威あるが如し。古人道く、「心月孤り円かにして、光は万象を呑む。光、境を照らすに非ず、境も亦た存するに非ず。光と境と倶に忘ぶ、復た是れ何物ぞ」と。此の宝剣或は現じて指上に在り、忽ち掌中に現ず。昔日、慶蔵主説いて這裏に到るや、手を竪てて云く、「還た見るや」と。也た必ずしも手指の上に在らず。雪竇路を借りて経過して、你をして古人の意を見しむ。且道、一切処是れ吹毛剣にあらざるべからず。所以に道う、「三級の浪高くして魚は龍と化せるに、痴人猶お戽む夜塘の水」と。

[五]祖庭事苑載孝子伝云、楚王夫人、嘗夏乗涼、抱鉄柱感孕後、産一鉄塊。楚王令干将鋳為剣、三年乃成双剣。一雌一雄。干将密留雄、以進雌於楚王。王秘於匣中、常聞悲鳴。王問群臣。臣曰、剣有雌雄、鳴者憶雄耳。王大怒、即収干将殺之。干将知其応、乃以剣蔵屋柱中。因嘱妻莫耶曰、[六]日出北戸、南山其松、松生於石、剣在其中。妻後生男、名眉間赤。年十五、問母曰、父何在。母乃述前事。久思惟、剖柱得剣。日夜欲為父報讎。楚王亦募覓其人、宣言、有得眉間赤者、厚賞之。眉間赤遂逃。俄有客曰、子得非眉間赤邪。曰、然。客曰、吾[七]甑山人也。能為子報父讎。赤曰、父昔無辜、枉被荼毒。君今恵念、何所須

『祖庭事苑』に載する『孝子伝』に云く、「楚王の夫人、嘗て夏、涼に乗じて、鉄柱を抱いて感じて孕み、後に一の鉄塊を産す。楚王、干将をして鋳て剣を為らしむ。三年にして乃ち双剣を成す。一は雌、一は雄なり。干将密かに雄を留めて、以て雌を楚王に進む。王、匣の中に秘すに、常に悲鳴するを聞く。王、群臣に問う。臣曰く、『剣に雌雄有り。鳴くは雄を憶うのみ』と。王大いに怒り、即ち干将を収えて之を殺さんとす。干将、其の応を知り、乃ち剣を以て屋柱の中に蔵す。因って妻の莫耶に嘱して曰く、『日北戸より出で、南山に其れ松あり。松、石に生じ、剣は其の中に在り』と。妻、後に男を生み、眉間赤と名づく。年十五、母に問うて曰く、『父は何にか在る』と。母乃ち前事を述ぶ。久しく思惟し、柱を剖いて剣を得たり。日夜父の為に讎を報いんと欲す。楚王亦た募って其の人を覓め、宣言すらく、『眉間赤を得る者有らば、厚く之を賞せん』と。眉間赤、遂に逃る。俄かに客有り、曰く、

邪。客曰、当得子頭幷剣。赤乃与剣幷頭。客得之進於楚王。王大喜。客曰、願煎油烹之。王遂投於鼎中。客紿於王曰、其首不爛。王方臨視、客於後以剣擬王頭堕鼎中。於是二首相囓。客恐眉間赤不勝、乃自刎以助之。三頭相囓。尋亦倶爛。〈川本無此楚王一段。〉

『子は眉間赤に非ざるを得んや』。曰く、『然り』。客曰く、『吾は甑山の人なり。能く子の為に父の讎を報いん』。赤曰く、『父は昔辜無きに、枉げて荼毒らる。君今恵念うは、何の須むる所ぞや』。客曰く、『当に子の頭と剣とを得べし』と。赤、乃ち剣と頭とを与う。客之を得て楚王に進む。王大いに喜ぶ。客曰く、『願わくは油を煎らせて之を烹ん』と。王、遂に鼎の中に投ず。客、王を紿いて曰く、『其の首爛れず』と。王、方に臨み視んとするや、客、後ろより剣を以て王の頭に擬つれば鼎の中に堕つ。是に於て二つの首相囓む。客、眉間赤が勝たざらんことを恐れて、乃ち自ら刎ねて以て之を助く。三つの頭相囓む。尋で亦た倶に爛る」と。〈川本、此の楚王の一段無し。〉

一 盤山宝積。第八六則・本則の評唱、第九〇則・本則の評唱に既出。二 圜悟の同学。三 他人が作ってくれた道に便乗する。四 第七則・頌の句。五 一一〇八年に成る一種の禅宗事典。『孝子伝』はその巻三に引かれる。ただし、『種電鈔』は、これを後人が誤って付加したものとして、蜀本に従って削除している。なお、この説話自体は『捜神記』(『法苑珠林』三六に引く)ほか諸処に見える。六『捜

神記』では「出戸望南山、松生石上、剣在其背」と。七 未詳。八 蜀本のこと。

雪竇道、此剣能倚天照雪。尋常道、倚天長剣、光能照雪。這些子用処、直得大冶兮磨礱不下、任是良工払拭也未歇。良工即干将是也。故事自顕。雪竇頌了、末後顕出道、別別。也不妨奇特。別有好処、与尋常剣不同。且道、如何是別処。珊瑚枝枝撑著月、可謂光前絶後。独抛寰中、更無等匹。畢竟如何。諸人頭落也。老僧更有一小偈。

一万斛盈舟信手拏、却因一粒甕呑蛇。二
拈提百転旧公案、撒却時人幾眼沙。三

雪竇道く、「此の剣能く天に倚りて雪を照らす」と。尋常道う、「天に倚る長剣、光能く雪を照らす」と。這の些子なる用処、直得に大冶も磨礱ぎ下せず、任是良工払拭するも也た未だ歇めず。良工とは即ち干将、是れなり。故事自ずから顕らかなり。雪竇頌し了り、末後に顕出して道う、「別なり別なり」と。也た不妨に奇特なり。別に好処有りて、尋常の剣と同じからず。且道、如何なるか是れ別なる処。「珊瑚は枝枝に月を撑著う」とは、光前絶後と謂うべし。独り寰中に抛りて、更に等匹無し。畢竟如何。諸人、頭落ちたり。老僧、更に一小偈有り。

万斛を舟に盈たし手に信せて拏き、却って一粒に因って甕は蛇を呑む。
百転の旧き公案を拈提げ、時人に幾の眼沙をか撒却らせる。

一「斛」は容量の単位。宋代以後の一斛は約四八リットル。大量の穀物、つまりこの『碧巌録』百則

の公案をいう。 二 万斛のうちの一粒を食べようとした蛇は甕の中に落ちて出られなくなった。多くの葛藤(言葉のしがらみ)に呑み込まれてしまった。 三 どれほど多くの読者に目つぶしの砂を投げかけたことか。

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第十　終

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第十　終

後序

雪竇頌古百則、叢林[一]学道詮要也。其間取譬経論或儒家文史、以発明此事[二]。非具眼宗匠、時為後学撃揚剖析[三]、則無以知之。圜悟老師在成都時、予与諸人請益[四]其説。師後住夾山道林[五]、復為学徒扣之、凡三提宗綱。語雖不同、其旨一也。門人掇而録之、既二十年矣。師未嘗過而問焉、流伝[六]四方、或致踳駁。諸方且因其言、以其道不能尋繹[七]之、而妄有改作、則此書遂廃矣。学者幸諦其伝焉。宣和乙巳[八]春暮上休、罕人[九]関友無党記。

後序

雪竇の頌古百則は、叢林学道の詮要なり。其の間、譬を経論或は儒家の文史に取り、以て此の事を発明す。具眼の宗匠、時に後学の為に撃揚剖析するに非ずんば、則ち以て之を知ること無けん。圜悟老師成都に在りし時、予諸人と与に其の説を請益す。師、後に夾山・道林に住し、復た学徒の之を扣うが為に、凡そ三たび宗綱を提ぐ。語は同じからずと雖も、其の旨は一なり。門人掇めて之を録し、既に二十年。師未だ嘗て過り問わざるに、四方に流伝して、或は踳駁を致す。諸方且く其の言に因り、其の道を以て之を尋繹ぬる能わずして妄りに改作すること有り、則ち此の書遂に廃せん。学者幸に其の伝を諦かにせよ。宣和乙巳春暮上休、罕人関友無党記す。

一 禅宗寺院をいう。　二 禅の極則。　三 解釈し分析する。　四 重ねて教えを請う。　五 本書巻頭に「師住

澧州夾山霊泉禅院」と。道林も寺の名という。六「不能以其道〜」の意のつもりか。七すじ道をつけて理解する。八宣和七年(一一二五)。上休は未詳。九「罕」は解で、解県の人ともいい、あるいは牟の誤りで、牟県の人ともいう。

重刊圜悟禅師碧巌集疏[1]

雪竇頌古百則、圜悟重下注脚、留示叢林、永垂宗旨、[2]経也。学人機鋒捷出、[3]大慧密室勘辨、知無実詣、毀梓不伝、[4]権也。此書諸仏正眼、列祖大機、両経鉗鎚、一無瑕纇。茲欲与[5]大慧長書並駕、同[6]圜悟心要兼行。掲[7]杲日於迷途、指[8]南鍼於慧海。快然一覩、開彼群愚。相与円成、不無利益。[9]幸甚。

右伏以、[10]十七歳便悟雲門・睦州、可道是口頭三昧。二百年不見碧巌・雪竇、忽遭[11]渠手下一交。怎忘得[12]弓冶裘箕、莫断却児孫[13]種草。随人去脚跟後

『圜悟禅師碧巌集』を重刊するの疏

雪竇の頌古百則、圜悟重ねて注脚を下し、叢林に留示して、永く宗旨を垂るるは経なり。学人の機鋒捷出きも、大慧密室に勘辨するや、実の詣り無きを知り、梓を毀ちて伝えざりしは権なり。此の書は諸仏の正眼、列祖の大機、両たび鉗鎚を経て、一も瑕纇無し。茲に大慧の長書と駕を並べ、圜悟の心要と同に兼ね行われんことを欲す。杲日を迷途に掲げ、南鍼を慧海に指す。快然として一たび覩れば、彼の群愚を開かん。相与に円成せば、利益無きにあらず。幸甚。

右伏して以れば、十七歳にして便ち雲門・睦州を悟るは、是れ口頭三昧と道うべし。二百年碧巌・雪竇を見ず、忽ち渠の手下の一交に遭う。怎か弓冶裘箕を忘れ得ん、児孫の種草を断却つこと莫れ。人に随って脚

転、誰下得[一四]釣龍鉤。有箇具眼目底来、不看作[一五]繋驢橛。此事当如[一六]筏喩、他時自会[一七]筌忘。家家門戸透長安、[一八]前者呼後者応。種種因縁帰大数、昔之廃今之興。莫怪山僧口多、終是老婆心切。不読東土書、安知西来意、重興一代宗風。[一九]雖無南去鴈、看取北来魚、便有十分消息。持同文印、続[二〇]無尽灯。
謹疏。
今月　日疏

跟後に去いて転ぜば、誰か龍を釣る鉤を下し得ん。箇の眼目を具する底の来たること有らば、看て繋驢橛とは作さじ。此の事は当に筏の喩の如くなるべく、他時自ずから会く筌忘せん。家家の門戸長安に透り、前なる者呼べば後なる者応う。種種の因縁大数に帰し、昔は廃れ今は興る。怪むこと莫れ、山僧の口多きことを、終に是れ老婆心切なり。東土の書を読まずんば、安んぞ西来の意を知り、重ねて一代の宗風を興さん。南に去る鴈無しと雖も、北より来たる魚を看取れば、便ち十分の消息有り。同文の印を持して、無尽灯を続がん。
謹んで疏す。
今月　日疏

一 その趣旨を述べた起請文(表白文)。 二 本来の正道。 三 大慧宗杲(一〇八九―一一六三)。 四 臨時の便法。 五『大慧普覚禅師書』二巻。 六『圜悟禅師心要』二巻。 七 光輝く太陽。 八 南を指す針。 九 願文の結びの語。 一〇『会元』一九・大慧章に「年十七、薙髪具毗尼。偶閲古雲門録、悦若旧習」と。 一一 大慧が『碧巌録』の版木を焼き捨てたこと。 一二 弓作りの子は箕を作ることから学び始め、鍛冶屋の子は裘を作ることから学び始める。『礼記』学記に「良冶之子、必学為裘、良弓之子、必学為箕」と。家業を代々伝えること、ここは『碧巌録』の伝承をいう。 一三 宗旨を継ぐべき人物。

一四 梁山縁観の語に「垂鉤四海、只釣獰龍」(第三則・頌の評唱など)と。 一五 驢馬をつなぎとめる杭。人をとらえて身動きできなくするものの喩え。第一則・本則の著語などにも。 一六 仏の教えは人を渡す筏で、渡し終われば用のないものだという比喩。『金剛般若経』に「如来常説、汝等比丘、知我説法如筏喩者、法尚応捨、何況非法」(岩波文庫『般若心経・金剛般若経』五二頁)と。 一七 「筌」は魚を捕えるわな、道具や手段にすぎないもの。『荘子』外物の「筌者所以在魚、得魚而忘筌」による。 一八 欧陽修(一〇〇七―一〇七二)の「酔翁亭記」に「負者歌于塗、行者休于樹、前者呼、後者応、傴僂提携、往来而不絶者、滁人遊也」と。 一九 杜甫(七一二―七七〇)の律詩「酬韋韶州見寄」に「雖無南過鴈、看取北来魚」と。 二〇 仏の法門をいう。

圜悟老祖居夾山時、集成此書、欲天下後世知有仏祖玄奥。豈小補哉。[一]老妙喜、深患学者不根於道、溺于知解。由是毀之。謂其父子之間矛盾、可乎。今嵎中張居士[三]、重為板行。果何謂哉。覧者宜自択焉。大徳壬寅中[四]秋、住天童第七世法孫比丘浄日[五]拝手謹書。

圜悟老祖は夾山に居りし時、此の書を集成し、天下後世に仏祖の玄奥有るを知らしめんと欲す。豈に小補ならんや。老妙喜は学ぶ者の、道に根かずして知解に溺るるを深く患う。是に由って之を毀つ。其の父子の間に矛盾すと謂いて、可ならんか。今嵎中の張居士、重ねて為に板行す。果して何の謂ぞや。覧る者宜しく自ら択ぶべし。大徳壬寅中秋、天童に住する第七世の法孫、比丘浄日拝手し謹んで書す。

一『孟子』尽心上に「豈曰小補之哉」と。二 大慧宗杲のこと。妙喜は大慧の別号。三 張煒。「方回序」(上冊二三頁)を参照。四 元の大徳六年(一三〇二)。五 無準師範(一一七八―一二四九)の法嗣、東巌浄日。

圜悟禅師、評唱雪竇和尚頌古一百則。剖決玄微、抉剔幽邃、顕列祖之機用、開後学之心源。況妙智[一]虚凝、神機黙運、晶旭輝而[二]玄扃洞照、円蟾升而幽室朗明。豈浅識而能致極哉。後大慧禅師、因学人入室下語頗異疑之。纔勘而邪鋒自挫、再鞫而納款自降曰、我碧巌集中記来、実非有悟。因慮其後不明根本、専尚語言、以図口捷、由是火之、以救斯弊也。然成此書、火此書、其用心則一、豈有二哉。嵎中張明遠、偶獲写本後冊、又獲[三]雪堂刊本及蜀本、校訂訛舛、刊成此書、流通万古。使上根大智之士、一覧而頓開本心、直造無疑之地、豈小補云乎哉。[四]延祐丁巳迎仏会日、径山住持比丘[五]希陵拝書以為後序。

圜悟禅師は、雪竇和尚の頌古一百則を評唱す。玄微を剖決き、幽邃を抉剔りて、列祖の機用を顕し、後学の心源を開く。況んや妙智虚凝して、神機黙運すれば、晶旭輝いて玄扃洞照され、円蟾升って幽室朗明なり。豈に浅識にして能く極に致らんや。後に大慧禅師、学人の入室下語の頗る異なるに因って之を疑う。勘するや纔や邪鋒自ずから挫け、再鞫るや納款して自ら降って曰く、「我碧巌集の中より記え来たれり。実には悟り有るに非ず」と。因って其の後、根本を明めず、専ら語言を尚び以て口捷ならんと図るを慮り、是に由って之を火き、以て斯の弊を救う。然れども此の書を成すと、此の書を火くと、其の用心は則ち一なり。豈に二有らんや。嵎中の張明遠、偶たま写本の後冊を獲、又た雪堂刊本及び蜀本を獲て、訛舛を校訂し、此の書を刊成して、万古に流通す。上根大智の士をして、一覧するや頓に本心を開き、直に無疑の地に造らしめば、豈に小補と云わんや。延祐丁巳迎仏会の日、径山

住持の比丘希陵拝書して以て後序と為す。

一 第九〇則・頌を参照。 二 玄妙な道への入り口。 三 未詳。 四 元の延祐四年(一三一七)。「迎仏会」は未詳。 五 虚谷希陵(一二四七—一三二二)。圜悟八世の法孫。

儒門子貢、極有功於東家聖人。藉令良馬見鞭影而奔、皆如瞠若乎後之顔子。吾聖師遊乎何言之天、久矣。霊山会上、四衆海集。世尊拈花宗旨、諸人罔措、独迦葉尊者、微為之破顔。与吾教中一唯之外、口耳倶喪同一、頓徹懸悟。当時曾参、不直下剖撃忠恕之秘鑰、豈惟門人之惑滋甚。千載之下、何以袪一貫之迷雲乎。異時成都仏果圜悟老禅、笏夾山丈室、拈提雪竇頌古百則。其大弟子杲上座、懼学人泥於言句、辜負従上諸祖、取老和尚舌頭、一截併付烈焔、煙而颺之拉壒堆。自以巨壑太虚、投置毫滴、如古徳徳山、売弄油餈婆前、此疏鈔已埃、冷而無餘矣。野火焼不尽、春風吹又生。花落碧巌、陽陂如繍。歴

儒門の子貢は極めて東家の聖人に功有り。藉令良馬の鞭影を見て奔るも、皆な後ろに瞠若たる顔子の如し。吾が聖師、「何言の天」に遊ぶこと久し。霊山会上、四衆海のごとくに集る。世尊拈花の宗旨、諸人は措すこと罔く、独り迦葉尊者のみ、微しく之が為に破顔す。吾が教の中「一唯」の外、口も耳も倶に喪うと同一にして、頓徹懸悟せり。当時曾参、直下に「忠恕」という秘鑰を剖撃せざれば、豈に惟だ門人の惑い滋甚だしきのみならんや。千載の下、何を以てか「一貫」の迷雲を袪かんや。異時に成都の仏果圜悟老禅、夾山の丈室に笏して、雪竇の頌古百則を拈提す。其の大弟子の杲上座、学人の言句に泥み、従上の諸祖に辜負かんことを懼れ、老和尚の舌頭を取りて、一截に併せて烈焔に付し、煙して之を拉壒堆に颺る。自ら以るに巨壑太虚に毫滴を投置すること、古徳徳山、油餈を売弄る婆の前に此の疏鈔已に埃れて、冷えて餘り無きが如しと。野火焼き尽くさず、春風吹いて又た生ず。

過[12]去劫、死灰[13]復然。不知何許。許多葛藤、一一従嵎中張居士手栽無影樹[14]子上、全[15]体敗露。直得[16]般若無説、諸天雨花。百七十八年、衲僧驀地横穿鼻孔、従前不曾嗅底宝熏、一旦水湧雲蒸於[17]八万四千毛孔、悉普悉徧。可謂甚[18]深希有、難値難遇之事。

花は碧巌に落ちて、陽陂繡するが如し。過去劫を歴て、死灰復た然ゆ。知らず何許ぞ。許多の葛藤、一一嵎中の張居士の手ずから栽うる無影樹子の上より、全体敗露す。直得に般若は説かるる無く、諸天は花を雨らす。百七十八年、衲僧驀地横に鼻孔を穿たれ、従前曾て嗅がざる底の宝熏、一旦、八万四千の毛孔に水のごとく湧き雲のごとく蒸いて、悉く普く悉く徧し。甚深希有、難値難遇の事なりと謂うべし。

一 孔子のこと。 二 第六五則・本則に「仏云、如世良馬見鞭影而行」と。 三「瞠若」は目を見張るさま。『荘子』田子方の「夫子歩亦歩、夫子趨亦趨、夫子馳亦馳。夫子奔逸絶塵、而回瞠若乎後矣」による。 四『論語』陽貨に「子曰、天何言哉」と。 五 第一五則・頌の評唱に「昔日霊山会上、四衆雲集。世尊拈花、唯迦葉独破顔微笑、余者不知是何宗旨」と。 六『論語』里仁の「子曰、参乎、吾道一以貫之。曾子曰、唯。子出。門人問曰、何謂也。曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣」による。 七 大慧宗杲。 八 第四則・本則の評唱に「窮諸玄辯、若一毫置於太虚。竭世枢機、似一滴投於巨壑」と。 九 徳山宣鑑(七八二—八六五)。以下、第四則・本則の評唱を参照。 一〇 野火が焼いても根絶やしにはできず、春風が吹くとまた萌え出す。白居易の詩「賦得古原草送別」の二句。 一一 南の斜面は美しく飾ったよう。百則の名場面の展開に喩える。 一二 無限に長い時間。 一三「方回序」に「燃死灰復板行」と。 一四 第八六則・頌を参照。 一五 まるごと露顕する。 一六 第六則・頌の評唱(上冊一一七頁)を参照。 一七「八万四千」は、きわめて大きな数の形容。無数の。 一八 非常に珍しく、めったに無いこと。

已而居士二子得心疾。或謂[1]勤竇経、杲上座燬板、居士不当拾遺燼。而日月光景之故、受如是報。居士者疑其説、以質於予。予謂圜悟門人、人人而杲上座、碧巌自碧、何得有説。杲[2]上座見月亡指、遂乃追尤古仏、[3]毒燎亙天。[4]倒却刹竿、不放一綫。彼未嘗識月者、誰将乗一指而示之。或者又謂、杲上座火此書、[5]盟之社鬼者深重。居士二子之患、正坐此。予謂、当杲上座灼然秉炬時、煉得故紙通紅。何縁密室通風。[6]老勤巴命門舌根、別自有不壊処。一星迸散明月空山、張居士那裏得這消息来。把天然一段西蜀錦機、依旧織作旧日花様。[7]意者主林神、陰為之地、[8]訶護至今。料亦是此書合出世因縁時節。[9]清涼池上[10]針芥相

已にして居士の二子は心疾を得たり。或は謂う「勤竇の経、杲上座板を燬けば、居士当に遺燼を拾うべからず。而るに日月光景の故に、是の如き報を受く」と。居士なる者其の説を疑い、以て予に質す。予謂えらく、「圜悟の門人、人人にして杲上座なりとも、碧巌は自ずから碧なれば、何ぞ説有るを得ん。杲上座は月を見て指を亡れ、遂乃に古仏を追尤めて、毒燎天に亙る。刹竿を倒却し、一綫を放たず。彼の未だ嘗て月を識らざる者は、誰か将た一指に乗じて之を示さん」と。或者は又た謂う、「杲上座此の書を火いて、之を社鬼に盟うこと深重なり。居士の二子の患は正に此れに坐る」と。予謂えらく、「杲上座灼然として炬を秉る時に当り、故紙を煉き得て通紅とす。何に縁ってか密室に風を通ぜん。老勤巴が命門舌根、別に自ずから壊せざる処有り。一星迸散る明月空山、張居士那裏よりか這の消息を得来たる。天然一段西蜀の錦機を把りて、依旧として旧日の花様を織り作せり。意うに主林神は陰に

逢、則書写読誦為人演説之功、応獲殊勝福徳。何況金石刻鏤展転流布。客居士二子之心疾根本、本不在此。客作漢妄以情識卜度。居士縁其目前不足計校之禍福、亦以情識卜度之、是相随赴火坑也。豈不冤哉。

之が地を為して、訶護今に至るか。料るに亦た是れ此の書の合に世に出づべき因縁時節か。清涼池上に針芥相逢えば、則ち書写し読誦し、人の為に演説するの功すら、応に殊勝の福徳を獲べし。何ぞ況んや金石に刻鏤み展転流布するをや。居士の二子の心疾の根本、本より此に在らず。客作の漢、妄に情識を以て卜度る。居士其の目前の計校るに足らざる禍福に縁かれ、亦た情識を以て之を卜度らば、是れ相随いで火坑に赴くなり。豈に冤ならざらんや」と。

一 圜悟克勤と雪竇重顕の経、つまり『碧巌録』。二 月は仏法、真理。指は、それを指し示す教え。『楞厳経』二などに見える。三 相手を打ち砕く毒舌の烈しさに喩える。四 邪説を論破し、ヒントも与えない。五 うぶすな神。氏神。六 圜悟のこと。七 八十巻本『華厳経』世主妙厳品に見える。八 この書の流伝を今日まで守ってくれたのだろう。九 絶対の境地。一〇 針の先に芥子の実が命中する。希有な契合に喩える。一一 賃やとい、半奴隷のやから。一二 火の燃えさかる穴。地獄の猛火。

一 冥験記、沛国周氏三子並瘖。一日有客造門曰、君可内省宿愆。忽猛憶、児時見燕窠三子、伺其母出、各以一

『冥験記』に「沛国の周氏の三子並に瘖す。一日客有り、門に造って曰く、『君、宿の愆を内省すべし』と。『忽猛憶うに、児たりし時、燕の窠の三子を見て、

蒺藜吞之。斯須共斃。母還悲鳴而去。常自悔責。客曰、君既知悔責、罪今免矣。三子即皆能言。然則居士二子之病風喪心、得無亦有可悔恨之事乎。談般若者、若為人軽賤、是人先世罪業、応堕悪道、以今世人軽賤故、先世罪業、即為消滅。居士能於此有省、縦無始劫来所造諸業、当応時消滅。即君二子之心疾、当如周氏三子之応時能言。可以不疑。

其の母の出づるを伺い、各一の蒺藜を吞ましむ。斯須して共に斃す。母還るや悲鳴して去る。常に自ら悔責めり』。客曰く、『君既に悔責むことを知らば、罪今に免れん』と。三子即ち皆な能く言う」と。然らば則ち居士の二子の風を病み心を喪うも、亦た悔恨すべき事の有るに得無や。般若を談ずる者、若し人に軽賤められなば、是の人は先世の罪業ありて、応に悪道に堕すべきを、今世の人の軽賤むるを以ての故に、先世の罪業は、即ち為に消滅するなり。居士能く此に於て省ること有らば、縦い無始劫来より造す所の諸業も、当に応時に消滅すべし。即ち君の二子の心疾は、当に周氏の三子の、応時に能く言えるが如くなるべし。以て疑わざるべし。

一 劉義慶撰『宣験記』か。『続捜神記』(『太平広記』一三一ほかに引く)にも同じ話が見える。二 ハマビシ科の草で、鋭いとげが有る。三「風」は瘋、気のふれる病気。四 〜ではないのか。「得不」とも。文語では「寧不・豈不」。五 第九七則・本則を参照。

世尊住世、四十九年、六百函文字、

世尊住世、四十九年、六百函の文字、偏界を覆蔵す。

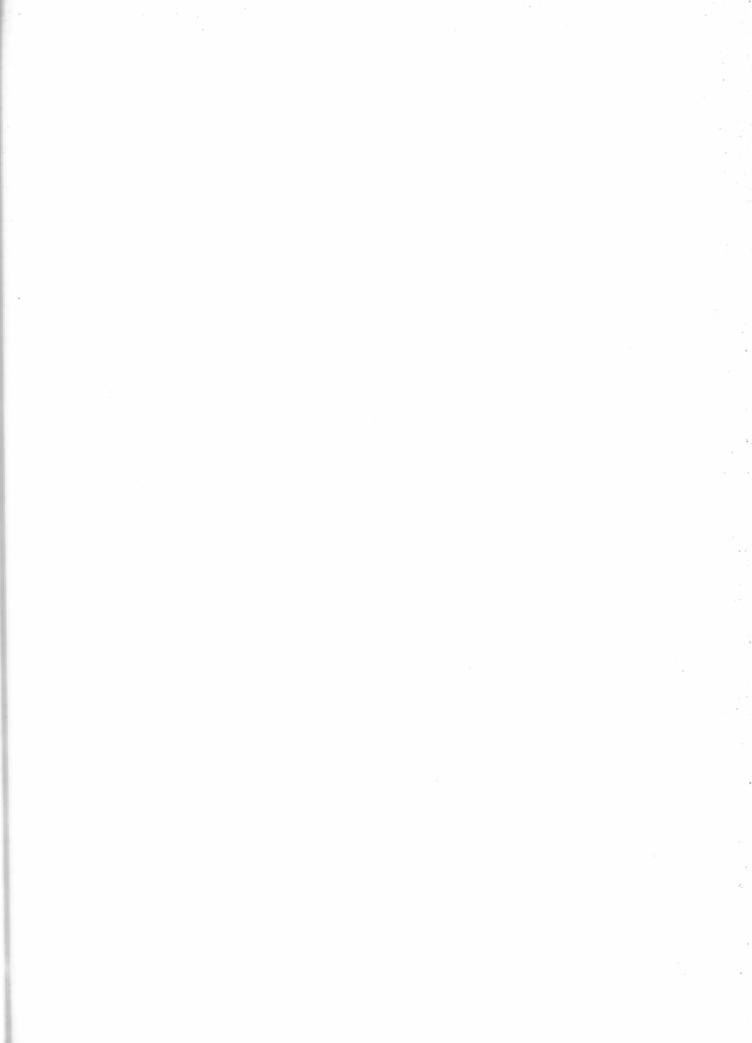
覆蔵徧界。若従杲上座之説、万年一念、更留踪跡作麼。向上禅林無限尊宿、有両句、最端的。曰、任你即心即仏、我但非心非仏。今而後、有謗如来正法輪者、君但応之曰、任汝説杲上座底是、我只説勤老師底是。若不如是、即恐燎却面門、四百四病一時発矣。将如居士二子心疾何。不見古人道、養子方知父母恩。居士学仏知恩、臨老懺悔。他日作家炉鞴、跳出丈六金身。不知還見勤老師真箇揚眉竪払否。若還一句薦得、向道、仏祖有誓、罪不重科。莫殃及他家児孫好。雖然如是、且得没交渉。是年延祐丁巳中元日、海粟老人馮子振題。

若し杲上座の説に従わば、万年一念、更に踪跡を留めて作麼せん。向上の禅林の限り無き尊宿に両句有り、最も端的なり。曰く、「任你即心即仏なるも、我は但だ非心非仏なり」と。今より後、如来の正法輪を謗る者有らば、君但だ之に応えて曰え、「任汝杲上座底是なりと説うも、我は只だ勤老師底是なりと説わん」と。若し是の如くならずんば、即ち恐らくは面門を燎却して、四百四病一時に発せん。将た居士の二子の心疾を如何せん。見ずや古人道く、「子を養んで方めて父母の恩を知る」と。居士は仏を学んで恩を知り、老に臨んで懺悔す。他日、作家の炉鞴に、丈六の金身を跳出せしめん。知らず、還た勤老師の真箇に揚眉竪払するを見る否。若し還た一句に薦得むれば、向って道わん、「仏祖に誓有り、罪重ねて科せず。殃他家の児孫に及ぶこと莫ければ好し」と。是の如くなりと雖然も、且得没交渉。是れは年延祐丁巳の中元の日、海粟老人馮子振題す。

一万年が一瞬に収まる。第七〇則の垂示にも。『信心銘』には「一念万年」と。二 大梅法常（七五二―八三九）の語に「任汝非心非仏、我只管即心即仏」と。入矢義高編『馬祖の語録』（六八頁〜）を参照。三 第三則・本則の著語にも。四『臨済録』勘弁（岩波文庫一五〇頁）に「潙山云、養子方知父慈」と。五 ふいご。修行者を鍛える手段の喩え。六 身のたけ一丈六尺で金色に輝くという仏身。第三九則・本則の著語にも。七 眉を動かしたり払子を立てたり。（もし居士がその炉から仏を創出した暁には）勤老師は果たして禅の指導者たる本領を発揮できるであろうか。八 言ってやる。九 元の延祐四年（一三一七）の七月一五日。一〇 馮子振（一二五七―？）。中峰明本（一二六三―一三二三）と親交があった。『元史』一九〇に伝がある。

『碧巌録』を読むために

末木文美士

一、諸　本

『碧巌録』(『碧巌集』)は、雪竇重顕(九八〇―一〇五二)が古則百則に対しての頌を付したものに、圜悟克勤(一〇六三―一一三五)が垂示・著語・評唱を加えたものである。その成立の事情、および両者の伝記については、上冊の解題を参照されたい。

さて、現存する『碧巌録』の諸本のうち、一つの例外を除くと、すべて張本と呼ばれる元代の刊本をもとにしている。我々が底本とした宮内庁書陵部蔵瑞龍寺版もその一つで、いわゆる五山版の一種である。ところで、一つの例外と言うのが一夜本と呼ばれる写本であり、『碧巌録』の古形を伝える最大の手がかりである。それ故、まず一夜本について触れておきたい。

一夜本は正しくは『仏果碧巌破関撃節』と称するが、道元が宋に留学したとき、帰国の直前に原本を入手し、神の助けで一夜で書写して請来したと伝えるところから、「一夜本」「一夜碧巌」などと呼ばれる。これはもちろん伝説に過ぎないが、もし道元が請来したという点を認め

るならば、その帰国の一二二七年以前の書写ということになろう。全二冊で、加賀の大乗寺に秘蔵されていたが、鈴木大拙によって校訂され活字刊行された（岩波書店、一九四二）。本写本は以下のような特徴がある。

1、序・後序・奥書など一切ない。また、巻一末の「夾山降魔表（かっさんごうまひょう）」も欠く。

2、各則の前置の文は、張本系では「垂示云」で始まっているが、一夜本では、「示衆」になっている。

3、各則は、張本系では、本則・本則評唱・頌・頌評唱の順で並んでいるが、一夜本では、本則・頌・本則評唱・頌評唱の順になっている。

4、垂示（示衆）が、張本系では八十九の則にあるのに対して、一夜本では七十四の則にある。

5、張本系では第二、三、四則の垂示が、一夜本では第一、二、三則の示衆になるというように、本則と垂示（示衆）にずれが見られる。

6、張本系と第六六―九三則の順が異なる。

7、一夜本と張本系の字句の相違は極めて大きく、それも個々の文字の相違に留まらず、評唱など長文にわたって相違する箇所が少なくない。一夜本は、現存しないが『不二鈔（ふじしょう）』などの注釈書に引用された福本との類似が大きい。

字句の相違する箇所など、概して張本系より一夜本の方が簡略であり、古形を保っていると思われる箇所が多い。また、第六六―九三則の順も一夜本の方が『雪竇頌古（せっちょうじゅこ）』の順と一致し、

やはりこの方が原形であったのではないかと思われる。
このように一夜本は『碧巌録』の古形を知る上で極めて貴重な写本であるが、今回底本としては張本系を選んだ。張本系が長く伝統的に親しまれており、その形に従う方が有意義だと考えるからである。また、一夜本もしばしば参考にしたが、校訂に当って直接に用いることはしなかった。相違が余りに大き過ぎ、校訂の範囲を超えていると考えたためである。ちなみに、一夜本をもとにしながら、張本系を合せて綿密に校訂したものに伊藤猷典『碧巌集定本』(理想社、一九六三)があり、貴重な成果であるが、両者を折衷しようとしたために、そのいずれとも異なる新奇なテキストを生み出す結果になったのは残念である。
そこで、次に張本系に属する刊本を見ることにしよう。張本というのは、元の時代(一四世紀初め)に杭州の張氏が刊行したためにこのように呼ばれるが、そのもとの版本は残っていない。現在その原形をうかがうことができるのは、日本の五山版の系統が、体裁まで含めてかなり忠実に原本を模刻して残していてくれるからである。各種の五山版の間にも小さな相違はいろいろあるが、大体次のような点が特徴と考えられる。
1、巻一の巻首には扉があり、その上方に横書きで「宗門第一書」とあり、中央に縦書きで「圜悟碧巌集」と書かれている。その左右には偈文と刊行の由来などが記されている。「宗門第一書」は、『碧巌録』の位置付けを象徴する言葉としてしばしば用いられる。
2、巻一巻前に四本の序、巻十巻後に五本の後序を収める。希陵(きりょう)と馮子振(ふうししん)の後序が延祐四年

（一三一七）のものであり、本書の刊行の時期を知ることができる。

3、巻一末に「夾山降魔表」が収められている。もっとも五山版でもこれを欠くものがあり、初めからあったのか疑問が残る。

4、巻五、巻六末にやや長文の刊記があり、他の巻にも張氏の刊行であることを示す簡単な記載がある。

5、一部の則に音釈や、数は少ないが異本との校合が示されている。

ところで、上述のように五山版でも版によって相違が見られるが、大きく二つに分けることができるのではないか、というのが筆者の仮説である。仮にそれを第一類と第二類と呼ぶことにしよう。管見に触れた範囲では、それぞれ以下のような版本がある。

第一類――玉峯刊本（宮内庁書陵部所蔵）、無刊記本（駒沢大学所蔵）、応永八年版本（大阪府立図書館所蔵）

第二類――能登総持寺版本（東京大学・大東急記念文庫所蔵）、美濃瑞龍寺版本（宮内庁書陵部・大東急記念文庫所蔵）、越後本源寺版本（大東急記念文庫所蔵）、妙心寺版本（大東急記念文庫所蔵）

これらの二類に分けられるのは、字句の相違に基づくが、例えば、第一則本則評唱の範囲でも次のような相違が見られる。

①人伝、志公天監十三年化去、達磨普通元年方来。自隔七年。（上巻、四五頁）

②嗟夫見之不見、逢之不逢、□□□□。（同、四六頁）

③心有也曠劫而滞凡夫、心無也刹那而登妙覚。（同）

以上は第二類のテキストであるが、第一類では傍点の箇所が次のようになっている。

①「十三」を「四」に、「元」を「八」に、「七」を「十餘」に作る。

②空格の箇所を「遇之不遇」に作る。

③「滞凡夫」を「受沈淪」に、「登妙覚」を「成正覚」に作る。

これらを較べていずれが古い形であろうか。朝鮮本や中国本が第一類の形であること、②の欠格が不自然であること、第二類の方が合理的に改めてあると考えられること、などの理由のために、恐らく第一類の方が古い形を留めているのではないかと推定される。ただし、第二類の方が日本では広く流布しているため、今回の底本は第二類の瑞龍寺版によった。

以上は五山版であり、日本の諸版は多く五山版の系統を引いている。中国・朝鮮の版本を見ると、まず、大東急記念文庫所蔵朝鮮版（一四六五―一四八四の間）は、五山版ほど忠実に張本を模してはいないが、序・後序を有し（ただし、配列は五山版と異なっている）、張本系であることが明らかである。中国で刊行されたものとしては、駒沢大学所蔵明版・明嘉興蔵続蔵本・駒沢大学所蔵清版（光緒二年版）などがある。これらは序・後序を有しないなど、形態上の相違は大きく、直ちに張本系とは言えないが、本文は上記張本系諸本と近く、同じ系統に属するものと考えることができる。

以上は現存する諸本であり、このようにいずれも張本系と考えられるが、かつてはそれ以外の系統の版本も存していたと考えられる。この点貴重なのは岐陽方秀（一三六二―一四二四）の『碧巌録不二鈔』であり、同書にはかなり詳しく現行本（張本）と他本の相違が指摘されている。そのうち、特に多く用いられているのは福本で、福州で印行されたものであるから、こう呼ばれる。字句の相違を一夜本・張本と較べてみると、一夜本と合致するところが多く、張本より古い形を残していると考えられる。福本の次に多く用いられているのが蜀本であるが、これは福本よりは張本に近付いている。他に『不二鈔』には楊本への言及も見られるが、これはどのようなものか解らない。

福本などは大智実統（一六五九―一七四〇）の『碧巌録種電鈔』にも引かれており、その中に『不二鈔』に見えないものも少数あるから、大智の頃まで存在したかとも考えられるが、他からの孫引きとも考えられ、いつ頃まで存在したか、はっきりしない。今回の校訂にあたっては、主として『不二鈔』により、本文解釈の参考になる範囲で校異を挙げた。

以上、『碧巌録』の諸本について、詳しくは拙稿「『碧巌録』の諸本について」（『禅文化研究所紀要』一八、一九九二）を見られたい。

二、翻訳・注釈など

1、翻訳

〔書き下し〕

朝比奈宗源『碧巌録』三巻（岩波書店、一九三七）

旧岩波文庫版。原文と書き下しを見開きの形で示し、簡単な校注と語注を付したもの。伝統的な解釈に従った定本とも言うべきもので、刊行以来長く親しまれてきた。

その他、『国訳一切経』和漢撰述部五一、『国訳禅宗叢書』七などにも収められている。

〔現代語訳〕

『碧巌録』は内容が難しいと同時に、当時の俗語をふんだんに使った言葉自体が極めて難解である。そのため、広く読まれているにも関わらず研究が遅れ、いまだにその点を踏まえた本格的な現代語訳ができていない。

佐橋法龍『全訳碧巌録』（三一書房、一九八四―）

第二冊（一五則まで）で中断している。達意の訳に解説が加えられている。

禅語録研究会「『碧巌録』第一則訳注」（『禅文化研究所紀要』一四、一九八七）

同「『碧巌録』第二則訳注」（同一七、一九九一）

末木他『宋代禅籍の文献的研究』（科学研究費研究成果報告、一九九二）

上記三部は筆者も加わっているグループで、はじめて学問的批判に堪えうる現代語訳を提供しようと試みたものである。最後のものは非売品であるが、第三―三〇則までの現代語訳を収めている。現在このグループでさらに現代語訳の作業を継続中であり、遠からず百則まで完成

して、公刊したいと考えている。

本則と雪竇の頌に関しては、次のものが模範的とも言える訳注を提供している。『碧巌録』を読むためにも、座右に置くことを勧めたい。

入矢義高・梶谷宗忍・柳田聖山『雪竇頌古』(筑摩書房、『禅の語録』15、一九八一)

その他に、評唱を除いて、垂示・本則・著語のみに訳注を施したものはいくつかあり、特に以下の二部は入矢義高氏を中心とする近年の語学的研究の成果を踏まえている。

平田高士『碧巌録』(『仏典講座』二九、大蔵出版、一九八二)

平田精耕『現代語訳碧巌集』(大蔵出版、一九八七)

『碧巌録』は日本語以外にもさまざまな言語に訳されている。筆者未見のものを含めて、知りえた範囲のものを挙げておく。ただし、上記のような言語の特殊性が十分配慮されているかというと、なお問題が多い。

〔英訳〕

R. D. M. Shaw, *The Blue Cliff Records*, London: Michael Joseph, 1961.

T. & J. C. Cleary, *The Blue Cliff Record*, Boston & London: Shambhala, 1992.

〔独訳〕

W. Gundert, *Bi-yän-lu*, München: Carl Hanser Verlag, 3 vols., 1960–73.

A. Seidl, *Das Weisheitbuch des Zen*, München: Carl Hanser Verlag, 1988.

前者は全訳。後者は五〇則まで。

〔仏訳〕

M. Beloni, "Trois cas du PI YEN LOU," in *Tch'an Zen-racines et floraison*, Hermès Nouvelle série 4. Paris: Les Deux Oceans, 1985, pp. 271-293.

第一、六三、六四則の訳。

〔現代中国語訳〕

許文恭『白話碧巌録』(台湾・円明出版社、一九九一)

〔韓国語訳〕

白蓮禅書刊行会『碧巌録』三巻(『禅林古鏡叢書』三五—三七、蔵経閣、一九九三)

各巻末に版本の影印が収められている。

2、注釈

『碧巌録』の注釈書は、中国・朝鮮には見られないが、日本では南浦紹明(なんぽしょうみょう)(一二三五―一三〇八)が伝えて以来、極めて多数の注釈書が著わされてきた。それらのリストは駒沢大学編『新纂禅籍目録』の『碧巌録』末疏の項(四二六—四三二頁)に詳しい。それらのうち、江戸時代以前のもので、管見に触れたものは、拙稿「『碧巌録』の注釈書について」(『松ケ岡文庫研究年報』七、一九九三)に概観した。それだけでも五〇書を超える。

もっとも、『碧巌録』そのものを読むためには、それ程たくさんの注釈書を繙く必要はない。それらの注釈の多くは学問的な研究を目的としたものではなく、むしろ禅者が自己の境地から『碧巌録』を味わい、講じたものである。もちろん、それはそれで優れたものもあるが、伝統的解釈の墨守か、さもなければ独断に陥っているものも少なくない。結論から言えば、『碧巌録』を読んでゆくために、我々が常時座右に置いているのは、先にも触れた次の二つの注釈だけである(いずれも漢文体)。

岐陽方秀『碧巌録不二鈔』一〇巻

著者は霊源性浚(れいげんしょうしゅん)の法を嗣ぎ、東福・天龍・南禅寺に住し、晩年、東福寺の不二庵に退いた。本書の特徴は、語句や故事の訓詁、出典・典拠などに詳しいところにある。また、本文に関して、張本をもとにしながら、福本・蜀本などとの校訂に意を用いている。このように、主体的・体験的であるよりは、客観的・学問的な態度を貫いている。禅文化研究所より、索引を付して影印本が刊行されている。

大智実統『碧巌集種電鈔』一〇巻

著者は黄檗宗の人で、桂巌性幢(けいごんしょうどう)を嗣いだ。『不二鈔』と並ぶ『碧巌録』注釈の双璧であるが、概して穏当で、本文理解にあたっては、『不二鈔』以上に頼りになる。また、その版本は『碧巌録』本文を収録して、その割注の形で注釈を収めているので、非常に読みやすい。ただし、そ

の本文は大智が手を入れているところがあるので、扱いに慎重を要する。『基本禅籍叢刊』(禅文化研究所)に『碧巌録』本文の語句索引と合せて影印本を収録・刊行しており(『碧巌録索引、附種電鈔』)、便利である。

以上の他に、次のものは参考になる。

服部天遊『碧巌録方語解』一巻

儒者である著者(一七二四-六九)が『碧巌録』の中の俗語を取り上げて解釈したもので、取り上げられた語彙は少ないが、解釈は正確で、定評がある。

白隠慧鶴『碧巌集秘抄』一冊

著者(一六八五-一七六八)は江戸時代の臨済宗の復興者として余りに名高い。本書は片仮名交りの口語的な文体で自由に講じたものであり、さすがに著者独自の優れた見地がうかがわれる。活字本が刊行されている(永田春雄編、成功雑誌社、一九一六)。

明治以後のものでは、評唱を除いた講義本は数が多いが、評唱まですべて含んだものでは、次のものが定評がある。

加藤咄堂『碧巌録大講座』一五巻(平凡社、一九三九―四〇)

卑俗な例など混えながら、解りやすく講じている。今日の学問水準からは難のあるところも多いが、非常に読みやすく、初心者がとりあえず取り掛かるのに勧めたい。

最近の全体にわたる講述としては、次のものがある。

山田無文『碧巌録全提唱』一〇巻（禅文化研究所、一九八八）
　第十巻は『碧巌録』本文の語彙索引で、それだけでも利用価値が大きい。

3、工具書

　上述のように、『碧巌録』は当時の俗語をふんだんに含み、言語そのものが極めて難解である。この岩波文庫本や上記の訳注・講義書などからさらに進んで、自分で本文を読み解こうとするならば、それ相応の辞書や参考書が必要となる。それらの工具書と呼ばれる種類の本については、次のような案内を見られたい。

佐藤錬太郎「『碧巌録』への文献学的アプローチ」（『印度哲学仏教学』五、一九九〇）
小川隆「中国の原典解読」（田中良昭編『禅学研究入門』大東出版社、一九九四）
　後者はもっとも新しく、またもっとも詳細である。なお、この『禅学研究入門』は、他にも禅を研究する上で必要とされる参考文献を網羅しており、極めて便利である。
　もっとも、小川氏の挙げる工具書は余りに数が多く、初心者がどれから手にしてよいか解らない。それ故、まずとりあえず手許に辞書が欲しい人には、次のものを勧めたい。
入矢義高監修・古賀英彦編『禅語辞典』（思文閣出版、一九九一）
　斯界の第一人者により、難解な禅語が明快に解釈されている。この岩波文庫本『碧巌録』の注釈も本書によるところが多い。

駒沢大学編『禅学大辞典』(大修館、一九七八。新版一九八五)
禅に関する百科事典であるが、ただ俗語的な語彙に関する説明は不十分である。

これより進んで勉強しようという場合、回り道のようであるが、まず多少なりとも現代中国語の勉強をすることをお勧めしたい。宋代の俗語の多い禅文献は、古典的な漢文よりも、現代中国語の方にはるかに近い。漢和辞典の類には出ていない語彙でも、例えば愛知大学編『中日大辞典』(大修館、増訂版一九八六)を見れば容易に解る場合も少なくない。

三、思想理解のために

1、『碧巌録』の位置付け

はじめに記したように、『碧巌録』は、雪竇重顕が古則百則に対して頌を付したものに、圜悟克勤が垂示・著語・評唱を加えたものである。それ故、そこには①古則、②雪竇の頌、③圜悟の垂示・著語・評唱という時代的に異なる三つの階層が重層的に含まれているわけである。従って、それを読み解くためには、この重層性を解きほぐして、それぞれの位置付けを明らかにしてゆかなければならない。それには、中国の禅思想史の中で、それぞれがどのような位置付けを占めるか、見当を付けておかなければならない。

伝統的には、従って、『碧巌録』でも前提にされているところでは、中国の禅は菩提達磨にはじまり、慧可―僧璨―道信―弘忍―慧能と相伝されたと言う。しかし、今日の研究では、こ

の相伝の系譜は極めてフィクションが多く、信用できないことが解ってきた。いずれにしても、禅が社会的に大きな勢力になるのは、五祖弘忍の弟子神秀(六〇六?–七〇六)によってであり、神秀は則天武后の信頼を得て、長安の都で広く受け入れられた。この神秀一派を真向から批判し、華々しい宣伝を繰り広げたのが慧能(六三八–七一三)の弟子神会(六六八–七六〇)であり、それによって慧能系の南宗の頓悟の思想が北宗の漸悟を圧倒することになる。

だが、皮肉なことに、神会の系統は長く続かず、その後の禅は慧能の別の弟子である南岳慧譲(六七七–七四四)から馬祖道一(七〇九–七八八)への流れと青原行思(?–七四〇)から石頭希遷(七〇〇–七九〇)への流れから発展する。前者から臨済宗・潙仰宗、後者から曹洞宗・雲門宗・法眼宗が分れ、いわゆる五宗が形成される。これらの唐末から五代へかけての禅においては、慧能・神会時代にはなお見られた教学的議論はすっかり影を潜め、各地の禅僧たちがそれぞれの個性をもっていかに修行者を教化するかという方法にもっぱら関心が寄せられるようになる。「臨済の喝、徳山の棒」と言われるように、機に応じた見事な対応に禅匠の力量の見せどころがあるのである。こうした中から語録に集成され、また『伝灯録』などの史書に記載されるような問答が重んじられ、「祖師西来意」のような定型的な問答のパターンができ上がってくる。

次の段階は宋代に入って特に発展するもので、前代の大力量の禅匠たちの問答の中から特に重要とされるものを選び出し、それを批評する形で自らの力量を発揮し、あるいは教化の手段とするようになる。いわゆる公案禅で、代別(代語・別語)、頌古、拈古、評唱などの形式が発

展する。その新しい方向へ大きく歩を進めたのが汾陽善昭(九四七―一〇二四)であり、さらに頌古という形式を極めて高度に発展させたのが雪竇重顕であった。雪竇は雲門宗の人であるが、もともと雲門宗には文学的な表現を重んじる傾向があった。『頌古百則』はその流れの最高峰に位置するものであり、古則に呼応しつつ、技巧を凝らした頌に託して自らの境地を表現した。

　こうなると、もはや禅は「不立文字」とは言えなくなる。むしろ徹底して文字言語(禅で言う葛藤)にこだわる文字禅の時代である。その文字禅を究極まで推し進め、これ以上は行き詰りというところまで行き着いたのが、圜悟克勤の『碧巌録』であった。古則と雪竇の頌古に付せられた圜悟の垂示・著語・評唱は、ある意味では蛇足と言ってよい。本則と頌をいかに読むかという老婆心切な教示であり、それ故それは多分に教育的な配慮によるものである。本書がもともと圜悟の講義の筆記に基づくというその成立にも関わるものである。だが、それに留まらない。特に本則と頌の一句ごとにくどいまでに付けられた著語は、いささかマンネリの気味がないわけではないが、古則と頌をもう一度解体し、全面的な読み直しを迫るものである。我々はそれを通じて、言語と意味の解体と生成の場に改めて立ち合うことになる。

　だが、ここまで行き着き、極限化した文字禅は、もはやそれ以上継承発展できる余地がない。また、これ以上文字にこだわるならば、もはや禅林の修行と関わりのないものになってしまう。圜悟の弟子大慧宗杲(一〇八九―一一六三)が『碧巌録』を焼却して、その流行を戒めたと伝えるのも、こうした状況を反映している。大慧の看話禅は文字禅への反省に立ちつつ、もう一度禅林修行

の立場から古則公案に生命を吹き込もうとするものであった。この大慧系の看話禅が宏智正覚(わんししょうがく)(一〇九一―一一五七)の黙照禅(もくしょうぜん)の系統と対立することはよく知られており、南宋の禅は新たな段階へと進んでゆくのである。

(宋代の禅思想の流れを適切に概観した入門書は意外に少ない。その中で、魏道儒『宋代禅宗文化』(中州古籍出版社、一九九三)は推奨に価する。)

2、例えば、第一則を読んでみよう

上冊の入矢義高氏の解説は、本書をどう読んだらよいかという、これ以上ないよい指針である。それを熟読玩味して頂きたいが、ここでは具体的に第一則を取り上げて、一つの読み方を提示してみよう。本書はもちろん禅林で修行のための指導書として用いられるものであるが、同時にまた、一つの思想書としてもっと自由に読んでよいものと思う。

まず、圜悟の垂示がある。これはどの則も似たり寄ったりで、実際、一夜本の第一則の垂示が張本系では第二則に入っている。それ故、本則の具体的内容というよりは、本則を読むためにあらかじめ心構えを説いたものと見ればよい。

そこで、本則であるが、まず著語は読まずに、本則のみを読むのがよい。有名な達磨と梁の武帝の問答で、それに後で達磨の太鼓持のような志公が出てきて、蛇足的なコメントを加える。もちろんフィクションであるが、よくできた一場の寸劇である。仏教の保護者として名高い武

帝は、その常識的な仏教観を徹底的にコケにされ、取りつく島もない。ここでのポイントは達磨の「廓然無聖（かくねんむしょう）」と「不識」である。「聖」とか「名」とかいうものに対する武帝の固定観念を、見事に足下からひっくり返している。もっとも、それだけに今度はいかにも禅臭さが鼻につく感がしないでもないが。

次に雪竇の頌に飛んで、これも本文だけ先に読むのがよい。ここでは本則のポイントをおさえた上で、「相憶うことを休（や）めよ、清風地に匝（あまね）く何の極まることか有る」と展開させるところに雪竇の面目がある。本則の問答を何か他人事のように読んでいたのが、これでぐっと自分に引き戻される。それに追い打ちをかけるように、頌を打ち切り、「這裏（ここ）に還（は）た祖師有りや」と問いかけ、自ら「有り」と答えた上で、「喚び来たりて老僧の与（ため）に脚を洗わしめん」と締める。問われているのは「這裏」である。達磨と武帝の問答は遠い世界の話ではなく、今ここで、私が、そしてあなたが問われているのだ。

本則と頌のあらましが解ったら、ここで著語と評唱を読む。まず本則の著語。著語の言葉はいちばん難しい。短いから文脈が捉えにくく、解釈が定まらない場合も少なくない。我々の訓読や注もあくまで一つの解釈に過ぎない。著語は本則の語に対する圜悟の評価で、ストレートに賞めたり、けなしたりすることもあるが、もう少し屈折したレトリックもある。例えば、達磨の「不識」に対して、「咄（とつ）。再来するも半文銭に直（あた）らず」と著語しているが、達磨の語を揶揄したもので、決してそれを否定するわけではない。しかし、これによって「無聖」「不識」

じレヴェルに立って問答に加わってゆくのであり、そこでまた、「あなたはどう読む？」と問いかけられることになる。一応解ったつもりの本則を、もう一度揺り戻し、解体して、新たに読み直しを迫るのが著語の役割である。

評唱には大体二つの役割がある。本則の背景となっている故事や人物の紹介と、本則の語自体の受け止めかたに関する注意である。説明的な内容であるから比較的読みやすく、これを手がかりにして本則を読み直せば、圜悟の本則解釈が理解できる。本則は少なくとも雪竇以前の成立であり、しかもその状況をそれぞれ異にしている。それ故、圜悟の解釈が必ずしも本則自体の解釈として適切とは言えず、本則は圜悟の解釈を離れて自由に読んでよいものである。しかし、『碧巌録』としてまとまった形で読む場合には、圜悟の解釈を一応踏まえる必要がある。

第一則評唱の大きなポイントは、「廓然無聖」に関して、圜悟の師である五祖法演の語を引いたところであろう（上巻、四一頁）。この一句さえ解れば、万事完了と言うのである。こうして受け止められた「無聖」は単なる否定でもないし、また、肯定・否定という二項対立自体を否定する、と言っても不十分である。そうではなく、「無聖」自体が実は堂々たる積極的な提示である。だからと言って、それを『老子』的な「無」の実体化と言うのも当らない。ここではそもそも言語がある固定した意味を指示するという構造そのものが崩壊している。唐突かもしれないが、ここで私は、クリステヴァの言うサンボリックとセミオティックの区別を思い浮

べる。言語の安定したサンボリックの構造が崩壊したときに根源から浮び上がる得体の知れないもの、まるごとのそのもの、それが「無聖」なのである。『碧巌録』全体を通じて、さまざまなヴァリエイションを持ちつつ、繰り返し繰り返し、この「無聖」の幽霊が顕ち現われる。それを見極めてゆくとき、あなたはきっと「文字禅」の戦慄すべき世界の虜になっていることだろう。

頌の著語・評唱の扱い方も基本的には本則の場合と変らない。ただ、本則のヴァラエティーに較べて、頌はすべて雪竇という一人の人の作であるから、改めて評唱で説明しなければならない故事来歴も限られてしまう。概して頌の評唱は本則の評唱に較べて短いものが多く、精彩に乏しいように思われる。

凡例にも述べたように、この岩波文庫本は訓読という伝統的なスタイルによりつつも、俗語表現に意を用い、少しでも解りやすくするために、かなり大胆な工夫を凝らした。あくまで試行錯誤の一段階に過ぎないが、これによって『碧巌録』が伝統の枠から解放され、第一級の思想・文学の書として現代に蘇るきっかけとなるならば、訳者としてこれにまさる喜びはない。

碧巌録禅者生卒表

？ 達磨 530？
425 宝誌（志公） 514
464 梁武帝 549
497 傅大士 569
？ 僧璨 606
709 馬祖道一 788
？ 耽源応真 ？
711 粛宗皇帝 762
718 定州石蔵 800
738 西堂智蔵 817
739 丹霞天然 824
748 南泉普願 834
749 百丈懐海 814
？ 龐居士 808
751？ 薬山惟儼 834？
757 章敬懐惲 818
？ 帰宗智常 ？
？ 麻谷宝徹 ？
？ 盤山宝積 ？
？ 塩官斉安 842
？ 金牛 ？
？ 烏臼 ？
？ 黄檗希運 ？
764 陸亘 834
769 道吾円智 835
771 潙山霊祐 853
778 趙州従諗 897
？ 百丈惟政 ？
？ 長沙景岑 868
780 雲巌曇晟 841
？ 翠微無学 ？
？ 臨済義玄 867
780？ 睦州道蹤 877？
782 徳山宣鑑 865
807 仰山慧寂 883
？ 香厳智閑 898
？ 劉鉄磨 ？
？ 倶胝 ？
807 洞山良价 869
807 石霜慶諸 888
819 投子大同 914
？ 漸源仲興 ？
？ 三聖慧然 ？
？ 定上座 ？
？ 桐峰庵主 ？
？ 陳操 ？
822 雪峰義存 908
828 巌頭全奯 887
834 大隋法真 919
835 龍牙居遁 923
835 玄沙師備 908
837 大光居誨 903
？ 欽山文邃 ？
854 長慶慧稜 932
864 雲門文偃 949
867？ 保福従展 928
868？ 鏡清道怤 937
？ 翠巌令参 ？
？ 良禅客 ？
884 禾山無殷 960
885 法眼文益 958
？ 智門光祚 ？
？ 蓮花峰 ？
896 風穴延沼 973
？ 盧陂長老 ？
908 香林澄遠 987
910 洞山守初 990
？ 巴陵顥鑑 ？
？ 明招徳謙 ？
？ 大龍智洪 ？
？ 報慈慧朗 ？
？ 王延彬 ？

980 雪竇重顕 1052
1063 圜悟克勤 1135

『碧巌録』法系図（本則登場人物）

(青原)
(石頭)
南陽
耽源
粛宗
薬山
丹霞
(天皇)
(龍潭)
徳山
雲巌
洞山
欽山
良禅客
道吾
漸源
石霜
龍牙
(九峰)
禾山
大光
翠微
投子
巌頭
(羅山)
明招
(感潭)
(白兆)
大龍
雪峰
雲門
香林
智門
雪竇
洞山初
翠巌
鏡清
巴陵
太原
(奉先)
蓮花峰
保福
王太傅
長慶
朗上座
玄沙
(羅漢)
法眼
慧超
(清渓)
天平

内蒙古自治区
恒山(北岳)
北京(幽州)
河 北 省
渤 海
五台山
山
太原
趙州
西
山東半島
陝
汾陽
省
泰山(東岳)
山 東 省
黄 海
西
洛陽
開封
長安(西安)
熊耳山
龍門山
嵩山(中岳)
風穴山
華山(西岳)
首山
江
蘇
太白山
終南山
河 南 省
省
省
丹霞山
南陽
安
徽
省
揚州
白崖山
紫玉山
南京
摂山
武当山
洞山
虎丘山
大蘇山
揚子江
牛頭山
太湖
上海
四

川省
湖北省
玉泉山
武漢
双峰山
司空山
皖公山
径山
杭州
明州
天童山
五洩山
会稽山
雪竇山
阿育王山
睦州
夾山
薬山
德山
龍牙山
潙山
洞庭湖
廬山
石門山
百丈山
雲居山
鄱陽湖
黄龍山
黄檗山
(鷲峰山)
洞山
高安
大愚山
鵝湖山
雲黄山
天台山
浙江省
温州
(永嘉)
石霜山
楊岐山
耽源山
曹山
江
貴州省
湖南省
仰山
青原山
衡山
(南岳)
西
雪峰山
(象骨山)
禾山
鼓山
福州
福建省
黄檗山
省
大庾嶺
泉州
雲門山
南華山
保福山
廈門
広西壮族自治区
広東省
潮州
広州
羅浮山

中国禅宗地図